

---

# 箱庭のメイド達

浜松春日

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

箱庭のメイド達

### 【Nコード】

N8501V

### 【作者名】

浜松春日

### 【あらすじ】

ダメ自衛官、異世界の地方領主になる！？ 20XX年 日本は突然、異世界へと空間転移してしまった。資源の枯渇、食糧危機。日本は国家としての生存をかけて異世界の大陸への介入を深めていた。そんな中、根性もなければやる気もない、ないない尽くしのダメ幹部である主人公の任務は、名前も聞いたことのない地方都市の領主になることだった。しかし、赴任した街の館には美しきメイド達が残っており…… 完全版が読みたい方は、2004年版20話まで読んだ後、2011年版へお進み下さい 現在第2部構想中！

## 第1話 異世界の地（前書き）

2003年から2004年にかけて完成させた自衛隊in異世界ものの小説です。ダメ自衛官が赴任先の異世界の地で、行き場のないメイド達と共同生活を送りながら、街の問題を解決していくという異色作。

一体何を考えてこんな作品を完結までもっていったのか自分自身謎な一作、かつ黒歴史的な面も強い作品です。

当時十代だった若さに任せた勢いだけはあるので、どうか読んでみてください。

## 第1話 異世界の地

「地の果てへようこそ。新品さん」

空自のC-130輸送機から五時間の旅を終え、地面に脚を降ろした僕に、中堅であろう整備隊員が声をかけた。

僕は、目の前の光景に呆然として何も答えられない。

アスファルトの不足に未舗装同然の滑走路。プレハブ以上の建築物の見当たらない施設群。

妖魔の襲撃に備えて張り巡らされた鉄条網と対人地雷のワイヤー。

こんなの、どっかで見たことあるぞ……。そう、なんかのベトナム戦争映画でこんな基地の風景が写ってた。

後悔。

この一言に尽きる。

やっぱり進路というのは軽はずみに決定しちゃいけない。

高校三年の頃、うっかり防衛大なんか受けて通っちゃったのがそもその間違いだった。

地連のおっさんがあんまり熱っぽく自衛隊の環境の良さと福利厚生  
の堅実さをアピールするし、

就職難のご時世ということにも後押しされ、書類に印鑑押ししてしま  
ったのが今でも悔やまれる。

何も防衛大でなくても良かったじゃないか。一流でなくとも、他に  
も行ける大学はあったんだ。

貴重な青春を汗と涙に投げ打ってまで自衛官にならんでもよかった  
じゃないか。

教官の怒号と先輩のいびりに泣きながら、演習場でゲロを吐き、消  
灯時間にパシリに走らされ、

銃の部品をなくして殴られ、四年間の懲役のような日々耐え抜い  
た。

青春ものの映画なんかだと、ここで立派に旅立っていく若者達が描かれるんだろうが、そんなもんの主人公になる気は僕には毛頭なかった。任官拒否。絶対に任官拒否してシャバに戻って人生をやり直すんだと心に決めていた。が、あまりにも残酷な現実が僕の、いや、この日本を一瞬にして飲み込んだ。

20XX年

日本は異世界へと召喚され、生命線の確保のために、宣戦布告を行ってきた帝国に対して自衛権を発動。

戦争が、始まった。

説明はそれだけか？

戦争なんかに興味のない僕にはこれ以上はよく分からないだよ。自衛隊と帝国軍が初めて衝突した戦闘でどこの部隊がどんな活躍をしたとか、

ハイテク兵器を前に帝国軍はあつと言う間にやられて同盟国の連中の度肝を抜いたとか、

ちらほら聞いたことはあるけど、詳しくは覚えていない。

任官拒否が不可能になったという信じられない話に茫然自失となっていた僕にとっちゃあ、

そんな軍オタしか喜びそうにない話しに耳を傾けている暇なんてなかった。

悪いことは続くもので、せめてもの進路希望で「会計課」と書いたものの、

この非常事態にそんなもんが受理されるわけもなく、めでたく実戦部隊である普通科への配属が決定してしまった。神様、僕ってそんなに悪いことしましたっけ？

この日ヴェ戦争（ヴェロスニア帝国とかいう国の他にもその同盟国

とも戦つたらしい)での自衛隊の戦死者数は222人。

10万人相手によくこれだけの死者で済んだもんだと他人事のように思つてたが、

お察しの通りこの222人の内、106人が普通科である。

酷い話では斥候に出たまま帰つてこないの探しに行つたら首をはねられて晒されてたなんてシャレにならなすぎる事件もあつたらしい。

基礎的な教育期間が終わりに近づき、僕は半ば本気で脱柵(先輩に教えてもらったが自衛隊では脱走のことをこう呼ぶそうな)

を考えていた。が、そんなある日。上官に呼ばれ、僕は他の者とは違った配属がいいのかと尋ねられた。

僕はこれはチャンスだと感じ

「普通科でなければどこでもいいです！」

と答えてしまったのである。後悔先に立たず。

僕は分厚い書類と、外務省へ出頭する命令書を受け取った。

最初は何が何だか分からなかったが、決められた日時に外務省へ行って担当の部署へと回されたとき、ようやく話が見えてきた。

「いやあ。さすがにあんな危険地域に非武装の職員を派遣するわけにはいかないの、

ここは自衛隊さんに行つてもらつのが適任かと思ひましてね」

つまりである。

日本は連戦連勝。そりゃそうだ、MLRS(多連装ロケット弾発射システム)やらクラスター爆弾やら反則もいいところの武器を使って勝てないわけがない。

勝つて進撃したはいいものの、占領した地域の統治という新たな問題が発生した。

しかし、あのイラク戦争を見ても分かるように、統治というのは危険と隣り合わせだ。

外務省もイラクのときのように職員を犠牲にしたくないのだろう。……担当の職員を見る限り、犠牲者を出したくないというより責任問題になるのを恐れているといった方が正しいように思えたけど。

僕は泣きたくなかった。っていうか泣いた。イラクのときだって戦争中よりも統治段階に入ってから死者数の方が多かつたじゃないか。書類を読んでまた泣いた。

『旧帝国領地方都市エクト 派遣人員 陸上自衛隊より三名を選考』 たった三人でどうやって統治しろってんだよ！

イラクのときの米軍はバグダッドだけでも数万人規模を駐留させていた。が、こいつは……。

暴動でも起こつたら、もうお終いだ。気分はもう戦国自衛隊。父さん母さん逝って参ります。

しかし。

そう、なんだかんだ言って、僕はやはり日本人のようだ。

こうして輸送機に乗り、いつのまにやら現地入りしている。

ブラック企業とかで逃げ出せなくなる社員の気持ちがなんだか分かるのが嫌だった。

「三尉。司令部まで送りましょうか？」

さっきの整備隊員が給油トラックの中から再び声をかけてきた。

「あ、はい。お願いします」

僕は父親ほど歳の離れたその整備隊員の好意に甘え、助手席に座った。

異世界の土を踏んだという実感は、まだ沸いては来なかった。

「辻原英氣三尉……。ふむ。書類の内容は読ませてもらったよ。君も大変だな」

司令部とは名ばかりの薄暗い天幕の中で、ここの事務責任者の佐官は呟いた。

「はっ！」

直立不動の姿勢で、精一杯の虚勢を張って僕は答える。しようもない自衛官らしさが身についたもんだと内心ためいきをつく。

「では早速だが、君はもう部下には会ったのかね？」

「は？」

僕は彼の言っていることの意味が分からなかった。

部下？ 上官じゃないのか？

「……もしかして君の方には書類が行ってないのかね？」

てつきり誰かの隷下に入って働くものだと思っていた。

鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしている僕を見た佐官はそういつて一つ、

やれやれといったため息をつくと自分の机の中から何かを探して取り出し、僕に寄越した。

「辺境とはいえ都市一つを管理するんだ。最低でも幹部が必要だ。

しかし、何の価値もない辺境都市へベテランの幹部を割くほど今の我々に余裕はない……」



僕は全てを悟った。ああなるほど。そうかいそうかい、そんなに僕  
あ自衛官として利用価値がないのかい。

危険地域だとかいうだけじゃない。

よりもよって無能だから左遷されたんだ。

自衛官なんか辞めてやると今まで言ってきたが、こうして存在価値  
を否定されるような見方をされるとさすがにいい気はしない。

僕が渋面を作っているのを見て、むっつり顔だった佐官も苦笑いし  
て言った。

「左遷されたと思ってるのかね？」

「い、いえ。そんなことはありません」

「心配するな。戦争はベテランに任せておいた方がいいと判断して  
のことだ。」

今更、君のような新品を部隊に入れて戦場に出しても混乱していた  
ずらに損害を出すだけだ。

君は会計課希望ということもあってこっちに回されただけだろう」

ホンマかいな。半信半疑だったが、佐官の話は筋が通っているし一  
見嘘はなさそうだ。

「それに報告によれば、君が赴任する都市は比較的治安は安定して  
いるそうだ。」

そんなに危険な仕事もしなくて済むはずだ」

なんだそうなのか？僕は素直に安心した。

今日のところはこの空港（というより野戦基地）に宿泊することに  
なった。

同時に、先に到着していた二人の部下となるべき隊員とも顔を会わ  
せる予定だ。

昼の佐官から聞いた話といい、嫌なことばかり思い浮かんでくるので、僕は早めに動いた。

書類を脇に、三人の寝泊りしている天幕へと向かう。

本格的な基地を整えるのだろうか、基地内あちこちに資材が山積み  
にされている。

10分ほど歩いて、天幕についた僕は入り口から声をかけた。

「エクト暫定管理小隊の者はいるかい？」

すると中からドタバタと慌てる音が聞こえてくる。

そして、蜂の巣をつついたかのように中から慌てて飛び出してきた人影が二人。

今日書類を渡されて知ったが、皆、僕より若い。整列した二つの顔を見渡してみる。

「すみませんでした！ 三尉殿の到着日時が知らされておりませんでしたので！」

背の高い男が敬礼をかざして叫んだ。

佐久間勇一三曹。

彼は曹候出身で21歳。

美形ではないが、真面目そうな顔をした好青年という感じだ。

正直、僕よりずっと自衛官らしい面構えだと思う。

「あのおー。出発はいつなんでしょうか？ 自分もうちのこの暮らしには飽き飽きしてて……」

佐久間とは対照的に、上官に対する敬意も何も感じられない気だる  
そうな声で尋ねてきたのは前島秀二一士。

予備自衛官補出身のためか、首筋まで伸ばした髪の毛と、

前髪がかからないように迷彩柄のバンダナを巻いたその姿はとても自衛官には見えない。

どっかのゲーセンで遊んでそんな風貌だ。年齢も19歳。よく見るとまだ幼さが残った顔をしている。

彼の口調、普通の自衛官なら、ここで怒鳴りつけるところだろうが、僕はそんな熱血をやるほど真面目じゃないんでやめておく。

「まあ二人とも待って。俺も今日来たばかりだし」

僕は周囲に誰もいないことをいいことに、幹部隊員の威厳もクソもない口調で二人に話した。佐久間三曹は驚いたように目を見開き、前島一士は相変わらずニヤニヤしている。

「俺は辻原英気。一応、今から君らの隊長になった」

見たトコ、こいつらもここへ至るのには何やらワケありだったみたいだな。

不意に、今日初めて聞いた言葉が頭に浮かんだ。

『地の果てへようこそ』か。

まあいいや。こいつら三人で、何ができるかは分かんないけど、仲間がいるのは結構心強いもんだ。

そして、俺は幹部として初めて部下を持った。

たぶん、防衛大出身で一番自衛官らしくない僕だけど、こいつらにとっては上官なんだよな。

僕にしては珍しく、責任感というものが背筋を伸ばした。

明日は、いよいよ出発だ。

## 第2話 赴任

直線距離にして三百キロ。無論、道路は舗装されてなどいない。魔物が出る山を抜け、山賊の矢の雨の中を全速力でかいくぐり、僕ら三人を乗せた大型トラックは空港を出発して一週間をかけてようやく目的地の近くへとたどり着いた。なんかもう、一生分のスリルを味わった気がする。インディ・ジョーンズばりの緊迫の連続だった。……いや、どっちかっていうと地獄の黙示録かな。山賊が撃ってきた矢があちこちに刺さり、雨漏りのひどい幌を恨めしげに見上げて僕は感嘆を漏らした。

「撃ってきたのが火矢だったら今頃生きてねえよなあ……」

このトラック、長距離を移動するために燃料を大量に積んでいる。引火したら一巻の終わりだったはず。生きてるって素晴らしい！……といえるほどまだ安心はできない。この森も山賊が出没する地域らしい。

帝国時代は厳しい取締りがあったのでそう深刻なものでもなかったらしいが、

事実上の無政府状態である今は山賊化した傭兵団や帝国軍残党が出没する危険地帯に変わってしまったということだ。

先日も、笑顔さえあれば人間皆分かり合えるとテレビで力説していた日本人ジャーナリストが惨殺死体で発見された。

今は外で雨衣（自衛隊のレインコートのことだ）を着た前島一土が小銃を手に歩哨に立っている。

佐久間三曹は寢袋に入って既に眠りについていた。大型免許を持つ

ているのは彼だけということもあり、  
運転は一日彼に任せきりだ。疲れているのだろう。  
僕はペンライトを車外に光が漏れないように気をつけながら点灯し、  
荒い作りの地図を広げた。

目的地まであと五キロといったところだ。

雨音だけがしとしと響く不気味な静けさを頭から追い出すように、  
僕は地図とペンライトをしまつて寝袋を頭から被った。

「みいえたあー！ 見えましたよ三尉ー！」

双眼鏡を覗いていた前島一士が元気よく叫んだ。をを文明世界！や  
つとこさ石造りの街道に出て安堵していたら、ようやく目的地へ到  
着だ。

「はあ……もう運転しなくていいんですね……」

「佐久間三曹。今までご苦労さん」

「いえ！ 任務ですから！」

今時珍しい熱い男だよまったく。

「それで三尉どの。街の中に入ってどこへ行けばいいんですか？」

街を観察するのに飽きたのか、前島一士が尋ねてくる。

「旧領主の館だって書いてある。とりあえず街の人に聞いてみよう」

僕はこの苦難の旅から解放されたという安堵感から、これから起こ  
る数々の問題のことを考える余裕など持ち合わせてはいなかった。

「……三尉、なんかこの街」

珍しく前島一士が沈んだ口調で言った。運転席の佐久間も、街の様子を間近で見て戸惑いを隠せないようだ。僕自身、動揺している。街は、まるで寂れたゴーストタウンだった。大通りであるというのに人気はまばら。人々の着ている服はみすばらしく、身体もやせている。

屋台も数えるほどしかなく、活気などとは程遠い。

この街は戦略的価値がないので戦争の被害は直接は受けていないはずだ。何故、こんなに荒廃しているのか皆目見当がつかない。

この街エクトは、四十年前に帝国に滅ぼされたパステイル共和国の都市の一つであった。

敗戦後は植民地として帝国の統治下におかれていたが、今回の日本との戦争で帝国は大敗し、

帝国勢力は一千キロも後方まで潰走。今こうして、新たな管理者である僕らを迎えているわけだけど……。

「植民地支配のなれの果て、ですか」

佐久間が呟く。重々しい思いが込められているような、そんな口調だった。

「と、とにかく旧領主の館を探そう」

どう答えていいかわからず、僕は話をそらした。

街の治安ばかり気にしていたが、街の人々がどんな暮らしをしているのかなど一度も考えなかった。

複雑な感覚がぐるぐると頭の中で回っているようで、情報が整理しきれない。

だが、これからの見通しがあまり楽観できるものでないことは確かだった。

やっぱり、自衛隊なんか入るんじゃないやなかった……。こんな、色んな意味で酷い場所が赴任先だなんて。

「では止めましょうか？」

佐久間がこちらを覗いて尋ねる。

「そうしてく……。あつ！？」

佐久間が余所見をしたほんのわずかな瞬間、突然トラックの前に人が飛び出してきた。僕は慌てて手を伸ばし、ハンドルを大きく切った。

「どわつち！？」

突然大きく揺れた車内で前島一士が悲鳴を上げる。

あまり速度は出していなかったこともあり、事故だけは避けられた。しかし、飛び出してきた人は地面に倒れてこちらを見上げている。

「い、いけねえ！」

僕はトラックから素早く降りると、急いでその人のもとへ駆け寄った。

「すみません！ 不注意でした！ 大丈夫ですか？」

見ると、まだ子供だった。これは……。髪は短い、女の子か？手にしていたバスケットが地面に転がり、

中からいくつかの未熟な野菜類が散乱していた。こけた頬に薄汚れた野良着のような服。この異世界特有の水色の髪

の毛と大きな瞳だけが生氣を感じさせる。素朴な可愛らしさのある娘だ。

「あ……うあ……」

少女は怯えきつた様子でその瞳に涙を浮かべ、身体を震わせている。まるで肉食獣に睨まれた小動物のような痛々しい表情だ。

「ねえキミ、キミ。大丈夫？」

声をかけると、肩をビクリと大きく震わせて僕の顔を凝視した。

あ、ひよっとして僕らのことが怖いのか？

ここは異世界だ。文明のレベルは僕らの世界の中世程度のものらしい。

いきなり日常生活のなかにトラックみたいなデカイ機械が現れたらビビるのも無理もない。

僕らでいうとこの、UFOが突然現れて宇宙人が降りてきたってところか。

「大丈夫だよ。お兄ちゃんは怪しい者じゃないから」

僕はしゃがんで彼女と同じ目線にあわせ、恐ろしく月並みな言葉を使った。

ほかにもどう言えっただよ。自衛隊の者ですとか言っただけで分かるはずがないだろうに。

っていうかこんな幼い女の子を泣かせちゃったのはさすがに良心が痛む。下手なことはできない。

「ごめんごめん。余所見してたらついで……」



僕は散らかった野菜類を拾い集めてバスケットの中へ戻してやる。それにしても、まさかこんな不良品も同然のしなびた野菜を主食にしてるわけじゃないよな。

いや、ありうる。この子の姿から、とても栄養状態が良好とは言い難い。

「……………」

「はい。どうぞ」

野菜を入れ直したバスケットを渡してやる。

ようやく、震えも収まって僕の顔をきょとんと愛らしい瞳で見つめてくるようになった。ようし、ここは思い切って。

「ねえ、キミはこの街の人だね？」

手を貸して立たせてやりながら、尋ねてみる。

コクン…

少女は少し間をおいて、躊躇いがちに頷いた。よかった。会話が成立したぞ。

僕は内心しようもない喜びを感じながら、今度は腰を折って少女の目線にあわせ、尋ねた。

「前までこの街で一番エライ人が住んでいた場所ってどこか、知らないかな？」

気のせいだろうか、一瞬、少女の表情が驚きと恐怖に凍りついたように見えたのは。

「……………」

ややあつて、少女は静かに身体の向きを変え、スツとその細い指を向こうの方に指差した。

「え、あの建物？」

コクン…

少女は僕が理解したことを確認するように一瞥をくれると、何も言わず、野菜の入ったバスケットを胸に大事そうに抱きしめて一目散に路地裏へと駆け出して行ってしまった。

「あつ！ ちょっと……」

声をかけたときには、もう少女の姿はどこにも見えなくなってしまっていた。

「ホントかよ……あれが旧領主の館……？」

僕は再び少女が指差した方角に向き直る。

街を見下ろす小高い岡の頂上。

そこにはまるで、下界の荒廃に侮蔑の笑みを浮かべるかのように、遠目にさえ確認できる豪華絢爛な館が、腰を据えていた。

### 第3話 残されたメイド達

「優しい方ですね。三尉は」

丘へ登るしつかりと舗装された道。ハンドルを握る佐久間が何の前置きもなしにそう言った。

「そうか？」

優しいって、さっきの女の子のことだろうか。そんな特別なことをした覚えはないけど……。

「ええ。自分はそう思います」

微笑を浮かべ、こちらに視線だけ向けて佐久間は答える。

彼は時々、年下とは思えない大人びた雰囲気醸しだすときがある。そんなところが、僕は嫌いではなかった。

「三尉どのー。今日からあの館に寝泊りするんすかあ？」

前島一土が相変わらぬいい加減な態度で尋ねてくる。

僕は防水カバンの中に大事に保管していた書類の束の中から、これから関係ありそうな数枚を取り出す。

彼に聞かれなくても、そろそろ詳細を知っておかなきゃいけない。道中、山賊やらに怯えてまともに読む機会がなかったんだよな。

「ああ。書類ではそういうことになっている。ん？ あと……」

これは、なんだろう？

「あと？」

前島一士が怪訝な口調で僕が言いよんだ言葉を鸚鵡返しする。

最後の項目がどうも変だ。

「『尚、当該施設に現在居住している現地住民は小隊指揮官の判断によって現地スタッフとして雇用、もしくはスタッフとして不適であると判断した場合、就職先を斡旋することを条件に当該施設からの退去を指示できるものとする』  
つてこりゃなんだ？」

二人に聞こえるように朗読してみたが、どうみても不可解な内容だ。現地住民というからには、あの館には今も人が住んでいるということとだろうか。

確か、あの領主の館の主は自衛隊がどこかの大きな戦いで勝利し、帝国軍が後退する際に遅れまいと館を飛び出していったという。所有者は確実に不在のはず。じゃあ一体誰が？

「三尉……」

僕が考えをめぐらせていると、佐久間はトラックのブレーキを踏んだ。そして僕を呼び、視線を前方へ注いでいる。

「うっわぁー……」

次の瞬間、僕と前島は情けないため息をついた。

目の前には、つまらない金持ち自慢特集の番組なんかで出てくる、海外の大富豪の豪邸の数倍に匹敵するような、立派な門がその偉容を誇っていた。

極めつけは水のたたえられた幅十メートルはある堀と、門を繋ぐ吊橋。

門と一体となった石塀は館をぐるりと囲んでいる。

これはもう、館というより城だ。

平和な時代になったら、ちよつとした観光名所になるんじゃないかなるか。

そんなバカバカしい感想が脳裏をよぎっては消える。

吊橋は今は上げられ、門も閉まっているようだ。

佐久間はどうするのかという意味で僕を呼んだのだろう。

「着いたようですが……」

「あ、ああ」

なんとまあ……すさまじい建物だな。一戸建てが夢のまた夢である日本人には理解不能なスケールのデカさだ。

「すつげえなあ。いくらかけて建てたんだろ？」

前島が庶民じみた疑問を持つ。

「ちよつと待ってる」

僕は再びトラックから降り、堀の前まで小走りで近づいた。

えーと、ホントこんな場合はどうすりゃいいんだろ？ インターホンは……あるワケがないか。

仕方ない、書類によれば人がいるはずだし、呼べば開けてくれるだろう。

僕は堀から十メートルほど先の門へ向かって、息を大きく吸い込むと、腹の底から大声を上げた。

「ごめんくださあーい!」

十秒ほど待ってみる。反応なし。

「どなたかおられませんかあー!」

さらに十秒。反応なし。

「開けてくださあーい!」

「開けてえー!」

「開けるゴルアー!」

十秒待ってみる。反応なし。

「ぜえぜえ……」

こんちきしょうめ!僕はいつの間にかヤケクソになって声を出そうと息を吸い込んだ。

「三尉ー?」

するとそれを遮るように前島が間延びした声で僕を呼んだ。

「何だ!??」

「いや、相手に気付かせるだけなら、トラックのクラクション使えばいいんじゃないっすか?」

ほら、この館、マジ広そうだし。塀に阻まれて声が届いてないんじゃない?」

……確かに。僕は急に自分がやったことが空しくなった。



「死ね魔物めっ！」

鋭い女の声が塀の上から響き渡った。僕にはそれしか分からなかった。

次の瞬間、佐久間の怒号が僕をトラックへと引き戻す。

「危ない三尉！ 連中が弓を構えてます！」

「っ!?!？」

僕は普段の三倍の機敏さで身体を反転させるや否や、飛び込むようにトラック車内へと逃げ戻った。

直後、フロントガラスにベチベチと鈍い音を立てて何本もの矢が直撃した。

フロントガラスはまるで投石を受けたかのようにひび割れ、視界が白く曇った。

時折、矢が当たってカチンカチンと金属音を奏でる。

すみません神様。前言撤回です。世の中ラヴ・アンド・ピースです。

「後退しますっ！」

佐久間は僕が命令するよりも早く、クラッチをガクガクと操作してバックに入れる。

遠路三百キロを走破した、ご苦労なこのトラックのエンジンが唸り、一気に来た道を逆戻りする。

「畜生聞いてねえぞっ！ あいつら俺たちを殺す気か!?!？」

攻撃を受ける理由が分からぬ上、あまりにも非常識な相手側の行為にさすがに憤りが隠せない。



いきなり話しも聞かずに撃ちやがるなんてどうかしてるぞ。

「いやあ、アレは多分誤解されてると思いますよ」

意外にも、あの前島一士が答えた。

「何でだよ？」

「いえ、だってこの世界の人たちって車なんてみたことないんですよ？」

60年前の日本人だって、アメリカ人を鬼だとか信じてたわけですし、

いきなりクラクションをバンバン鳴らしてりゃね。ホラ、『魔物め』とか叫んでませんでしたっけ？」

「……」

つまり……全部僕のせいということだ。

「だから言ったじゃないですか三尉……」

二人の視線が痛い。……正直、スマンカッタ。

迂闊なことは慎んだほうが良さそうだ。

冗談半分にやったことが命に関わる世界なんだよここは。

「それで、これからどうしますか？」

「むーん……」

さすがにモウコネエヨウワアアンとはいえない。どうしたものだろうか。

小一時間後。

「こんなもんで大丈夫ですか？」

「知らない」

「知らないってそんな無責任な……」

「責任を持てる根拠がないんだよ」

「……ですよね」

中学生のようなレベルの会話を交わし、

ボディアーマーとヘルメットを装着した僕と前島一士がとぼとぼと丘に登る。

彼の手には、急ごしらえの白旗が握られている。

テレビで白旗をあげて投降する帝国軍兵士の姿を見たことがある。

白旗はこちらの世界でも戦意がないことを示す道具なのだ。

誤解されているだけなら、これを見せれば話くらいは聞いてくれるはずだ。

が、やはり絶対に大丈夫と胸を張れるような根拠にはならないだろう。

佐久間三曹は後方でトランシーバーを持って待機している。

万が一のことが「また」起きたら助けに来てくれるように指示してある。

「三尉……」

前島一士が足を止める。館が見える位置までやってきたのだ。

「話があるんだ！ あなた方の責任者とお会いしたい！」

向こうでぼそぼそと何かを話しあう声が微かに聞こえてくる。

ややあって、向こうから初めて回答があった。

「貴様は何者だ！ 名を名乗れ！ ここがご不在とはいえランクロ

ード様のお屋敷と知っているのか!? 無礼にも程があるう!」

僕と前島一士は顔を見合わせた。

驚いたのは向こうが叫んだ言葉の内容にではない。

声が若い女性のものであったからだ。

「どうした! 答えんか!」

困惑して黙っていたら、再び鋭い女性の声が聞こえた。

僕は気を取り直してとにかく的確な答えを返すことにした。

ランクロードという名は目を通した書類の中に記載されていた。前  
のここの領主である。

「そのアルビス・ランクロードという人物はもうここの領主ではな  
いでしょう?」

自分らは日本国より派遣されてきました。ここの後を引き継ぐ暫定  
管理部隊の者です。

書類によれば、この街へ我々がやってきた時点でここの領主を含め  
る全権は私、

辻原英氣に移譲されたことになっています。

あなた方が何者かは知りませんが、責任者を呼んでもらわないとこ  
ちらも困ります」

簡潔にまとめたつもりだったが、もう少し段階的に説明すればよか  
ったかな。

どうしよう。確かに俺みたいなの若僧がやってきてこの街の全権が手  
中にあるだなんて言っても信じてもらえないかもしれない。

向こうは何故か沈黙してしまった。

おいおい、答えたんだから、なんかリアクションしてくれよ……。

いかん、間がもたない。詫びを入れれば許してくれるかな……。

「あつ！ すいません。先刻はどうも誤解を招くようなマネをしてしまいました……。謝罪します。でも……」

情けなく頭を下げるのは現代日本人の十八番である。……ええいうるせえこつちは命がかかってんだ！

「ま、待て！　すぐに上の者を呼んで来る！　そこを動くな！」

あれ？　またもや僕は前島一土と顔を見合わせた。

幸い、自分と領主についての説明は分かってもらえたようだが、さっきまでの高圧的な態度からの、この一変ぶりはなんだろう。

ひよっとして客人を攻撃してしまったということに気が付いたのか。どうやらそのようだ。

その証拠にしばらくして、遂に重々しい音を上げて、上げられていた橋と閉ざされていた門が開き始めた。

しかし、僕たちは橋がかけられ、巨大な門が開ききり、中から現れた人々に我が目を疑った。

「さ、三尉……」

「ああ、こ、こりゃあ……」

思わず、後退る。

橋の奥の門の前に静かに歩み出てきた人々。数は十数名。

驚くことに全員が、若い女性、あるいは明らかに未成年の少女だったのだ。

更に目を見張ったのが、彼女達の服装だ。

彼女らは紺色のエプロンドレス姿に加え、首にはワインレッドのボウ・タイ、

頭には純白のカチューシャ。以前、オタクの友達の部屋で見たこと

がある。いわゆる「メイド服」を着ていた。

一番先頭に立つ『彼女』が、彼らのリーダーなのだろうか。スラリと背は高く、露出部分の少ないメイド服の中で、わずかに見える手や顔の肌は透き通るように白く、更に多種多様な髪色の存在するこの異世界でも珍しい、柔らかな光沢を放つショート銀髪が印象的だった。

立ち姿も絵になるもので、両手をそつと腰辺りで交差させているので、

非常に折り目正しく感じられる。だが年齢は、僕とそう離れていない、

もしかすると、前島より若いかもしれなかった。

大人びた雰囲気をかもし出しているが、顔つき自体はまだ幼い。ただ一点、無表情なのが気にかかる。

しかし、そんな今まで見たこともないような美少女が現れて、いい加減な性格の僕はいつもなら大喜びするところだが、今の状況はそうはいかなかった。

銀髪の少女の背後に従うようについている、十名を越える少女達はなんとクロス・ボウを手にしてこちらを睨みつけていたからだ。

旧領主の家のものだろうか、家紋入りの胸当てや腰の矢筒など、アーチャーの武装をしたその姿は、異様であると同時に冗談抜きな殺気を孕んでいる。

その今まで見たこともない状況に不安と戸惑いを隠せない我々に、銀髪の少女は一言だけ言った。

「……………当館でハウス・スチュアートを務めております。リオミアと申します。お話しを、お伺いしましょう」

声には抑揚がなく、同時に無表情な彼女のアイスブルーの瞳が迷彩服姿の僕たちを、じっと見つめていた。

か細い、いや、繊細な声だと、僕は思った。  
正直に言おう。カワイイとかいう気持ちになる少女なら見たことはある。

だが、綺麗だと感じた少女は、僕の人生で彼女が初めてだった……。

「その……大変失礼なことを尋ねますけど、リオミアさん、本当にあなたがここの最高責任者なんですか？」

不思議な雰囲気秘めた少女だが、未成年の彼女が責任者というのはどうもには理解できない。

彼女の背後に控える女性らの中には彼女より年上らしい女性もいる。何故なのだろうか。この世界の知識に乏しい僕には推測すらもできない。

「はい、そうです。ランクロード様と臣下の方々がおられぬ今となつては、私が館に住む者共の長となります」

淀みなく答える彼女の声は、氷水のように冷たく感情を感じさせない。

「つまり、あなた方はそのランクロードに仕えていた従者か何かですか？」

「はい。ランクロード様の所有するメイドです」

『所有』という言葉に、僕は変な言葉を使っただなと感じたが、この時点でその言葉の意味を察することは、平和ボケした日本人の僕には到底無理な話だった。

「つまり帝国の人間ってことか……。どうしてここに残留を？ 逃

「遅れたとか？」

「逃げ遅れたというのなら、空自あたりに要請して帝国側に引渡しが必要だな。」

「帝国人がいたとあっては、長い間植民地支配されてきたこの街の人間の反感を買い危険性だつてある。」

「しかし謎なのが、どうして今まで彼女らは帝国勢力が退いた状態でこの館を維持してきたのだろうか。」

「このように武装しているとはいえ、街の帝国に恨みを持つ住民たちに襲撃されたりしなかったのだろうか。」

「僕は珍しく推測を試みた。もしか、この街の統治は事実上、この館の彼女らがやっているのではないだろうかという推測だ。」

「しかし、どうも説得力に欠けるな。」

「街で会った女の子は、この館を畏怖の対象としてみていたようだけど、彼女らはそんなに恐ろしい存在なのだろうか。」

「そんな考えが頭に浮かんでは消える。」

「いいえ、帝国の『人間』はランクロード様と臣下の方々のみです」

「は？ だつて今仕えてるつて……」

「私どもはただのメイドです。帝国人ではありません」

「つまり現地雇用のお手伝いさんだつてことか？ さっぱり分からないな、じゃあどうして雇い主がいなくなつてるのにこの館にいるんだろう？」

「なんだ雇われてただけですか、失礼しました」

「とりあえず僕は率直な感想を口にする。僕がさういうと、リオミアの背後にいたメイド数名が驚いたような顔をした。どうしたんだろう。」

「……………」

しかしどうも気まずい空気だな。

本題に入る前に今までの経緯から、一から説明する必要があるように感じた僕は、彼女に確認をとる。

「帝国が敗走した現在で、この地域を管理下……まあこちら風に分かりやすく言うと占領しているのはどこかご存知ですか？」

「ええ。異世界から召喚された恐ろしい魔導機械を操る国だと聞きました」

彼女は眉一つ動かさずに答える。やはり、感情を読み取ることはできない。

しかしまあとりあえず、戦争の経過については知ってはいるようだ。

「魔導機械ねえ……………」

僕の後ろで白旗を持ったままの前島一士が苦笑を漏らした。

「こちらから質問してよろしいでしょうか？」

「え？ はいもちろん。どうぞ」

「あなた方は……その国の人なのですね？ 先刻の魔物と紛うような鉄の箱も、魔導機械の一つでございましょう？」

「ええ。その通りです」

彼女だけはえらく冷静だな。ハウス……なんとかだつても領ける。つていうか、そのハウスなんとかつてのはなんなんだろう？



「七三式大型トラックってゆーんだよ」

「前島一士!」

僕が注意すると、前島一士は全く反省していない様子でニツと白い歯をみせた。………「…ったく、こいつはもう。」

「ここへ参られた理由は………」

おや、向こうから切り出されたか。しようがない、ここは単刀直入に言っべきだろう。

「非常に申し上げにくいのですが、ここはもう帝国領ではありません。我々はここエクトの暫定管理のために派遣されてきました」

「暫定………管理?」

馴染みのない単語だったのだろう、彼女は軽く首を傾げた。

「この前領主が行っていたことを引き継ぎます。まあ僕が新しい領主ってことですかね」

僕はこのとき、それこそ何の躊躇いもなくこんなことを言ってしまった。

彼女らにとって領主という存在がどんなものなのか全く理解できていなかったんだ。

「なっ!?!?」

一斉にリオミアを除く全てのメイドが動揺の声をあげた。その狼狽ぶりは予想以上のものだった。

しかしこいつらいくら前の御主人だからって何でこんなにこたわっ

てるんだろっ？

……僕のこの発言が実は、人の命に関わるような大失言であったとは、このとき知る由もなかった。

ざわつくメイドたちを一瞥するだけで黙らせ、リオミアは僕に無言で先を促した。

僕は少しでも相手の緊張を和らげようと……いや、実際緊張しているのは僕の方だった……胸ポケットをまさぐって一枚の名刺を取り出した。

「申し遅れました。自分が管理小隊隊長、このたび日本国陸上自衛隊より派遣されました辻原英気三等陸尉です」

彼女に軽くお辞儀して、名刺を差し出す。彼女は、今までの無表情さにほんの少しだけ、好奇の念のようなものを示した。

彼女の海を思わせる蒼い瞳が、ピクルスくんとパセリちゃん（自衛隊のマスコットキャラだ。結構カワイイぞ）

のプリントされたよそ様用の名刺を観察している。どこか滑稽な光景だったが、口には出さないでいた。

「……新しい領主様……なのですね」

ややあつて、彼女はわずかに顔を歪ませ、何かを覚悟したかのような口調で呟いた。

「まあ実際はそんな大仰なものでもないんですけどねえ……」

確かに後継ということではそういうことにはなるけど、僕は貴族でもなんでもないただの自衛官だ。そんな大層なものじゃない。

「そっそんな！ リオミア様!？」

「我らの領主様はただお一人のはず！」

すると突然背後のメイドの数人が騒ぎ始めた。

おいおい……なんかしらんがひよっとしてヤバいのか？

あっ！

前島の野郎、俺の真後ろに移動しやがった！

「私はこの館の全ての者の命をあずかっています。あなた方“純潔の獵犬”だけの判断でここの者全員を危険に晒すわけには参りません」

「……っ！」

抑揚のない声にも関わらず、圧倒的な威圧感で武装したメイドたちを黙らせるリオミア。

このコ、すげえ。

どんな人生を歩めば、こんな雰囲気帯びるのだろうか。

彼女を見ていると、何故か背筋がゾツとした。氷の結晶のような、純粋な冷たさともいえるのだろうか。

「事情は……理解しました。こんなところで立ち話などさせてしまい申し訳ございませんでした。どうぞ中へお入りください」

僕の方へ振り返った彼女は、感情の読めない無表情で恭しく頭を下げて一礼すると、右手を門の方向へスツと差して僕たちを促した。会話がかみ合っているようでもかみ合っていないためか、どうも釈然としないが、どうやら誤解は解けたし中にも入れてもらえるようだ。詳しい説明と質問は中へ入ってからでいいだろう。

だがリオミア以外のメイドたちは、領主が代わることがよほど重大なことなのか、茫然自失な表情になっている。いったい、彼女らはなんなんだ？

こんな若い女性たちがボウガン持って館を守ってるなんて聞いたことないし、  
ただのお手伝いさんがどうしてそこまで帝国の雇い主なんかにこだわってるんだろう？

リオミアという銀髪の少女の謎めいた口調とその存在感いい、どうも嫌な感じがする。

この館には、いったいどんな世界が築かれているというのだろうか。

「詳しいお話と、他の者への説明は私が行います。どうぞ……」

「あつ！ ちょっと待ってくれ、仲間はまだ一人いるんだよ。今から呼ぶからもう少し待っててくれないですか？」

「もちろんです」

僕は慌てて腰のトランシーバーを取り出してトークボタンを押す。

「佐久間三曹、佐久間三曹。こちらは状況を終了した。おくれ」

リオミアが少しだけ、僕のその行動を不思議なものでも見るような表情で観察している。

『三尉！ 無事ですか！？』

トランシーバーから佐久間の声が聞こえてきた瞬間、メイドたちが驚きに息をのんだ。

が、今のこの状況はそんなことに構っている場合ではない。僕は用件を早く済ませることにした。

「ああ。なんとかね。話はついたから、今からトラックをこっちに回してくれ」

『了解』

短い通信が終わった。美女美少女揃いメイドたち全員が、僕を注視しているのというのに、

この状況では全く嬉しさが沸いてこなかった。  
彼女らの顔に浮かんでいたのは、未知なるものへの畏怖と警戒心だ  
ったのだ……。

## 第4話 館

「遠くから見ても分かるくらいだったんだから、予想はしてたけど……」

「こりゃあ……もうほとんど文化遺産ですね」

僕は門を通って百メートルほど行った噴水広場近くでトラックから降りた。

この世界の宗教に登場する美しい女神をかたどった像が、水瓶から清らかな水を絶えずあふれ出ている。

天気の良いさに、水飛沫が綺麗な虹をつくっていた。

その絵画のような光景に目を細めながら、僕は周囲を見渡してみた。ゴルフができるのではないかと思えるほど広大な庭の芝や植え込みは綺麗に剪定されており、

門へと続くしつかりとした石造りの道の両脇は、色とりどりの花で彩られ、何匹もの蝶が踊るように宙を舞っている。

狭い住宅環境に加えてパンピーな僕らにはあまりにも現実離れた風景だ。

「トラックはここに停めていこう。あのリオミアって人に案内してもらわないことには、館がどれくらいの広さがあるのかさえ分からないから」

下手にトラックを動かして、なんか高価なものや貴重なものを壊したら取り返しがつかない。

きつと、僕の俸給（自衛隊では給料のことをこう呼ぶ）なんかじゃ一生かかっても払えない額のものばかりに違いはない。

くわばらくわばら……生活するのもちよつとした気を遣ってないといけないなんてな。

「ツジハラ様！」

リオミアたちが駆け寄ってきた。トラックの速度に追いつけなかったのだから、息を切らして走ってくる。

「驚きました……。このような大きな物がそんなに速く走るとは思いませんでしたので……」

リオミアは上品に胸をおさえて息を整えながらそう言った。彼女の視線は、この華やかな庭のなかで唯一ゴツツくて、鈍いOD色の光沢を放つ大型トラックに注がれている。

「すみませんでした。止められそうな場所がこちら辺しかなかった……」

「申し訳ありませんでした。配慮が不足しておりました。どうかお許しください」

僕が謝ろうとするのを遮り、彼女は大きく頭を下げた。お、おいおい。なにもそんなことする必要はねえってばよ。

「あ、いえそんな……頭なんか下げなくてもいいですよ」

どっちかというと、広場のど真ん中に駐車して悪いのは僕らの方だ。どうも調子が狂うな。日本にいたときなんて、

演習帰りに弁当を買おうとスーパーの駐車場に停めようとしたら、店員に客が驚くから迷惑だ、出て行けって言われたことならあるけど。

しかしまあ、軍人が一般市民に追い返される国なんて、地球もこっちの世界も広しといえども日本だけなんだろうな。

…ついでにいうと軍人って言葉もNGワードだ。

「寛大なるお許し、感謝いたします」

「あ、ああ」

再び頭を深々と下げるリオミア。

バカ丁寧なんてレベルじゃないぞこりゃ…。

戸惑いに近い感情を抱きながら、その後僕はリオミアに導かれて館の本館へと案内されていった。

「うひゃあ……」

その建物を見上げて僕は馬鹿みたいに開いた口が塞がらなかった。

外観は高校のころの世界史の資料集に写真で載っていた、ゴシック建築の宮殿を思わせ、

壮麗ながらも一種の近寄りがたさのようなものを感じさせる。

きつと、僕のような凡庸な人間など、今まで受け入れたことなどないのだろう。

どういえばいいのか、分からないが、どうも好きになれない雰囲気だった。

「「ようこそお越しくださいました……お客様」」

立派な玄関の両脇に身じろぎ一つせずに立っていたメイド二人が、綺麗にハモってから僕に向かって一斉に頭を下げる。

「ど、どうもご苦労さまです」

いつもの癖で、僕は咄嗟に被っていたヘルメットを脱いで会釈した。あんなに丁寧にお辞儀されて返事もしないんじゃないじゃ失礼というか、ど



うもきまりが悪い。

「!?!? も、もつたいなきお言葉でございます!」

しかし彼女らは僕の言葉にビクリと驚くと、更に深く身体を折って頭を垂れた。

「えっ……。あ、あの……」

な、なんだなんだ？ 俺なにかまずいことでもまた言っちゃったか？

「ツジハラ様。お手間をかけて申し訳ございません。

しかし、そのような下賤な者どもにお情けなど不要にございます。どうぞこちらへ……」

リオミアが割って入ってくる。彼女は冷徹な口調で僕に話した。

言葉こそ丁寧だが、その中にはどこか有無を言わさぬ迫力があつた。しかしなんだよ、下賤だとか言つて。同じメイドじゃないのか？

「い、いやでも……」

やっぱり納得できない。しかし、次の瞬間、僕は愕然とした。

二人のメイドは、さっきからと全く同じ姿勢で、僕に対して頭を下げたまま上げていかなかったのだ。

見ると、ブルブルと微かに怯えたように震えている。なんて、こつた……。

僕はいつたい彼女らがどうしてこんな態度をとるのか、全く理解ができないゆえに、背筋に言いようのない寒気を感じた。

「は、はあ。分かりました。行きましよう……」

これ以上、彼女らを怯えさせてはいけない。

ただ単にそう思った。リオミアに問い詰めることは諦め、僕は大人しく彼女に従った。

案内をする彼女の華奢な背中が、その時の僕には、どこか恐ろしいもののように思えてならなかった。

館の中に入り、本来ならばその荘厳さに圧倒されるところなのだろうが、僕には何故かあまり気にはならなかった。

そんなことより、今日になって今までに見てきた様々な出来事を考えるのに思考のほとんどをもっていかれていったんだ。

リオミアは沈黙する僕を別に不審に思うわけでも機嫌を覗うわけでもなく、

黙々と木製であるにも関わらず軋み一つあげない階段を登ってゆく。僕はただ、彼女の背中を追っただけだ。途中に出会ったメイドたちは

皆、

僕らを見掛るや否や、その全員が頭を下げて通り過ぎるのを待つという行動に出た。

まるで、大名行列だ。居心地悪いこと限りない。

よほど男尊女卑の染み付いた男でないとこの光景を気持ちよく思うなんてことはまずありえないだろう。

しかし新たに、気になることも出てきた。

この館の人間で、まだ男性に会ったことが一度もないことと、

出会ったメイドたちが皆うら若い美女や年端もゆかぬ少女ばかりだということだ。

喜ばしいことだとか冗談を言う気にもなれない。

現実的に考えてもみる、はっきり言ってこの館は異常だ。

美少女ばかりのいる中学や高校なんてあるはずがないだろう。

僕はここにきてようやく、この館の謎と暗部の存在に気付き始めていた。

だが、それが一体どんなものなのか、まだ確実には理解できてはいなかったように思う。  
ホント、危機感のない馬鹿だったよ。

「どつぞこちらの部屋へ……」

リオミアが一際立派な扉の前で立ち止まり、扉を開けて中へ入るよう丁寧に促した。

僕ははあと曖昧な声で答えてから入室する。

「……………」

僕は室内の様子に声も出せなかった。

室内はまさに富の限りを尽くした造りになっていた。

外国の一泊数百万の最高級ホテルをそのまま私室にしたといった感じだ。

即座に悟った。ここは領主の部屋にちがいない。

「ツジハラ様。こちらへおかけになってください」

寝室・居間・食堂、もう一つは、執務室か？

執務室とおもしき立派な机とテーブルの置かれた部屋へ案内され、テーブルの椅子を勧められた。

リオミアはわざわざ椅子を引いてくれており、

俺が座ろうとするとこれまた御丁寧に椅子を丁度良く引きなおす。

「す、すみません」

「恐れ入ります」

彼女は深くお辞儀をすると、それから僕の向かいに座った。

しかしこのテーブル、無意味にデカイので、向かい会っているという気分があまりしない。

これだけでもどこかの大企業や国会の会議が開けるのでは思えてしまうほどだ。

ややあつて、彼女が無言だったのでこちらから切り出そうと、僕は携えていたリュックから必要書類を取り出した。

「えー……さっき門で話したとおり、自分はここエクトの暫定管理に派遣されてきました辻原と申します。

今から重要なことをお話ししますが、他にここへ呼んでおいた方がいいと思われるような重役の方はおられませんかね？

聞いた話では、リオミアさんがこのハウス……えーと」

「ハウススチュアートでございます。

御心配には及びませんツジハラ様、身分的にこの館で私以上の者は現在おりませんゆえ、

私に全て話していただいて結構です」

「そ、そうっすか……」

淡々と淀みなく話す彼女に圧倒されながら、僕は書類に視線を落としました。

「暫定管理に関する無期限特別法概要……」

まあこの辺は自衛官の僕が読んでもワケわかんないから省くとして……。

えつとそう、ここらへんだ。

『暫定管理官の特別権限』と『暫定的管理方法および該当地域住民の義務と権利』。

今から話すのは僕とこの街の人に直接関わる重要な説明だから、よく聞いてください。

必要ならメモを取ってもかまいません」  
「理解しました」

リオミアは微動だにせず答える。なんか、ロボットに話しかけてるみたいで違和感があるなあ。

それから僕は延々二時間に渡って細々とした説明を行った。大きく分けて

一つ  
ここの前管理者的立場であった前領主の権利は剥奪され、それらの権利は全て管理部隊の指揮官、つまり僕に移譲されたこと。

一つ  
管理部隊の指揮官は誠意をもって管理地域の管理及び支援にあたること。

一つ  
非人道的、または風習的に許容できない場合を除いて、  
該地域の住民は原則として管理部隊の決定及び指示に従う義務を負うものとする。

ただし、前述の『許容できない場合』が発生した際には、管理部隊に陳情・抗議を行い、  
指揮官はこれを外務省へ報告し指示を仰ぐことを義務とする。

一つ  
抜き打ちで査察が入る場合があるが、その際査察官の立ち入りを拒否することはできない。

といったあくびが出てきそうな内容だ。

「……ふう。というわけですけど、何か質問はありませんか？」

途中、12〜3歳くらいの可愛らしいメイドさんが運んできてくれた（これって労働基準法違反じゃねえのか？）お茶をすすり、僕は二時間前から全く姿勢を崩さないリオミアに尋ねた。この人ホ

ントにロボットじゃないのか？

「恐れ入りますが……。私どもの処遇はどうなれますでしょうか？」

遂にきたか、と僕も思わず姿勢を正した。

「命令書では、現地スタッフ……つまり管理機構の職員として雇わせよと明記されています。」

あなた方に異論がなければ、このまま自分が新しい領主ということであなただ方の身柄は保証しますが……」

「まことですか？」

「ま、まことですよ……ただ」

「ただ……？」

僕が言葉を切ると、彼女は珍しく不安げな表情で鸚鵡返した。

「ここを去りたいと思ってる人とかいないんですか？」

別に他意があつたわけじゃない。普通に、日本人の感覚として出た言葉だった。

「申し訳ありません。それは、どういう意味でございましょうか？」

しかし、リオミアは少し眉をゆがめて僕を凝視している。まるで僕が何を言っているのか理解できていないかのようだ。

いや、彼女はこのとき、実際理解できなかったのだろう。

「どういう意味って、ほら、もうここを辞めて実家に帰りたいとか、個人的な理由でここを出たいって思ってる人もいるんじゃないです

か？」

先刻の玄関にいた二人のメイドとか、きつと、先輩メイドにいびられたりしてるんじゃないだろうか。

僕自身、自衛隊で銃の部品をなくしたときに血反吐を吐くほど腕立て伏せをやらされて、

それ以来教官が来ると震え上がっていたもんだ。

その僕は現に自衛隊を嫌って辞めたいと思っている。

別につきたくてついた職業じゃねえし。

あのメイドたちもきつとこんな口クでもないメイド仕事なんて好きでやってるわけがないだろう。

見たトコ、あのコたちの仕事なんて、日がな一日玄関につっ立ってるだけだろう。やってらんねえはずだ。

「個人的な……理由にございますか？」

「そう。僕もさ、実は自衛隊なんかさっさと辞めちまいたいんだけどねえ」

僕はお茶の入ったカップを手にとると、西日の差してきた窓を見やりながら口をつけようとした。

「そういうた者はおりません」

断言しやがったよこの人……。みんなに聞いてもないのになんでそんなことが言えるんだ？

「どうして？ 親御さんに会いたいって人もいるんじゃないの？」

ここの労働環境が悪そうだからとかは、さすがにいえなかった。

「この館にいる者に、帰る場所がある者など、存在しないからです」  
「え……そりゃあどういっ……」

今度は僕が彼女が何を言っているのかわからなかった。彼女は、何の感情もこもらない相変わらずの口調で説明した。

「我々は皆、ランクロード様から奴隷身分から引き立ててもらった者ですので」

僕は、カップを握ったまま、しばらく何もいえなかった。彼女はそんな僕にはおかまいなしに、話を続ける。

「主に仕えること以外に、私どもは生きる術を知りません」

「……………」

「主なき今、我らの生を支えてくれるのは……………」

彼女が、初めて感情を表情に表した。

その感情は、『諦め』だった。実際は違ったのかもしれないが、少なくとも、僕にはそう見えた。

「ツジハラ様……いえ、領主様。これより我らは命の限り、貴方様に御仕え申し上げます」

あまりにも哀しい、少女の瞳だった。

この瞬間からだったろうか、僕の人生の方向が変わり始めたのは。

「この世界は……………」

僕は頭を下げるリオミアを呆然と見つめながら、呟いた。



「イカレてやがる……」

長い長い、僕の闘いの、始まりの一日だった。

## 第5話 食堂

夜の帳が落ち、辺りはまとわり付くような闇に覆われていた。

電気のないこの世界、しかも街とも距離があるこの館周囲の暗さは半端じゃない。

ランプの光に慣れていない僕にとっては、薄暗い室内はどこか不気味で嫌だった。

ここは領主の部屋だ。佐久間三曹と前島一士も加えて、エクト暫定管理機構の総力が結集している。

僕らは領主の執務机をテーブル代わりに座り、

中央に防災懐中電灯（ラジオや蛍光灯機能までついてるアレね）を立てて光を確保し、

諸々の書類やファイルを広げて会議を開いていた。

薄暗い室内に加えてこれじゃあ、なんかよからぬことを企てているみたいだな……。

「武器・弾薬・燃料は特別な保管場所が必要ですね」

佐久間がトラックの積荷のファイルを見ながら言った。

「大丈夫ですよ。こんな広い屋敷、倉庫になりそうな空き部屋の一つや二つはあるでしょ」

椅子を反対向きにして座っている前島が言う。この野郎二人とも上官なのになんてえ態度してやがんだ。

「鍵付きで関係者以外立ち入れないような部屋が望ましいです」

「分かった。明日リオミアに聞いてみよう」

僕はメモ帳にボールペンでそのことを書きとめる。

「自分からはこれだけです、三尉、今後の日程は？」  
「そうだなあ。まずは最低限の暫定機構としての環境を整備しないと」

やらなければいけないことは、意外にもたくさんあった。

「もとい、生活環境の構築ですよね」

前島がニヤリと白い歯を見せる。まだまだ高校生気分が抜けていないようだ。

「まあ、そういうことだ」

僕は書類をガサガサと束ねながら、会議の終了を二人に告げた。彼らはそれぞれ僕とは違う部屋を割り当てられていた。

この領主の部屋ほどではないが、どちらも凄い部屋だそうだが、しかし、意外にも、というか僕自身もそうなのだが、生活する分にはどうも馴染めないと漏らしていた。

佐久間は職業自衛官で無駄が嫌いだし、前島は若いあんちゃんだからこんな歴史情緒溢れる部屋を見せられてもあんまり嬉しくないだろう。

若い僕らが欲しいのはTVやら、ゲーム機ってこった。

「ん……？」

佐久間が背後に何かの気配を感じたのか、後ろを振り向いた。

「皆様、御食事の御用意ができましたのでお呼びに参りました」  
リオミアだった。

「おっと、待ってましたあ！ 三尉、行きましようよ」

前島が無邪気に尋ねてくる。まあ、腹が減ってるのは僕も同じだし、別にいいか。

「そうだな」

「では御案内いたします。付いてきてください」

三人の迷彩服姿の男が、席を立てて彼女の後を追った。領主の部屋があるのは三階、食堂があるのは一階だ。

「わお。可愛いコちゃんハケーン！」

「馬鹿。少しは慎まんか前島一士」

「にははは」

佐久間と前島がそんなことを話しながら階段を下りてゆく。その少し後ろを、僕が続く。僕は夕方の、あのリオミアの言葉を思い出していた。

『命の限り、貴方様に御仕え申し上げます』

なんだって、こんなことに……。

僕みたいな、何の価値もない男に、何を期待してるってんだ。自衛官として使えないから、左遷されたような男だぞ？

何かに秀でてるわけでもない。防衛大でもビリだったし自慢できる経歴があるわけじゃない。

例え一般社会に戻っても、別に資格を持ってるわけでもないから、ハローワーク通いするのは目に見える。

それでもキツイから自衛隊を辞めたいとかぬかしてる人生の敵前逃亡ヤロウだ。

「三尉。どうしました？」

「顔色悪いっすよ。体調悪いんすか？」

突然、二人から声をかけられた。この二人にも、旅の途中で随分と迷惑をかけたな。

やっぱり、僕のことを無能な指揮官だと思ってるんだろうか。人の上に立つような人間じゃないんだよ。僕は……。

「三尉？」

二人が黙りこくる僕を心配そうに見つめていた。

「い、いや。何でもないんだ」

僕は慌てて答えた。何を弱気になっちゃってんだ。気合入れる自分！この二人の命だつて預かってんだぞ。

「領主様がお入りになられる。粗相のないよう注意なさい」

「心得ております。リオミア様」

リオミアが他のメイドたちに指示を出しているのがちらりと目に入った。

きびきびとした動作にキリリと締まった表情。彼女みたいな人物こそ、人の上に立つべきなんだろうな。

「どうぞ……」

彼女は優雅に頭を下げ、食堂へと誘う。  
それに続いて入り口付近に並んだ十人程のメイドたちも、一糸乱れぬタイミングで同じ角度で頭を下げた。

「よく訓練されてますねー？」

それを見た前島が呟いた。……少なくともオメエよりは訓練されてるししっかりしてるだろうよ。

「さあてつと。メシメシー」

「馬鹿タレ、自衛隊員たるもの節操をわきまえんか！」

佐久間が前島の襟首を引っ掴んで静止している。

「ほらほら、どうでもいいから早く入れよ」

「しかし三尉……」

「いいんだよ佐久間三曹。どうせ馬鹿は死ななきゃ直らないんだ」

「あつ！ 何気に酷いこと言いますね三尉ー！」

そんなことを言い合いながら、僕らは食堂へと足を踏み入れた。そして……

「うおおおおおー！？」

僕ら三人は、馬鹿みたいに一齐に驚きの声を上げた。

絢爛豪華！庶民では味わえぬ至高の食材！一流の料理人が腕を振るった最高の芸術作品！

僕は即座にそんなアホ丸出しなナレーションを入れた料理番組を思い出した。

ただ、今日の前に広がるこの光景は、紛れも無い現実である。

「さ、三尉殿ー！ これは自分のような陸士階級の者が食してよいのでありますかー！？」

前島が初めて真面目に敬語を使って僕に尋ねてきた。

それほど、今テーブルに並んでいる料理は圧倒的な存在感と美味しい匂いを漂わせていた。

「領主様。三人分御用意いたしました。よろしかったでございませうか？」

リオミアが僕に尋ねてきた。えっ！？ 今なんていった！？ 三人分！ このテーブルいっぱい御馳走がか！？ どうみても十人分ぐらいはあるだろうこの量は！

「い、いいのか？」

「申し訳ありません。何か問題がありませんか？」

「いや、そうじゃなくて、こんなにたくさん御馳走を僕らだけでいただくってさ……」

リオミアは僕の言葉に、不思議なものでも見るかのような表情を浮かべた。

そして次の瞬間、突然はつとした表情に様変わりすると、突然頭を下げた。えっ？ なんだなんだ？

「……申し訳ございません。こちらの世界の料理がお気に召さないとはいけません」

「えっ！？」

「すぐに新しいものを作らせましょう。御要望がございましたらどうぞ仰ってください。……あなた達、すぐに片付けなさい」

「かしこまりました……」

リオミアがパチンと指を鳴らした瞬間、部屋の四隅に控えていたメイドたちが一斉に目の前の料理を片付け始めた。

「うわあああ！ やめてえー！？」

前島が悲鳴を上げた。こりゃいかん。珍しく僕は頭の回転が速かった。人間食い物のことになるかと凄くもんだ。

「い、いいよ！ この料理を食べます！ 食べさせてください！」

僕が慌てて彼女らを制止する。

すると飛び上がりんばかりに驚いた彼女らはまたもや頭を下げて異口同音に「申し訳ありませんでした！」……。  
うーん。なんでこんなに疲れるんだろう……？

……

「これもうんめえー！ 俺、自衛隊に入ってホントよかったですよ！」

「そうだな。こここのところ、まずい缶詰と味のしない乾パンばかりだったしな」

「そーそー。在日米軍供与のMREなんて、食った日に腹壊しちゃいましたもんね」

談笑しながら、士・曹・尉の僕ら三人は今までの人生最高の夕食を楽しんでいた。

てゆーかここは本当に自衛隊組織内なのだろうか？

まあ指揮官の僕がこんなじゃ仕方ないか……。



この自衛隊という組織は職種・部隊によって恐ろしく落差がある。  
一日中デスクワークの部署もあれば、「狂ってる団」とまで言われ  
一日中全力疾走してるような部隊もある。

「うーっぶ……そうだ、リオミアさん」

「リオミアで結構でございます。領主様」

「あ……うん。その、一つ尋ねたいことがあるんだけど」

「私めに答えられることならば何でも……」

「この料理を作った料理人さんのこと、知ってる？」

「はい。存じております」

「そのお、向こうが忙しくないならここへ呼んでくれないかな？」

「料理人どもをですか？」

いつも無表情なリオミアが、意外そうな表情を浮かべた。

「うん。一言お礼を言わないと」

「お礼……にございますか？」

「ああ。頼むよ」

リオミアは戸惑ったように沈黙した。そんなに僕の頼みは変だった  
ろうか？

「しよ、少々お待ちください」

ややあってリオミアはそそくさと食堂を出て行った。

僕は出された高級そうな香りのするワインに口をつけながら待つこ  
とに……あっ！？

「前島お前まだ未成年だろう！？」

「えー？ いいじゃないですかココ日本じゃないですし」

「日本なんだよボケ！ バレたら俺の首が飛ぶんだぞ、すぐに飲むの止める」

「ちえー」

前島が名残惜しそうに最後の一口を口に入れる。 ……こいつやっぱ自衛官としてダメだよ。

「領主様。連れて参りました」

そここうするうちにリオミアが帰ってきた。

「料理長のパーシエです」

リオミアが紹介する。

「パーシエと申します。領主様、本日はお呼びいただき私ども感激の極みにございます」

頭を下げたまま、彼女は僕へ贅辞の言葉を送った。

「顔を上げてください。そんな緊張しなくていいですって」

僕はほろ酔いも手伝って陽気に言った。

「…し、しかし私めのような卑しい身分の者が…」

「なーにワケわかんないことってんのさ。領主様直々の御命令であられるぞ！」

前島は意外と酒に弱かったらしく、もうべろべろになってやがる。いわんこっちゃんえ。

「は、はいっ！ 大変失礼いたしましたっ！」

前島は冗談で言ったつもりだったのに、料理長は真に受けてしまったようだ。

しゃちほこばった姿勢で頭を上げた。気の毒に……。後で前島にはビシツとやってやらんとな。それはさておき…

「へえ……」

料理長、パーシエは僕と同一歳くらいの女性だった。

南方系を思わせる浅黒い肌と真っ赤に燃えるような紅髪が印象的だ。きりりと吊りあがった双眸は髪色同様に情熱的な光を宿している。

実直そうな、女版佐久間三曹といった感じだろうか。

体格も女性にしてはがっしりとしており、柔らかなメイド服は一見して窮屈そうだ。

むしろ、タンクトップ姿で海に漁に出てそんな健康体だ。

ただ、女性特有の身体のラインは決して失われておらず、均整の取れたプロポーション。

そして何より……なんというか、デカイ。グラビアアイドル並、いやそれ以上か？

メイド服のエプロンが締め付けているので、余計に強調されていて目の保養…ではなくて目のやり場に困る。

しかしまあ、こんな若い女性があんな凄い料理を作ってたのか。同じように皆感じたのか、僕たちは顔を見合わせた。

「お若いですねえ」

率直な感想を述べる。

「畏れ入ります。まだ未熟ゆえ、料理にはまだまだ改善の余地がございますことは重々承知しておりますが……」

「待った待った！ 別に料理がまずいとか文句言ったために呼んだわけじゃないですよ」

なんで普通に挨拶ができないんだろう。

そうか奴隷か……。平和や平等が当たり前の国で育った僕には到底理解できない世界だよ。

僕は気持ちいい程度の酔いがさっぱりと醒めてしまったのを感じた。しかし、呼んでしまったからには挨拶の一つでもしておかないとな。

「料理おいしかったです。祝い事でもあつたらまた食べたいくらいですよ」

「は……？」

パーシエが目を丸くして僕を凝視した。

「まあ、なんです……。この人たちとは仲良くやっていきたいので、顔を覚えてもらっといた方がいいと思ひましてね。多忙なところを呼び出したりしてすみませんでした。これからも毎日三食、よろしくお願いします」

僕はいい終わると席を立って、ガチガチに固まっているパーシエの手を少し強引に引っ張り、握手を交わした。

緊張がほぐればいいと思つてやったことなだけで……。それを見た周囲のメイドたちが息を飲むような驚きの声を漏らした。

「な、なりません！？ 領主様！」

突然、大声を上げてパーシエが手を振りほどいた。その場が、一瞬にして氷ついた。

「……………」

「あ……………」

パーシエが愕然とした表情で自分の手を見ている。

自分がやったことに気付き、彼女は固まってしまった。

また、あの目だ。怯え、不安、恐怖……。ここへ来て、散々見てきたあの目。

ただ単に友好を築きたいのに、それすらも身分と未知への恐怖に阻まれてうまくゆかない。

でも、その時の僕は別にそんなことはどうでもよく思えた。冷めたとばかり思っていた酔いが、思わぬところで力を発揮したようだ。

「同じ手だね」

僕は彼女をまっすぐに見据えた。

「……………は？」

彼女は僕の真意が読めないのか、目を丸くして一步後退った。

「パーシエさんの手、俺や佐久間や前島のとそっくりだよ。荒れて、汚れて、苦勞が染み付いた手だ」

同じだ。安月給で守る価値もない国のために命張ってる僕ら自衛官と。

いや、彼女らの方がもっと悲惨だ。

自分の身分や命を、自分自身でどうにもできないんだからな。

まったく、ファンタジー世界は常識外れな場所だよな。

それに日本のファンタジー組織、自衛隊がやってくるんだからお笑いだよ。

お互い、損な人間だよな？ そう思わねえか？

僕は酔ったことで目が据わっていた。

彼女の情熱的な瞳に俺はどう写ってんだろな。

俺には、あんな凄い料理が作れる君が、俺なんかじゃとてもかなわないようなスーパードール・ガールに見えてるってのによ。

「……………」

パーシエは尚も凍りついたまま僕の表情を覗っている。これ以上、何を言っても無駄だな。

「もう下がっていいよ。変に気を遣わせて悪かった……………」

僕は静かにそう言うと、テーブル上のワインセラーからワインをひったくると、

苛立ちを隠すために一気にラッパ飲みした。畜生、なんでこんなに悲しいんだよ……………？

「りよ、領主様!？」

リオミアが慌てて止めにやってきた。

しかし俺は聞き分けのない子供のように酒を飲み続ける。

「三尉、止めて下さい」

見かねた佐久間も席を立った。

その瞬間、もとより酒にめっぽう弱い僕は意識を失ってその場にひ

すっかりかえった。

## 第6話 朝風呂

「ぐ……」

頭が死ぬほどいてえ……。

一体今何時だ？

部屋は薄暗い。仰向けになった僕には、天井が見える。

変な天井だな……。

ああ、そうか。領主の部屋のあの馬鹿みたいにデカイ天蓋付きのベッドに寝かされてるんだな。

僕はそこまで考えると、そのままの体勢で腕を動かし、左手首のGショックを確認した。

「ちっ……夜が明けてやがる……」

あんな醜態晒した上に、課業時間に起きれなかっただなんてな。

僕が部下なら陰口叩きまくってるところだろうな。情けねえ。佐久間や前島になんと言おうか。

「御目覚めになられましたか……？ 領主様」

「わっ！？」

横から突然声をかけられた僕は慌てて飛び起きた。

「り、リオミアさん！？」

彼女はベッドの側にジッと佇んでこちらを見下ろしていた。



「なかなかお目覚めになりませんので心配しておりました」

彼女は抑揚なくそういう。ホントにそう思ってたのかあ？

「うぐ……」

痛む頭を押さえつつ、僕は足を床へ降ろした。

「大丈夫でございますか？」

「ああ……なんとかね……」

僕は枯れた笑みを浮かべた。その時になって、僕ははっと気付いた。

「なかなか目覚めないって、君、もしかしてずっとここに？」

「はい。御目覚めになった時、私めどもがないのでは失礼というものでございます」

淡々と答える彼女。

側に立ったまま、昨夜からずっと、まるで彫像のように立ち尽くしていたのか？

僕は彼女のその整った、それでいて冷たい表情を浮かべる顔をじっと見つめた。

なぜだか知らないが、申し訳なさとともに、胸がしめつけられるような熱い感情を抱いた。

「領主、様？」

彼女がその無表情に、ほんのわずかだけ心配そうな表情を浮かべて僕の顔を凝視した。

急に恥ずかしくなった僕は、慌てて顔をそらす。

「ああ〜う……身体がだりい」

その場をごまかすため、僕はおおきく伸びをした。倦怠感に顔を歪め、僕は脱がされた半長靴を探す。

が、そんなことをするまでもなく、リオミアがささっと僕の降ろした足に取り付いて靴を履かせてくれた。

「……あの」

「きつづいぎいませんか？」

「いえ、別に……」

恥ずかしいやら頭痛が酷いやらでもう何か言うのは止しておこう。しかし、靴を誰かから履かせてもらうのなんて子供のとき以来だろな。

「あ、そういえば他の二人はどうしてるんですか？」

僕は思い出したようにリオミアに尋ねた。

自衛隊が決して欠かさない日朝点呼も今日はやっていない。

馬鹿な上官のせいで暇を持って余しながら待機しているのだろうか。

「それでございましたら、サクマ殿から伝言がございます」

「あ、そう。なんて？」

「本日予定されていた行動は私めの許可をもらったので即時取り掛かる、とのことですよ」

佐久間三曹……。

僕は頼りがいのある部下に感謝しつつも、もはや自分が幹部として

有名無実化しているような疎外感に襲われた。

彼がいなければ、一体この小隊はどうなっていただろうか。自分の立場も忘れて飲んだくれる上官……か。最低だな。

「あの、領主様？」

「ん？」

僕が暗い表情をしているのを、やはり感情のこもらぬ表情で覗き込み、リオミアは言った。

「朝食がまだでございます。すぐに御用意いたしますので、食欲が  
おありでしたら……」

「いえ、まだメシはいいです」

僕は丁寧な言葉遣いで促してくる彼女を遮った。彼女は意外そうに眉を歪め、今度は僕のことを気遣い始めた。

「食欲がないのでございますか？」

「いや、それもあるけど、仕事に取り掛かっている部下をほっとくわけにはいかないよ」

「何か、不都合がございますでしょうか？」

サクマ殿は上官の命令無しに行動するのは軍規違反だと申ししておりましたが、領主様ならば大丈夫であられると……」

「そうじゃなくって、汗水流してる部下を放って自分だけメシ食ってくつろいでる場合じゃないってことですよ」

「……はあ」

リオミアはどうも納得がいかないようだ。

説明するのめんどくさいが、一応僕という卑小な人間の性質を知ってもらうためにも説明を試みる。

「あのですね、明日仕事があるってのに酒に酔いつぶれて夜が明け  
ても起きない。

その上自分らが仕事してるのにちんたらとメシを食ってるようなダ  
メ上司ってどう思います?」

執務室の机の上に放り出されたままだった戦闘帽を手に取り、被り  
ながら彼女へ問う。

「配下の者に仕事を任せられたり、ご自分がくつろぐのは、よから  
ぬことにございますか?」

彼女はどうも領主という絶対的立場をそういうものだと思っている  
らしい。

いや、かつての領主はそうだったということか。ひでえ奴だな。  
きっと部下からは陰口を叩かれまくっていたに違いない。

「じゃあ例えばさ、君がだらけてて、他のメイドが君をハウススチ  
ュアートだつて信頼してついてきてくれるかい?」

僕が言ったことに、彼女はひどくうろたえたようだった。彼女は考  
え込み、ややあつてその桜のように淡い血色の唇を開いた。

「……いえ」

躊躇いがちに、一言だけ。まるで僕の心証を悪くしないように気を  
つけているようだ。

まあ、いいさ。僕はツカツカと執務室を出ると、ドアをリオミアが  
開けるより早く開いて階段へ向かった。

彼女は慌てて僕の後ろをついてくる。

ぱたぱたと控えめな足音が聞こえてくることに、彼女がそんな細かいところまで気を遣っていることに驚きさえ感じた。

「で、ですが、領主様と私めどものような下賤な身分の者を同じ例えにするなど……」

彼女は尚も身分がどうのとややこしいことを言ってくる。

そんなワケがわからないものを強要することの方が僕にとっては不快だということがまだ分からないらしい。

きつと、この世界。彼女が生きてきた人生ではそれが当たり前だったのだろう。

だが生憎と、僕はそんな価値観クソ喰らえだっと思っててる人間なので、

それに従って横柄な態度に改まるなんてことだけは願ひ下げだ。ついでに言つと自衛隊の上位下達も大ッ嫌いだ。

「なんで？ 同じだよ。組織の中で生活するって点でもそっくりさ」

階段を下りながら、僕は皮肉交じりに話す。

「そ、そういうことではなく、身分の問題にございます」

「リオミアさんは自衛官じゃないだろ？」

話しながら、またもや玄関の扉を彼女より早く開けて外へ踏み出す。うー…おてんとさまが眩しいや。

玄関の横を見ると、昨日のあの二人のメイドが昨日と同じように深々と頭を下げていた。

僕はまた「ご苦労さん」と声をかけ、一際庭の中で目立つ大型トラックを視界に認め、その方向へ向かって歩き出した。

「は、はい。ですからまったく身分というものが……」

リオミアはずかずかと先へ進む僕のペースに翻弄されるように後ろをついてくる。

「自衛官じゃないなら僕と同じ目線でモノがいえる立場ですよ」

「は、はあ？」

「リオミアさんは文民ですからね」

「ブンミン？」

「そう。僕らのいた日本って国はね、僕ら自衛官より一般市民の方がエライの」

「御冗談を。そんな国聞いたことがございません」

「そうだな。冗談みたいな国さ」

噂では、今の日本では命がけで戦う自衛隊や資源採掘プロジェクトチームの派遣を、

占領政策だと言って連日善良な市民団体の方々が国会やら街頭やらで即時撤退を求める抗議運動をしてるんだとか。

その連中は、今の日本の食糧のほとんどがこの世界の輸入品だということを知ってるのだろうか？

撤退などしようものなら、輸入を断たれ一ヶ月と経たずに飢饉が発生するということに。

食料と資源の確保のために派遣され、

命を落とす自衛官や官民間問わず諸々のプロジェクトチームのメンバーの数はもう三桁にも登っている。

政府のせいだと彼らは批判するが、じゃあお前らは餓死していいのかってんだ。

僕だって好き好んでこんな場所にきたわけじゃねえってのに。

「そ、そういう意味では……」

そうこう言っている内に、トラックの停車場所へ到着した。リオミアは何かまだ言いたそうな雰囲気だったが、部下との会話の邪魔をするわけにはいかないと即座に判断したのか、ぴたりと黙り込んだ。まったく、大したメイドさんだよ。

「ああ。三尉い」

トラックから物資を降ろしていた前島が僕に気付いて声を上げた。……しかしこいつ幹部に欠礼するなんて大した野郎だな。

「おはようございます。三尉殿」

佐久間もトラックの荷台から現れ、思わずこちらも背筋の伸びるようなビシッとした敬礼をかざした。

「具合は大丈夫なんすか？」

「いや……正直もう寝込みてえ」

「体調が優れないのでしたら、午前中はお休みになってください。作業がひと段落したら報告に向かいますので」

「いや、そんなわけにやいかないよ。昨日のこともあるしな」

「危険物を取り扱うのにミスを犯しそうな人間に任せるわけにはいきません」

佐久間が冷静な声で僕に言った。くそう……なんにもそんな言い方しねえでもいいじゃねえか。

「そうか……」

だが彼の言うことは正しい。言い返す理由も気力も見当たらなかつ

た。しかし佐久間はこう続けた。

「ええ。そういうことにすれば、上も納得しますよ?」

佐久間はそういうとニヤリと意地の悪い笑みを浮かべた。

こいつ、いらん世話焼いてくれるぜ。……ありがとうよ、三曹。

「すまん……」

「大丈夫つすよ! 三尉は休んどいてください。こいつのは兵隊の俺らの仕事つす」

前島が腕まくりをしてぐつと力瘤を見せる。結構、僕はいい部下を持ったのかもしれない。

それから僕はさつきとは打って変わってよたよたと館内に戻ると、一つため息をついた。

「はあ……。使えない男は使えない男らしく、体調管理に気いつけないとな」

リオミアはどう答えていいのか分からなかったらしく、沈黙したまま後ろに控えていた。

「あつ! そうだ」

「いかなさいました?」

「風呂……入ってなかった……」

これだけ広い館なら、風呂の一つくらいあるだろう。

ここへ到着するまでの8日間、身体を拭くくらいしかできなかったからな。

正直、今臭ってないか心配なくらいだ。



「湯浴みでございますね。昨夜、サクマ殿とマエシマ殿はお入りに  
なされました」

「そうかい。今すぐとは言わないけど、できれば入りたいね」

これでも日本人だ。身体を清潔にしておかないと気がすまない。

リオミアはこの日初めて役目を仰せつかったことに、どこか生き生きとした口調だった。

「では御案内いたしましょう。御着替えはいかがいたしますか？」

「ああ。替えのがあるからそれを着るよ」

「左様ですか。ではこちらへ、御着替えは私めが後ほどお持ちします  
ので」

「あ、そう？ 悪いですね」

「いいえ。恐縮にございます」

彼女の話によると、浴場は別館にあるとのことだった。

一階の渡り廊下を歩きながら、改めてこの館の巨大さに圧倒される。  
これじゃあ、館内の構造を覚えるのも一苦労だ。

先を行くりオミアに、今日この見取り図があるなら持ってきて欲しい  
とお願ひしておいた。

ざっと見た感じ、この館はいくつかの大きな棟から成っている。

本館、西館・東館、メイドの寄宿舍、馬小屋豚小屋鳥小屋そして武  
道場と倉庫……。

これらに加えて小規模ながら農園まであるんだから、  
なんとまあ、ちょっととした駐屯地に匹敵するなこりゃ。

それらの維持管理を全てメイドたちが行っているというのも凄い。  
庭師や馬番、農園の農夫まで皆メイドだという。

「何ですか？」

「ランクロード様はその方が見栄えがよいと申されておりました」  
「それってただのヘンタイじゃないんですか？」

そついやあ、元の世界の北のどこぞの国の首領様でそんな感じの奴  
がいたっけ。

「へ、ヘンタイ？」

「……いや、なんでもないです」

そうこうしているうちに、風呂場についた。

重々しい扉を開けて中に入ってみると、銭湯並のただっ広い脱衣場。  
しかし、装飾品やら高価そうなインテリアまで置いてあって、なん  
となく落ち着かない。

とりあえず、初めてということもあり、浴室内を確認してみる。

「……………」

すげえ…自衛隊駐屯地の風呂場より広い。

もうもつと立ち込める水蒸気に視界が霞んでいるが、  
どうやら温泉を引いているらしく、常に湯船は満たされているよう  
だ。

が、その湯をげろげろげると気色悪い音を立てながら吐き出してる  
獅子顔の蛇腹にはあきれ返ってもものも言えない。

風呂場、などという庶民じみたものというよりは、悪趣味なラブホ  
テルの壮大版だ。

まあ、風呂に違いはないわけだけど。

「それじゃあ入ってきます」

頭を抱えつつも僕はリオミアにそう言い、

いつの間にやら彼女が持ってきた石鹸とタオル、  
シャンプー（後で知ったがこの世界でこんなもんを使うのは王侯貴  
族のみ。つまり超高級品だったというわけだ）  
を受け取るうとした。

「はい。どうぞごゆるりとおつかりなさってください」

が、彼女は差し出した手にそれらを渡そうともせずになんと言った。

「あ、あの……」

空を切った手が空しい。

「はい…なにか？」

「それ、僕が使っているんですよね？」

「もちろんでございます」

「じゃあ、渡してくださいよ」

「……何故でございますか？」

リオミアはさらりと答えた。

「いや、何故って、それがないと身体が洗えないじゃないですか」

「ですから、何故それを領主様へ御渡しする必要があるのござい  
ましょう？」

「……」

ひょっとして……。

「リオミアさん、もしかしてさ、前の領主が風呂入るときって、そ  
の…、なんだ…、君も一緒に入ってた…のかな？」

どうか査察官が来たときにセクハラで訴えられませんかように。

「はい。領主様のお体をお清めさせていただいております」

さらりと言うようなことでございましょうか？

僕は開いた口が塞がらなかった。

ラブコメやらだと、ここで純情な少年が彼女のあられもない裸身を想像してしまつて顔を真っ赤にする、

なんて展開になるんだろうが、現実はそのまんじやない。

いくら美少女でもあかの他人に風呂で見つめられてるのって、すげえ嫌だろ？

しかも僕はちよっぴりえっちなラブコメデイの主人公なんかじゃない、い、

暫定管理小隊に所属する自衛隊員というゴツツイ立場だ。

今後この館で頭を抱えながら仕事に励まないといけない、この風呂場も職場の内なのだ。

しかしまあ気合の入った変態だったんだな、ここの前の領主は。もし出会うようなことがあったら鼻っ柱へしおつてやるぜ、

「はあ……」

いろいろ言いたいところだが、風呂場で人権学習の真似事やるのはどうもマヌケだ。頭もまだ回復しちやいないし。

「どうなさいました？」

「いいからそれ貸してください。身体くらい自分で洗えますから」「なっ！？ なりません！」

彼女はよほど度肝を抜かれたのか、飛び上がらんばかりのリアクシ

ヨンだった。

僕は進まない会話に苛立ちを覚え、つい意地悪い発言をしてしまった。

「なんでですか？ 領主の命令に逆らうんですか？」

「あつ……」

彼女の表情が凍る。無表情に、どこか抗えぬものへの服従を強要される諦観のようなものが垣間見えた。

なんでこんな強制じみたことを言わなきゃならないんだよ。

別に彼女が悪いわけでもないのに、僕が悪いわけでもないのに……。ランクロードとかいう野郎、万が一出会ったら実弾演習の的にしてやらあ！

そんなできもしない悪態を日本人らしく脳内だけでつきつつ、

僕は彼女からようやくお風呂セットをゲットする。

彼女は、どこか悲しそうだった。

ひょっとして、彼女は自分の仕事を否定されているような気持ちなのだろうか。

少しだけ、彼女と話していて彼女のことが分かったような気がする。生きる意味であったメイドとしての仕事を取り上げることは、

つまり生きる意味を取り上げているのと同じ意味ということになる。仕事なんてマンドクセ、と言っている僕ら日本人とはワケが違うんだ。

「……じゃあ、服、机の下のバックパックの中に入ってますから、持ってきておいてください」

「えっ？」

「そいじゃあさ……」

僕は彼女の背後に素早く回りこむと、背中を押して彼女を脱衣場か

ら追い出した。

「あつ！？ りよ、領主様！」

「お願いしますよりオミアさん。これもお仕事の内さ」

そういつて僕は彼女の肩を二度ほど叩いた。

「……………」

彼女は呆然と僕の目を見つめた。そしてややあつて

「しよ、承知いたしました！ すぐにお持ちいたします！」

弾かれたようにお辞儀して廊下を走っていった。

「ふーん……………」

その慌てっぷりは、初めて見た。

ずっと無表情で、何を考えているのか分からない印象があつたが、意外な一面が見れたような気がして、僕は彼女への親近感が沸いてくるのを感じた。

なんだ結構、かわいいところもあるんだな。

「さて……………ひと風呂あびるかあ」

そうして僕は、脱衣場で服を脱ごうと迷彩服のジッパーに手をかけた。

## 第7話 ギルド

「これで武器関係は全部です」

カチャン、とクローゼットの中に六四式狙撃銃を立て掛け、前島が言う。

クローゼットの中には衣服ではなく、黒く鈍い光沢を放つ自動小銃が収められていた。

ここは以前、高価な古着や布などを保管しておく部屋だったらしいが、

前領主が逃げ出す際に高く売れるものは全て持ち出してしまったのでほとんど空部屋状態だったため、

武器庫として使うことになった。

七・六二ミリ口径の六四式自動小銃が四丁と、狙撃仕様のものが一丁。

その他に、分解されてケースの中に入れられている六二式機関銃一丁。

そして九ミリ拳銃三丁とピストル型照明弾発射機一個。

弾薬は七・六二ミリ弾が五百発と九ミリ弾九十発、エクト暫定管理部隊の最大火力である手榴弾一ダース。

発煙筒などもいくつがある。火薬が使用されているものは全てここに入れてあるわけだ。

できれば、一度も使わないで全てを終えたいもんだ。

っていうか、こんなポンコツ兵器揃いでどうしろってんだ？

六二式機関銃なんかにいたっては、あの生真面目な佐久間ですら

「バラしときましょう。定期的に整備するだけ無駄です」

とまでいわせしめたクソ機関銃だ。

トリガー引いただけでぶっ壊れる、世界最悪の銃だ。

どんくらい酷いものかというと、演習ですだだだっとなら連射できた  
ら隊員たちが「おおー」と驚くくらいすぐ壊れる。

部品の数も多いので整備も大変。

組み立てておくと少し荒っぽく動かただけで銃身が外れたり小さな  
部品が欠落するんで厄介。

バラして箱の中に放り込んでおく方が部品の紛失もなくて安心だ。

八九式自動小銃やミニミ軽機関銃といった新型（というほど新しく  
もないが）で性能の安心なものは、

全て最前線など重要な方面へ回されてしまい、

僕らのような辺境の部隊にはこんな半世紀近く前の代物ばかりがや  
つてきているというわけだ。

故障の心配なく使えるのは拳銃だけだ。 …… と佐久間に苦笑しな

がら言ったら、

『ライセンス生産された日本製P220は重要な部品の寿命が短い  
んです。

見てくださいほら、このスライド、少しヒビが入ってるでしょう？

これは命中精度の低下や作動不良、最悪の場合暴発の危険があるん  
で使わない方がいいです』

ここは銃のゴミ捨て場か……？

『まあ、グリースガンやM1ライフルが混じってなかったただけ良し  
としましょっ』

……激しく鬱だ。

『拳銃は使える部品と使えない部品を分けてまともなものを二丁ほど



組み立てておきます。

幸い六四式の方は全部まだ使えそうですし。なんとかかなりますよ』

まるで旧軍の共食い歩兵銃だな。

先行き不安な現実に頭を抱えながら、銃の分解結合を行う佐久間を残し僕らは武器庫となった空き部屋を出た。

「せめて重機関銃が無反動砲くらい欲しいっすよね」

前島がいい加減な感想を述べる。

「そんなもんが来たとして、お前扱えるのか？」

「……いえ。俺、教育課程二ヶ月しか受けてないですし」

戦線の拡大と、元から人員不足気味だった自衛隊は深刻な人手不足に陥っていた。

ベテランの隊員は前線に、僕みたいにやる気のない奴は後方支援といった効率的な配置になっではいるものの、頭数が少ないのはいかんともしがたいらしく、

防衛省は予備自衛官補の募集条件を恐ろしいほど緩和して健康ならどんな奴でも入隊させるようにしてしまった。

前島はそのクチだ。

本来、新入隊員には前期と後期でそれぞれ三ヶ月ずつ、計六ヶ月間の教育課程が義務付けられている。

しかし、戦線の拡大に補充人員が追いつかず、日本国内の常備自衛隊員の七割近くが国外派遣、

つまり前線投入されているという恐ろしい状態が発生してしまった以上、

人員の補充は急務であった。

予備自衛官と即応予備自衛官が前線補充隊員の中核を担い、

予備自衛官補のようなたったの二ヶ月しか教育を受けていない、素人同然のインスタント隊員を国土防衛に充てるという苦肉の策をとった。

前島は射撃の成績と銃の分解結合が早いというだけでここへ回されたという。

つまり、事実上日本本土はまともに銃も扱えないような連中が守っているということだ。

その上、辺境とはいえ一応派遣部隊である僕らの武器がこんなポンコツ揃い。

日本には兵器工場が存在しないため、必要な武器や補給物資の生産も滞りがちだという。

国民はそんな命がけの現場の苦労も知らないで、ワイドショーで自衛隊がこんな残虐な兵器を使って異世界人を殺している、

というニュースを見て街頭でデモを起こし、人気アイドルグループは反戦コンサートを開いてる始末だ。

非常事態だから、官民一丸となってこの苦境を乗り切ろう、とは全くなっていないのだ。

……いろんな意味で、日本は大丈夫なんだろうか。

ま、いいか。僕一人が悩んだってしょうがないさ。給料分の仕事はするよ。

「武器庫はつくったから、今度は発電機の設置だな」

僕は歩きながら呟く。

小型ながら低燃費で、ある程度まとまった電力を供給してくれる日本製発電機をトラックに積んできていた。

電力が確保できれば、パラボラアンテナを屋根に立てて、はるか後方の都市にある自衛隊本部と連絡が可能になる。

更に近々、気球衛星を上げることで衛星通信による日本本国とも電波が受信できるようになるらしい。

そうすれば、ラジオ番組に衛星放送も楽しめるようになる。

……TVないからラジオだけなんだけどな。ま、とりあえず暫定管理機構としての生活基盤は出来上がるわけだ。

「ハツデンキ……とはなんですか？」

この館の責任者として、傍らに控えていたリオミアが尋ねてくる。

「電気を造る機械のことですよ」

「デンキ、でございますか？」

彼女は小首を傾げた。まあ分からないのも無理はない。

「そ。まあ見てれば分かりますよ。魔法みたいなものさ」

「領主様。魔術のお心得があるのでございますか？」

「魔術……？」

んなワケねーべや。あんなバケモノじみた力、凡人を絵にかいたよ  
うな僕に備わってるはずがねえ。

ちなみに魔術、魔法の類はこの世界において自衛隊を最も苦戦させ  
た。

現在の戦死者二百二十二名中、魔法攻撃による死者は八十名を超え  
ている。

全くの未知なる存在ゆえ、対処法はおろか基礎知識すらなく、  
低空飛行していたヘリや非装甲車輛が相次いで撃破されるという史  
上最悪の

『魔法都市ネリエントス市街戦』では一気に四十名もの死者を出す  
惨事となった。

しかしまあ、九三年のソマリアの米軍もそうだったが、

ハイテク装備で勝る自衛隊に対して敵側の死者数は推定三千人という差があったのも事実だが。

……あの戦闘の後、戦死者の棺が輸送機から、まるで荷物のようにまとめて降ろされてくるのをTVで見て、自衛隊を脱柵する隊員が激増したんだよな。

つたくよお。自衛隊の制止を聞かずに敵地に取材に行つて勝手に惨殺された女カメラマンのときは、メディアじゃ平和のために散つた勇氣あるジャーナリスト扱い。とつくに死んでたそいつの救出に行つて二人機動隊員が負傷、内一人が重態で集中治療室送りになつたことには全くといっていいほど触れやがらねえでさ。

「領主様？」

「……あ」

眉間に皺を寄せて突然黙りこくつてしまった僕に、リオミアが機嫌を損ねてしまったのではないかと、気が気でないといった表情で声をかけてきた。しまった…なにやつてんだよ自分。

「まあ……ね。一応パソコン検定二級だよ」

説明するのもマンドクセので、いい加減なことを教えておく。

「す、素晴らしゅうございます」

意味分かっていつてんのか……？僕は思わず苦笑を漏らした。

「りよ、領主様？」

「いや、ごめんごめん」

彼女が狼狽する様が、どこか、なんとというか、微笑ましい。

夜盗に襲われたり、この館へ来て立て続けにおきた非現実的な出来事に加えて、

重圧を感じさせる身分になってしまったストレスの中、久しく忘れていた笑いだっただ。

彼女、案外癒し系だったりしてな。

何か問題でもあったのだろうかと難しい顔をしている彼女を横に、僕は次の仕事に取り掛ろうと、トラックへ機材を取りに向かった。

「三尉いー。こっちはOKっすよ」

前島が叫ぶ声が館の裏側から聞こえた。

発電機の騒音が気にならないように、館から少し離れた場所に設置したからだ。

そして今僕は長距離通信用のパラボラ・アンテナを立て終わり、屋根で一息ついているところだった。

通信機との接続は佐久間がやってくれている。

さつき、接続が完了したことをトランシーバーで伝えてきたから、後は前島の発電機が動き出すのを待つだけだ。

「よーし。じゃあ回してみれ」

「あいあいさー」

日が暮れるまであと少しといった時間になって、今日の締めくくりとばかりに発電機の始動に踏み切った。

前島がガロンガロンとレバーを引くと、ダダダッと発電機が発電を開始する。

「ふいー。終わった終わった」

前島は一仕事を終えたことに満足したらしく、油で汚れた手を拭きながら中庭に姿を現した。

御手伝いをしろ、とでもリオミアあたりに言われたのか、背後に何人かメイドさんがついてきている。

が、どうも居心地が悪そうにしているのは、別に仕事の手伝いらしいことなど一つもできなかつたからだろう。

「どうだった？」

屋根の上から尋ねる。

「これでも工業高校卒です。あれくらい説明書見れば分かりますって」

へえ。アイツも結構やるじゃんか。

ちよっぴり部下の意外な一面に感心しながら、僕は危なっかしい足取りで屋根を降り、天窓を開けて四階へ戻る。

「よつと」

「領主様」

「うおっ!?!?」

天窓から降りた瞬間、いきなり横から声をかけられた僕は思わず飛びあがった。

「り、リオミアさんですか……」

「驚かせてしまい、申し訳ございませんでした」

「いいですよ、別に。もうだいぶ慣れちゃったし。……で、何か用ですか?」

「はい。非常に申し上げ難いのですが……」

すると彼女は眉を歪めて忌々しげな表情を浮かべた。僕は思わず姿勢を正した。彼女がこんな表情をするのはただごとじゃないな。

「評議会の者どもが訪ねてきております」

「えっ評議会!？」

書類で読んだ。

評議会とは、帝国統治時代は帝国の隷下で街の統治活動を行い、帝国無き今はその評議会が一時的な自治政府機構としてエクトの維持管理を行っている。

評議会はギルドと呼ばれる商工業の同業者組合の頭や、地主といった名士の類が寄り集まって構成されている。

市長やその他役員はそこから選出されるといった、まあ見た感じ民主的だ。

しかし、リオミアはなんでそんなに忌々しげに彼らのことを言うのだろうか。

「なんでそんなに評議会の人たちのことを言うんです?」

OD色の作業着から着替えるために急ぎ足で領主部屋へ戻りながら、RPGキャラよろしくすたすたと後ろについてくる彼女に尋ねる。

「あのような卑しい者どもを領主様の目に触れさせるのは心痛うございます」

さざりと言つりオミア。

「それ、ランクロードに吹き込まれたんですか?」

「!」

「……まあいいです」

なんとなくそんな気がしたんだが、案の定か。

民は為政者の食い物、自分は食物連鎖の頂点に立つ王者、か。ランクロードとかいうゲス野郎の考え方が分かってきたぜ。嬉しくもなんともないけどな。

「あ、あの……」

「ああ。すぐに会いに行くから伝えといて。応接室くらいあるんでしょ？ お茶でも出して待たせておいてくれないですか？」

「は、はい！ 仰せのままに」

部屋に戻ると、リオミアのときは使わなかったわざわざ防水カバンの中に入れて持ってきて、

ここに着いてからはハンガーにかけておいた陸自の制服を取り出し、急いで袖を通す。

ネクタイをキュツと締め、制帽をサツと被って、やたらと豪華な姿見でおかしな点がないか確認する。

防衛大の頃から叩き込まれてきているからな、おてのものさ。

「うううー。緊張すんなあ」

つまりこれから市長さんたちと会議するわけだ。

ある程度予想はしていたけど、どうしよう……きちんと説明できるだろうか。

親父ぐらいの歳の人ばかりなんだろうなあ。こんな若僧が新しい領主だと？なんていびられないかなあ。

いや、待てよ。

この街の頂点に位置していたであろうこの館の人間がこんな領主様絶対主義に汚染されてるんだから、



街の人間もまた然り、ということになってるんじゃないだろうか。それはそれで話しくそうだな……。ま、いいや。悪ノリするわけじゃないが、ここの領主は僕なんだし。もう後戻りなんてできやしない立場になってるんだ。

「はあ……これで特別手当が一日たった百円じゃやってらんねえよなあ」

ぼやきながら、僕は部屋を出た。

「領主様……その御洋服は？」

今までずっと迷彩服か深緑の作業服だったので、足早に戻ってきた彼女は初めて見る自衛隊の制服に目を丸くする。

「こつちの世界でいうとこの正装ですよ」

「な……！ あのような者どもにお会いなされるのにそんな御大層なものは……」

「必要なですよ」

説明もかったるそうに彼女の声を遮り、応接室はどこか尋ねる。

そして毎度のことながら、付いてくると言ってきかないリオミアを先導として廊下を歩いていった。

「どんな人が来てました？」

「市長と役員全員、各ギルドマスター、近隣の農村の村長なども来ております」

うへえ、マジやりにくそうだな。

生まれてこの方命令されるばかりだった僕が、自分よりずっと年上

の大人に命令しなきゃならない。気が重い。

「ここでございます」

「う、うん」

着いてしまった。中から微かに人の話声が聞こえてくる。

人が大勢いるだろうと容易に想像できた。

ひよいとすればLR同時押しで逃走してしまいたい気持ちを抑え、ドアノブに手をかける。精一杯の虚勢を張って、僕は室内に入った。

「おお…！」

「か、彼が…！？」

「領主様」

「あの異世界の……」

うわっ！？

いきなり視線がイテエ……。

二十人以上の初老から老人までの、いかにも責任者といった雰囲気  
の男たちの様々な視線が全て僕に注がれている。

多くは好奇、畏怖、驚愕、いくつかは嘲りも含まれているだろう。

僕が入室したことで、その場の雰囲気ガラリと変わった。彼らに  
一体僕はどんな風に見えるのだろうか。

ちよっとかなり、僕的にはピンチな雰囲気。

よ、よし！ 面接じゃないけど、とにかくこういうのは第一印象が大  
切だ。

できるだけ、さわやかにいこう。

「ど、どうも皆さん初めまして。日本国より新しく着任いたしました  
辻原と申しま……」

「このお方こそ二ホン国より参られた新たなる領主であられるエーキ・ツジハラ様である！ 皆の者、心せよっ！」

ええーっ！？リオミアさんあーたいきなりなんて最上級に尊大な態度なんだ！？

「おお領主様……………」

「領主様……」

彼女の言葉に弾かれるように、その場にいた全員が僕に向かって頭を下げた。

状況・立場・彼らの印象・居心地全て最悪。

リオミアさん、気持ちは嬉しいんだけどちょっとこれはシャレにならない過ぎる。

いかんフォローしなければ！ 今後の僕の立場しいては生活に影響してくる。

「あーあーあー！ リオミアさんリオミアさん！ ちょっとちょっと……………」

また何か言い出さないか心中穏やかでないのだが、努めて平静を装い慌てて彼女を呼び寄せる。

「誰がそんな紹介頼んだんですか！ 責任者同士の会議なんですから自分に任せて下がっててくださいよ！」

さすがの僕も、評議会のメンバーに聞こえないように小声ながらも辛辣な言葉を浴びせてしまう。

「も、申し訳ございません……………」

僕の言葉を耳にするや、彼女は今の威勢はどこへやら、まるで塩をふりかけられた軟体動物みたいにしおしおと萎縮する。まったく、申し訳ないと思ってるなら少しは配慮してくれよなあ。

「りよ……領主様」

と、突然背後から声が上がった。

僕が振り向くと、どこか疲れ果てた雰囲気のある小太りの中年男性が汗を拭きながらおどおどとこちらを見ていた。

「あ、はい。なんででしょう?」

僕はその哀れなまでの卑屈オーラにどこか安心し、さらりと聞き返した。

「そ、そのですね……本日こうして領主様に謁見の席を設けていただいたことに感謝するとともに……」

「あー。すみません。どうにもこの二日はこっちも忙しかったもので。会議はこちらから申し込もうと思っていたんですけど」

会議くらいで感謝だの謁見だのと大仰な単語を並べ立てるその男性に、案の上だったかと即座に感じ、僕は手間を省くつもりで言葉を遮った。

心証を悪くしてしまったのか、はたまたどうすればいいのか分からないのか、中年男性は顔を真っ青にしている。

僕はそれに居心地の悪さを感じながらも、長テーブルの上座に少し躊躇いながらも腰を下ろし、

どれも不安そうな評議会の面々の顔を確認してみる。

誰も、何も話さない。この館にきて少し理解できるようになった。きつと、僕が許可していかないからだろう。しようがないな…。

「えーとですね。まあ、自分の自己紹介は今さっきの通りで別に変わりはないんですけど、

会議を始めるにあたって今度はここにおられる方々の名前と役職名を教えてくださいませんか？」

評議会の面々が驚いたような顔をしてざわついた。

う……僕またなんか変なこと言っちゃったかな？

が、ざわめきも長くは続かず、ぴたりと止んでしまった。……大方、後ろに控えてるリオミアが睨みつけでもしたんだろうな。

「わ、私が市長のカータースでございます。領主様」

最初に言葉を発したのは、あの小太りの中年男性だった。

「え、市長さんだったんですか？」

思わず、日本で自衛官がこんなことをこぼしたら市と自衛隊に十年越しの軋轢が発生しそうな発言をしてしまった。

それくらい、違和感ありまくりな市長であった。とてもじゃないが、人の上に立つような人物には見えない。

「は、はい。ははは。皆にそう言われます」

僕は失言にはっとしたが、どうやら彼のほうはなんとも思っていないようだ。よかったよかった…。

「じゃあ、この中での責任者はカータースさんということですね」

「は、はい……」

別に叱責しているわけでもないのに、気の毒なくらい萎縮して答えるおっさん。

しょうがねえな、これ以上どうこう言っても進まねえしめんどい。さっさと次にいこう。

「では部下の方のお名前と役職の方を……」

「は、はい」

補佐役や書記といった数人の部下を紹介する市長。

市長ほどではないものの、一様に彼らは不安そうな面持ちであった。そんなに、僕のことを怖いのかねえ？

ん？

僕はふとムサイおっさん連中の中に若い女性がいるのを発見した。

僕よりも四〜五歳は年上だろう。

しつとりと濡れたような紫がかったセミロングの髪、あえて色香を際立たせるように引かれているアイシャドウ、

露出度が高く、なまめかしい光沢を放つ皮製の服を身につけており、男の欲望の視線を捕らえて放さないであろう豊かな胸が腕くみした間から覗いている。

だが目立ったのはそれだけではない。

彼女一人だけが、僕に対して畏怖の表情を向けていなかったのだ。

どこか値踏みするような、何を秘めているのか分からない妖しい瞳が僕を捉えている。

何度も言うが、いくら美女美少女がいたとしても、僕は生憎ラブコメの主人公じゃないんで、

彼女に対して感じたのは『なんじゃあこのフェロモン姉ちゃん？』というどこかひいた感想だった。

日本で非番の日、彼女に出会ったなら、垂涎ものの反応だっただろ

うが、

こんな神経すり減らしっぱなしの現場じゃあそんなもんだ。

「領主様。次はギルドの者どもを御紹介いたします」

「え？ あ、うん……」

慌てて市長の方へ視線を返す。

危ない危ない。会議中にこんな反応だったら自衛隊内なら上官からビンタ喰らってるところだ。

ちらりとあの妖艶な女性の方を一瞥すると、彼女はくすりと妖しく笑っていた。

しかし僕はドキリとするとかいう以前に、この姉ちゃんも何かの責任者だということの方に頭がいつてしまっていた。

キャバクラ組合でもこの世界にはあるのだろうか？

市長はそんな僕にはお構いなし（多分、声をかけて機嫌を損ねでもしたら大変だと思ってたんだろう）に、

各ギルドマスターの紹介を続けている。

様々な商工ギルドの名前を一度に言われても、とても覚え切れそうにない。

これは後で書類に纏めておいた方がいいな。そして、遂にあのフェロモン全開の姉ちゃん番になった。

「えー…そちらの彼女は盗賊ギルドのマスターにございます」

「ふーん……つて、と、盗賊う！？」

突然素つ頓狂な声を上げた僕に、市長が椅子から飛び上がりながら驚いた。

「え、えええとですね……」

呂律が回らないまま、額にびっしりと汗をかく市長。

「サキユア・ナイトロードと申します。領主様……」

代わりに言葉を発したのは当人だった。シーフマスター・サキユアは妖艶な笑みをたたえ、僕を見つめている。

「我がギルドに何か問題がございますでしょうか？」

まったく恐れを知らない、淡々とした口調で尋ねてくる。

「問題……というか、盗賊というのは、そのお……犯罪組織なわけですよね？」

僕は他に言葉も見つからず、直球にそう言うしかなかった。彼女の深い碧眼に圧倒されていたということもあるが。

「その通りですわ」

躊躇いもなく、彼女は即答する。

「ひ、非常に申し上げ難いのですが、日本の法律と照らし合わせても、犯罪組織を公認するわけにはいかないんですけど……」

こうも面と向かって肯定されては、対応もなにもあったもんじゃない。自然と、僕の言葉は尻すぼみしていた。

「つまりそれは、我がギルドを潰すおつもりであるということでしょうか？」

「潰すだなんて大袈裟なものではないんですけど、公機関として公



認はできませんし、犯罪組織である以上、その存続を容認するわけには……」

「前領主の時世では、税さえ納め、領主に従属するのであれば存在も活動も認められておりました。そういった『契約』もないと？」

「生憎ですがありません」

公共機関である自衛隊が査定もなしに特定の組織に肩入れしたり契約したりできるはずがない。

こればかりはハッキリといえることだ。

「そうなれば、領主様の御身も保障しかねますが？」

背筋がゾクリとする微笑を浮かべ、彼女は静かに言った。

「……脅迫するんですか？」

怖いとかそういうこと以前に、その物言いがムカついた。コイツ何様のつもりじゃ。

「とんでもございませんわ。ただ、我らとて明日の生活がかかっておりますゆえ」

「防衛省の上層部に問い合わせ、後日決定を知らせるのはどうでしょう？」

「そんなことを仰って、もし我らに不利な決定でしたら？」

「ではどうしろと？」

「多くは望みませんわ。ただ、我らの存在を認めて欲しいのです。何も公文書に載せるといつているのはございません。ただ、『なにもなかった』こととして認知して欲しいのですよ」

「つまり、報告書に犯罪組織が存在している記載をするな、と？」

「その通りでございます。今日ここへ参じたのも、いずれは我らの

存在を知ることになられますゆえ、  
早めに陳情しておいた方が得策と思つてのこと……」

「……………」  
「御心配には及びません。我らのギルドは正統派にございます。黒い仕事は主としておりません」

「犯罪に黒いも白いもあるんですか？」

「……………領主様はまだこの世界の暗部をよく御存知ないように見受けられます」

「それがどうかしたんですか？」

「いえ……………。ただ、我ら程度の盗賊にここまで頑なになられるようでは、この先危険でございますよ」

「どういう意味です……………？」

その人を食つた態度に腹立たしさを覚えながらも、気にかかることを言う彼女に聞き返す。が、彼女が答えるより先に、誰かが僕の隣を横切つた。

「リオミア？」

「領主様への侮辱、もう許せぬ」

僕はそこまできて、彼女の両手に短剣が握られているのに気が付いた。彼女どこにあんなもの隠してたんだ！？

「あら……………。久しぶりね、可愛い子猫ちゃん。あなたに私が殺れるとでも？」

「リオミアっ！ 止せ！」

僕は慌てて席を立ち、リオミアの手を取った。

「…領主様」

リオミアがはつとした表情で僕の顔を見つめる。

「それ以上何かやったら、両方とも傷害か殺人未遂の容疑で逮捕しますよ」

僕はそういつて腰の、佐久間が護身用にと渡してくれた拳銃を抜いた。

彼女が今にも凶器を繰り出してきそうな恐怖があったので、すかさず照準を合わせる。

拳銃がどんなものなのか知らないのか、またはこちらを舐めきっているのか、

サキユアは銃口を前に眉一つ動かさずにこちらを笑みをたたえて見つめている。

「……私の用件はこれだけにございます。」

それ以外のことは我らには関わり薄きことゆえ、本日はここでお暇させてもらいますわ」

彼女はそういつと、何事も無かったかのように席を立って出口へと歩んでいった。

「領主様。よい判断を期待しておりますわ……」

優雅に振り返り、サキユアは僕にウィンクして見せる。だがあいにくと、今の僕にとっては気色悪いだけだ。

「女狐め……」

リオミアが、サキユアの出で行った扉を、まるで射殺さんばかりの

殺気に満ちた瞳で睨みつけていた。

僕は、無意識の内に起こしていた撃鉄を慎重に降ろし、疲れ果てたように椅子へと戻った。

「りよ、領主様？」

評議会やその他のギルドマスターたちがおろおろとした様子で、遠慮がちに声をかけてくる。

「会議……続けましょうか」

僕は憔悴した表情に苦笑いを加えてそう呟いた。

## 第8話 お願

「疲れたあ……」

日付が変わろうかという深夜になって、僕はようやく解放された。部屋へ戻るなり、ベッドへ倒れこむ。靴を脱ぐのも面倒くさい。そのままベッドにうつ伏せになっていると、誰かが靴を丁寧に脱がせてくれた。リオミアか……。

「ありがとう……」

「おそれ入ります」

相変わらず恭しい態度で返してくる。

もう、何故あんな武器を隠し持っていたかなんて、聞く気力もない。会議で以前リオミアにしたのと同じ説明を繰り返し、

最後に質問に応じると言った途端質問が際限なく浴びせられるハメになった。

遠慮がちだが、どれも難解な問題で、

答えもほとんど「後日お伝えします」か「前向きに善処します」「しか返せなかった。

解決できたのは、領主が街の娘の……その、なんだ、初めてを奪う権利、つまり初夜権はどうなるのかを、  
全面撤廃だと即答して娘さんのいる人たちを安心させたことくらいだ。

しかし、えらい感謝のしようだったな、ありゃあ。つーか、そんな権利が公然と存在していたこと自体が驚きだ。

「つー…でも風呂入ってこなきゃ……」

もう眠ってしまいたい衝動を抑え、体を起こす。  
僕はいつも自衛隊の窮屈な半長靴では不便なので、館内では持ってきたスリッパを履くことにした。  
すかさずリオミアが僕の足下へ運んできてくれる。

「では支度いたします」

「マジで？　ありがとう」

「いえ。恐れ入ります」

彼女は僕の日用品をそのままぶちまけているテーブルの上から、タオルや風呂セット（これは私物だ）を丁寧な手つきで取り上げ、スリッパをペタペタと鳴らしながら部屋を出て行く僕の後を追ってくる。

廊下は薄暗く、メイドも就寝している者が大半なのか、一人も出会わない。

「リオミアさん」

「はい」

「なんであんな物騒なものを持っていたんです？」

僕は後回しにするのもよくないと考え、歩きながら尋ねた。

「領主様を守るためにございます」

「そういうことを聞いてるんじゃないですよ」

「失礼しました。しかし他に理由などございませんので……」

「まあ、護身用の武器を所有するのはまあ百歩譲って許可するけどね、

今度から僕の許可もなしにああいう行動にはでないでくれ。寿命が縮まったよ……」

「申し訳ございません。以後、徹底いたします」

頭を下げて、寂しげに彼女は言った。

いや、僕がそう感じただけかもしれないけど、寂しそうだった。

彼女は彼女なりに必死にやっているのだろう。同時に、それを汲んでやれない自分が情けなくもあつた。

「僕はこれでも自衛官なんだ。どっちかというと、君たちを守る立場なんだよ。」

だから、できればもうあんな武器なんて持ち歩かないでくれると安心だ。いざって時は僕がなんとかするからさ」

ため息混じりに言うと、彼女は小首をかしげる。

「……それは命令にございますか？」

「命令じゃないよ。お願いだ」

「……お願い、にございますか？」

「そ。個人的な、ね」

苦笑いしつつ、肩を竦めてみせる。

「……難しいです」

「は？」

「私は、人から命令されるか、命令するかのどちらしかありませんでしたので……」

彼女は、まるで自らの不甲斐無さに失望しているかのような複雑な表情を浮かべて呟いた。

僕には聞こえないように、呟いたつもりだったのだろう。

「領主様のお言葉は、難しゅうございます……」  
「……………」

僕は、答えるべき言葉が、思い浮かばなかった。  
難しく考えなくていいよ。この一言が口から出なかった。

何故だろうか。彼女は、きっと僕みたいな人間では想像もつかない  
ような過酷な人生を歩んできているんだろう。

その中で、ようやく培った価値観を、根底から覆すようなことを僕  
は言っているんだ。

てめえの都合のいいことだけ並べ立てて、女の子に押し付けるなん  
てこと、僕にはできない。そこまで、無責任じゃない。

「では、じゅるりとおくつろぎください」

風呂の前で、彼女はまた僕に対して頭を下げた。

僕は、どこかぶつけようのない激しい苛立ちを、腹の底に抱えてい  
るような気持ちになった。

朝がきた。ガキの頃、夏休みに

「きいぼーのああさあーだ」ってラジオ体操でさわやかに言っ  
たけど、今の僕にはそうとは思えなかった。

「領主様……。朝にございます」

しかしまあ、仕事とはいえこの口には疲れつてもものがないのかね。

昨夜だって、雑務があるからとか言っ僕より遅く寝たみたいなの  
に、



僕よりずっと早く起きてるんだから凄い。自衛官が言う言葉じゃないんだけどな。

「ん……起きてるよ」

「御食事の支度はできております」

「あんがとございます……」

眠気眼をこすりながら、僕はのそのそとおき始める。

私服の、上はシャツ、下はジャージといった格好の僕は、スリッパをつっかけながらOD色の作業服を取りに行く。

が、そんなことをするまでもなく、リオミアが丁寧に腕に抱いてこちらへ持ってきていた。

窓から差し込む朝日が、彼女の銀髪をきらきらと照らす。僕は、目が覚める思いでその姿を見つめた。

「領主様。袖をお通しします」

「えっ？ い、いやそれくらい自分でやるから……」

見とれている内に、背後を取られてしまった。

こうなると、もう降参するしかない。僕は彼女のいうとおり、袖を通してもらうことにした。さすがにズボンは自分で履くと断ったが。

「あー三尉。おはようございます」

食堂へ向かう途中の廊下で、前島とでくわした。

「お前、顔に似合わずきちっと起床できるんだな。インスタント隊員の割には感心感心」

「へへっ。お湯入れて三分じゃなくって、駐屯地入れて三ヶ月です

か？」

「三ヶ月どころか二ヶ月じゃあな。いくらお湯が熱くても、まだ食えないだろうに」

「同感っす」

そんな皮肉混じりの冗談を言い合いながら、食堂へ向かう。

…ちりん…

「ん……？」

鈴の音？ふと後ろを見ると、リオミアの少し後ろを、おずおずとした表情の小柄な女の子がちょこちょこ付いてきている。

誰だろう？よく見ると、彼女の豊かな緑色のツインテールの髪を束ねているアクセサリーが、鈴だった。

「ああ、そのコっすか？」

「ああ……。誰だ？」

「名前ミルシエちゃんって言って、俺っちの身の回りの世話をしてくれてるんすよ」

「へえ。お前にも専属メイドがついてるんだな」

てつきり僕のリオミアだけかと思っていた。

……が、『専属メイド』なんて言葉が自然と出てきたことに、

僕は少しこの空気に自分が慣れてしまったような気がした。なんとなく、ヤだ。

「気の利いたいいコっすよ」

でれでれとだらしなく、前島が言う。

当の少女は、ふるふるると不安そうに僕と前島の顔を交互に見比べて

いる。

前島の言つとおり、おとなしく賢そうな印象を受ける。まだ十二、三歳くらいだろうか。もっと幼いのかも知れない。

「おめえなあ、とりあえず言つとくけど、間違つても手なんか出さなよ。発覚でもしようものなら責任問題になる」

無性に心配になった僕は、とりあえず釘をさしておく。

さすがにこんな子供にそんなことはないだろうが、その他のメイドが心配だ。すると前島は意外そんな顔をした。

「じゃあ両者合意の上なら？」

「はあ？」

僕はそのストレート過ぎる言葉に声を失った。

「ば、馬鹿いえ！ 俺たちは仕事でここに来てるんだぞ」

予測不能な反撃に狼狽しながらも、僕は慌ててそういった。

「でも、彼女つくっちゃダメなんて規則、ありませんでしたよね？」

おいおい、屁理屈ばかりこねやがって。

「あのなあ。俺たちは無期限とはいえ、いつかは交代要員と交代したり、

あるいはここに自治政府が発足すれば自動的に出て行かなくやいけないんだぞ。

お前の日本にいたときと同じ中途半端な意識で恋愛なんかできねえんだよ。

わかったか？　そもそも、こつちの世界の人間の価値観つてのを考えろ。

恋愛も別れるのも結婚するのも自由つてわけじゃねえんだ。

恋愛を楽しむだけ楽しんで、撤退命令が来たらいい思い出をありがとつ、

はいさようならつてわけにはいかねえんだ。

ナンパや合コンで出会った女とは違って彼女らにしてみれば一生を左右するんだぞ。それくらいわかるだろ？」

「……………」

前島は、ぐつと言葉を詰まらせた。そのまま、苦い顔をして黙りこくる。やれやれ、若いのは結構なことなんだがな。

「……………俺は中途半端な気持ちなんかじゃないつす」

前島が、小さく呟いたのを、その時、微かに耳にしたような気がした。

……………ちりん……………

横を見ると、前島に寄り添うように、ミルシエと呼ばれた少女が、彼の顔を見上げていた。

前島はそんな彼女に、ニツと屈託のない笑顔を見せる。

……………ちりん……………

彼女の鈴が、嬉しそうに鳴った。鳴ったように、聞こえた。

食堂に入ると、先客がいた。

「三尉、昨日はご苦労さまでした」

佐久間は、出されている朝食に手をつけもせずじっと待っていた

ようだ。

上官を差し置いて食べはしない、ということか。体育会系だな。まあ防衛大OBの僕は意外なことにも部活でいびられたりはしなかったが。

意外に思うかもしれないが、防衛大は伝統的に体育系クラブのイジメや先輩の異常なまでのしごきというのは少ない。

某体育大と防衛大の部が合宿を同じ施設で行った際、

防衛大は先輩と後輩が関係なく一緒に風呂に入り、シャンプーの貸し借りを平気でやっているのを見て驚いたという話もある。

階級社会は嫌いだったが、世話になった先輩や尊敬できる先輩も、結構いたっけな。……今、前線に送られている先輩も、いるんだろっな。

「ああ。でも、まだまだなんか苦勞が絶えなさそうだよ」

「まあ、戦争するよりは気が楽でしょう……」

「確かにな……」

席について、三人揃って朝食にする。

「そういえば、食料とかを購入する費用はどこから出ているんでしょっつ。」

何分かして佐久間が、ゆで卵を剥きながら、新鮮なサラダを見つめて呟いた。

「裏に菜園と家畜小屋があって、この館の人間だったらある程度自給自足できる生産量があるらしいぞ」

リオミアにちらりと説明を受けたときのことを思い出しながら答える。

「その維持管理も全部、女の子がやってるんですよね……」  
いきなり横から眉を歪めた前島が呟く。

「……辛いよな」

「前島？」

どうしたんだろう、今日の前島は朝からどうも変だ。

「三尉」

どうしたのか尋ねようと思っていたら、急に彼は改まった表情で僕の方を向いた。なんだなんだ。こいつの真剣な表情なんて、初めて見たぞ。

「今日、自分がやる仕事ってなんかありますか？」

「は、はあ？」

こいつ、変なもんでも食ったのか？自分から仕事を欲すなんて、こいつには天地がひっくり返ってもありえないことだ。

「……別に、午後に補給へりが来る以外はこれとってないけど」

「じゃあ、自分を館内の一部署の支援に回してください！」

な、なんと!？

「……い、いいけど」

「ありがとうございます!」

呆然とする僕の目の前で、パンを口いっぱい頬張り、牛乳をがぶ飲みして一緒に飲み込み、前島は急ぎ足で食堂を出て行った。

……ちりんちりんちりん……

彼が出て行った後、食堂の外から鈴の音が聞こえてきた。

ミルシエが前島を追いかけてちょこちょこ走っていったのだろう。

「……大丈夫、でしょうか？」

「そう願いたい、な……」

残った僕と佐久間は、鳩が豆鉄砲くらったような顔を見合わせた。前島よ、この三日間の内になにがあったんだ？山積する難題のことも忘却し、僕はただその一点が頭から離れなかった。

「あ、佐久間、そういえば君も……？」

「自分も？」

突然自分に話を振られ、戸惑った顔を見せる佐久間。

「その……専属メイドさん、いるんだろ？」

「はあ、一応、お世話になっております」

「どんな人？」

「そうですね……非常に優秀で人柄もよい方ですよ」

具体的なようどこか実像の浮かんでこない答えだ。

まあ、いつか会うことになるだろうし、別に詳しく聞く必要もないか。

だが、佐久間の顔に少しばかり赤みがさしているように見えたのは、気のせいだろうか。





## 第9話 不穩

薄暗く、まるで神に見放されたかのようなスラムの中に、一軒の酒場があった。

まだ陽も高い時間帯なので、小汚い店内に客はまばらだ。

一人の体格の良い男が、店の奥、人目につき難い場所でちびちびと時間を潰すように酒を舐めていた。

男の身なりは御世辞にも綺麗とは言い難く、店を出ればその辺に転がっている物乞いと大して変わりはない。

ただ、生きることに疲れた物乞いと違うのは、その強固な意志を秘めた双眸だった。

「……………ザマないですわね。ケイルダイン」

突然、気配も覗わせずに現れた美女に、男は視線を向けた。

「相変わらず、クソ溜めのような街だな……………」

男は表情に何の変化も表さず、ただ不機嫌そうに答えた。

「あら、そうでなくては困るわ。闇がなければ黒い生き物は生きていけないもの」

優雅な物腰で男の向かいに腰掛け、肩肘をついて女は話しを続けた。

「で、こんなチンピラの頭領に何の用？」

女：シーフマスター・サキュアは男に向けて剃刀のような鋭利な視線を送った。

「まずお前はどこまで我々のことを掴んでいるか聞かせてもらおう」  
「相変わらず横柄な態度なこと……」

サキュアは呆れたようにため息をつき、幼い少年が運んできた麦酒に一口だけ口をつけた。

「山賊の動きが活発になってきているみたいだけど、あれは貴方の傘下の連中でしょう？」

縄張り意識しかない頭の悪い今までの連中とはワケが違ってるわ。噂では山の奥や滅多に人の訪れない村々を勢力下において力を蓄えてるそうじゃない。

その手際といい、山賊風情や素人にできる芸当じゃないわ。違うかしら？」

「そこまで把握しているのなら話は早い」

男は不敵な笑みを浮かべた。サキュアは、その笑みの奥に隠された野心を、どこか冷めた気持ちで見つめる。

「帝国軍残党の再編成はほぼ完了した。

傭兵や山賊も戦力に加わっている。

我々は決起するのだ。この街を拠点に、本国の帝国軍の反攻作戦の支援を行う」

「……たった三ヶ月で無敵を誇っていた貴方たちを壊滅状態に追い込んだ軍隊を相手に、どうやってそんなことを？」

サキュアは、不味い麦酒に顔をしかめながら尋ねた。

「異世界軍の勢いは最早止まっている。」

もとより、奴等の兵力は脆弱だ。増強される様子もない。

たかだか十万の兵を広大な戦線に配置しているだけに過ぎん」

「分かりませんわね。そのたかだか十万の兵に百万の帝国軍が一週間であれた……。」

いくら戦線が拡大しているとはいえ、そう易々と倒せる相手でないのは貴方が一番よく知っているのではなくて？」

男は、サキュアの問いに酒を一杯一気に飲み干してから答えた。

「くつくつく……。ネリエントスでも実証済みだが、異世界軍の補給遅延と魔導兵器の故障多発は深刻さを増している。」

連戦連勝にも関わらず、どういいうわけか前線の敵兵士どもの士気は低い。おそらく、本国に何か問題でもあるのだろうよ」

そこまで聞いて、サキュアは昨晩会ったあの異世界軍の将校のことを思い出した。

まるで軍人らしくない、とてもではないが修羅場をくぐっているようには思えなかった。

あんな若者が領主に据えられるなど、この男の言うように、異世界軍は予想以上に疲弊してきているのかもしれない。

「で、この街に駐留している異世界軍兵士の数は？」

「そんなこと、私が教える義務があつて？」

「ふんつ。がめつい女だな。ここで手放しで協力すれば、ここが帝国領に復帰した暁には便宜を図ってやってもよいのだぞ」

「生憎、私な現実しか見ない主義ですの」

全く動じないサキュアに、男は不承不承、金貨の入ったズタ袋をを

取り出して寄越してやる。

「……三人ですわ。内一人は領主」

袋の重みを確かめ、彼女は答えた。

「馬鹿をいうな。いくらなんでも……」

男は馬鹿にされたと思ったのか、眉を歪めて殺気をみなぎらせた。サキユアはその殺気にも全く動さず、男へ皮肉げな笑みを見せる。

「あら、あなたが言っていたことと合点がいくではないかしら？」

「……本当なのか？」

「盗賊は金にだけは忠実よ」

男は考え込んだ風だったが、すぐに顔を上げた。

「だとしたら恐るるに足らん」

満足気に頷く。

「……それで、私に何をしろと仰るの？」

「くくく……。そこなくてはな。決起は三カ月後だ。それまでに  
工作せねばな……」

男は、目の前の美女にねめつけるような視線を送った。

## 第10話 純潔の猟犬

椅子にとっかか座り、眉間に皺を寄せてヘッドフォンを片耳にあて、目の前の機械と格闘する男が一人。無線機なんて、まともに説明を受けたことが一回もない恐怖の代物だ。

「がーがーぴーー」

ええい、やかましい奴だ。説明書にあつたとおりにパラボラアンテナと電源などのコード接続は済んでいる。

あとは通信を試みるだけなんだが、これがなかなか繋がらない。

いろいろ、ボタンやらスイッチやらをいじくってみるが、

いかんせん、通信隊員でもない素人同然の僕がやっていることだ、限界がある。

「えーと……メガヘルツの変更……ここでスケッチをして……？」

説明書とにらめっこしているが、さっぱり分からない。

一昔前の漫画とかだと、ここで機械を力まかせにぶっ叩くと、ガタガタいって動き出すって展開になるんだろうな。

が、国民の血税で購入している備品相手にそんなこと恐れ多くてもじゃないができない。

これ一台でウン百万円、僕の年収を超える額になるのだ。

「こりゃあ骨が折れそうだ」

肩を回しながら、僕は一人ごちた。

カチャ……

「ん？」

ふと、誰かの気配を感じて後ろを振り返る。

「お茶をお持ちしました」

見ると、リオミアがテーブルに見るからに高価そうなティーセットの用意をしていた。

メイドさんにティーセット。なんとも絵になる組み合わせだ。

「おっ。ありがたい」

まだ仕事に段落はついていないものの、湯気が冷めない内にいたただいた方がよさそうだ。

僕は無線機の置かれている机から離れ、リオミアのいるテーブルへ移動する。

慌てて彼女が椅子を用意してくれようとしたが、さっさと僕は自分で椅子を持つてくる。

「いやあ。お茶を入れてもらえる立場になるとはね」

熱い茶をすすり、僕は誰に言うでもなく呟いた。

「……………」

その感慨深げな呟きに、リオミアがなんのことが分からず小首を傾げる。

「防衛大学にいたころは先輩の、部隊配備されてからは上官のお茶

用意はいつでも自分の仕事だったもんでさ」

リオミアは驚いたように目を丸くした。

「何故召使いをお雇いにならなかったのですか？」

「人件費がかかるからね」

「奴隷を買えば安いはずでございますが」

何気に凄まじいこと言うなあこの」。

「うちの国に奴隷なんていないよ」

奴隷みたいな職場はあるにはあるけど。そう、とどのつまり僕ら（自衛官）みたいな。

働けど働けど、我が暮らし楽にならず。

まあ、どこぞの金融業社みたいに殴る蹴るは当たり前、自殺するまでき使われないだけまだましか。

「……………」

リオミアは珍しく難しい表情を浮かべている。

「どしたの？」

僕は、また迂闊なことを口走ってしまったかとハツとなった。

「領主様」

「えっ。なに？」

「領主様の祖国のこと、聞かせてくれませんか」

躊躇いがちに、彼女は尋ねた。

「祖国？ 日本のことかい」

「はい」

「聞かせてって言われてもなあ」

思わぬ質問に困惑する。なんでまたそんなつまんなさそうなことを聞きたがるんだろうか。

「奴隷がないのに、なぜ豊かなのです？」

心なしか、身を乗り出すように彼女は言う。  
ふうん、そういうことに興味があるんか。

意外というか案の定というか、やはりこの世界の人間にとっては興味をひく事柄のようだ。

「まあ、機械が発達してるからね」

「機械にございますか？」

「うん。指一つで洗濯してくれるやつとか、食べ物を温めてくれるやつとか、箱の中が冷えててその中に生ものを入れておくと長持ちするのとか、

馬より速く走れる、ああ、あの僕らが乗ってきたやつね……。一般庶民でもそれくらい誰でも持つてるから」

彼女にとっては想像を絶する世界なのだろう、半分も理解できていない様子だ。

しかし、急に神妙な表情を浮かべると、静かに尋ねてきた。

「ではなぜ人を見下さないのです？」

「え？」



論点がまったく見えてこないんだが。

「豊かな者ほど、人を見下します。領主様は、我ら下賤な身分の者でも見下しません。何故でございますか？」

そういうことか。なんともはや、この世界の闇、か。あの盗賊ギルドのマスターの言葉を思い出す。

「憲法つてのがあってね、その憲法に、人は生まれながらにしてみんな平等で豊かに生きる権利がある、って書いてあるんだよ」

「けんぽう？」

「僕の国で一番偉い法のことさ」

「生きる……権利……」

まるで噛みしめるように、彼女はその言葉を反芻する。なにがそんなに衝撃的なのか、よくわかんないけど。

「まーだからさ。失業したり病気したりしても、お役所に泣きつけば少なくとも死んだりすることはないよ。

みっともないけど、ゴミあさりすれば、それだけで生きていける量の食べ物だって確保できるし」

「ゴミをあさつてですか？」

「そ。僕らの国は、豊か過ぎて、わざわざ輸入した食糧を食べ残して捨てちゃうんだ」

「……………」

彼女の顔が目に見えて引きつった。にわかには信じられないのだから。

「変な国だろ？」

さすがに苦笑し、僕は言う。彼女は、なにやらまた考え込んでいるようだったが、しばらくすると改まった表情で答えた。

「そうでしょうか？」

「え？」

「私は、よい国だと思います」

「な、なんでよ？」

意外な答えに、僕は動揺を隠せない。

「さあ、私のような卑しい身分の者に難しいことは分かりませんが……」

彼女は、少し考え込むそぶりを見せた。ややあって、彼女はぼつりと呟くように言った。

「私たちを、初めて人間として見てくれた、領主様の祖国だから……だと思います」

僕の『祖国』だから？

人間相手に人間として見るのなんて、当たり前のことだろうに、何をそんなに感動するというのだろうか。

しかし、つまり僕らにとって当たり前前かが当たり前じゃないのか、この世界は。

それを思うと、背筋に冷たいものを感じずにはいられない。

「は、ははっ。禅問答みたいだね」

僕は苦し紛れに適当なことを言っただけです。

「ゼン？」

彼女はあっさりとその話に乗ってくる。本当に、感心するほど真面目な娘だ。

「僕らの国の宗教。一般には仏教っていうんだけどね」

そう言っただけ、また一口紅茶をすすむ。

「そういえば、中学の頃、修学旅行で京都に行ったっけな。

ああ、京都って街はね、歴史的な仏教の寺院がたくさんあって、一般の人でもそれを見学できるようにしてあるところだよ」

「キョート……」

彼女は想像しかできない京都の町並みを、必死に思い描いているのだろうか。

そんないいものでもないぜえ。寺なんて見ても眠くなるだけだつて。

「ま、厨房にそんなもん見せただけしょうがないんだけどね」

僕は、率直な感想をこぼした。

「何故ですか？ 我らの世界では、歴史的な教会は高位の聖職者しか入場できません。素晴らしい街ではありませんか」

リオミアは理解できないといった表情で問う。

「だって、寺なんて興味ないもん」  
「……………」

リオミアは、日本という国のことが、ますます分からなくなったようだった。  
祖国、か。そういえば日本をそんな風に考えたことって、なかったな。

「なんだあその格好!？」

即席ヘリポートとなる前庭に十名ほどのメイドと共に集合していた僕と佐久間は、遅れて現れた前島の姿をみて声を上げた。  
彼は上は泥だらけのシャツ一枚、下は同じく泥だらけの作業服のズボンといういでたちだった。まるで演習帰りだ。

「いやあ遅れてすみません」

彼は「前島電器店」と描かれたタオルで汗を拭きつつ、呑気に説明する。なんでも、畑仕事を手伝っていたらしい。

「……………迷惑だったんじゃないか？」

「ええ、下手すると俺より力ありますよ、農婦メイドさんたち。だから雑用を主にしました。なっ？」

…くくり…

いつの間にか彼のそばにくっついていたミルシェが頷く。

「まあ、迷惑にならなかつたんならいいけどよ」

「役に立ったかかって聞いても、『精進しますのでお許しください』とかワケわかんないことしか答えてくんなくて困りましたよ」

やっぱり思いつきり迷惑かけてんじゃねえか。僕は農婦メイドの人たちのそのときの心境を察すると気が重くなった。

「そついえば無線、通じたんすか？」

「なんとかな」

小一時間といわず苦労したけど。

「さあて、滅多にこないお客さまだ。丁重にお出迎えといこう」

ため息をついて、僕は皮肉混じりに言う。

日用品や陳情のあった物資を運ぶ補給へりは、主に戦線への補給を任務としているので、

こんな僻地への補給は要請があった場合を除いて月一度きりということになっていた。

トラックに積んでできていた初期に必要な設営機材は全て設置済み。

あとは今日のへりで運んでくる当面必要な細かい物資を搬入するだけだ。

「領主様」

「ん、何？」

リオミアが怪訝そうに僕に尋ねてきた。

「どうしてお外でこうして立ち尽くしているのですぐぞいますか？」

彼女たちには、重くない荷物も多いのでそれらを搬入するのを手伝

つてもららうつもりだ。

「あつ。まだ説明してなかったんだっけ。あのね、もうすぐヘリが物資を積んでやってくるんだ」

「ヘリ？」

「まあ、見てれば分かるよ」

このとき、めんどくさがってきちんと説明しなかったのはまずかった。

腕時計を確認すると、予定時刻までもう間もない。

バドドドドド……

ややあつて、遠くから大型ヘリ独特の重いローター音が聞こえてきた。

「おつ。きたきた」

快晴の青空に小さな点が現れ、みるみるその点は大きさを増して機影に変わる。

「佐久間三曹、発煙筒」

「了解」

指示を出す佐久間はポケットにしまっていた発煙筒を取り出し、庭の中央へピンを抜いて転がした。

すぐに赤い煙が空へもうもうと立ち上る。旋回していた補給の大型ヘリ……CH-47はその目印に気が付いたのか、ぐんぐんと高度を下げてきた。

二基の巨大ローターが巻き起こすダウンウォッシュがたちまち強くなってくる。

強風に落ち葉や細かい砂などが巻き上げられ、顔に叩きつけられる

のに、思わず顔を覆う。

上空を見上げると、富士の演習の時に見たとき以来の、巨大なシルエットが爆音と共に迫ってきていた。

これはいつみても迫力があるもんだな。

「リオミア、これがヘリコプターって……」

僕が思い出したように隣のリオミアに説明しようと顔を向ける。

が、そこには無表情ながらも額に汗をびっしりとかいたりリオミアの顔と……

「いやああああー!!」

「きゃああああああー!!」

「ま、魔物が、魔物が襲ってきたわー!!」

腰を抜かす者、脱兎の如く逃げ出す者、泣き喚く者と、とんでもないパニック状態に陥ったメイドたちの姿があった。

僕はその阿鼻叫喚ぶりにあんぐりとだらしなく口を開いたまま固まってしまう。なして、なしてこんなことに……。

「わっ！ ミルシエちゃん」

「……………」

前島のズボンに、目に涙を浮かべ、恐怖にブルブルと震えながらしがみつくミルシエ。

「三尉……。指揮官というものは、部下に必要最小限でいいですから情報を与えておくものですよ」

佐久間が困ったような口調で僕を諭した。

そして結局、その日の搬入作業は四人（リオミアだけが手伝ってくれた）でやるハメになってしまった。

「小一時間後」

「では自分らはこれで……」

「はい、ご苦労さまでした」

へりのパイロットに敬礼し、飛び立って行くのを見届け、ようやく僕は一息ついた。

「ああー疲れたあ……」

なして幹部隊員の僕がこんな肉体労働せにやらんのだじゃ。

中庭に降ろした物資を、今度は館の中や倉庫へ運び込まなければならぬ。

こればかりは他のメイドたちも手伝ってくれるだろうから少しは楽になるだろうけど。

「……ん？」

不意に、妙な視線を感じた僕は周囲を見渡した。すると、すぐにその正体が分かった。

「あれって、最初にここに来たときの……」

あの武装メイドたちだった。騒ぎを聞きつけてここへやってきたのだろう。

あれからずっと監視してたのか。

しかし、なんとというか、僕らとは気合が違う目つきをしてるよな。



クロス・ボウを手に武装していたメイドたちは、ランクロードが他のメイドとは別枠に育てた子供たちらしい。

リオミアはあえて言及を避けていたようだが、つまり従属のみでなく、強固な忠誠心を持った、メイドというよりは私兵のようなものようだ。

ランクロードの言葉以外には決して従わない。

それゆえ彼女らはこう呼ばれた“純潔の猟犬”と。

どうやったたら人へ忠誠心なんてものが抱けるのか僕には経験がないからよく分からないが、

後で佐久間に尋ねたところ「元いた世界の、北の独裁者の国の人間を思い描けばいいです」と言われた。

……なるほど、あの国をイメージすればなんとなく理解できた。

洗脳か……、冗談じゃない。

しかし、彼女らがいてくれたから、街はある程度の治安が守られ、館も襲撃されずに済んだとリオミアは言う。

純潔の猟犬こと武装メイド隊の隊長が、街で自警団を組織して治安維持にあたっているという。

どつりで、貧しいに関わらず治安が悪いという話題が昨晚出なかったわけだ。

ここいらで話し合っておくのもいいかな、今は警備員扱いにしているけど、

いずれは武装解除してもらわなければならぬわけだし。

そう簡単に武器を置いてくれるとは思えないが……。

リオミアの話が本当なら、彼女らはまだランクロードという気の違ったような前領主に忠誠を捧げていることになる。

いきなり喉元をパツクリ、なんてシャレにならないことにならないのを祈るばかりだ。

「や、やあ」

「！」

彼女らはこちらへ僕が近づいてくるのを見て表情をサツと変えた。警戒心むき出しといった感じた。

「警備ご苦労さん。毎日大変だね。この館の警備員としてこれからも頼むよ」

できるだけ自然に、僕は彼女らに話しかける。純潔の猟犬のメンバーは二七名。

ここにいるのは十名ほどだから、三分の一ほどのメンバーがいるわけだ。

「……………」

彼女らは、一言も発さずに僕を警戒視している。おうおう、声かけられてその態度かいな。

まあいいさ、リオミアだって最初の頃はこちらの話をわかってもらうだけなのに随分と時間がかかったんだしな。

しかし、一言も口を利いてくれないのはさすがに気まずいな。あ、そうだ、「はだしのン」でアメリカ兵がやってたみたい……………。

「ガム食べない？」

ポケットの中から、たまたま持っていたブルーベリーガムを取り出す。まだ封は切っていないから、ここにいる人数分はあるはずだ。

「……………」

武装メイドらは、差し出された物体がなんなのか分からないらしく、怪訝な表情で仲間と顔を見合わせている。

「心配しなくても、ただのお菓子だよ」

ガムを差し出されたただけだというのに、その大真面目な様子。

僕は思わず笑ってしまった。そして、ガムの封を切って一枚取り出して食べてみせる。

「ほれ」

僕は笑顔で再び彼女らにガムを差し出す。

「……………」

隊長格だろう、彼女らの中で一番年長らしい、グレーの髪と肉感的な唇が印象的な二十歳そこそこの女性が躊躇いがちに受け取った。部下の見守る中、手にしていたクロス・ボウを肩にかけてガムの銀紙から取り出す。

まじまじとその見たこともない物体を観察し、試しに匂いをかいでみる。

ブルーベリーガムの甘い芳香が鼻腔をくすぐったのだろうか、恐る恐るだが口に入れた。

「!……………あ、甘い!」

初めて、彼女は声を上げた。目を白黒させて、頬を押さえている。

そ、そんなにおいしいものか?初めて食べるものだから、そう感じたのか、はたまた、甘いものに飢えていたのか。

どうも、後者のような気がするな。

隊長のその表情に驚いたのか、部下たちはさっきまでの警戒感は微塵もなく、ガムを珍しそうに見つめていた。

「三尉」。このダンボールはどこに運べばいいっすかあ？」

遠くから前島の声が聞こえてきた。そういえばまだ全部仕事は済んでいなかったんだっけ。

「じゃあね。仕事がんばって」

「え？ あ、ああ……」

部下たちがガムに次々と手を伸ばしてくるのにたじろぎながら、隊長の女は僕に気の抜けた返事をした。

事務機器の入ったダンボールがそこかしこに置かれ少々乱雑な雰囲気になった領主の部屋で、今回はリオミアも交えて会議を行っていた。

「と、いうわけでだ。リオミアさんはこの館にいる者全員の履歴書作成に協力してくれ。前島、お前の明日の仕事はリオミアのその履歴書をパソコンに打ち込む作業だ」

仮にもこの館のメイドは日本国政府が雇った現地スタッフという立場だ。

履歴書くらい作っておかないと業務に支障をきたす可能性もあるし、正確な人事の把握もできない。

「承知いたしました」

リオミアは責任感を感じさせる頼もしい返事をする。

「えーい了解」

前島よ、その態度はどうにかならんのか。

「それじゃ今日の課業はこれでおしまい。あとは風呂入って寝ろ」  
僕は犬仰に手を振って会議の終了を告げた。

「領主様、どちらへ行かれるのですか？」

風呂へ行くラフな格好ではなく、普段着である迷彩服を着たまま部屋を出て行くこうとしている僕を見たリオミアが呼び止める。

「ああ、まだこの館を全部見て回ってないでしょう。暇な時に見ておこうと思ってさ」

「それでは私もお供させていただきます」

「いいよいよ。見取り図はもらってるし、一人でも大丈夫。リオミアさんは明日の作業の準備でもしててください」

こんなことに手を煩わせるまでもない。ただでさえ彼女は多忙を極めている身だ。

「で、ですが、館には……」

しかし、リオミアは途端に不安な表情になった。いつもは冷静で無表情なはずなのに、どうしたのだろうか。

「え？ なに？ なにか問題でも？」

「い、いいえ」

ホントにどうしたんだろう、口ごもるなんて。

「ひょっとして他のメイドさんに変に馴れ馴れしく接するとか？」

「そ、そんなことではございません……」

「じゃあどついついことですか？」

「い、いえ。メイドの宿舎などは領主様が踏み込むにはあまり綺麗とは言い難いので……」

リオミアはどこか焦ったように答えた。どうも要領を得ないが、これ以上詮索しても無駄だろう。

こうしては時間がもったいない。僕はまだ何か言いたげな表情を浮かべるリオミアを尻目に部屋を出た。

「はぁーこんな豪邸持ったって、広すぎて逆に不便じゃないのか」  
四階から順を追って確認しているが、各階の部屋の位置を確認するだけで小一時間はかかっている。

今ようやく一階だ。しかし、隅々まで調べるのも億劫になってきていた矢先だった。

薄暗く、一見するだけではまず気が付かない廊下の突き当たりに、何か通路のようなものが見えた。

近づいてみると、下りの階段だった。

「地下……か」

見取り図を見るが、地下へ続く階段の位置以外、なぜか詳しい記載がない。

空白状態なのだ。変だな。見ると、薄暗いが階段にランプはきちんと灯されている。

人が全く使っていないわけではないわけではないようだ。立ち入っていいものか、しばし逡巡したが、ここの領主は自分だということに思い至って、決心がついた。

恐る恐る、一歩づつ足を踏み出す。薄暗い、引きずり込まれるような不気味な通路が口をあけている。

コツツ コツツ……

半長靴の靴底が石造りの床を鳴らし、闇の中に音が吸い込まれてゆく。

二十メートルほど下っただろうか、随分深くまで掘り下げられた地下室だ。

松明が赤く大きな扉を照らし出していた。鍵はかかっている。僕は扉を押し開けた。

「うわ……」

とうにワイン保管庫などではないと気づいていたが、その光景には思わず背筋が凍りついた。

「監獄……か」

扉の向こうにズラリと並んでいたのは、赤錆が目立つが頑丈そうな鉄格子の林だった。

ざっと見ただけでも五つはある。しかし、奥行きもあるようなので、総数はもっとあるかもしれない。

こんな場所がこの館にあるなんて。僕は恐怖心と好奇心という奇妙な感覚を抱きながらも、奥へと進んだ。

映画のセットなんかとは違い、本当に使われていたであろう牢屋を横目に見る。

薄汚れた毛布や、ゴキブリの這い回っている鉄製の皿が無造作に転がっており、ゾツとせずにはいられない。

もしかして、リオミアが言おうとしていたのはこのことだったのだろうか？

監獄を通りすぎ、廊下の突き当たりに来ると、角になっておりまだ奥に続いていることが分かった。

扉が二つ。一つは大きく頑丈そうな扉。もう一つは普通の木製ドア

ほどのものだ。

木製ドアには錠がかかっているので、中に何かあるのかは確かめようがない。残るは……

「よっ…！」

予想以上に頑丈に造られている。かなり重い。

女性なら二人がかりでないと開けるのは困難かもしれない。

ようやく通れるほど扉を開き、僕は中へ進入した。

これは……？

僕は一瞬呆然と立ち尽くしてしまった。

そこは、ピカピカに磨き上げられた黒大理石の床の部屋だった。

十五メートル四方くらいだろうか、部屋の四隅には重厚な甲冑の置物、壁には前領主の家のものであろうタペストリー。

真正面の壁に、不気味な石像が置かれている。これは、ガーゴイルだろうか。昔RPGで見た覚えがある。

もちろん実物など見たことはないが、非常に精巧に作られており、目をそらすと動き出してきそうだ。

悪趣味極まりない。

こんなのより、オタクの部屋に飾られてる一分のフィギュアの方がまだいい。

扉はまた二つある。が、僕は突然立ち止まった。そして、耳を澄ます。

「こっちの部屋……」

何かが聞こえる。人の声のようだった。じつとりと手のひらに汗がにじみ出る。何か、何か嫌な予感がする。

だが、ここで退いてはいけない。そんな気がした。

思い切って、静かにドアノブを回す。想像以上に静かに開いたドア。



僕はこっそりと中へ踏み込む。そして僕は、絶句した。

「あぐう……うぐ……」

「あ……許し……て……」

ただっ広い部屋の中。二十人を超えるメイドがそこには集まっていた。そして、そして。

「ウエリル。貴様の主は誰だ？」

メイド達の中で、最年長とおもしき女性が、グレーの髪の毛のメイドの頭を、髪の毛を引っ掴んで上げさせた。

彼女の顔は、痣だらけで、鼻からはおびただしい量の血を流している。

意識は朦朧としているらしく、わずかに開いた瞳も焦点があつていない。

半裸に見えるほどズタズタにされたメイド服は、鞭で打たれて破れてしまったようだ。赤く腫れあがり、出血している部分さえある。

「あう……ランクロードさま……ですう……」

「そうだっ！　ランクロード様だ！」

狂ったように彼女の耳元で叫び、女は縛り上げられた女の鳩尾に鉄拳を叩き込んだ。

「うげ……え……」

声にならない呻き声を上げて、グレーの髪の毛の女は気を失った。

すると、女は目配せをして部下に何かを命じる。部下のメイドが、水ダルからバケツに水を汲み、気を失った女に何の躊躇もなくぶっ

かける。

「ゲホッ……」

冷水を浴びせられ、気を取り戻す。同じような仕打ちを受けているのは、彼女だけではなかった。

部屋の中にはどう使うのかも分からないような拷問器具が並べられており、それぞれにメイドが張り付けられていた。

僕はハッとした。拷問を受けているメイドたちの顔には皆見覚えがあった。

そうだ。今日、何の気もなしに話しかけ、ガムをやった武装メイドらだ。

なんで、なんで彼女らは仲間からこんなことを……。

その理由は愕然たるものだった。そんなまさか、まさかあれは……

あの女が忌々しげに見せているものは、  
しわくちやになった、ガムの袋……。

「誰だっ!?!」

声も出せずに立ち尽くしていると、侵入者の存在に気付いた武装メイドの一人が叫んだ。

「異世界人!」

武装メイドたちが一斉に武器を構えた。多彩なものだ。

長剣、曲月刀、ナイフにショートランス、なんでもござれだ。

僕は本能的に拳銃を抜いた。今自分の命を守ってくれるのは、間違  
いなくこいつだけだ。

「おまえら何してるっ!?!」

虚勢ではなく、心の底から出た声だった。怖いと思うより、怒りがこみ上げてきた。

ふざけんな……ふざけんなよ。こんなアホみてえな理由でリンチかっ！？

「これはこれは……『新』領主様ではないですか」

あの女が前へ出てきた。僕は拳銃のスライドを引き、初弾を装填することで相手を威嚇する。

尋常じゃない。僕は直感する。メイドたちの目は集団心理というのだろうか、全員据わっている。

人一人殺すくらい、平気でやりそうな顔してやがる。

しかもそれが少女ばかり、メイド服を着ているのだから、異常さに拍車がかかっている。

「これはアンタの指示か!？」

「それが何か？」

女は全く動じた様子もなく、さらりと答える。

「自分がやっていることが、イカれてるって自覚はないのかよ!」

震えそうになる銃口を必死に抑え、叫ぶ。

「この者たちは敵国人である貴様になびいた。極刑に値するところを、賤程度で済ませてやっている。寛容なくらいだ……」

「んだとコラあ!」

血だらけ痣だらけになり、縛られ、物のように吊るし上げられてい

るメイドたちを見て、僕の語気は自然と荒々しくなる。内ゲバするメイドなんて冗談じゃねえ！

「あんたらを集団暴行の現行犯で逮捕する。抵抗すんなよ！」

僕が叫ぶと、メイドらの表情に殺気が滲んだ。

「我らを罰すると……？」

「そうだ！ 私刑行為は日本国の法律では認められてない！」

メイド長は鼻で笑った。

「我らはニホンなどの法には従わない。従うのはランクロード様だけだ」

「まだそんなこと言ってるのか！？ その男はもうここへは帰ってこない！ あんたらが縛られる理由はもうないんだ！」

その言葉に、メイドたちの顔が狂気に歪んだ。

「いいやつ！ あのお方は必ず還ってこられる！ それまで、我らはこの街を守るのが使命！」

メイド長は絶叫した。その狂気を孕んだ声に、僕は本能的に恐怖を感じずにはいられなかった。

自分が絶対に理解できない存在に遭遇したとき、人はこれほどまで恐怖と不安を覚えるものなのか。

「……貴様は邪魔だ。いつか消そうと思っていたが、あの『裏切り者』のおかげで寝首もかけない」

「裏切り者？」

「貴様について片時も離れぬハウススチュアートのリオミアだ。あの女、ランクロード様に気に入られていたというのに、恩知らずなことよ」

そんな、リオミアが……？

酔いつぶれたとき、ずっと側にいたのも、僕一人で移動するとき必ずついてきていたのも、武器を隠し持っていたのも、まさか全部僕の安全のためだったのか！？

僕は愕然とした。そんなそぶり、一つも見せなかったのに。

「しかし、獲物自らここへやってきてくれるとは好都合。今宵、再びこの街をランクロード様の下へ戻すことが叶うやもしれん」

「俺たちを血祭りに上げる気か……？」

背中を見せて逃げ出したい衝動を抑え、僕は可能な限り平静を保って尋ねた。

何も知らずに不意を突かれたら、佐久間も前島もひとたまりもないしかも、そもそも身を守るための小銃は武器庫に鍵をかけて保管しているのだ。

「このシュレスヴァイラ、全てをランクロード様に捧げた身。御主人様の領地を侵す者は誰であろうと……」

僕の問いには答えず、メイド長はズラリと両手にシミターを抜き放った。

「殺す」

シュレスヴァイラの血のように赤い唇と、白刃が不気味な光沢を放つ。

「新兵より予備のない幹部だ。そんな簡単に殺してもらっては困るな……」

僕は突然背後から発せられた男の声に思わず振り返った。そして、その姿を認めるや、歓声をあげずにはいらなかった。

「佐久間!？」

さっきまで僕が立っていたドア前には、今まで見せたことのない厳しい表情を浮かべ、シユレスヴァイラに向け六四式小銃を構える佐久間が立っていた。

「うへえマジで修羅場ってるし」

佐久間の後ろからおどおどと現れたのは、同じく六四式を抱えた前島。

「ほっ……」

シユレスヴァイラは予想外の展開に戸惑いを覚えつつも、殺気に満ちた視線は変わらずにこちらを睨みつけている。

「すみません三尉。武器庫に行つて銃を取ってくるのに時間がかかりました」

佐久間が銃を構えたまま僕の隣へ進んでくる。ここで、ようやく僕は疑問を抱いた。

「なんでここに俺がいるって分かったんだ？」

「領主様が地下へ降りて行くのを見たというメイドがいたからです」  
僕の問いに答えたのは佐久間ではなかった。

「リオミア……？」

スラリとした長身と銀髪、切れ長のアイスブルーの双眸が部屋の武装メイドらを睨みつけていた。

彼女の手には、あの隠し短剣が握られている。

よく見ると、佐久間と前島はヘルメットにボディアーマーまで装備した完全武装だった。  
なんでここまで用意がいいのだろうか。

「彼女がそわそわした様子で部屋に戻ってきたんで不審に思って問い詰めたら、

案の定、この館にヤバイ連中がいるって話を白状しましてね。

慌てて三尉の後を追いかけたんですが、

途中で会ったメイドに聞いたら地下へ入っていくのを見たってのを聞いた途端、

彼女が顔を蒼くしてたんで更に問い詰めたら、このことを」

「……申し訳ありませんでした」

佐久間が今までの経緯を説明すると、彼女は頭をつな垂れた。なるほど、そういうことか。

「形勢は逆転したぞ。無駄な抵抗は止めて武装解除しろ」

佐久間がシュレスヴァイラに向かって冷徹な声を投げかける。メイド長は、その美貌に狂気を浮かべ、笑った。

「逆転？ これで逆転したと？」

哄笑が室内に響き渡った。

「我らを止めたくば、屍にする以外に方法などありはしない」

これはやばいな。こいつら銃火器の威力を知らないんだ。

佐久間は、メイド長の言葉に何も言い返しはせず、しばらく黙ったまま銃を構えていたが、ややあつて静かに口を開いた。

「三尉」

「え、なんだ？」

「射殺許可をください」

僕と前島が、思わずギョツとした顔になる。

「馬鹿いうな！ 正当防衛以外で許可なく武力を行使するのは禁止されて……」

「三尉。こういった状況で、この世界の人間を『人間』と思つてはいけません。この状況なら十分すぎるほど正当防衛に値します」

慌てて止める僕に、淡々と佐久間は説明した。

「この世界の人間は、『我々』が考えているほど『人道的』ではありません」

「ど、どういうことだよ？」

佐久間の言葉は、説明的なようで、どこか解せない。

「ネリエントスで、自衛隊も民間人も、一体何人死んだと思つてる



「んですか？ 三尉」

佐久間は、今までの彼とはどこか違っていた。目が、言いようのない不気味なものに支配されている。

「佐久間……お前まさか……!?」

僕はハツとした。

聞いたことがある。あの地獄とまで言われたネリエントス市街戦で、激戦区内で生き残った隊員たちが、隊を解かれて他の部隊へ編入されていると。

隊を解かれた理由は、無論、部隊として機能しないほど死傷者が出ていたからだ。

そういえば、佐久間の履歴書には、曹候補生過程を終えてから一年ほどの空白がある。

部隊配備されていたはずが、その記述がなかったのは……。

「かつはははは！ これはいい。あのネクロポリスで異世界軍は大敗したというが、その生き残りとはな」

僕の頭の中を代弁するかのように、シュレスヴァイラが高笑いしながら叫んだ。

「……どうした？ 憎いであろう？ 殺したいであろう？ 我らもまた同じよ」

シュレスヴァイラは、今にもフルオートで小銃をぶっ放しそうな佐久間に挑発的な言葉を叩きつける。

「仕えた主を奪い、我らの存在意義を奪った、我らは貴様ら異世界

人が憎い！内臓を抉り出してもまだ足りぬほどになっ！」

佐久間が、それは俺も同じだと言わんばかりに目を見開き、銃右側にあるセレクターレバーを

『タ』から『レ』に変えた。いけない！そう僕が思った刹那だった。白い人影が、佐久間とシュレスヴァイラの間を歩み出した。

リオミア！？

「……なんだ。裏切り者」

シュレスヴァイラが、意外な外野の侵入に怪訝な表情を浮かべる。

「その主は、一体あなた達や私達、そしてこの街の人々に何をしたのですか？」

ゆっくりと、噛みしめるような口調だった。

「暴力と圧政、懲罰と恐怖を植えつけただけではないですか」

彼女は、今までの無感情なものではなく、哀しく訴えかけるような声で言った。

まさか、彼女が前領主を否定する言葉が出てくるとは思わなかった。彼女は、優秀なメイドとして前領主に可愛がられていたのではないのだろうか？

言葉少なく、無表情な今までの彼女からは、それらを確かめることはできなかった。しかし、今の彼女は……。

「黙れっ！ 貴様はランクロード様に御寵愛を受けていたというのになぜそこまで……」

ヒステリックに喚くシユレスヴァイラ。しかし、リオミアはそれを聞いて、突然凄絶な笑みを浮かべた。

「寵愛？ 私が寵愛を受けていたというのですか？」

「……！？」

その見るものが石と変わり果てるという美女の姿をした妖魔メデューサのごとき妖艶な笑みをたたえたまま、

彼女は何を思ったか、おもむろにそのメイド服に手をかけ、

ゆっくりと脱ぎ始めた。彼女が一体何を考えているのか分からない僕らだったが、

その有無を言わさぬ雰囲気、どうすることもできなかった。やがて、彼女はボウ・タイをほどき、上着を脱ぎ捨てた。

「うっ…！？」

次の瞬間その場にいた全ての者が声にならない呻き声を上げ、そして驚愕の表情を浮かべた。

彼女の白磁のような白い肌には、まるでおぞましく蟲が這い回った後のように、赤い傷痕が走ってたのだ。

鞭で打たれた痕、焼けた鉄棒を押し当てられた痕、長袖に隠れて今まで見えなかったが、

手首には縄で縛られた痕も生々しく残っていた。そしてリオミアは薄く笑みを浮かべたまま続けた。

「あの男は、市場で売られていた奴隷の分際で自分に身も心も捧げない私を屈服させたかったです。」

あなたの言う、『寵愛』がこれです。毎日毎日、あの男は私を『躰』と称した拷問にかけては死の淵ギリギリまで追い詰め、

そしていくら痛めつけても慈悲や許しを請わず心を渡さない私に怒

っていた。

こんなみすばらしい奴隷の女が自分の思い通りにならないことに耐えられなかったのですよ」

「あ…あああ……」

シユレスヴァイラは、驚きのあまり声がでないようだった。

おそらく、あの女の中では今まで信じていたものが、音を立てて崩れていつているのだろう。リオミアは、凜として言葉を紡いだ。

「あなた達は、生きる意義を奪われたと言いましたね。

それはつまり、あの男に魂を売っていたということ。

ならば、何故あの男がここを去るときに無理にでもついて行かなかったのですか？

本当は怖かったのでしょうか？

あの男についていって、これからも懲罰を受け続けることが。

でも魂を売っていたあなたは女王バチを失った働きバチも同然。

結局はここに残ってからも、

あの男の強要した『生きる意義』にすがってこうして仲間懲罰を加えることでしか自己の生を見出せないでいる。

そう、あなた達は……」

一息おいて、リオミアは、キツと武装メイドたちを睨み、宣告するように言い切った。

「自ら『生きる』ことを放棄した敗北者です」

彼女の言葉が、まるで死刑宣告であったかのように、武装メイドたちを襲った。

「うあああああああ！！ 黙れえー！！！！」

髪を振り乱し、シュレスヴァイラが吼えた。

「!?!」

そしてシュレスヴァイラは、狂気に突き動かされたかのように、手にしたシミターを振りかぶって半裸のリオミアに襲い掛かる。そのメイド服からは想像もできぬような無駄がなく、鋭敏な動作だった。

バンツ!

次の瞬間乾いた一発の銃声が部屋に激しく響き、シュレスヴァイラが血を吹いて床に転がった。

「...あああ...がはっ...!!?!」

九ミリ・パラベラム弾が肺を貫通したシュレスヴァイラは、血の塊を吐いて床をのたうち回った。部下の何人かが、反撃しようと動こうとする。

「やめろっ!!」

僕は天井に向かって拳銃を威嚇射撃し、大声を張り上げた。そのときの僕は、正直、リオミアのあの行動と、そして真実を知った衝撃に頭がどうかしていたのかもしれない。

反撃に移るべきかどうか逡巡している残りの武装メイドらに、僕はこう叫んだ。

「主が欲しいか！？　ここの新しい主は俺だ！　生きる意義が欲しいか！？　そんなもんでいいならくれてやる！　俺に従えっ！」

武装メイドたちは、僕の絶叫に近い声にビクリと肩を震わせ、次の瞬間には反射的に頭を下げている。

彼女らの、生まれてこの方染み付いてしまった哀しい性だった。

「さ、三尉……？」

佐久間と前島が、その僕の変わり様を、不気味そうに凝視していた。

## 第11話 教会

「一命は取り留めたそうです」

街の小さな教会の祭壇近くの長椅子に浮かない顔をして腰掛けていた僕は、

奥の部屋から戻ってきたリオミアの澄んだ声に現実に呼び戻された。

「そうか……」

とりあえずホツとして、僕は疲れた笑みを浮かべる。

「神官によると一週間ほどは絶対安静が必要だそうです」

小銃を背負い、リオミアの後ろについてきていた佐久間が補足する。あるとき拳銃で、しかも至近距離で撃たれたシュレスヴァイラは、肺を貫通され虫の息だった。

もう助からないならここで一発ぶち込んで楽にしてやりますと恐ろしいことを平然と言つてのける佐久間を抑え、

なにか助ける手段はないかと思わずリオミアに尋ねたところ、街のスラムにある教会なら救えるかもしれないとトラックを飛ばして担ぎこんだ。

最初はこの場所に医者でもいるのか疑問に思ってたけど、話を聞いて呆れちまったよ。

『この教会に癒しの魔法を操れる神官がおります。神の奇跡を信じ』

「ましよう」

さすがに半信半疑……いやほとんど疑ってたが、まさか助かったとはな。

「もう意識は戻ったのか？」

「はい。ですが……」

「なんだ？」

「何で死なせてくれなかったのか、と泣き喚いたので、また眠ってもらいました」

リオミアがいつも通りの無表情で淡々と説明する。

代わって佐久間が、首をトントンとチョップする仕草を見せた。つまり手刀を叩き込んで気絶させたらしい。

「まあ……なにはともあれ死人が出なくて幸いだったよ」

率直な今の気持ちだった。正当な拳銃使用だったとはいえ、人殺しにはなりたくねえよ。

「三尉、そろそろ帰りましょう。前島一人では館が心配です」

「そうだな……」

とにかく疲れていた。眠ってしまえばもう再び起き上がれないのはと思える疲労感だ。

「あら……可愛い籠の中のメイドさんは無事だったようですね？」  
「！」

僕を含めた三人が一斉に正面扉を振り返った。



夜の帳が下り、闇に閉ざされたスラムの街から、ぬるりと抜け出るかのように扉から中へ入ってきたのは……

「サキユア・ナイトロード……」

僕はその名を無意識に呟いていた。露出度の高い皮製の服が、まるで闇に生きる者の保護色のように写る。

「そんな嫌そうなお顔をなさらないで下さいまし。この一帯は我らのテリトリーですよ。私がいても不思議はないのではなくて？」

彼女は艶然と微笑んでこちらへ歩み寄ってくる。

「なんか用ですか？」

僕は憮然として尋ねる。この女は、どうもきな臭い。

「用？ いいえ、私は領主様に御用があつてここを訪れたわけではありませんわ」

心外そうに答え、彼女は僕らを素通りして祭壇前へと歩き去る。彼女が通り過ぎるとき、甘い香水の香りが鼻腔をくすぐった。

「私、これでも光母神の信者なのでしてよ」

質素な造りの祭壇に祀られた聖母の像を見上げ、彼女はクスリと笑って言う。

「これはこれは。サキユア殿ではございませんか」

さつきリオミアが帰ってきた奥の部屋から、もう一人の人物が現れ、サキュアの姿を認めるや、親しげな態度を見せた。年齢は四十半ばくらいだろう、温厚そうな神官だった。

「お久しぶりですわ。アールマン司祭」

彼女の容姿からは想像しにくいであろう丁寧なお辞儀をする。どうやら、この教会の祀る宗教の信者であるのは本当のようだ。

「いやはや、領主様があのようなものに乗って現れたので、もうここもおしまいかと冷や汗をかきました」

「どうということですか？」

司祭の苦笑混じりの言葉に、僕は疑問を抱いた。

「あら、御存知ないのですかしら？ この街が帝国領だった頃、マール教は邪教扱いでしたのよ」

司祭の代わりに、サキュアが答えた。

「はあ……」

それって答えなのか？

よく分からないので曖昧な返事を返していると、司祭がしみじみと思いつくように語り始めた。

「ええ。闇を司るヴェルア原理教以外の信仰が禁じられ、多くの他宗教信者が異端者狩りにあつて処刑されました。

そんな中、この教会を救っていたのが、サキュア殿の母上だったのです」

僕と佐久間が一斉に信じられないといった表情を浮かべ、飄々とした態度のサキユアを見やった。  
このフェロモン姉ちゃんか!?

「お母様は私よりも敬虔な信者でしたから、苦勞はしたでしょうけど、ね……」

昔のことを思い出したのか、彼女は遠い目をして言う。

「ここは酷い街ですわ。でも、皆ここで生まれ、ここで死んでゆく運命。」

その到底幸せとはいえない人生で、せめて神に慈悲を乞うことだけは許されるべき……と言っていましたわ」

在りし日の母の姿に思いを馳せ、彼女は語った。

彼女の母は、前領主に対して知謀の限りを尽くしてこの界隈の暗黙の自治権を得、

そしてその中にひっそりと教会をかくまったという。

どうやら奇麗事だけでは済まなかったらしく、

領主の側近の買収や上玉の娼婦をあてがったの懐柔など、

あまり聞いていて心地よいとはいえないことも相当行ったようだ。

僕は、この世界、この街、この教会、そして彼女について、あまりにも無知だった。

「それでも、立派な方だったんですね……」

口をついて、そんな感想が漏れた。

「……?」

サキユアが、驚いたように僕の顔を凝視する。

「そんなどうしようもない状況下で、よく弱者のために命をかけたもんです」

自嘲の笑みを漏らし、僕は独り言のように呟いた。

「自分には真似できませんよ……」

僕がここに着任してから、まだたったの三日しか経っていないのに、問題は山積。

解決する術も見通しもない。

彼女の母もそうだったか、それ以上の絶望的状况だったのかもしれない。

そんな中で、人々のために自分を犠牲にできることが、僕にはとても眩しく思えた。

そして、自分はなんと情けない人間なのだろうか。

犯罪者と誇りを受けながらも、この小さな教会を守った彼女の母と、それを守り続けている彼女の方が、ずっと立派だ。

「あの、司祭さん？」

「はっ、はい。なんでもございましょうか領主様？」

僕が突然話しを振ってきたことに狼狽したアールマン司祭は、慌ててかしくまった。

「寝込んでいる彼女のこと、お願いできますでしょうか？」

「え、ええ。構いませんが……」

「お願いします。彼女とは後日、きちんと話しに来ますので。自分

はこれで帰ります。夜分にご迷惑をおかけしました」

「そ、そんな！ 領主様。もったいのうございます！」

司祭は頭を下げた僕に慌てて取りすがった。僕は苦笑し、今度はサキユアに向き直る。

「情けない話ですけど、僕らの命を狙っているのはあなた方だけじゃないみたいです」

「……………」

「では」

僕は軽く敬礼すると、佐久間とリオミアに目配せして帰る意を示した。

教会を出て行く際、サキユアに向かってリオミアが、鋭い視線を向けているのが気になったが、

今は深く考える余裕はないので何も尋ねようとはしなかった。

「リオミアさん……………」

「はい。なんででしょう?」

トラックが領主の館へ向かう中、

僕は薄く明りの漏れる家の窓から僕らの乗るトラックを恐ろしげに盗み見るこの街の人々を眺めながら、呟いた。

「僕は……………いや、僕らは、これからどうすればいいのかな?」

リオミアは、初めて何も答えようとはしなかった。そのことに促されるように、僕は続けた。

「僕がやったことは……………正しかったのだろうか。彼女達の人生を縛

るなんて、正しいことなのだろうか……」

一呼吸おく。佐久間も、リオミアも、無言だった。

「僕だけじゃない、この世界は……この街は……日本は……どつすればいい……」

トラックのエンジン音にかき消されるように、僕は呟いた。

「珍しいですな？」

異世界からの客人が去り、礼拝を終え、教会から去ろうとする彼女の背に、司祭は声をかけた。

「異世界人は誰だって初めてですものね」

「いえ。サキユア殿が裏世界の者以外に興味を持たれるなど……何か理由でも？」

「…何も、ございせんわ」

彼女は司祭の問いに冷たく答えると、そのまま扉の外へと消えていった。

「あの領主、今なら殺れたのでは？」

いつからそこにいたのか、扉から出た彼女の横で、痩せた顔の中で眼光だけは不気味に鋭い男が尋ねる。

「決起もまだなのに殺してしまつてどうするおつもり？」

殺せば本国から増強部隊が送られてくるし、下手をすれば残党の集結を気取られるのがオチですわ」

教師が出来の悪い生徒相手に話すように、彼女は答えた。

「今は静観しなさい。そもそも、我らは闇の存在。闇は底なしの自由。帝国も異世界の国も我らには関係ない。

ただ、その欲望のみに忠実たれ……」

「…？」

リドルのような主の呟きに、アッサシンの男は無表情に疑問を抱く。

「ふっ…まあいいですわ」

しかし彼女はその疑問に答えることもなく呟き、彼らの住处、闇の街へと戻っていった。

## 第12話 朝日の中で

朝、眠れぬ夜を過ごした僕は、佐久間と前島だけで会議を行い、今日やるべきことを割り振った。

誰を信用すればいいか分からない状況下で、毒をもらえる危険を考え、朝食は自衛隊のカンヅメで済ませる。

純潔の猟犬が事実上消滅した以上、街の自警団を統率し治安の維持に努める必要が出てきたので、

今日はそのことも含めて評議会と協議しなくてはならない。帰ったら帰ったで、軟禁している純潔の猟犬のメンバーと、教会で療養中のそのリーダーの処遇も決めねばならない。

ああ、その他にも盗賊ギルド絡みでも色々考えないと……。

「領主様……それは？」

半ば懊悩しながらトラックの荷台でござごとやっている僕に、いつものようについてきていたりオミアが目を丸くしてその物体を凝視した。

「自転車」

「は、はあ……」

明らかに分かってない返事をするリオミア。

駐車しているトラックの荷台から、中古みえみえのママチャリを降ろす。

「その……何のために使う道具なのでしょうか」

「乗り物」



「は、はあ……」

またしても分かってなさそうな返事をするリオミア。  
その上、僕の態度がいつにも増して他人行儀なのに気付いているのか、どこか話しかけにくそうな様子だ。

「リオミアさんは前島の手伝いをしてください。今日は俺一人で仕事こなしてきます」

「そ、そんな!？」

僕の言葉にリオミアの血相が変わる。

「リオミアさん」

「は、はい!」

自転車の空気入れをやめ、僕が面と向かって声をかけたことに、彼女は狼狽した様子だった。

「……心配せんでもいいです。自分が暗殺でもされりゃ、また代わりが誰かきますよ。」

きつと俺より優秀で頼れる奴です。

あなたに俺の身の安全を気遣う理由は、よくよく考えたらないんだって、昨日やっと分かりましたから」

彼女は、石の彫像のように固まった。

でも、たぶんこれでいいんだ。

畜生め……どんなに考えても、彼女を信じたくても、信じられねえよ。もうあんなことを知った後じゃ。

「……それじゃ、行ってきます」

場がもたない。いや、僕自身、彼女のその表情を見たくなかった。僕は逃げるように自転車を押し出した。その時、僕は腕に華奢な手が回されるのに気付いた。

「なっ…!?!」

リオミアが、唇を噛んで僕を睨むように凝視していた。

「私も行きます」

一言だけ、彼女は言った。

「アンタな……」

無性に腹がたつた僕は、思わず強く振りほどこうとする。

「私はあなたに媚びているわけじゃありませんっ!」

彼女は、短く叫んだ。

「あ……」

僕は思わず彼女のその表情に目を見張った。今まで見せたことのない彼女の感情。それは怒りだった。

「言ったはずです……私たちを初めて人間として見てくれたと」

彼女は精一杯に抑えた口調で言葉を紡いだ。

そして、掴んでいた僕の腕から手をおそるおそる放す。

やり場のない感情を逃がすかのように、僕から顔を背けて地面に視線を落とす。その姿は、何故か優美に感じられた。

「……私のことが信じられませんか？」

彼女は僕を聞き分けのない子供に言い聞かせるようにキツと睨みつけ、尋ねた。

「……すみません」

僕は一言だけ、曖昧ともとれる答えを返した。それ以外、うまく説明できる言葉もなかった。

彼女は、いったいどういう人生を歩んできたのかは知る術もないが、たった一人でランクロードに立ち向かっていた。

奴が去ったあとは、この館のメイドたちを守るために残留した。そして、新しい支配者である僕たちの不興を買わないように媚びへつらっていた。

あげくの果てには、影に隠れて命を守ってもらってまでいた。だがそれも全て、自分と仲間のメイドたちを守るためであり、僕らのことを心配してのことではないのだ。

おそらく心の中では、僕に向かって反吐をはいていたのだろう。考えてみれば、こんな綺麗な女の子が身も心も捧げて僕みたいな男に尽くすなんてこと自体に疑問を持つべきだったんだ。

脳裏に、昨日の彼女の傷だらけの裸体が蘇る。

……クスッ

彼女が口に手をあてて、頬を赤くしている。

「え？」

もしかして笑った、のか？

今まで、どんな冗談を言っても困った顔か理解できていない顔しかしてこなかったのに。

いきなりなんで、しかもこんな状況で。ワケが分からず、僕は無意味に混乱した。

「領主様は、人が良すぎます」

「え、えええ？」

困ったように、だがそれどころか和んだ口調で、彼女は言った。

「領主様、私は生きるためには何でもしてきました。

領主様の国のように、ただで生きられる場所ではなかったからです。ここでは疑わねば生きていけないのです。

それと同時に、騙さなければ生きていきません。

……領主様と過ごしてまだほんの数日ですが、

領主様はあまりにもお優しくすぎて納得してはもらえないことは承知しております。

ですが、いつか真実を話してもいいと思えたのも、また事実です。これで御説明にはなりませんでしょうか？」

最後は俯き加減に、彼女は語った。

僕は、彼女のその言葉を頭の中で整理することもできずに引きつった表情を浮かべる。

「あ、いやその……」

何か言わなくては、答えなくてはいけない。

畜生め！ 彼女に本音で話して欲しいだなんて思ってたくせに、本

当に本音で話してくれたらこのざまだ。

「私は私で、必死な思いだったのです。新しい支配者が、いったいどんな人物なのか……」

焦って黙りこくる僕を、不信をぬぐいきれていないと勘違いしたりオミアは躊躇いがちにそんなことまで打ち明けた。

僕は、いつの間にか彼女を真っ直ぐと見つめていた。

彼女はその視線に気付くと、まるで細波一つない湖に一羽の白鳥が舞い降りたときのような清廉な微笑を浮かべた。

そして、目を細めて呟く。

「おかしな気持ちです。その支配者を目の前にしてこんな事をいえるなんて……」

そう呟いたきり、彼女も黙ってしまった。

僕は、彼女のその双眸を魅入られたかのように見つめ、彼女もまた見つめ返している。

不思議な静寂にその場が包まれた。

トラックを停めてあるその場の隣にある小さな花壇に咲く花々の蜜を吸いに、

小鳥たちが舞い降りた。細やかなさえずりが風景に溶け込む。

僕は彼女に背を向け黙って自転車を押し出した。

「ツジハラさん……」

僕の背中を見た彼女が珍しく、僕を名で呼んだ。

いつもの無機質な声ではなく、想い人に別れを告げられた少女のような、切なげな声だった。

「なにしてんですか、リオミアさん」

僕は振り返らずに言った。

「……？」

彼女がワケが分からずに息を飲んだ表情が手に取るようだ。

「ついてくるんでしょう？　急がないとまた遅くまで会議になっちゃうんですから」

少だけ顔を後ろへ向け、彼女を促す。彼女は、一瞬固まっていたが、すぐに返事をした。

「は、はいっ！」

それは今まで聞いた中で、一番気持ちのいい返事だった。今は彼女がいつたい何者なのかなんて気にしなくていい。それでいいんだ。うらかな日差しと、彼女のぎこちない笑顔が、そんな気持ちにさせてくれた気がした。

### 第13話 議事堂

「りよ、領主様、大丈夫でございますか……?」  
「よっ！はっ！ ああ、なんとかね」

お世辞にも活気があるとはいえない大通りを異質な存在が通り過ぎていた。

ママチャリのペダルを息を切らしながらこぐ迷彩服姿の若者と、その後ろにおっかなびつくりと乗っかっているメイド服の少女だ。道行く少ない人々が、思わず目を丸くしてその二人が通り過ぎていくのを眺めていた。

まー、なんだ。多少苦しくしても女の子に手を回されてくつつかれているのは悪いもんじゃないな。  
キッ！

ようやく評議会議事堂に到着した。  
街の中心付近にあるだけあって、かなりの距離を二人乗りしていたことになる。

見上げてみると議事堂は結構な建物で、維持費だけでも相当の費用がかかるように思われた。

議事堂前の広場には、数十人の男たちがざわめきながら集まっていた。  
た。

あれが例の自警団だろう。

思い思いの武器や防具を身につけた、  
年齢も着ているものの質もバラバラの民兵というものはばかられるようないでたちだ。

おそらく、シユレスヴァイラが命令にこないので身動きできないでいるのだろう。

あの女の子だ、勝手なことをしようものなら容赦ない懲罰を加えていたのだろう、

男たちの顔に自警団としての使命感や自覚は見受けられない。ただ、不安そうにたむろしているだけだ。

「すみません。あなた方ひょっとして自警団の人？」

チャリをカラカラと押しながら、自分でも驚くほどすんなりと声をかけていた。

男たちが、一斉にこちらへ向かって奇異の視線を送ってくる。む……なんだよその訝しむような目は。

「なんだ貴様。こっちは忙しいんだ。ん……？」

リーダー格とおもしき髭面の中年男が不機嫌そうな様子で僕を追っ払おうと口を開いたが、

途中で僕の後ろに控えているリオミアに気がついて表情が変わった。

「こ、これはリオミア様！ シュレスヴァイラ様に代わってここへおいでくださったのですか？」

僕を完全にスルーして、男は安心したように声を上げた。

「……あの女は新しい領主様に対して反逆つかまつったので現在投獄されている」

リオミアは男の問いに完結かつ冷徹に答えた。

次の瞬間男たちが一斉に驚きの声をあげ、その場のざわめきが一層うるさくなった。

「お、おい……」



僕がいきなり話が飛躍しすぎだと抗議しようと思うと、  
彼女はそっと目配せして僕の言葉を遮った。  
つまり、ここは自分に任せて欲しいということだろうか。僕はぐっ  
と黙って彼女に軽く頷いて見せた。

「静まりなさい。新しき主の前で、不敬であろう」

射るような冷たい表情で動揺する男たちを睥睨し、  
リオミアは一瞬にしてそのざわめきを黙らせた。

「新しき、主ですと？」

あの男が周囲を慌てて見回す。こいつ、わざとやってんじゃねえだ  
ろうな……？

「おほん……」

僕は意味ありげに咳払いして見せる。男がまだいたのかと言わんば  
かりに僕を睨んだ。

「リオミア様、その領主様はいつここへいらっしゃるのですか？」

媚びたような笑顔をつくり、男はリオミアに詰め寄った。

「あなたの目の前におられますでしょう。まだ分からぬのか、無礼  
者」

しかしリオミアは微笑み返しもせず、まるで人形のような表情のま  
ま突き放すように言い放った。

そして、僕に向かってうやうやしく一礼してみせる。

「申し訳ありません領主様。この者たちの躰、なっておりますぬゆえ平に御容赦願えますでしょうか？」

彼女はまるで忠犬のごとく振舞った。

朝見せた微笑など、今の彼女を見る限りではまったく想像すらできない。

僕はいつものように混乱するかと思ったが、予想に反して冷静だった。

こんなまねをしてみせるなど、彼女なりに何か理由があるのだろう。僕はそのことについては後で問いただすとして、今は彼女の思惑に乗ってやるうと即決した。

「あ、ああそうだ。日本国陸上自衛隊よりここの領主として派遣された。辻原英気だ。階級は三等陸尉」

自衛隊の観閲式などで幹部がやっているような威厳に満ちた声で、そしてできるだけ偉そうにふんぞり返ってみる。男たちを先刻よりも大きな衝撃が襲った。

悲鳴に近い声をあげ、次々と地面にひれ伏す男たち。

「じっ…じっ…御無礼をお許しくださいっ！」

今までの尊大な態度はどこへやら、

蛇に睨まれたカエルのように顔面を強張らせて地面にひれ伏すおっさん。

僕はその異様な光景に驚きを通り越して呆れてしまった。

領主という肩書きの持つ威力というのは、なにもメイドに限ったことではなかったようだ。

「お優しいのは結構ですが、なめられてはいけませんので……」

リオミアが皆に聞こえないように耳打ちしてきた。なるほどね。僕という人間をよく見てらっしゃる。

彼女の機転のお陰で、この連中の指揮権についての掌握はうまくいきそうだった。

その後、自警団の指揮権限を僕が持つことと、私刑行為の禁止や俸給の支給（士気低下を防ぐために）の約束などを言い渡した。

最初は人の上に立つことに不安や躊躇があった自分が、こんなにすらすらと領主の役を演じていることにいささか驚きもした。

リオミアのサポートがないとどうしようもないのは情けなかったが大分らしくなってきたんじゃないかなろうか。

そして尊大に振舞うことも、ここでは必要なことであると、知りもした。

…ママチャリ傍らにふんぞり返っては威厳もなにもあったもんじやないけど。

結果オーライ、かな？

「領主様、どうぞこちらへ」

ようやく議事堂に入った僕らは、文官に大会議室に案内された。

ドーム状のどこか大学の講義室を思わせる大会議室に入ると、集まっていたギルドマスターや街の有力者、

そして近隣の農村の村長たちが一斉に立ち上がって恭しく一礼する。その光景は、やはりどこか異様なものを感じる。

こういうのは上座というのだろうか。壇上に席を用意されている。リオミアは座ることを拒み、僕の席の後ろにメイドのように…

というかメイドなのだが…控えることにした。

「えー。お忙しい中、本日お集まりいただきありがとうございます」  
僕は議事進行はいらないと文官に話し、無駄を省いた会議をしよう  
と考えた。

開口一番の挨拶に戸惑いを覚えたように目を丸くする者が大勢いた  
が、構わずに続ける。

「今日はこの街の現状と議決が必要な事案を優先的に決定もしくは  
否決します。  
議会役員そして各ギルド及び村々の方々は自分の質問に正確かつ隠  
匿なしにお答えください」

そんなに大きな声というわけでもないのに、  
この議事堂は音響まで考えて造られているのか、よく声が通る。

「ここまでで不都合あるいは質問は何かありませんか？ 可能な限  
り答えますよ」

僕が一旦言葉を切ると、議事堂内は相変わらずのしんとした雰囲気  
だ。

ひよっとしたら、こういう会議形態は初めてなのだろうか。まー、  
前の領主が領主だからなあ。

そんなことを考えながら、僕はノートパソコンで打ち込んでプリン  
トアウトしておいた諸々の書類をバックパックから取り出す。

「質問はないようなので、会議を始めます」

宣言し、僕は書類に視線を落とす。

「確認事項からいきます。徴税担当もしくは農業担当の方？」

突然指名されたことに驚いたのか、顔を見合わせながら二人の役員が起立した。

「お名前は？」

「アクル・イクナルスと申します」

「フォン・カタルアにございます」

「帝国の税体制が今まで維持されてきたわけですけど、その内容を詳しく教えてください」

二人の役員は自分に答えられる範囲の問いだったことに安堵の表情を浮かべ、

丁寧な口調で説明を始めた。

「はい。帝国は植民地に対しては一等、二等、三等の三つの身分を与え、

その階級に応じて税を課しております。

ここエクトは二等階級に属しましたので、

税は食料ならば収穫の四割、商工関係には総収入の同じく四割、

そのほか、鉄などの生産品徴収も場合によってはありました」

「ふーん……」

つまり十万円稼いだら四万円もってかれるのか、随分な重税だな。

今更だけど、ここって植民地だったんだよな。

いや、今だって彼らにしてみれば支配者が代わっただけで、植民地には違いないのだろう。

まあいいや、いちいち考えたところで何が変わるわけじゃないのはここへきて散々感じたことだろう。

必要なのは、変えるように行動することだ。

「農村の村長の方々、質問がありますが…」

前々から気になっていたことを確認すべく、僕は会議を進める。

「は、はい」

農民は下の存在として見られているのか、

議事堂の後ろにひしめくように集まっていた村長らがざわめいた。

その中で、リーダーらしい長身の男が起立した。

「税で徴収される作物の量が四割とあったんですけど、それで一年間大丈夫なんですか？」

彼に向かって僕は質問を投げかける。

「それは……その」

男は僕の顔を覗いながら言いよんでいる。

「？ なにか問題でも？」

「実際は領主の取り分もありますので、作物はどんなに寛容な年でも七割は取られてしまうのです……」

躊躇いながら、彼は答えた。

ええっと、つまり汗水流して作った作物の残りは事実上三割くらいだど。おいおいおい。

「そ、それって越権行為じゃないんですか？」

思わず僕は感想を述べてしまう。

「本国へ必要な税を納めている限り、後は領主の自由でございますので……」

少しだけ忌々しげに村長は話した。

「もしかして、酷い年には餓死者が？」

初めてここへきたとき出会った少女のことをハッと思い出す。

「酷い年でなくとも毎年出ます。口減らしに子供を売ることも珍しいことではございません」

畜生……最悪だ。今まで帝国に好感など持ったことはないが、少なくとも憎しみは持っていなかった。

だが、今はつきりと帝国を憎いと感じた。

「……じゃあ、いくつか聞いていいですか？」

だが僕がここで憤慨していても始まらない。

自らの無力さに苛立ってくるが、仕方がない。僕は僕の仕事をするだけだ。

「はい。なんなりと……」

「一年に必要な食料はいつたいどれくらいですか？ 全体の何割くらい？」

村長は少し考えこむように視線を天井へ向けた。

「そう……ですな。五割…い、いえ四割あればなんとか」

「ではこの主食は？ その他の作物の種類は？」

「大麦と小麦が主でございます。これが村にもよりますが全体の六割ほどにございます。」

その他は、芋や人参、ジャガイモも多いです。畜産もある程度あります」

「ふーん……。総生産量の正確な、いやそうでなくていいからどれくらいの単位なのか分かれねえ」

「袋に大の大人一人分の重さを詰めて馬車約一千台分ほどにございます」

村長が分からないのか焦燥の表情を浮かべているのを引き継いで、徴税担当の役員が答える。

「つまりえーと……。馬車に積める袋の数が百と仮定して、馬車一千台なら十万袋。」

袋が大人一人分を六十キログラムとして約六千トンか。

農作物のほかに畜産とかも含めると結構豊かなはずだ。

三万人をまかなうには十分だが、これから税で七割ないし八割をひいた場合は……

たったの一千二百トン！

そりゃあ餓死者もでるわな。北朝鮮並じゃないか。

現代日本人の僕にとって、食べ物というのはお店に行けば置いてあるものという感覚だった。

しかしこうして現実と直面してみると、

食料不足とは人間の生死を分ける死活問題だということを痛感する。

「うーん。なあ、リオミア？」

「はっ？ はい」



「ウチの館の一年の維持に必要な分はどれくらいか見当つくかい？」

リオミアは意外な問いに少し考え、正確な情報を説明した。

「そうですね。田園が多少あるとはいえ、自給自足するには遠く及びませんゆえ、

かつては領主の徴収した一割でまかなっておりまして」

「じゃあ、一割以下は暫定管理機構の維持費として必要だと仮定しようか」

「はあ」

リオミアはよく分からないといった表情で首を傾げる。

「職員の俸給分、インフラ整備の資金充足、衛生環境も心配だし失業者も多そうな気がする。

それに加えてたぶん教育設備費も必要になってくるだろうから……」

僕は取り出した電卓でチャカチャカと計算をはじき出す。

ふふっ。それでも会計課志望だったのさ。

「まあ、無理ないところでざっと見積もって税は全体の二割五分つてところかな……？」

僕はこう言ったものの、実は現地での反乱を恐れた防衛省と外務省が重税を原則禁止する規定を作っているので、

一般市民に対する三割を超える（しかも査察が入った際、状況が酷い場合によっては無課税もありうる）税徴収はできないのだ。

もう一つの理由としては、日本は農業作物による税徴収をしたところで金にならない上、

ここのように遠い場所からそれらを輸送したのでは逆にコストがか

かかってしまう。

道は未整備で場所によっては崖崩れや土石流が起こりやすいし山賊まで出没するので陸路は危険。

空路といっても飛行場はないし作る余裕もない上、

大型ヘリで輸送するにしても穀物十トンと一回分の燃料を比較すると圧倒的に燃料の方が高いしそれに加えて整備費もかかるのでやるだけ金の無駄だ。

よって、食料は専門の運送業者が中継基地を作って集めたものや港湾都市に集積されたものを輸入するようになっていく。

ここエクトで徴収する税というのは手早く商人などに売っ払って金を確保する手段くらいにしか利用価値はない。特別な鉱石を産出するといった様子もないし、まさに戦略上無価値な場所なのだ。

「そ、それは真にございますか!？」

村長たちが信じられないことを聞いたかのように問い詰めてくる。

議事堂内は自分の聞き間違いか僕が言い間違っただものではないかとざわめいている。

「詳細は村々を回って決めますけど、原則これで変更ありません」

他にどう答えるかってんだ。

「で、では余った食料はどうすれば?」

「どうすればって………売るなり蓄えるなりすればいいんじゃないですか?」

「商工に関してはいかがでございますか!？」

「いやだから原則これですから………」

たじろぐ思いで僕は興奮する男たちへ答える。

すると議事堂内が騒然とした状況に変わっていく。口々になにかを叫びあっている。それは歓喜だった。

「おお偉大なるニホン帝国に栄光あれっ！」

「ニホン帝国万歳！」

聴きながら、僕はどうすることもできなかった。

僕は前の領主のような悪党ではないし、

かといって全ての恵まれぬ人々を救いたいと動けるような聖人君子でもない。

つまり、ただの無力な一公務員だ。

何故だか歓喜に沸く議事堂の男たちの僕へ向ける尊敬の眼差しが、その時の僕には例えようもなく気持ち悪く感じられた。

僕がやったのは善政ではない。ただ、悪政から元に戻しただけだといふのに。

いや、「元」がそもそも悪政だったんだ。

日本はそれから開放してやったんだ。褒められることなんだ。

いくら自分をそうして納得させようとしても、どうにも納得できないのは、

どうしてだろうか。傍らのリオミアだけが、浮かない表情の僕を横目に、

少しだけ心配そうな顔をみせていた。

## 第14話 共感者

「どういふことだ佐久間三等陸曹っ！」

叫ぶと同時に僕は勢いよく領主の机を拳で叩いた。

「……事後承諾になったのは遺憾であります」

言葉こそ丁寧だが、目の前の下士官はどこか無表情だった。

今日、会議を終えて館へ戻ると、血相を変えた前島が走り寄ってきた。

理由を尋ねると、佐久間が武器庫から拳銃を持ち出して街へ出て行ったというのだ。

いったい何を考えて彼がそんな行動へ出たのか最初は理解できなかった。

が、ややあつて僕はあることに思い至った。

彼は、佐久間はあるネリエントス市街戦の生き残りなのだ。

そして、街の教会には帝国寄りの思想を持つシュレスヴァイラが療養中だ。

僕は彼が常軌を逸した復讐に出たのだと思い、返す刀に自転車で街へ戻ろうとした。

しかし、そのとき石畳の道をとぼと歩いてくる人影が見えた。

一人は迷彩服、もう一人はメイド姿だった。

佐久間は何があつたのか聞くこともできずに呆然とする僕に腰から拳銃を取り出して差し出し、

申し訳ありませんでした、と一言だけ喋った。

そして、夕刻になるうかという今、この領主の部屋で事情を聴取し

ているのだ。

「事後承諾だった？ あんなものを持ち出して彼女にいったい何をした！？」

僕は語気も荒々しく詰問する。

佐久間と共に戻ってきたメイド、シユレスヴァイラは、暗い表情で俯き、半ば放心状態だった。

いくら声をかけても何も喋らず、彼が彼女にいったい何をしたのか見当もつかない。

「彼女には気の毒なことをしました……」

「だから何をしたのか聞いてる！」

「自分が正気かどうかの、判断材料にしたんです」

「判断……材料？」

自分が責任を追及されていることを自覚していないかのように淡々と答える彼に、

どこか背筋の寒いものを感じながら、僕は聞き返す。

「はい。理屈で説明するのは難しいかもしれませんが……」

あの魔法都市で……自分は『正気』なんてものをどこかへ置き忘れてきてしまった。

それを、もしかしたら取り戻せるかと思っただんです

「ワケが分からない。そんなことで復讐なんかを」

「復讐じゃありません。そんな気持ちは彼女へ抱いていません」

「じゃあなんで！？」

佐久間の考えていることが全くみえてこない。僕は半ば苛立ち机を叩く。

「似てた……」  
「……え？」

佐久間はまるで今気付いたかのような微かな眩きを漏らした。  
そしてゆっくり、回想するように話し始める。

「あの夜、狂った彼女の姿が、自分と……いやあの街で見た味方も  
敵も……あんな狂った姿をしていた」

悪夢を思い出すように、苦りきった表情だ。

彼はあの戦場で、いつたい何を見、何を感じたのか。  
そんなことは、僕には分からない。

しかし、彼の人生そのものを変えてしまうほどの強烈な体験だった  
ことは確かだ。

彼は意味不明の苦笑をしながら僕を見つめた。

「彼女……気がついてからは死を望んでいたのは御存知ですよね？」

「あ、ああ」

「それが、自分と重なったんです……」。

戦友をおいて、自分だけ生き残った。そのことに押しつぶされて、  
死を望んでいたあの頃の自分と」

「もしかして……お前彼女を救おうと？」

「いえ……三尉のように自分はそこまで優しくありません」

自嘲的な笑みを浮かべ、彼は頭を横に振った。

「ただ試しただけです。かつての自分のように。」

望んでいたはずの本物の『死』を目前に、

逃げ出すならば『死』を…… 逃げ出さないなら、絶対に安楽とし

ての『死』など与えない」

佐久間は今まで見せたことのない厳しい表情を垣間見せる。

「それが、自ら生きるという選択です」

彼は、断固とした意思を持って断言した。

「自分が狂っているとお思いなら更迭でもなんでも処分をしてください。」

判断は、三尉にお任せします」

彼は話し終わると観念したかのように頭を垂れた。

僕はここまで聞いて、いや途中からだった。

あることを思案していた。ここにくる前までの僕には到底考えつかないような、

半ば大胆、半ば無謀な考えだ。

「佐久間。お前は今日から……」

僕のためらいがちな言葉に佐久間がわずかに反応する。

「お前は今日から、彼女についていてやれ」

僕の命令に、彼は首をかしげた。

「彼女？」

「いや、彼女たち、というべきかな」

佐久間が目を見張る。

まさか、自分にそんな役目を与えるとは予想していなかったに違いない。

「……いいんですか？」

「彼女達の暗部まで理解してやれるのは、甘ちゃんの俺じゃない。お前だけだ」

僕はぶっきらぼうにそう答える。この野郎、余計な心配かけさせやがって。

これくらい働いてくれなきゃ困るぜ。

佐久間は、椅子から立ち上がると、陸曹らしい決まった敬礼をかざした。

「了解しました。三尉」

こうして純潔の猟犬のメンバーは、『エクト暫定管理機構特別警務部隊』として新たな任務につくこととなった。

そして、数日後、佐久間の後ろには、いつの間にかあのシュレスヴアイラの姿があった。

あの狂気じみた高飛車な態度はなりをひそめ、今は寡黙な淑女といった雰囲気だ。

いったい何が彼女をそうさせたのかは、佐久間と彼女だけにしか分からないのだろう。

佐久間が彼女に、ぎこちない笑みを見せると、彼女もほんの少しだけ、柔らかな微笑を返していた。

これでよかったのかは分からない。

ただ、僕一人で全てがうまくはいかないという、痛烈な事件として、このことは締めくくりたい。





## 第15話 密航者達

港湾都市ビネ・ゼル・ジークグリス  
海上自衛隊専用埠頭

潮風に乗った海鳥が舞い、朝日が湾内を銚色に変えている。ひんやりとした朝の空気が心地いい。戦時下でなければ、そうも思えただろう。

古来より中継貿易によって栄えてきたこのジークグリス連邦だが、ほんの一年前まで帝国という招かれざる客に怯えていた。しかし、ある珍客のおかげでその恐怖も解消された。

珍客とは、ニホンという異世界より召喚された国である。魔導兵器による圧倒的な軍事力を以て、帝国による大陸制覇の野望は打ち砕かれた。

そして、この街に異世界からの客人が求めたことは唯一つ。こここの戦略的重要性から、港の半分を貸せということだった。

中継貿易の要である港を半分も渡してしまうことに当初人々から批難があったものの、

ニホンからの貴重な交易品が流入してくるにつれてその不満も解消されていった。

今では、すっかりこの街は異世界人と中継貿易を両立させていた。

びーびー！

けたたましい警笛の音が朝の簡易倉庫群の中で響き渡った。

「こちら警務第二分隊！ 不審者を発見した！ 服装からして違法

渡航した日本人と思われる！」  
「そつちに逃げたぞ追えー！」

二人の警務隊の腕章をつけた隊員が思わぬ事態に慌しく対応していた。

巡回警備中に昨晚搬入されたコンテナの中から人影が出てくるのを発見したのだ。

数は二人。ちらりと見えたその姿は、この世界のコソドロが着ているみすばらしいものではなかった。

一人は着古されるところどころが破けたジーンパンに、上着は収納ポケットの多くついたミリタリージャケット。

そして頭には『大漁』なんてなめたロゴの入った帽子を逆さにして被っている。

もう一人は、黒の三本白線ジャージに、白シャツの上にどこで手に入れたのか、紺色の防弾チョッキを着込んでいる。

「あつはははあ！ まさかいきなり警備員と出くわすなんてねえー」  
「笑ってる場合ですかセンパイい！？ わーん私犯罪者として新聞に載りたくないですうー！」  
「だつたらちやつちやつと走るっ！」

重いリュックを背負いながら、追跡される身となった二人は口々に叫んだ。

背後で、鋭い警笛の音と、自衛隊員と思われる警備員の怒鳴り声が聞こえてくる。

だが彼女らにはさして気にはならなかった。

それはもちろん、自衛隊員は米兵と違って民間人を撃つたりはしないからだ。

それが同じ日本人、ましてや民間人となればなおさらだろう。

「イツちゃんあそこだ！」  
「は、はいいい！」

まだ設備に十分な予算が割けていないのか、申し訳程度のフェンスがそこにそびえている。  
彼女らでも、よじ登れそうだった。

「おりゃあー！」  
「えいつ！」

背負っていたリュックを向こう側へ放り投げ、続いて自分たちがフェンスをよじ登る。  
警務隊員たちがすぐそこまできていたが、間一髪でフェンスの向こう側へ飛び降りた。

「コラー！ 止まれー！」

警務隊員らの叫び声も空しく、日本人らしき二人の人影は、朝の漁港へと消えて行った。

「イツちゃん街だ！」  
「うわああんやつと着いたあ！」

あちこち泥のこびりついた服装の二人が、晴天の空の下で歓声をあげていた。  
たった一本しかない街道にたどりつき、彼女達がここまで歩き通せたのは奇跡に近かった。

山中で盗賊に襲われ、護身用の催涙スプレーで撃退して命からがら

逃げ出したときなど生きた心地がしなかった。

「じゃあここで記念に一枚……」

『大漁』帽子から茶髪を覗かせたショートカットの女性は、首に提げていた彼女の小柄な体格に似合わぬカメラを持ち上げ、ピントを合わせてシャッターを切った。

ファインダー越しの異世界の街ののどかな風景がフィルムにしっかりと写ったことを確信し、

彼女は上機嫌に「ふふん」と鼻をならした。  
ぐう

「イっちゃんはしたないぞ」

「……先輩だつて」

今にもずり落ちそうなメガネの位置を直しつつ、イっちゃんこと笠間衣緒は弱く反論した。

かれこれ、三日はまともなものを口にしていない。

『異世界の真実を激写したい！ この生きる意味すら見出せない日本から抜け出たい！』

『ノロマな自分でも誰かの役に立ちたい』

そんな熱い気持ちで日本を出航（密航）したものの、内陸部へ行くという獏全としたプランで行くあてもなく、闇雲に歩き回っていたらこのザマだ。

せめて大学の単位を全部取ってからにすればよかった。衣緒はそんな今更なことを考えていた。

『異世界を激写する！』と血気盛んだった、

いや今も盛んな高校時代の先輩、倉敷景は満足いく被写体になかな

か出会えないことに苛立っていたが、  
今だけは満足そうに眼前に広がる風景を楽しんでいる。

「でもお腹減りましたよお……」

「うむ。折角たどり着いた街だ。市内も撮っておかねばなるまいて」

そう大きく頷き、景はずんずんと街へ向かって歩き出した。

「え？ 物価が高騰してる？」

昼食のゆで卵の殻をむきながら、僕は聞き返した。

「はい。どうも何者かが買い占めているようです。特に穀物類の上  
昇率が気になります」

リオミアは表情を変えず、説明口調で言った。

「結構なことじゃないですか。農民に余剰作物を売る余裕が出てき  
たってことでしょう？」

僕は軽く塩をふったゆで卵を半分ほどかじり、もぐもぐと咀嚼しな  
がら答えた。

その行儀の悪さも気にならないのか、彼女はどこか不安そうに首を  
ひねった。

「……にしては量が多すぎます。大した街や産業もないこの地域周  
辺で、

それだけ多くの食料を買い取る理由も人物・団体も心当たりがあり

ません」

「誰が買い占めてるかはわからないの？　っていつかそんな情報どつから手に入れたんですか？」

すると彼女は呆れたように僕を見つめる。

「評議会からの雑務の一部をお任せになられているのをお忘れですか」

あ、そうだったっけ。

ただでさえ人手の足りないエクト暫定管理機構で、彼女の事務仕事までこなしてくれる有能さを頼って評議会関係の書類はほとんど彼女に任せていたんだ。

「ふーん。で？」

気のない返事に、リオミアはもどかしそうに眉をひそめた。

「で……といわれましても。何か気になりませんか？」

「別に。誰が困るってわけじゃなし。いいんでないのほっとしても」「はぁ……。そうでしょうか？」

「リオミアさんは何か気になるの、そのことが」

「何か嫌な予感がします。」

がめつい商売人が一儲けを狙っているにしては購入、そして輸送手段の手際が鮮やかすぎます。

まるでどこかの国の諜報機関の手口のように足跡を残していません。危険でもなければ珍しくもない食料を購入して輸送するのにどうしてそこまでする必要がありませんか？」

よくもまあそんなことまで考えるね、君。

「考えすぎじゃないの？　なーんもない地域だってことはリオミアだって分かるでしょう」

難しい表情の彼女に僕は樂觀したことを言つてのける。すると、隣の佐久間がまるで言葉遣いの丁寧な教師のように話しを始めた。

「何も無い場所ほどテロリストやゲリラの逃亡先あるいは集結場所になりえます。

我々の元いた世界で、現にアルカイダはド田舎であるアフガニスタンに潜伏していましたし、  
コロンビアあたりでも共産ゲリラは森林地帯に拠点を築いていました。

……少し調べるか上層部に報告しておいた方がいいかもしれませ  
ん」

「う、うーん」

ただでさえ課税調査やら衛生環境整備やら雇用開発やらで忙しいのに、

これ以上面倒な仕事は増やしたくねえなあ。

でも、佐久間やリオミアの言うことは説得力がある。

とりあえずもう少し様子を見て何か変わったことがあったら報告しようか。

「大規模な戦闘がここ数ヶ月起こっていないのが、どこか不安でもあるんです。

前線で敵が戦力増強を行っているという噂もありますし」

僕が思案顔でいると、いつの間にやら食事を終えた佐久間がテーブ



ルに肘をついて呟いた。

「この意味、分かりますか……？」

「分かるよ。これでも『B』(防衛大出身)だ。

敵さんは増強されてるのにこっちは補給不足に加えて本国の若い兄ちゃんが志願入隊しないから増援のあてもない。

あげくのはてには人気のアイドルが反戦コンサートやって国民の戦争への不参加をよびかけてる。

戦線の第一線を突破されたら正直もう建て直しはきかんわな」

あまりにも情けない日本の現状に深いため息をつき、僕は自家製のチーズを口にした。

そつなつたら最悪は大陸中央に位置するキレシュト山脈を境に戦略撤退、

よくても戦線の大幅な後退は必至だろう。

自衛隊はそもそも外征型の軍事組織ではないんだから。

「あの……」

リオミアが僕の話聞いていて何故か血相を変えていた。

「どしたの？」

「よ、よろしいのですか？ そんな国の批判などをなさって……」

「あー。いいのいいの。リオミアなら変なデマは流したりしないって信じてるしさ」

僕の言葉を聞いたりリオミアは、驚いたように僕を凝視した。なんか変なことを言ったか？

「あ、いえそんなことではなく領主様やサクマ様が国家反逆罪に問

われるのでは……」

リオミアは我に返ったように心配した。なんだ、そんなことね。

「マスコミか警務隊にバレなきゃ大丈夫」

「は、はあ」

リオミアは分かっているような分かっているような曖昧な表情だ。

「しかし…杞憂であればいいのですが……」

それでも何か心配なのか、彼女は心細そうに呟く。

「大丈夫だよ。キレシュト山脈を万単位で部隊が移動することは不可能だ。

敵に航空輸送手段がない以上、それ以上の進撃は無理だからここはどっちにしたって安全性」

僕はそんな彼女を安心させようと説明を加えた。

別に嘘は言っていない。

この世界の軍隊の装備である険しい山脈を越えることは至難の技だ。自衛隊は輸送機で第一空挺団を降下させて大陸北部に拠点を確保した後、

直ちに飛行場を建設し部隊や物資をピストン輸送して帝国軍の再編成が間に合わぬ内に機甲部隊で主力を蹴散らした。

敵は山脈をいとも簡単に越えて進撃してくるとは予想していなかったため、潰走を重ねた。

しかし、それ以上は自衛隊も人員不足と補給の限界により進行不能となったわけだ。

まあ、山脈が間に割って入っている以上はここは安心だよ。  
海路もあるが、海自の護衛艦のレーダーに輸送船団が捕捉されたが  
最後、

127？砲のド派手な実弾演習が開始されるだけだ。そのことを話  
してやると、

リオミアは安心したように一息ついた。この街の人間にとって、帝  
国が戻ってくることは大きな不安であるに違いない。

ま、僕らも所詮は支配者に変わりないんだけど、餓死者ださないだ  
けまだマシだろう。

「まあそのことは何か変わったことが更にあつたら上に報告しとく

よ」

「はあ」

まだ納得できない表情だったリオミアだが、次の瞬間食堂の扉が勢  
いよく開けられたことにその表情はかき消えた。

「三尉、大変つす！」

ここまで走ってきたのだろうか、今朝から当番制にしてある自警団  
の視察に行っていたはずの前島が息を切らして立っていた。

「なんだ何があつたんだ？」

思わず立ち上がり、早くも駆け出す準備を始める。

「日本人です！ それも民間の……」

前島の言葉に、僕と佐久間は顔を見合わせた。

前島の話によると、自警団が巡回中に市場で変な格好をした二人組

みが食料を無理矢理値切っているのを見て呼びとめたら、脱兎の如く逃げ出したため、不審者として捕らえたのを、評議会に置かれた自警団本部にのほほんと座っていた前島の前に連れて来たのだそうだ。

がつつがつ！

という音が聞こえてきそうな勢いで、二人は出された食事を頼張っていた。

その鬼気迫る様子にたじろぎつつ、僕は彼女達の身分証明書に視線を落とした。

学生証と免許証の二つ。

学生証の表紙にはなんとも敵かな校章の下に『清真女子大学医学部』と書かれている。

開いてみると、気の弱そうなメガネの少女の写真。

笠間衣緒：カサマ イオ、か。

医学部三回生：年齢は二十一歳。

もう一つ、免許証を見てみる。

倉敷景：クラシキ ケイ、ね。

年齢二十二歳。

彼女も大学生なのだろうか？

僕は彼女の服装とバッグの上に置かれている本格的な感じのカメラを見やった。

こいつ、ひよつとしてジャーナリストか？

だとしたら面倒だなあ。

「うーつぶ。いやあこんな異国で日本人に出会えるとは幸運だねえ  
イツちゃん」

茶髪の姉ちゃんが口から八重歯を覗かせ、豪快にカツカと笑う。

「ふあい…もぐもぐ」

彼女らはよほど腹が減っていたのか、綺麗に出された料理をたいらげてしまっている。

「で、落ち着いたところで尋ねますけど、あなた方、何の目的でここへやってきたんですか？」

僕の質問に彼女らの表情が変わる。

漫画ならここで『ギクッ』という効果音が入るんだろうな。

まるで食い逃げしようとしたことがバレたかのような焦りようだ。

「えーとねえ……」

「ひょっとして政府から正式な許可をもらわずに渡航したんじゃないですか？」

「えーと…」

「せせせ先輩いいい」

こりゃあ間違いないな。

全く、行方不明になったりしたら探さなきゃいけないのは僕らなんだぞ。

しかも大抵、そんな場合は死んでいる。

タチが悪いことにマスコミはまるで政府の責任のように報道するんだからたまったものではない。

真実を伝えるフリージャーナリストといえは聞こえはいいが、現場の我々からしてみれば迷惑者の何者でもない。

「明日にでもへりを呼んで強制送還させてもらいます。」

それと、へりの燃料と整備費はあなた方に請求されるのでそのつも

りでいてください」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。あたしはまだ……」

「取材が終わってない、でしょ？」

「あう……」

絶句する二人。

「フィルムも没収します」

念のため、予防措置をとっておく。

戦闘で死んだ帝国兵の死体を

『空自の爆弾の犠牲となったアケイア共和国市民』と捏造報道やって公安に捕まった記者がいたしな。

「なんだってえ！？ それじゃ報道の自由が……」

「違法行為してて何が自由ですか」

素っ頓狂な声をあげて席をガタンと立ち上がった姉ちゃんに、僕は冷やかな目で見つめる。

ムっとした表情になった姉ちゃんは、腕を組んでそっくり返る。

「だってえー。フリーのカメラマンには許可出さないし、

警察か自衛隊の従軍記者みたいなことしかさしてもらえないし」

あんたみたいなのが勝手に死んで現場に迷惑かけるからだよ、という言葉をすんでのところで飲み込む。

報道関係者には迂闊なことを言わないのが自衛隊の鉄則だ。

「規則ですから」

「けち！ 日本戻ったら自衛隊が言論弾圧してるって投書すつから

覚悟しとけよ」

「せ、先輩抑えて……」

無償でメシをおごってもらっていて次の瞬間から平然と自衛隊批判をたれる自称フリーカメラマンに頭痛を抱きながら、僕は事務的な口調でさっさと退席を願った。

「では部屋に案内しますので……リオミアさん」  
「御意に」

リオミアがまるで私兵のように彼女らの眼前に歩み出る。その氷塊のような冷たい表情に二人がうっと思を飲む。

「どうぞこちらへ……」

口調こそ穏やかだが、彼女らへ対する威圧感は逆に際立っているように思えた。

二人は、顔を見合わせ、どうやら逆らわない方が身のためだということを理解したようだった。

「カメラは置いていってくださいよ」  
「ちっ！ わーってるよ」

荒々しくカメラボックスをテーブルに放り投げ、彼女は鼻息も荒く大股で部屋を出て行った。

やれやれ……こればかりは早く報告しとかないとな。

「冗談じゃねえよなあ……」

無線連絡を終えた僕は思わず愚痴をこぼした。

「どうしたんですか三尉？」

「ヘリが前線に出払っててこっちは当分回せそうにないそうだ」

「民間のヘリは？」

「自衛隊の輸送力を補うために徴用中。そもそも燃料が不足してるしな」

そのときはまだ、この街が後にあんな状態になるなんて予想すらしていなかった。

思えば、このときが、この街から引きあげることができる、最後のチャンスだったのかもしれない。

あの民間人二人と同居生活が始まるかと思うと、ただただ頭が痛い。それくらいにか考えられなかった自分を、後の僕は激しく後悔した。



## 第16話 兆候

「久しい……といっても直接会うのはもう二ヶ月ぶりですわね」

エクト唯一の高級娼館『真実の涙』の最高級ルームのソファに身を沈めた状態で、

サキユアは入室してきた男にしつとりとした声をかけた。

「決行は二週間後だ……」

だが男はサキユアの艶かしいドレス姿に何の反応も見せず、ただ一言だけ口を開いた。

豪華な椅子にかけようとせず、薄汚いローヴを纏った姿は、どこか異様だった。

「あらそうですの……で、今日は何の御用でした？」

深い紫色の髪を弄いながら、彼女は無関心そうな声をあげる。

「領主の異世界兵の暗殺を任せる。手段は問わん」

抑揚のない低い声が、静かな室内に吸い込まれる。

この娼館のオーナーでもあるサキユアは、面白くなさそうに赤いマニキュアを塗った爪を眺めた。

「あら……いつから私はあなたの部下になったのかしら？」

フードを目深に被った男へは視線すら泳がさず、彼女は心外そうに

言う。

すると、男は腰をまさぐり、サキュアの寝そべるソファの前へ袋を放りなげた。

袋がよく磨き上げられた床に落下すると、袋の中でジャリンと金属がこすれる音が響く。

「報酬の前金だ。成功した暁には占領後に便宜を図ってやる」

「……嫌だと言ったら？」

サキュアはじろりと鋭い視線で一瞥をくれる。

「別にかまわん。ただし、占領後は生きていられると思わんことだ」

男の恫喝に眉を微かに歪ませ、彼女はそのスラリと長い脚を組み替えた。

「本当にニホン帝国に喧嘩を売るつもり……？ 増援がきたら二千そこらの戦力ではひとたまりもないわよ？」

サキュアの問いに、男は喉の奥でくっくと殺したような笑い声を上げた。

「密偵の情報によれば異世界軍の兵力不足と補給の遅延。そして土気の低下はもう限界だそうだ。

南部で一斉反撃に出れば、こんな地方都市に増援を回すどころではなくなる。勝機は十分ある」

自信に裏打ちされた答えだった。

ケイルダイン・クアン……ヴェロスニア帝国軍グリフォルス騎士団の元団長として、戦場を駆けていた頃を彷彿とさせた。

サキユアはかつての彼の手柄についての噂を思い出した。  
勇猛果敢にして騎士道精神に厚い真の騎士。

それが彼に関する風評だった。  
だがそれも異世界から召喚された軍と戦うまでのことだった。  
あの戦いで彼は変わった。

鉄の怪鳥…… F - 2 支援戦闘機の投下した、たった二発のクラスター爆弾によって、彼の騎士団は壊滅したのだ。

「成功するかどうかは賭けよ。この報酬の半分でいいわ」

彼女は部屋の隅に向かってなにやら目配せをした。

すると、いつからそこに控えていたのか、小柄な少女がソファの前の袋を取りに歩み出てきた。

ケイルダインはその少女に目を見張った。

褐色の肌、短く切りそろえられた黒髪の間からは尖った耳が覗いている。

その少女は袋から半分ほど金貨を取り出すと、残り半分の入った袋を男へ返上した。

「お前も物好きだな……」

袋を腰にしまい直しながら、男は呟く。

妖魔を飼いならすなど、と言いたかったのだろうか。

しかし次の瞬間、男は少女の射殺さんばかりの視線に口をつぐんだ。

「このコのことかしら？ よく働いてくれるし、何より人間のよう  
に簡単には裏切らないわ」

サキユアが少女を招き寄せ、頭を優しくなでてやる。

少女は実の母親にそうされているかのように、気持ち良さそうに目を細めた。

「あなたの依頼……このコにやらせるわ」

サキユアの言葉に、フードの奥のケイルダインの表情が変わった。

「なんだと……？」

このダークエルフの小娘を？

冗談ではない。

男の不気味な眼光がフードの奥で光る。

「あら、このコを甘く見ない方がいいわよ。並のアサッシンでは彼女に遠く及ばないわ」

その場に重い沈黙が漂った。

「……しくじるなよ」

ややあって、折れたのは男の方だった。

メデューサの如き女だ、と内心にただならぬ思いを抱く。

「善処しますわ」

人を小馬鹿にしたような態度で、彼女は気のない返事をする。それを聞くなり、男はどこか忌々しげにその場を後にした。

「よいのですか……姉様」

妖魔の少女が、心細げに尋ねる。先刻までの殺気がまるで嘘のようだった。

「そうよ。あなたでないとできない仕事よ……やってくれるかしら？」

「……この命、姉様のためならばいつでも捨てる覚悟でございます」  
この若きシーフマスターに絶対の忠誠を誓う妖魔の少女は、恭しく答えた。

「ったく！ なんなんじゃあのクソ自衛官!？」

獅子顔からゲロゲロとお湯が湧き出ている館の風呂で、  
久しぶりの湯浴みに関わらず彼女は不機嫌も露わに湯船の中で腕組していた。

「しょうがないですよ……。密航したのは本当なんですし……。  
あーあ。パパ心配してるんだろっちなあ……」

白い肌を労わるようにさすり、今はメガネを外している衣緒は呟いた。

「いいよなあ。イツちゃんは罰金肩代わりしてくれる家族がいてさ」  
頭に手を回して、景はため息をつく。

「パパに頼んで先輩の分も払ってもらいましょうか？」  
「えっ？ ホント？」

「は、はい。ここまできたら一蓮托生です」

「イツちゃんエライっ！」

「きゃっ!?!? 抱きつかないでくださいよ先輩い!」

修学旅行中の女子高生のようなはしゃぎように、

風呂の外で待機しているリオミアは眉をひそめた。

ニホン人についてはよく知らないが、違法行為を咎められて送還される身分だというのに、

どうしてこんなに悪態をついたりはしゃいだりしていただけるのだろうか。

現代日本人の、特に若い世代について知らないリオミアにはこの二人の珍客はどうも理解に苦しむ存在に思えた。

「あー良い湯だった」

そんなことを考えていると、豪快に風呂場からの扉が開けられた。

二人のニホン人女性は、リオミアの姿に気付くと驚いたように目を丸くした。

「あれえ? ひよっとして待ってたんですかあ?」

衣緒が曇ったメガネをかけつつ、声を上げる。

「はい。罪人とはいえ日本からの客人でございますので」

冷たい自分の言葉に気を悪くするかと思いきや、

突然茶髪の女性はカツカと高い声で笑い飛ばした。

「なはははっ! 罪人だなんて言うねえメイドさん。ねえ、名前はなんてーの?」

素っ裸のまま、バンバンと肩を叩いてくる景に、リオミアは珍しく気圧された。

「り、リオミアにございます」

「きゃあ！ 可愛い名前ですう」

「そ、それはどうも……」

二人の勢いに完全に圧倒され、リオミアは冷や汗をかいていた。

「さあてさて。これで風呂上りに酒があれば最高なんだけどなあ」

身体を拭いて着替え終えた景がクイッと酒を飲む仕草をしてリオミアにウインクした。

リオミアには彼女のこの図太い神経がいったいどこからやってくるのか理解できなかった。

「そういったことは領主様に御伺いしてください」

「領主う？ ああ、あの冴えなさそうな自衛官ね」

景のこの一言に、リオミアの眉がピクリと動いた。

「その様なことを仰られてよいのですか？ 国を守られている軍人に対して」

「国を守ってるう？ ハッ！ 反吐が出るわ。」

そもそも自衛隊なんて憲法違反の違法組織なのよ。

こつちだつて守って欲しいなんて一言も言っていないし、

この世界で戦争をしるだなんてことも言っていないの」

「……せ、先輩いすぎですよ」

「いいんだよイツちゃん。」

現にこうしてリオミアさんたちの土地であるここに進駐して支配下においてんだ。

これって占領政策だよ？

日本じゃ有事法を振りかざして国民に戦争参加を強制するなんて軍国主義だぜ軍国主義！」

リオミアは言葉を失った。

この二人は相手が軍隊であるにも関わらず、何の恐れもなく批判を口にしたのだ。

『僕らの国じゃあ、自衛官より国民の方が偉いのさ。文民統制ってやつでね』

領主様が仰っていたことが冗談でなかったなんて……。

「そんな心配そうな顔しなくなっただっていいって。

あたしらは自衛隊の連中と違ってマトモだからさ。

君も大変だよな。

普通に暮らしていたらある日突然あいつらが進駐してきて街を乗っ取っちゃったんだからさ」

「あ、いえそんなことは……」

いったいこの女性は何を言っているのだろうか？

彼らが来て、この街は希望の見える街になってきたというのに。

「隠さなくっただっていいんですよ。」

怖かったですしょう？ 鉄砲で脅されたりしませんでしたか？」

リオミアには知る由もなかったが、

この二人の得ている情報といえば日本のマスコミの基本的に反体制



的な報道が元だった。

自衛隊はネリエントスでの人質救出の失敗なども災いし、国民から極めて悪いイメージを持たれているのだった。

「こんなコスプレみたいなのが格好させられちゃってさ。なに考えてるんだろなああの連中」

「いえこれは前からの……」

「分かった。分かったよ。あたしが労働環境の改善を直談判してやつから」

「え、えええ？」

「行くぞイツちゃん！」

「はいいい！」

勝手に盛り上がりすぎてずんずんと脱衣所を出て行く二人を唾然とした表情で見送りながら、どうすることもできずにリオミアは立ち尽くしていた。

「頼もーっ！」

蹴破るように領主の部屋のドアを開け放ち、シャンプーの香りを匂わせながらづかづかと部屋に入室する景と

室内の光景に、景は目を丸くして固まった。

迷彩服姿の自衛隊員と、もう一人は誰だろうか？

皮製の黒い服を着た、小柄な少女。

二人が目を見張ったのはその手に握られている少女には不釣り合いな無骨なナイフであった。

それを迷彩服姿の若者につきつけ、今にも襲いかかりそうだったところを、

たまたま踏み込んでしまったということに気付くのに、二人は少々

の時間を要した。

「や……やあ……」

「チッ！」

突然の事態に素早く反応した少女は一気に跳躍すると、

まるで踊るかのように自衛官の背後を取った。

そのあまりにも素早い身のこなしに、自衛官はどうすることもできずに情けない声を上げて羽交い絞めにされる。

「動くな。領主を殺すぞ」

首筋にナイフをあてがい、少女は低い声で恐喝する。

慌てたように女二人は顔を見合わせ、茶髪の女のほうが大きく頷いてなにやら前へ出てきた。

「キミ！ ダメだよ。そんな奴のために自分の手を汚しては」

「……何を言っている？」

思わぬ言葉に少女が怪訝な表情を浮かべた。だが女は構わず続ける。

「日本の占領政策が間違っているのはあたしはよく分かってるんだ。

いきなりあたしを信用しろなんてムシのいい話だけど、大丈夫、悪いようにはしない。

そいつにもよく言っただけだから今は武器を置いてくれないか？  
武器ではなんの解決にも……」

「C級刑事ものドラマに出演してそんな安っぽい説得のセリフをなん

の恥じらいもなく語る景。

次の瞬間、どこから取り出したのか、彼女の顔のすぐ側のドアにダガーが目にも留まらぬ速さで突き立っていた。

「黙れ」

ドスのきいた声で、少女は殺気に満ちた視線をたたきつけた。

「は、はい」

話し合いでどうにもならないと悟ったか、平和主義を捨ててあっさり一万歳の格好を取る景。

話し合いなんてものは、相手もそれを望んでいるときしか通用しないということに頭が回らなかったようだ。

「生憎だが……。この領主に生きていてもらっては困るのでな」

妖魔の少女が、薄く笑った。

## 第17話 守るべきもの

高級娼館『真実の涙』のいつもの最上級ルームに訪れたケイルダインは、朗報を受け取っていた。

「領主は死んだらしいわ」

相変わらずソファに寝そべったままサキュアは、

まるで近所の猫がいなくなった程度の話題のように言った。

ケイルダインは内心、計画通りにことが進んだことに満足感を覚え  
たが、

顔には出さずに室内を見回した。

「あのダークエルフはどうなった？」

違和感があると思えば、そうだあの妖魔はどこへ行った？

「帰ってこないところを見ると……捕らえられたか殺されたかどっちかですわ」

落胆の表情すら浮かべず、サキュアは思い出したかのように説明した。

「そっか」

しよせんは盗賊。あのダークエルフも捨て駒にされたらしい。

口ではああ言っていたが、人間の部下を行かせて失うよりも、妖魔を行かせた方が割がいいと踏んでいたのだろう。

やはり、この女はいつか始末する必要がある。ケイルダインは眉一

つ動かさずにそう考えた。

「鉄の怪蝶が今日にも残りの兵士を迎えに来るそうですわ。これでこの街から事実上二ホンは撤兵することになる……」

鉄の怪蝶…へりのことである。

「何故分かる？」

あまりにも早く正確な情報を話すシーフマスターに、ケイルダインは疑念の思いを抱いた。

「あの館のメイドには少々人脈がありますの」

「なるほどな……」

飄々とした態度を崩さないサキュアに、気のない返事をしてみせる。

「無血占領ができるならそれに越したことはない」

「あなたらしくないですわね……。こんな姑息な手口を使うなんて騎士道精神はどこへいったのかしら？」

明らかかな侮辱に対し、ケイルダインはフードの奥で眼光をぎよろりと目の前の女に合わせる。

しかし、次の瞬間珍しく自嘲的な笑みを漏らし、一言だけ呟いた。

「……武人としての志など、とうに捨てた」

抑揚のないその言葉にもかかわらず、サキュアには今の彼がどこか寂しそうに見えた。

彼もまた、変えようのない現実には押しつぶされた敗北者なのだ。哀れな男だ。彼女は、そう思った。

午後の中庭に、一機の白いヘリが降り立った。民間機である。

「栗原航空の藤間と申します。防衛省の要請で参りました」

人の良さそうな中年のパイロットが、コックピットから会釈する。

「ご苦労さまです。自分は陸上自衛隊の佐久間三曹であります」

待っていた佐久間がコックピットに向かって挨拶代わりに敬礼をした。

「あのフェロモン姉ちゃんも何考えてんだろなあ……」

四階の中庭側廊下から降り立った民間ヘリを眺めつつ、僕はなんとも嫌そうな顔をして呟いた。

「貴様にもいずれ分かる」

壁に身をあずけて腕組をしているダークエルフの少女が、まるで全てを知っている風に突き放した。

それに眉をひそめ、リオミアが僕の顔を見つめた。

「この妖魔の言を信じるので？」

昨日から何回聞かれたか分からない質問にため息をつく。

「信じるしかないっしょ……リオミアや佐久間の調査結果くらい、読みとれないわけじゃないよ」

昨晚、徴税関係の仕事が一段落しようとしていたとき、突然テラスの窓が開いた。

強い風が吹いているわけでもないので不審に思った瞬間、目の前にキラリと光るナイフが現れた。

ワケも分らずビビりまくっていると、あの民間人二人がずかずかと部屋に入ってきた。

で、右往左往する彼女らがリオミアや佐久間を呼びに行ってくれてみんなが領主の間に八時だよ全員集合となった。

するとそれまで僕を羽交い絞めにしていた少女が、僕を解放してからある文書を取り出した。

それは、サキュアからのものだった。その内容は、驚くべきものだった。

二千人規模の帝国軍残党が、山奥などに集結中だというのだ。

そして、現在自分が帝国軍の間諜、つまりスパイ活動を任せられ、僕たちの情報売っているということ。

最も驚いたのは、今度はその帝国軍を裏切るから協力してくれというのだ。

その理由については、まだ詳しくは明かせないことも書かれていた。信じるのか信じないのか、選択の余地はなかったといえる。

リオミアと佐久間の予想が、最悪の形で的中したってことだ。

「しかし盗賊ギルドの真意が……」

「呉越同舟って考えじゃないかな。

教会を庇護していたことといい、帝国勢力に再来されては困る理由が結構あるんじゃないかな？」

そう言いながら、ダークエルフの少女に意味ありげに視線を送る。少女は、肯定とも否定とも受け取れる不適な微笑を浮かべた。それにため息をつきながら、僕は続ける。

「まあ、キミの姉さんが何考えているのかはさておき、俺たちが本当に二千人も相手に勝てると思ってるのかい？自衛隊の力を過大評価しすぎてるよ」

民間のへりを徴用するようになったなんて、予想以上に事態は悪化しているのかもしれない。

『帝国軍残党集結中。数は二千。増援送られたし』と上層部に報告はしたが、

返ってきた答えは『前線で帝国軍に不穏な動きあり。帝国軍残党集結の確実な証拠を収集せよ』の一点張りだった。遂に、前線でくるべきときがきたのだろうか。

このままじゃ戦略拠点であることを理解できずに陥落した太平洋戦争のガダルカナル島の二の舞になるぞ。

隊員三人に銃が四丁程度じゃどう考えたって、勝てるわけがない。

「私は姉様の命令に従うだけだ。そんなこと知ったことではない」「無責任やなあ」

「将たる者、不可能を可能にするものであるが」

「俺は将官じゃなくって尉官なんだよ。それも会計課志望の」

精一杯の皮肉を言ってから、僕は西日に目を細めながら、平穏な窓からの風景を眺めた。

とても、これから二週間後に戦争が始まるという実感は沸かない。

何かの悪い冗談ではないのだろうか？

いや、この世界ではそういう悪い冗談の方が『真実』に近いことは、



今までの経験で証明済みだ。

「撤退しか……ないか」

「っ！」

その場にいる僕以外の二人、特にリオミアの血相が変わった。

「ごめん……どう考えても、無理だよ」

「領主様……」

まるでこの世の終わりのような表情で、リオミアは僕に詰め寄りつつとする。

「よう。取り込み中のトコわりいけど」

遠慮のかけらも感じられない元気のいい声が横から入ってきた。

「倉敷さん、笠間さんも……」

荷物を背負ったあの二人が立っていた。

「この街、ヤバイのか？」

「あなたは知らなくていいことです」

ただでさえ苦悩してるってのに、この女の言うことは無遠慮でどうも好きになれない。

「いいや、知る権利はあるね。なんだか複雑っぽいけど」

「これは自衛隊の機密事項なんで教えることはできません」

僕の公務員じみた語彙の少ない答えに、鼻で笑うと、  
倉敷は的を得たりといわんばかりの皮肉をこめているかのような笑  
みを浮かべた。

「戦争が始まるんだろ？ そうなんだろう？」

僕は肯定も否定もしなかった。この連中に協力してやる義理などな  
い。

僕が無言でいることに、短気そうな彼女にしては意外にも、腹をた  
てた風もなく、  
今度はどこか不安そうな表情で尋ねてきた。

「この街……放棄するのか？」

「……おそらくは」

自分自身に確認するように、僕はそれだけ搾り出すように答えた。

「援軍は呼べないんですかあ？」

能天気な口調で笠間が身を乗り出してくる。

「はい……」

「なんでですかあ？ 自衛隊は世界で三番目に凄い軍隊なんですよ  
っ？」

「それは防衛費の話ですよ」

「でもでも、最初はあんなに勝ってて強かったじゃないですかあ」  
「補給線が延び切っているのに加えて、補給物資自体が不足し始め  
てるんですよ」

この女、戦争をなんだと思ってやがんだ。  
いや、安全な日本本土にいる日本人の感覚など、結局この程度のものなのかもしれない。

「ふーん」

知りませんでしたあ、と言わんばかりに感心する笠間。  
僕はため息をつく。こいつと長く喋っていると途中でキレそうになるなあ。

「あなた達二人は、あのへりで先に帰還してもらいます」

厄介払いは早めに済ませておいた方がいい。

「やだつて言ってもダメなんだよな？」

「はい」

キツパリと断言する。すると、倉敷は突然改まった表情になり、一つ提案を出した。

「一つだけ、頼み聞いてくんねえかな？」

「なんですか？ 時間がないんです。早くしてください」

すると倉敷は頭をポリポリとかきながら、申し訳なさそうに切り出しました。

「ちょっとくら、市場でもいいんだ。写真撮らせてくれよ」

「あのねえ……」

この後に及んでまだ言うか。

「わ、私からもお願いしますう」  
「ダメです」

二人の熱意は結構なものだ。

だが、結局僕らをクソミソに書く連中に温情をかけてやろうなんて気持ちは、さすがに沸いてこない。が、意外なところから声が上がった。

「よいではありませんか領主様」

「り、リオミアさんまでなに言ってるんですか？」

リオミアはどこか寂しそうに、続けた。

「領主様……この街を去られるのなら……」

このシャシンというものに、街の景色を焼き付けてください」

僕はハツとし何も言えなくなった。

「私達のことを……忘れないでほしいんです」

「……」

沈黙が重い。どれくらいそうしていたらろうか。僕は懽然とした表情で答えた。

「分かりました。へりは待たせますんで、三時間だけ待ちましょう」

二人が歓声をあげてバタバタと廊下を走っていくのを見送り、

僕はリオミアが声をかける前に無線機のある部屋へと足早に去って行った。

「三尉！ 司令部から命令が届きました！」

「増援が来てくれるのか？」

わずかな望みを抱き、思わず身を乗り出す。

「いえ、民間人二人と共に、当該地域より撤収せよとのことですよ」

佐久間は残念そうに、簡潔に答えた。

やはり…ダメか。頭から冷水をかけられたかのような失望感が僕を襲った。

「三尉、命令です。行きましょう」

肩を落とす僕を気の毒そうに覗いながら、佐久間が促す。

僕は重い足取りで、民間ヘリの待つ中庭へと向かった。

「リオミア……」

中庭ではリオミアがぼつんと立っていた。

他のメイドたちには、僕らが去ってから真実を告げると言っていた。無用の混乱を避けるためだ。

彼女の銀髪が、夕焼けに朱に染まっている。

思えば、彼女なしにこの二ヶ月は語れない。なにからなにまで、彼女は世話してくれた。

それももう……今日でおしまいか。彼女達はこの後どうなるのだろうか。

また、前の領主のような人でなしに奴隷として扱われるのだろうか。最悪……考えたくないが、日本に与していた反逆者として血祭り。

「……」

とうとう彼女の目の前まで来てしまった。  
彼女が、手の届くほどの距離にいる。

「分かっています。何も仰らないでください……」

彼女は俯き、まるで苦しんでいるかのように眉を歪めて僕をじっと見つめた。

「さようなら。ツジハラさん……」

その場に、一陣の風が吹いた。彼女は、俯き、それきり何も言わなくなった。

「離陸しますよ。隊員さんたち、早く乗ってください」

ヘリのエンジンが始動し、ローターが回転を始める。

どうすることもできない。僕はいつも。いつも周囲に流されて、なにも貫けない。

無難な人生を守るためには必要なことだ。

でも……

そんなのはもう嫌だ！

「三尉」

佐久間がいつこうに動こうとしない僕に苛立ったように声を上げた。

「佐久間三曹。前島一士……」

僕は、彼らに向かい直り、踵をならして改まって話しを始めた。

「今まで、至らない上官の俺に真面目に従ってくれて、ご苦労だった」

これが、僕の選択……

「さ、三尉何を突然……」

戸惑った前島が叫ぼうとするのを遮り、僕ははっきりと言った。

「俺は、ここに残る」

前島がハツとした顔をし、一方佐久間はへりから降りると、無表情だが威圧感を漂わせてこちらへやってきた。

「命令違反ですよ」

「構わない」

気圧されそうになるが、きっぱりと答える。

「ひ、一人で残ってどうすんですか!？」

思い出したかのように前島が叫ぶ。

「放棄されてる武器だけでも、なんとかなるようにやってみるさ」

まだ終わったわけじゃない。一発も撃たずに負けただなんて、誰が

認めてやるもんか。

「やってみなきゃわからないさ。日露戦争だって、勝てない戦争を勝ったんだぜ？」

いつそ晴れ晴れとした表情で、僕は大笑いに手を広げて見せた。

「さ、三尉！」

「ん？」

「お、俺も残りまつす！」

僕は目が点になった。まさかこいつが…何の理由で？

「い、いいのか？」

「はい。へへ、情けねえや……ミルシエに『お兄ちゃんだと思っ  
ていい』なんて言っついて。

お兄ちゃんが妹置いて逃げるなんて、ありえないっすよね」

照れながら、彼はへりからひょいと飛び降りた。

「俺……いや、自分は三尉のお陰で決心つきました！」

前島は、初めて僕に対して、直立不動の敬礼をとった。

僕は、微笑を浮かべて前島の肩をぱんぱんと叩く。  
すると、隣で誰かがため息をついた。

「……佐久間」

「しょうがないですね。下士官のいない部隊はまともに機能しませ  
ん。軍隊の基本ですよ」

「すまん……もしものときは、責任は俺が取る」



「何言ってるんですか。一人で責任取れるほど偉くないでしょう?」

珍しい彼の冗談に、思わず苦笑を漏らす。

僕は頼もしい部下達に抱きついてやりたいとさえ思った。

照れ隠しのように、僕はへりで成り行きを傍観していたパイロットのおっさんに駆け寄る。

「すみません藤間さん……彼女二人を、無事に届けてやってください」

「いいのかね? 君らは若いのにこんな場所で……」

おっさんが、心配そうに尋ねてくる。

「いいんです。ここには……」

僕は、自分でも、恥ずかしくなるような言葉を口にしていました。しっかりと、彼女にも聞こえるように。

「ここには我々の守るべき人たちがいますから」

そう答え、僕は振り返ってリオミアを見つめた。

呆然と立ち尽くす彼女の宝石のような瞳が、涙に潤んでいた。

## 第18話 戦闘準備

「おーおー感動的だねえイツちゃん？」

「はい！ 私もう涙で前が見えませえん！」

ヘリの中から自衛隊員たちの様子を眺めていた二人は、一人は冷ややかに、もう一人は感動に胸打たれた雰囲気だった。珍しく何事か考え込んだ様子の景は、静かに呟く。

「このこと記事にしたら、戦争美化に繋がるって言われるのかな…」

幼い頃から正義の味方でありたいと望んでいた。

強大な国家権力に立ち向かうジャーナリスト、それが彼女の選んだ『正義』だった。

だが、今の彼女はその考えが独善的だったのではないかと思いつめていた。

『正義』の形は一つではない。いや、そんな形容詞で片付けられるほど、本当の『正義』は生易しくない。

現実に、人間が死の覚悟をするというのは、口にするほど簡単ではない。

目の前の隊員たちは、それを笑いながら……  
彼らのことを、多くの日本人は馬鹿だと思っただろう。

自分を正義の味方だと思い込んで、何を勘違いしているのだと。では、そうやって安全な場所で嘲笑している連中は、彼ら以上に何かを命をかけて守れるのだろうか？

そんなワケがない。

私は彼らについて記事を書き、反体制的な内容ならば評価を得、体制的、いや、彼らの覚悟を人として立派だと敬意を表すれば、多くの読者は私を右翼的な人間だと片付けておしまいだ。

「畜生……なんかそれも気にいらねえな」

曲がったことが嫌いな彼女は心底、そう思う。

「……よう大将さん」

「なんですか？」

景は、いつの間にか若い指揮官に声をかけていた。

「今、何が一番必要なんだ？」

彼女の質問に、隊員は目を丸くする。

「武器弾薬と人員ですよ。ま、ない物ねだりですけどね」

「そっか……」

苦笑しつつ答える指揮官に微笑みを見せ、彼女は帽子を目深に被った。

「お嬢ちゃんたち、もう離陸するよ」

十分に回転数を上げたヘリが、飛び立とうと羽ばたく。

「じゃあ、さようなら。倉敷さん、笠間さん」

「ああ。でも、死ぬなよ……大将さんよ」

「もちろんそのつもりさ」

見る者を魅了するような笑顔で隊員たちは敬礼した。

景は、その若者達の顔に見とれながら、地上が遠くなってゆくのを実感していた。

どこかで、あんな笑顔を見たような気がする。

ああ、そうだ。何かの授業で見た、出撃前の特攻隊員の、笑顔だ。

景は、彼らを追い込むことしかしてこなかった自分に、初めて気付いた。

かつての日本も、国民が好戦に偏り、多くの若者を無駄に死なせたように。

今の自分達は、彼らを無関心という暴力で死なせようとしている……  
へりの中で揺られながら、衣緒が肩で寝息を立てているのに苦笑しながら、

彼女はそんなことを考えていた。

元々辻原三尉達の派遣の前提が、帝国の残党が殆ど残っていない事を前提にしていた。

仮に、エクトが確保の必要な拠点であっても、予期していた以上の戦力がある可能性があるなら、

速やかに撤収を計るのは当然の措置。

純粹に軍事上の視点で見れば上記の考えは正しいだろう。

残された人々の事を考えなければ。

徹夜で防衛作戦の骨子造りに頭を使った結果、僕はある結論に至った。

チャリで街を走っていて常々感じていたことから、ヒントを得たといつていい。

人間、どんな経験が役に立つのか分かったものじゃないな。

「サキユアさんのお膳立てのおかげで、敵は無血占領を狙って堂々と隊列あるいは徒党を組んで街へ入場してくるに違いない。そこを狙い目だ」

僕は眠気覚ましのリオミア特製のお茶を飲んでから、部下と机の上の地図を囲んで顔をつき合わせた。

「何ですか？ こっちゃんタマだって少ないのに、市街地じゃ当たりにくくないですか？」

前島が片手をひょいと上げて質問する。

「戦術の基本つてやつさ。いいか、敵は大勢、こっちは少数。

…ところで前島、ナポレオンは知ってるよな？」

「あー。我が辞書に不可能の文字はないってやつっスよね？」

「そうさ。俺たちはそれに倣う」

「？」

二人とも、僕のもったいぶった物言いに怪訝な表情を浮かべている。いいじゃねえかよ、一晚悩みぬいた作戦なんだぜ。

そう内心に思いながら僕はボールペンで、

街の主要道路及び部隊規模で通れそうな路地をトントンといくつか指し示した。

「いいか、市街地という特殊な環境を考慮に入れるんだ。

この街に二千人も一気に通れる道があったか？

当然ない。だから、敵は街の掌握とこの館の制圧を目指すには入り組んだ道を部隊を分けて進むしかない。

つまり自然と戦力が分散されることになる。

ところで前島、自衛隊に入って敬礼の他にまず何を習った？」

突然振られた質問に、前島はうーんと唸ってから、自信なさげに答えた。

「え、えーと……早飯早糞芸のうち、です」

「惜しい。時間厳守だよ」

「？」

「極端な話だがな、一人と百人で喧嘩したって絶対に勝てない。

だがもし、その百人がてんでんばらばらに一人ずつやってきたら、それは結局一対一ということになる。相手が雑魚なら一対一なら勝てる。

それを百回繰り返し返せば絶対に勝てない喧嘩を勝つことができる。

これには時間が重要なわけさ。軍隊で時間厳守を基本とするのはただの精神教育じゃない。

戦力の集中という基本を兵士にこなせるようにするという側面があるんだよ。

つまりな、戦力を分散させてしまえば、それはただの数の上の戦いじゃあなくなる。

ナポレオンが強かったのは、この各個撃破の用兵が上手だったからなんだよ」

防衛大で嫌々教えられていたことを、実践することになるのは意外だったが、

どこか、これは自分にしかできないことであるという充実感があつた。

僕らの中で、ある程度専門的な戦術・戦略知識があるのは僕だけなのだから。

「それに考えてもみる。部隊が分散されてしまえば、それだけ各部

隊との連携が必要になってくる。  
でもな、敵は建物に遮られてうまく情報は伝わらない。連中には無線機なんて便利なものがないからな」

僕は不適に笑って見せた。

「ですが……武器の不足はいかんともしがたいですし  
「人員の数もどうしようもないですよ？」

そこなんだよなあ。まあ、なんとかならないわけではない。

「そこは、俺に任せてくれ」  
「何か手が？」

頷き、少しだけ不安混じりに、僕は答える。

「今まで俺たちがこの街の人たちにやってきたことを、信じるしかない」

その後僕らは、トラックに乗って評議会議事堂へと向かった。

議事堂前の広場に集まった、老若男女の人々。

何が始まるのか不安げに周囲と囁き合っているようだった。

以前は民衆をここへ集める理由といえば、公開処刑か重税の発布などであり、

今回もそうでないかという噂が広まっているようだ。

が、この際そんなことはどうでもいい。

「皆さん！ わざわざ集まっていたいただき、ありがとうございます」

僕は備品の拡声器を手に議事堂の玄関前から声を発した。拡声器によって少々変調した僕の声に民衆は最初驚いたようだったが、

これが異世界のマジックアイテムなのだとな納得したのかすぐに静まった。

僕は、できるだけ落ち着いて話を開始した。

そしてこれは、人々にとっては耳を疑いたくなるような話に違いない。

「……以上、この街へ帝国軍が雪崩れこんでくるのは時間の問題となっています。」

そして我々自衛隊にも、撤収命令が出されています」

話が終わる頃には、すすり泣きとも嗚咽ともつかぬ声があちこちから聞こえていた。

あまり聞いていて気持ちのいいものではない。

「おおお……神よ」

「おしまいだ…もうおしまいだ！」

絶望に打ちひしがれ、口々に嘆く人々。

その様子には、長年の植民地支配の傷跡の深さが覗えた。

彼らの思考の中には支配されること以外の生活がないのだ。

良い支配か悪い支配のどちらか一つだけ。それを思うと、哀れさと共にどこかゾツとする。

だが、それはいつか彼ら自身の手で断ち切らねばならない。

僕らがこれからやることは、その始まりだ。



「今日自分がここに来たのは、これを伝えにきただけではありません  
ん」  
「？」

自衛隊撤退の報告だけかとばかり思っていた人々が、何事かと顔を  
上げた。

ようし、良い感じだ。

「皆さんに聞きたいのです」

拡声器の音量をマックスにし、全ての人々に聞こえるように呼びか  
ける。

「日本の統治は、帝国よりも人道的に進めてきたつもりです。そ  
れを失いたくないですか？」

我ながら恩着せがましいとは思いが、これくらいは言わなければ始  
まらない。

が、民衆はしんと静まっている。僕はあえて何も言わずに誰かの  
発言を待った。

『自発的』であることに意味があるんだ。

「も、もちろんでさあ。おらの家は領主様の二公八民の御触れのお  
陰で娘を売らずに済んだんだ」

ややあって、躊躇いながらだがみすばらしい格好の中年の男が呟く  
ように言った。

すると、徐々にではあるが、ちらほらと賛同の声が上がり始めた。

「俺もだ。作物を売った金で末の息子に初めてまともな服を買って

やれた」

「家族で腹いっぱい飯が食えるようになっただ」

やがて、僕自身に語りかけてくるように人々は日本統治下の生活の  
樂さを口にした。

「そうか、良かった」

とりあえず、反感がもたれていないことは証明できたわけだ。  
少々罪悪感を抱かないでもないが、一気に畳み掛ける。

「帝国がここに帰ってくれば、それを失うことになります」

人々がうつと喉をつまらせる。

「自分は……上からの命令は無視してここに残ることにしました。  
この街を、また暗黒の時代に戻したくないからです」

すると驚きと希望の光を見出した人々から声が上がった。

「りよ、領主様を守ってくださいるのでございますね!？」

彼らからしてみれば、命令に背いてまでここに残ったということは、  
英雄の登場する騎士道物語のようにこの街を救ってくれると思った  
のだろう。

安堵感のような雰囲気はその場に漂う。しかし、あえて僕は冷徹  
に話した。

「違います。この街を守るのは、あなた達自身です」

「ど、どういふことぞいいますか?」

安堵に代わって戸惑いが民衆を支配する。

「今から志願兵を募ります。職業や身分は一切問いません。志願する気のある方、つまり飢えない生活を望む人は、武器を取るしか道はありません」

ざわざわと民衆が騒ぎ始めた。

自分たち自身に選択を委ねるなど、考えもしなかったのだらう。

「予測として開戦までの猶予は約二週間。それまでにこの街での戦闘に備えます。

兵は多いに越したことはありません」

突き放すような僕の言葉に静まり返り、誰もなにも言わない。

「選択するのはあなたたち自身です。では自分はこれで……」

不安を抱きつつも、僕にはこれ以上は何もできないだらう。

ヒトラーのように扇動的な演説をやったところで、

戦時に恐怖に支配されてしまえば馬脚を現すだけだ。

なんとなくで戦う兵士より、確たる意志を持った志願兵の方が強いに決まっている。

とはいえ、あの反応では望み薄かもな。

「従属しか知らなかった人間に、自ら立ち上がることは……難しいだらうさ」

募兵事務所となる議事堂窓口に任命した役員以外誰もいないのを眺めつつ、

先行き不安そうな表情の佐久間と前島に聞こえるように呟く。

「何人集まるでしょう?」

佐久間が半ば諦めたような口調で尋ねてくる。

「一千集まれば上等だろうな」

これが正直な予想だ。

「守る側は攻める側の三分の一でこと足りる……」

しかしそれは正規兵同士、それも籠城した場合です。

こっちは武器を持ったこともない民兵、向こうは激戦をくぐりぬいてきた猛者ばかり。

三千対二千でも勝てるかどうか……」

分かってるよ、それくらい。　この世界、そんなに甘くはないだろうさ。

「防衛省はなんて言ってきた?」

それでも不安を増長させたくない僕は話をそらした。

「命令違反は厳罰に処す、とだけ」

「増援ばかりか補給すらあてにできそうにないなあ……」

余計に不安を堆積させてしまった自分のマヌケさに苦笑しつつ、僕はため息をついたのだった。



## 第19話 民兵

「なんだこりゃあ……」

佐久間の基礎教育によって整列を覚えた民兵部隊を前に僕は啞然とした。

あれから一週間経ち、募兵窓口に志願してきた人数が二百を超えた時点で、

佐久間に近代戦術にある程度対応できるような教育を命じたのだが、僕はてつきり志願者のほとんどが青年・壮年の男性だとばかり思っていた。

が、今日初めてその顔ぶれをみた瞬間、僕は目の前が真っ暗になるような感覚に襲われた。

「全員傾注！ 部隊長殿がお見えだ」

「はいっ！」

佐久間の陸曹らしい鋭い声に血気盛んに応えた着の身着のままの兵士たちは、

そのほとんどが少年・少女だった。

「驚きましたか……？」

「あ、ああ。すんごくね」

佐久間の心配そうな耳打ちに、僕はかろつじて答えた。

現時点での総志願者が四百二十名という話にもならない少なさにも閉口していたものの、

その内容まで不安を抱えているとは思いませんでした。なんでも、大人は植民地支配に怯え切っており、未来を夢見てやってくるのは若い彼らだけだったという。最年少は十二歳の少女ときた。マスコミにばれたら袋叩きだろうな、こりゃ。」

「わずかではありますが噂を聞きつけた近隣の村の狩人の若者や流れ傭兵なんかもいます。」

「まともに戦力として使えそうなのは二百人ちょっとですかね」

「二百プラス三人対二千人……増援のない現状では秘策を練らない限り絶望的な戦力差だな」

「何か考えが？」

「あるにはあるけど、勝利……いや撃退する決定的なものになるかどうか」

戦闘帽を目深に被り、焦燥感を兵士らに気取られないように気を付ける。

「せめて爆薬があればな……」

「手に入りませんか？」

「黒色火薬じゃ相当量必要だし、それだけの量がこの近辺にはないんだよ」

「……だとしたら火炎瓶でなんとかするしかないですね」

「ガソリンや灯油はある程度備蓄があるからな」

市街地各所に可燃性爆発物を敷設し、敵部隊が通過する際、先頭と最後尾でこれを点火、退路を断つ。

孤立した敵部隊の頭上に、潜んでいた家屋の屋根から更に火炎瓶を投擲し損害を与える。

敵が反撃に出そうになったら、僕ら自衛隊の狙撃を援護として後退。

これの繰り返しにより敵に損害を積み重ね、夜間は佐久間が敵指揮官を狙撃し士気の低下を誘発する。戦術だけを並べればこんな感じだが、そう簡単にいくわけがないのは重々承知だ。なにより、敵を孤立させるための爆発物が揃わないのだ。こればかりはどうしようもない。

どうしたものか……

パタパタパタ

ん？

「三尉！ あれを！」

「あっ！」

民兵達が異変に気づき、騒ぎ始めるのを止める前に、僕は空を見上げていた。

「へりが来た！？ 俺たち連れ戻しに警務隊でもやってきたか？」

「いえ、あれは……民間機です！」

民兵達が驚き隊列を崩して逃げ出したり、仮武器の木製槍を振り回して敵が来たとはやり立ったりしている中、僕は着陸する三機の大型へりの方へと駆け出していた。へりのローターがひょんひゅんとまだ回転している。

僕は警戒心をもって近寄った。

こんなへりが来る連絡など受けていない。最悪、警察か警務隊という可能性がある。と、

「いよお！ 大将さん元気だったか？」

サングラスを外しながら、茶髪の女性が気楽そうな表情でへりから



降り立った。

「く、倉敷さん!？」

「えへへへ……私も」

ひよいとへりから降りてくるもう一人の女性。あのメガネと気の抜けた顔は……

「笠間さんも!」

いったいどうなってるんだ。

わけがわからずにいると、彼女はすたすたとこちらへやってきたかと思うと、

胸を張って僕の肩をバンバンと叩いた。

「こないだ言ってた『必要なもの』、持ってきてやったぜ」

「え?」

なんの話だ? 彼女に何か頼みごとなどしたのだろうか?

そういえば、ないものねだり、とは言ったが……

「まあ見てみな」

彼女はまるで何かの作品を披露するかのよう到大仰に手を広げて促す。

僕は不承不承、彼女のいうとおりに中をのぞいてみた。

「じ、じりゃあ……」

思わず目を丸くする。

へりの中には所狭しとごたごたとした荷物

が積まれていた。

そしてよくみてみると、その多くが何かしら『危険』なブツだった。

「最初は自衛隊にかけ合っただけだよ。前線に全部回すつつって全然貸してくんなかったんだよ。で、自衛隊以外で手に入る武器を総ざらいしてきたんだけど……」

「わぁお。三尉、これみてくださいよ！」

頭をぱりぱりとかきながら説明する景など全く眼中にない前島が、物資の中からあるものを見つけて歓声をあげた。

「と、トカレフじゃねえか!？」

鈍く黒光りするそれは僕でも知っている。

『黒星拳銃』と呼ばれる中国で大量にコピー製造され、日本の暴力団などに広く密輸されている旧ソ連製の大型拳銃だ。でもなんでそんなもんがここに？

「ああ。それ警察の押収品の中から失敬してきたやつだな。ヤクザ屋さんに感謝しな」

おいおい……。

「こっちはマカロフか……なるほど、接近戦では重宝しそうだな」

佐久間が手馴れた手つきで拳銃を構えてみる。

「ふっ…… P220より扱いやすいな」

薄く笑う佐久間の顔は、まるで野生の戦士のように精悍だった。

「で、メインはこっちなんだけど……」

景はそういうとシートがかけられていて中身が分からなかった物資を公開した。

「じゃーん！ お望みの銃だぜ！」

次の瞬間、僕は思わず叫んでいた。

この、黒光りする鉄の塊は……

「りよ、猟銃!？」

「ええつとですなえ。ライフルが32丁、ショットガンが171丁ですう」

笠間がファイルを手にとどどしく説明を加えた。

「だ、弾薬は？」

「うーんと……。よく分かんないことが書いてるんですけど……」

笠間はえへへと間抜けた笑いを漏らすと、僕に手にしたファイルを渡した。

なになに……。ライフル弾約二千発。こいつは銃と口径を統一しているから問題ないな。

散弾は12番・20番ゲージのスラッグ弾・六粒弾・九粒弾あわせて約五千発か。

みると、銃の横に山のように積み上げられているのは箱入りの弾薬のようだ。

物資の山の中にはどこでこんなものを手に入れたのか分からないよ

うなブツも多々見受けられた。

民間で武器になりそうなものは総ざらいしてきたって言うのは本当みたいだ。

猟銃のほかにはスタンガン、出刃包丁、痴漢撃退用催涙スプレー、日本刀、

ミリタリーショップから徴用したのかナチスドイツ軍のヘルメットや山岳猟兵の戦闘帽、防弾チョッキまである。

多くは役に立つのか疑わしいものばかりだったが、ありがたいことに削岩用の発破に使われるTNT爆薬がどっさりと積みまれているには安堵すら覚えた。

これで作戦の成功率はグッと上がったに違いない。

「しかしこれだけのものをよく集められましたね？」

「ああ。有事徴用だつて押し切つたから一応合法だよ。

ま、色々と際どい交渉はしなきゃならなかったけどね」

「む、無茶苦茶っすねえ」

あの前島ですら呆れ果てている。

「しかし………なんでですか？」

「ん？ 何が？」

疑問に思っていたことを尋ねる。

「あなた、自衛隊も戦争も嫌っていたんじゃない？」

「ああ。それね」

少し遠い目をして、彼女は話し始めた。

物資を確認している他の者には聞こえない小声だった。

「日本に送還されてからさ。なんか疑問に思えてきたんだよ、あの幻のような平和が」

自分自身に問いかけるような雰囲気だった。

「あんたらが、命かけてこのちっぽけな街を守ろうとしているってのに、

日本じゃ国会でくだらねえ憲法論議に時間費やして。

渋谷に行けば援交の女子高生がたむろしてて。

自分たちがカツコイイって勘違いしてるヤンキーのガキどもはオヤジ狩りした金でヤク買ってラリッてる。

そんなイカれた連中ほったらかしといて教師は

『教え子を戦争に送るな』って毎日街頭で誰の命も救わない署名活動してさ。

あげくにやこつちの世界に来たのが原因で失業しちまったのが原因だとかほざいて、

自分の子供を虐待死させた両親が被害者面して法廷で供述してる…

…」

彼女は少し恥ずかしげに、自分もイジメが原因で高校を中退していたことを打ち明けた。

そして、それでも未来に希望を捨てずに大検を受けて卒業した後ジヤーナリストになったことも。

「いったい何が正しくて、なにがおかしいのか……そんなものを判断するのは、あの国では難しいんだよ。

だからさ、あたしも人の言うことに惑わされてそれに染まっちゃうよりも、

自分で正しいと思えるものを信じてみようって気になったんだよ。で、あたしはあんたのやっっていることが正しいって信じた。だから

らだよ」

半ば押し付けるように指差す彼女にたじろぎながらも、その気持ち  
をなんとなく理解した僕は

「よく、わかりませんが……」

困ったように苦笑した。

「自分らのことを、応援してくれてるのはありがたいです」

彼女はニツと歯を見せた。どこかその笑顔が、頼もしく見えるのは  
なぜだろうか。

その後、兵士にも手伝ってもらって物資を降ろし、へりを見送るこ  
ととなった。

彼女らには思わぬところで世話になってしまった。

物資を降ろし終えたへりが飛び立つ準備にエンジンを温め始める。

ややあつて回転数を上げたへりが飛び立ってゆく。

が

「なにしてるんですか!?! 早くへりに……」

「あたし達はここに残るぜ」

荷物をドサリと地面に放り、手をパンパンとはたきながら彼女は平  
然と言い放った。

あんですと!?!?

「ふざけないでください! ここは戦場になるんですよ!?!?」

冗談じゃない! ただでさえ苦戦が予想されるのに、

足手まといな民間人なんか置いてられるかよ！  
しかし僕が本気で怒りを露わにしているにも関わらず、  
彼女はニヤニヤと笑いながら腕を意味ありげに組んでみせる。

「増援の来るあてあんのかい？」

なんだって？

「ないですよ！ だから尚更……」

「あたしらがここにいるなら、増援が来てくれるかもしれないじゃ  
ねえか？

なんたって、あたしらは民間人だかな」

僕はそれを聞いて思わず口をつぐんだ。

そういえば、確かに……。民間人がいるのであれば、  
救援を送ってくれる可能性も上がるかもしれない。

だが、そううまくいくだろうか？ この非常時に、たかだか不法入  
国の民間人二人のために。

「それにな。こっちには実は最終兵器があんだぜ」

「最終兵器？」

まるで僕の心中を見透かしていたかのように、倉敷はニヤリと笑っ  
た。

「こつ見えてもナ、イツちゃんって結構有名な国会議員の一人娘な  
んだぜ」

「なっ……！？」

この電波入ってるんじゃないかってコが！？

今も「にへら」つと抜けた笑顔のこのコが!? うそだろ!

「あっ!」

「どうした?」

前島が何かを思い出したかのように突然叫んだ。

「笠間ってまさかあの笠間直人衆院議員!?!」

えっ!? その名前だったら僕でも知ってるぞ。

討論番組とかにもよく出演してる議員だ。

「はい。パパです」

ほんわりと笑顔で彼女は頷く。  
が

「……死んだ自衛官の遺族への補償金を税金の無駄遣い呼ばわりしたあの笠間か」

佐久間が横で、冷徹な彼にしては珍しく不快感も露わに呟いている。まあ、他の人間ならまだしも、自衛官にあの名前は不快以外のなものでもない。

自衛隊が派遣される前までは

『自衛官の命を危険に晒すのはかわいそうだ。内閣は血も涙もないと連日国会で叫んでいたが、ネリエントスでの大敗を機に内閣が有事法を拡大解釈しての戦費確保の一環として国会議員の給与を半分に減らすと強行し、

一方で戦死した隊員の遺族への補償を充実させると発表した途端、彼は態度を一変させて叫んだ



『この国はいつから人殺しの家族に金を恵むようになったのかね？』

「あの男の娘か……」

ゾツとするような冷たい目で、佐久間は目の前ののはほんとしたメガネ少女を見つめていた。

「三尉、いいんでないですか？ あの男の一人娘を想う気持ちにかけましょう」

そっと、彼女らに聞こえないように僕に耳打ちしてくる。

佐久間が本心でいつているのか皮肉で言っているのか、僕には判別できなかった。

「……現実的に考えようぜ？ ナ？」

更に景がウインクする。

僕は指揮官だ。

戦いの先々のことまで考慮に入れて作戦を考える必要がある。

この際、奇麗事は言ってられない。言ってられないんだ。

「……分かりました」

「ありがとよ！ 大将！ あ、ちょっと待っていてくれよ」

歓声をあげ、彼女はへりから降ろした自分の荷物らしき大きなバッグ類を取りに走っていった。

なにが始まるのか眺めていると、ややあって、

彼女はなんと肩に担ぐあの報道用TVカメラを抱えて笠間と一緒にえっちらほっちらとやってきた。

なんとまあ気合の入った連中だな。

「せんばあい。準備オツケーですう」

「おーし！ じゃあ回して」

「さん、にい、いち、キュウー！」

「はい。倉敷景です。今私は異世界の土を踏んでいます。

旧帝国領、現在は自衛隊の管理下にあるエクトと呼ばれる街です。

私達は、一週間前にここに一度保護されました。

そして、ゲリラ集結の恐れから出された自衛隊の撤収命令に便乗し、本国へと送還されることになったのです。

ですが、今私はこうして再びこの街へ戻ってきました。

それは、この街で起こるであろう事件を克明に、装飾なく記録するためです。

実はこの街にいる日本人は私達だけではありません。私達を本国へと送還するのを見届け、

街の人々の安全を守るために危険を冒して残った人たちがいるのです。

この忘れられた地で、人々のために身を挺する人たちがいるのです」

なんとなんと。結構な役者っぷりだな。

呆れ半分に感心していると、笠間のカメラがこちらに向いた。

「みてください。命令違反を犯してまで、この街のために残った自衛隊の三人です。

彼らの平均年齢は二一歳。あまりに若い部隊です」

一旦話しを区切ると、彼女はスタスタと唾然として突っ立っている僕らの方へと歩いてくる。

そして、突然持っていたマイクをこちらへ向けた。

「今のお気持ちはどうですか？」

「えー!? ええと……」

「なるほど、緊張しているんですね？」

「え、ええまあ」

奇襲攻撃に近いインタビューにしどろもどろとなりながら、僕は慌てて話を合わせた。

「このように、決戦の日が刻々と近づく中、現場での緊張は最高潮に達しています。倉敷景でした」

「いやあー。ドキュメント撮るのも楽じゃないねえ。」

あ、この映像、あたしの知り合いのTV局に気球衛星中継で送信すつから。

メディアで国民の目に触れちゃったら、上も君らを手荒には扱えないはずだよ」

「あなたのその神経は自衛官以上かも……」

そのあまりの神経の凶太さに感服すら覚えつつ、僕は苦笑を漏らした。

こうして、大きく戦力を補強しつつも、我々は珍客を迎えることとなった。

決戦の予想される日まで、あと一週間だった。

## 第20話 最後の平穩

ゴツ！ ゴツ！ ボコツ！

「ようし、開いた」

ハンマーで四階の屋根裏の壁に顔一つ分ほどの小さな穴をいくつか開け終え、

僕は汗をぬぐった。

今開けた穴からは前庭を見渡すことができる。

向こうに見えるこの館を囲う城壁の上では、ショットガンを手にした武装メイドの姿がちらほら見える。

あの阻止線が突破された場合、この穴……銃眼から敵を狙撃する。そうならないようにしたいが、おそらくそれは難しいだろう。備えておくのに越したことはない。

「二階と三階の状況は？」

後ろで狩猟用ライフルを銃眼に突っ込み、照準の具合を確かめたりオミアに尋ねる。

「一足先に窓の打ち付けも終わったようです」

彼女は猟銃を背負い直し、狭い屋根裏で立ち上がった。

「良好だ」

工具箱を持ち上げ、僕は作戦本部となる領主の部屋に戻った。

途中、懐中電灯をつけないと暗くて通れない場所もいくつかあり、その上全ての窓を閉め切った上に板を打ち付けていたので新鮮な空気が入ってこず、居住性はかなり悪くなっていた。しかも、二箇所を除いて外からの扉も全て打ち付けられ、内側にはバリケードを築いて侵入不能にしてある。かつて『あさま山荘』で一千人の警官隊と対峙した連合赤軍のメンバーの気持ちが少し分かる。まともな神経ではやってられないだろう。

「猶予はあと三日……最悪明日いっぱいだな」

街の住人の周辺村落への避難は完了している。

敵が欲しいのはここを制圧下においたという勝利の持つ意味だ。

だとしたら、たとえ街に住人がいなくても我々を一人残らず駆逐するために襲い掛かってくるに違いない。

そしてまず間違いなく占領の象徴であるこの領主の館は、どんな手を使ってでも落としかかってくる。

波状攻撃に耐えるため、館の要塞化は必要だ。

それが大方完了したのには、まあ満足できる。

「こちら辻原。佐久間三曹おくれ」

部屋に戻った僕は無線機の周波数を合わせ、市街地にいる佐久間と交信を試みた。

「サクマ様、袋の中から声が……」

シユレスヴァイラが突然鳴り響いた携帯無線の音に、思わず隣にいた佐久間に飛びついた。

佐久間は彼女の手を邪険に振り解くと、

「ああ、三尉だ。寄越してくれ」

と思い出したように彼女に命令した。

「は、はい……」

佐久間の冷たい口調に身を縮め、彼女は迷彩柄の雑嚢を恐る恐る手に取り彼に渡す。

「はい。こちら佐久間」

佐久間は無線機片手、双眼鏡を片手に通信に応じた。

彼とシュレスヴァイラが今いるのは評議会議事堂の近くにある鐘楼。街で最も高い建造物であり、ヴェルアー原理教の不気味な鐘の音がかつては毎日のように響かせていたらしい。

しかし今となつては無人状態、鐘はとつくに佐久間の指示で取り払われ、

代わりに運び込まれたのは佐久間の狙撃銃や猟銃、そしてそれらの弾薬と火炎瓶数個であった。

ここは絶好の狙撃ポイントだと、佐久間にはよく分かっていた。

「はい。ナパーム爆弾の敷設は完了しました。余ったTNTはパイプ爆弾を作るのに使おうと思います」

双眼鏡で街の外に広がる風景をつぶさに観察し、敵影がないか監視しつつ、上官に報告を続ける。

「兵士の練度はこれ以上は望めそうにありませんね。」

簡単な適性を測って猟銃を扱えそうな奴を選抜しましたが、射撃訓練もせいぜい一人三発程度、これでは的に当たればいいほうですね」

泣き言は言わず、ただ事実のみを伝えることに、彼の自衛官らしい真面目さが覗えた。

「……はい、もちろんです。退際はわきまえていますよ。それが決心できない指揮官はボケナスですからね」

彼はそう締めくくり、交信を終了した。

先日までは敗戦色濃厚だったものの、今は開戦してみなければ分からないというレベルになった。

あとは指揮官次第だ。

そういったことを考えながら、佐久間が六四式狙撃銃の狙撃スコアの調整を始めようとしたときだった。

「どうした？」

「御主人様……もうお昼時でございますわ」

シユレスヴァイラが少し怯えたように告げた。

まだ彼に対しては怯えともつかない感情が見え隠れしていた。

「ああ。レーションと一緒に……」

「私が持ってきております。よろしければ……」

おずおずと、彼女は自前の雑嚢を持つてくる。

中から出したのは、なんとおにぎりだった。

佐久間が以前、日本食の話でちらりとその形などを教えてはいたが、まさか作ってくるとは。

しかし必死に作ったのだろうが、形はどれも歪だった。そしてそれ以前に、佐久間はこの世界の人間をあまり信用していなかった。

ネリエントスのトラウマである。

佐久間には今でも彼女のことを謎だった。

何かに取り憑かれ、壊れた者同士として共感はできるが、理解はできないのだ。

「貴様が持ってきたものだ。毒が入ってないと保証できんだろう。レーションでいい、早く出せ」

興味など微塵も示さず、彼は冷たく言い放った。

彼は彼女を下僕と見てなどいないが、人としても見てはいなかった。拳銃を持ち出して彼女に突きつけたあの事件以来、

佐久間は彼女に頼んでもいないというのにつきまとわれることに多少の苛立ちを感じていた。

この世界の人間、しかも元帝国側の人間だった者を信用などできない。

しかし、前領主の束縛から解放された彼女は、あまりにもか弱かった。

彼女にとっては、佐久間は自らの存在意義同然となっていたのだ。だが彼はその他力本願な生き方にも嫌悪感を感じていた。

人の人生はその人のものであり、決して他人に渡すようなものではないのだから。

「御主人様……」

尚も哀願するような声が佐久間の癪に障る。

「なんだ。いい加減に……」



いい加減うんざりしてきた彼は、一言きつく言ってやるかと狙撃銃を置いて振り向いた。

すると、彼女はその歪なおにぎりを半分ほど食べていた。

「……こ、これを食べればよろしいです」

毒見のつもりだったのだから、彼女は酷く怯えた様子だった。佐久間はため息をつく。

(……誰かに尽くしていないと不安なタイプなんだろう)

彼女の行動パターンが段々と見えて来た気がした。

「この世界の連中、どいつもこいつも馬鹿だらけだな……」

はき捨てるように彼は言った。

その態度にシュレスヴァイラはどこか悲しそうにおにぎりを包みに入れ直そうとした。

しかし、その手を強引に佐久間が止めた。

「貸せ。飯はさっさと食うのが自衛隊員の掟なんだ」

ぶっきらぼうな口調だが、彼の頬が少しだけ赤くなっていたことに、彼女は安心したように微笑んだ。

「だ、ただ誰だ!? で、出て来い!」

前島は慌てて背負っていた六四式自動小銃を持ち直し、暗闇に向かつて構えた。

館の中は窓を閉め切っているので、明りのない部屋は昼間にも関わらずまさに一寸先も見えない状態だ。

銃の扱い方を武装メイド数人に教え、休憩がてら昼食をいただこうと食堂へ向かう途中、

小さな人影がこの食糧倉庫に逃げ込んだのを目撃したのだ。

先日のダークエルフの侵入のように敵の工作員が潜んでいる可能性は十分高い。

何も物音がせず、前島は焦りのあまり、一発威嚇射撃を試みようかとトリガーに指をかけた。

もしも、飛び出てくるようなら一発で仕留めてやる。

人を撃つたことなど今まで一度もないが、やれるはずだ。

「…………おにいちゃん」

微かな、耳を澄ましていなければ聞き逃してしまったであろうか細い女の子の声だった。

暗闇から、まるで悪夢を見てしまった幼子が怖さのあまり兄と一緒に眠りたいと部屋へやってきたときのような。

「…………み、ミルシエ？」

前島は肩の力が抜け、銃口が下がる。

彼は耳を疑ったに違いない。

彼の専属メイドであるミルシエは、つい先日他のメイドと共に郊外へ疎開したはずだ。

…………ちりん…………

だが間違いない。この鈴の音は、彼女の髪飾りのもの。

「わっぷ！？」

ちりんっ！

暗闇から何者かに飛び掛られ……実際は抱きつかれ……前島は廊下側にしりもちをついてしまった。

「……おにいちゃん」

「や、やっぱりミルシェじゃんか！ 何してるんだよこんなところで!?!」

慌てて半身を起こし、少女の顔を確認する。

少女は今にも泣きそうな顔をしているが、彼に会えた事で安心したのか微笑みを浮かべていた。

「……一人ぼっちは……いや……」

「んなこといったってなあ」

困ったように頭をかく。

すると、彼女は絶望的な表情を浮かべて彼に詰め寄った。

「……おにいちゃん……わたしのこと、きらい？」

「そんなわけないだろ!」

涙ぐむ少女の瞳に、彼はもう自分がどうしようもないことに気がついた。

昔から、自分は人が良すぎて損ばかりしていた。

墮落した生活を送っていた高校時代に、たまたま不良どもに絡まれ

ていた生徒会長を、

その辺に落ちていた鉄パイプ片手に、  
連中を半殺しにして救ったが、その後少年院に送られそうになっ  
たことも、とんだ災難だ。

少年院に送られる代わりにぶち込まれたのが、人員不足に悩む自衛  
隊だった。

そして、今はこうして……

「まったく、しょうがねえな」

前島は苦笑しながら、彼女の頭をなでてやった。

「そっぴや生徒会長、元気にやってっかな？」

俺はこんなところでマジもんの戦争やってっけど、今はいいとこの  
大学だろっか？

そんなことを考えながら、彼は疲れていたのかそのまま寝息を立て  
るミルクシェの温もりを感じていた。

屋根裏でロウソクの微かな明りがぼんやりと室内を映し出していた。  
今となつては夜も昼も分からない状況だが、腕時計は今が夜である  
ことを刻んでいる。

僕は明日か明後日中にも開戦することにさすがに不安を隠しきれず、  
ケースに入れていた六二式機関銃の組み立てをマニュアル片手にや  
っていた。

手元だけはL字型の軍用ライトで照らしているものの、どうも光の  
あて具合が悪く見え難い。

そもそもこんな暗闇で一人で組み立てられるはずがない銃なのだ。

「お手伝い致しましょうか？」

もう諦めかけていたとき、屋根裏に上ってきたリオミアのメイド服がロウソクの光に淡く映える。

「ああ、ありがとうございます。これ持ってこの本を照らしててくださいませんか」

「はい」

それから、組み立てながらケースの中の部品を取ってくれるなど彼女の手伝いのお陰で、  
なんとか組み立て終えることができた。

「ふう……なんとか終わったな」

傍らに機銃を二脚を立てて置くと、僕は油で汚れた手を拭こうとタオルを捜した。

「領主様……」

すると彼女は僕の手を取り、自分のメイド服のエプロンで丁寧に拭いてくれた。

「あ、そんなことしなくても」

銃の油で汚れてしまった彼女の純白だったエプロン。  
申し訳なく、思わず謝ってしまう。

しかし彼女は微かに笑って、いいのです、とだけ言った。

「それより領主様、お腹が空きませんか？」

「え？ ああ、そういえば夕飯食べてなかったっけ」

「夜食を持ってきております。どうぞ召し上がってください」

彼女はそういうと、置いていたバスケットから皿とパン、そして葡萄酒を取り出した。

皿はよくみるとグラタンだった。まだ温かく、実においしそうだ。

「料理長が丹精込めて作ったそうですよ」

「パーシエさんか。今度あったらお礼言わないとな」

僕はスプーンでグラタンをつつきながら、感謝の念を抱いた。

食うものの善し悪しは戦場でトップクラスに大事なものの一つだ。

「……でも、本当に良かったんですか？」

「何がですか？」

途中で食べるのをやめ、神妙な面持ちで僕が問いかけたことに彼女は首を傾げた。

「非戦闘員も同然の君らが……ここに残るのを志願したことだよ」

「ああ……それですか」

リオミアは少しホツとしたようだった。

「領主様には……分かり難い思いかもしれません」

「どづいづいこと？」

「凄いいことではないですか？」

奴隷身分だった私達に、『自ら自由を勝ち取る権利がある』なんて

……。

どこからそんな発想が湧いてくるのか、私には理解できません」  
「なるほどね……」

これ以上は聞くまい。

彼女らも、生半可な覚悟ではないんだ。

武装メイド以外のメイドでも、リオミアやパーシエのように残った者は約十五名ほど。

戦闘時には、銃の弾込めや負傷者の介護、炊き出しなどを担ってすらう。

「領主様」

「ん？」

グラタンを平らげ、ワインをちびちびとやり始めた頃、リオミアが静かに口を開いた。

「キョートのお話を、もっと詳しくしてくれませんか？」

「京都の？」

「はい」

まるで夜のレストランで恋人と語らうようなしっとりとした雰囲気、少し僕は焦ってしまう。

ロウソクの淡い光に照らされた彼女の白い肌が艶かしい。

「京都ねえ……俺も修学旅行で一回行っただけだからなあ」

苦し紛れに、僕はあえて明るい口調で話し始めた。

「シユウガクリヨコウ？」

「ああ、中学の頃にね」

「チユウガク？」

「……え、えつとね」

「一から教えないといけなかったのは少し面倒だったが、僕の学生時代の面白い話とかを混ぜながら説明すると、彼女は見ていて楽しいくらい豊かに表情を変えてくれた。」

「せえらあ服というのは、領主様の以前着ていた服のようなものですか？」

「うーん。あれよりももっと可愛いよ」

「いつか着てみたいです」

彼女の何気ない一言に、思わず僕は彼女のセーラー服やブレザー姿を想像してしまった。

オタクが見たら狂喜しそうな光景だろうな。

「きつと似合うと思うよ」

僕は笑いながら言った。

「私…ニホンに行ってみたいです」

「そうかい？ こいつが終わったら、俺は極悪人になってるか英雄になってるか…前者の方が濃厚だけど、

まあなんとか便宜図ってみるよ」

「本当ですか……？」

「ああ。命張ってくれてるんだ。それぐらいは報酬の内さ」

そういつて、僕は一口ワインを舐めた。

あまり酒に強くない僕だ。酔いがもう回ってきたのか、頭が少しぼんやりする。



「リオミア……?」

ふと気がつくと、彼女が隣に座っていた。  
そっと、僕の肩に頭を委ねてくる。

「ツジハラさん……私……実は……」

何か躊躇いがちに、彼女は話そうとしていた。  
しかし、何故か今は何も聞きたくはなかった。  
そして彼女の鼓動さえ伝わってきそうな距離に、僕は酔いも手伝わ  
てか思わず彼女の肩に手を回した。

「あっ……」

彼女は一瞬驚いたように身を固くしたが、  
ややあって、もうそれ以上何も言わずに僕に寄り添ってくれた。  
彼女の体は、華奢で、やはり温かった。  
ずっとこうしていたい。そんな気持ちにさせられる。

「三尉い！ 大変ですっ！」

突然屋根裏への扉をぶち破って現れた前島に、  
僕は驚きのあまり飛び上がるように彼女から離れた。

「なななな何!？」

うまく言葉が出てこないが、とりあえずそれだけは言っておく。

「ぜ、前線で帝国の反撃作戦が始まったみたいっす！」

とんでもない様子で、とにかく領主の部屋まで来てくださって三曹が……」

僕とリオミアは恥ずかしさもどこへやら、顔を見合すとすぐさま駆け出した。

これはもしかしたら予想よりも早く、ここへも敵がやってくるかもしれない。

そんなことを、僕は考えていた。

## 第21話 会敵

無線機から流れてくる情報は錯綜していた。

随所で寸断された戦線。

孤立し各個撃破されてゆく小隊。

弾薬の不足。

空に航空自衛隊の直衛機の姿はなく見えるものは異形の妖魔ばかり。

小隊長の戦死に一介の陸士長が部下を指揮する苦汁の対応。

燃料不足に動かぬ戦車隊。

パーツの共食いの末に稼動機体が半数以下にまで減少したヘリ部隊。そして救援のあてもない。

戦闘に必要なほとんどのものが欠落している状態で彼らは必死の抵抗を続けていた。

無論、潰走も時間の問題だった。

第二次大戦時のダンケルクの兵士達も、このような気持ちだったのだろうか。

いや、彼らはいつかここへ戻り帰りを待つ国民のため敵を打ち負かしてやるという気概に燃えていただろう。

しかし、自衛隊にはそんなものは存在しない。

大陸に散在するに過ぎない戦闘能力の半減した八万の陸自。

対する敵軍は、妖魔使いと魔導兵団まで擁した帝国軍の精鋭・推定兵力……約六十万。

ただ不様な敗走の過程を刻むのみ。

「このことは口外しないように。士気を下げるわけにはいかない」  
「……はい」

僕は敗戦色の濃いこの戦争に、自分自身意外なほど落ち着いて指示を出していた。

大本営発表だな、こりゃ。

まさか同じ事を自分がやることになるとは思わなかった。

「それから、おそらく近日中に我々も会敵が予想される。

斥候との連絡を密にせよ」

「はい」

こうして、眠れぬ夜が明けた。

「ピュリツツアー賞も夢じゃねえかもな」

朝日もだいぶ昇ってきた時間。

領主の部屋のテラスで、

安全用にナチスのフリッツヘルメットを被った景は望遠レンズ越しに広がるその光景に息を飲んだ。

小高い丘を超え、現れた集団。

馬にまで鎧をつけ、重厚な鎧に身を固めた騎士達と、それに並走する歩兵隊。

装備のバラバラな部隊は傭兵団だろうか。

警戒しているのか、街とは一定の距離をおいているが、

やがて百人くらいの単位で三個隊を街道へ向かわせ街へ進め始めた。

本陣はまだ動かず、先遣を出したのだ。

これを見る限り、少なくとも残党の指揮官は馬鹿ではない。

「自衛隊の人たち大丈夫でしょうか？」

本人は真剣な顔をしているつもりなのだろうが、どこか間延びした雰囲気、衣緒が景に尋ねる。

「大丈夫でいてもらわないと困るよ。あたしらの命だったかかってんだから」

「ですよねえ」

この緊迫した状況下においても、彼女らはまだマイペースだった。すると、景はセッティングしていたＴＶカメラを操作すると、突然緊張した表情に変わってマイクを持った。

「見てください皆さん！ 遂に帝国軍残党と思われる軍団が街道から姿を現しました！

信じられない光景です。隊列を組み、戦旗を翻しながらこちらへと向かってきます！」

彼女はあくまでドキュメントを撮るつもりらしかった。

完全武装に身を包み、六四式を手にして防衛拠点である議事堂に待機していた僕は無線に叫んだ。

「佐久間三曹！ 状況報告！」

『A路より騎士一個小隊、歩兵二個小隊。B路より歩兵一個中隊。威力偵察と先遣の両方でしょう』

街を見下ろす鐘楼から佐久間が双眼鏡で見て取った情報を送ってくる。

「大通りを通ってここを制圧しにくる気だな」

僕はこの三ヶ月で作り上げた街の地図（まさか有事に使うとは予想していなかったが）を広げてそう判断した。  
いよいよか……

戦闘に備えて二週間。覚悟はしていたつもりだが、不安は隠しきれない。

「ここまで言うことはもう何も無い。行くぞ、みんな！」  
「おおー！！」

隠し切れないなら、紛らわすしかない。

僕は議事堂内から出ると、広場に待機していた散弾銃を手にした少年志願兵たちを睥睨し、出撃を告げた。

兵士達の士気は意外にも高い。これなら善戦も期待できるかもしれない。

怖いさ。正直怖い。

でも、戦わねば、もっと怖いことが起きる。

戦争するのはそんなものだ。

鬱になってる場合じゃないな。

これから起こる全ては、館に残ってるあの二人が記録してくれるだろう。

俺の生き様みとけてか、なんだかなあ。

「三尉、こっちです」

先に待ち伏せ場所である商店の屋上に待機していた前島が手招きしてくる。

僕は背後の少年兵たちに作戦通りにするよう指示し、前島がいる屋上へ行くために建物内に入っていった。

屋上に上ると、道を挟んである向かいの建物の屋上に銃を持った兵士たちがちゃんと位置についているのを確認する。

向こうは僕が見ているのに気付くと、親指を立てて準備完了を伝えた。

僕は苦笑してしまった。これではどっちが自衛官が分かったもんじやないな。

僕も気合をいれないと。

「爆弾はうまく隠してあるな。よし、じきにここを奴らが通るぞ。

タイミングが重要だ」

「分かってますって」

前島が点火器の安全装置を外しながら応える。

！

馬の嘶き、鎧の衣擦れ音。

来た。

僕はこちらよりも早く気付いたのか、こちらをじっと見ている向かいの建物の兵士に頷いて見せた。

すると全員が気取られぬように身を伏せる。

無言でいると、ヘルメットをコンコンと前島がつついてきた。

そして不安そうに二個ある点火器の内的一個、前方を塞ぐ方を僕に渡してきた。

自分が戦闘の口火を切るのが不安なのだろう。

いいさ、やってやる。もとはといえば僕が発案者なんだ。

僕は点火レバーに指をかけた。

不気味な静寂が辺りを支配する。

「アルゴス殿、やけに街が静かだと思いませんか？」

部下の言葉に壮年の騎士隊長は頷いた。

「この気配、ただごとではないな。」

家にもっておるのではない。誰もいないのだ」

そう呟くと、彼は伝令兵を鋭く呼んだ。

「市内の様子をつぶさにケイルダイン將軍にお伝えしろ」  
「はっ！」

伝令兵はすぐに後方へと走り去って行った。  
それを見送ってから、騎士が上官に尋ねる。

「して、これからいかが致しますか？」  
「しれたことよ」

壮年の騎士隊長は鼻で笑った。

「この街に駐留する異世界軍の連中は我らに戦術を用いて対抗しようとしておるのだ。」

確か三人と言ったな。

街がこの様子だと、民を徴兵して待ち構えておろつな」

「では後続を待って……」

まだ若い部下に、騎士隊長は不適に笑った。

「兵力差は衆寡適さずといえど、しょせんは農民どもの寄り集まり。」



我らの敵ではない。ここで待つて怖気づいたととられては心外よ」

彼はそう言うと、腰の長剣をズラリと抜き放った。

「聞けえい！」

ゴーストタウンとなり、静寂に包まれている街に朗々と響き渡る大声。

「我らはヴェルリアの騎士団にある！」

貴様らの主であるぞ！」

大人しく異世界人の身柄を差し出せば褒美を取らそうぞ！ だが……」

高々と剣をかざし、圧倒的でさえある自信をもって騎士隊長は宣言した。

「歯向かうのであれば容赦はせんっ！」

一族郎党生きておれると思うでないぞ！」

これだけ静まりかえった街だ。伏兵がいるのであれば十分に聞こえたはず。

なんの反応もないことに敵は近くにはいないと踏んだ騎士隊長は掲げていた剣を闘いの後のように降ろした。

「ふんっ！ 腰抜けどもめ……」

彼は嘲笑を浮かべて馬腹を蹴った。

黒毛の軍馬が鎧をきしませて力強く歩み出す。

だが、次の瞬間、凄まじい轟音が辺りをまるで雷鳴のごとく震わせた。

兵士達が耳を抑える暇もあたえず、今度は目の前に炎の壁が聳え立った。

「ぎゃああああああ！？」

一人前進していた騎士隊長は、その炎の中に飲み込まれ、断末魔の叫びを上げて炭と化した。

「くっ！？ 馬鹿な！ 炎の精霊を呼び出したというのか！？」

その炎の強力さに誤解した部下の騎士が叫ぶ。

TNT爆薬で爆破散布されたハイオクガソリンの燃焼力は半端ではない。

「一旦退くぞ！ 後方に伝令を……」

副官であった騎士が思わぬ攻撃にパニック状態となった馬と歩兵を制しつつ力の限りに叫ぶが、  
炎を前にして自分の跨る馬すらも恐慌に陥り、それどころではない。

「おのれ……この借りは必ず……」

返すぞ、といい終わらぬ内に、彼はハツとした。

両側の建物の屋上に、何かを手にした者たちがいつの間にか現れているではないか。

「しまった！ 伏兵だ！ 早く退……」

彼の叫びをかき消すように、またあの爆音が地を震わせた。  
見ると、元来た道、つまり退路が炎に塞がれている。

してやられた！ 全ては敵の術中だったのか！？  
彼が咄嗟に悟った瞬間だった。

パカッ！

何かが背中に叩きつけられ、彼の纏っていた鎧に当たって砕け散ったようだ。

投石か？ 彼は自分の経験からそう判断した。  
しかし、それは間違っていた。

何かが猛烈な熱に焼けただれる音を聞いた。  
それが自分の体であることを理解したのは、周囲で火達磨になってのたうつ歩兵達を馬上から見てからだった。  
そして彼は馬から振り落とされ、そのまま自分が焼けてゆくのを、朦朧とする意識の中で感じていた。

「火炎瓶はあと何本ある！？」

「あと一個！」

「それ投げたらバリケードまで退却する！ テムズたちもだ、いいか！」

『はい！ 領主様！』

携帯無線に叫んでから、僕は背負っていた六四式小銃を手に取り、ポルトを引いて初弾を送り込んだ。

退却を支えるのは、こいつと前島の一丁の六四だけだ。  
少年兵らに正確な射撃は期待できない。

「前島！ 急げ！」

「ちよつとチャッカマンがつかなくて……あ、ついたついた！」

前島が手にした火炎瓶に点火したのを確認し、僕は小銃を屋上から

下へ構えた。

思わずそこに広がる光景に息を飲む。まさに阿鼻叫喚の地獄絵図だった。

ゴムを溶かし粘着性を高めた特殊火炎瓶の炎が燃え移りのたうちまわる兵士たち。

すでに焼け焦げた死体。

主を失い、パニックになった軍馬は味方の逃げ惑う歩兵を蹴り殺している。

畜生！ 自分でやっというてなんだが、最悪だ！

「行け！ 撤収ー！」

僕は叫び、銃口を『人』に向けたままトリガーを引き絞った。

## 第22話 戦闘

市内から乾いた銃声が風に乗ってくるかのように微かに聞こえる。メイド服の少女はそれに耳を澄ましながら、いつもは付き従っている若き領主の身を案じていた。

この館を頼む。彼の命令は確かに彼女の仕事であった。それゆえ、反論の余地もない。

「よお。心配なのかい？ あの大将さんが」

同じようにテラスにいたあの二ホン人の女性がニヤニヤと笑いながら尋ねてきた。

リオミアはその笑顔が命をかけて戦っている者の話をする態度なのかと腹立たしさを感じたが、表情には出さずに素直に応えた。

「はい。もちろん」

「ふうん。大した人望やねえあん自衛隊員」

その物言いにも反感を感じずにはいられない。

しかし、こんな状況下でこの二人といざこざを起こしたところで事態は好転しないし労力の無駄でもある。

「まあ……命令無視してまでここに残るくらいだから、案外根性ある性格なのかもしれんがね」

そっけなく呟いてから、彼女はまた望遠カメラの調整にファインダ

「を覗いた。  
リオミアは、昼食の炊き出しの手伝いをしようかと厨房へ向かおうとテラスから出ようとすする。

「あつ！」

そのとき望遠カメラを覗いていた景が声をあげた。

「どうしました？」

「本陣が……動いた」

それは、更なる激戦の幕開けであった。

「伝令！ 市内にて敵の抵抗激しく、アルゴス騎士隊長隷下の部隊はほぼ壊滅！」

傭兵どもは現在途中にて止めさせておりますが、いかがいたしますか？」

伝令兵が息を切らせて本陣に駆け込んできた。

彼を見下ろす総大将ケイルダインは落ち着いた口調で伝令兵に尋ねる。

「異世界軍の魔導兵器か？」

「い、いえ。油を瓶につめ、それに火をつけて投げる手製の武器にございます」

「異世界軍には知謀に長けた将がおるようだな」

ケイルダインは表情に変化は表さずに呟く。

二ホン人は全ての民が読み書きは言つゝの及ばず高度な数学まで解するという。

軍の将校ならば三人の兵力でも勝てる戦略を考えられないわけでもないとはある程度予想はできていた。

しかし諜報能力のない彼らが我々の襲撃を知っていたとなると、サキユアが裏切つたのは確実なようだ。

あの女にはゆくゆくしかるべき報いを受けてもらわねばなるまいが、その前にこの街を落とす必要がある。

「將軍!？」

「俺が出る」

「ですが將軍自らが出陣なさるのは危険かと……」

「これが我ら騎士団の戦い方よ」

ケイルダインは部下の心配をよそに精鋭の部下達を従えて街の方へと馬を進めた。

たとえ馬鹿げた騎士道精神だとしても、これが彼らの武人たるプライドであつた。

「な、なにをしておるか！ 將軍が動かれたのだ。本陣も動くぞ！」

「おおおおおー！」

しかしケイルダインがとつたこの行動は、計らずとも自衛隊が最も恐れていた事態を招く結果となつた。

自衛隊は各個撃破を目標としてたが、もともとが寡兵である以上もつとも危険な状況は敵の波状攻撃によって対応しきれなくなることであつた。

そして、これからその最悪の状況に転じるのに、そう時間はかからなかつた。

「佐久間三曹、様子はどうか？」

評議会の二ブロックほどの距離にある防衛線に到着した僕らは、前方の道を睨んでいた佐久間の側に駆け込んだ。

「こっちが待ち伏せしているのを察知したのか、途中で止まってますね。」

なにかしらの作戦を立ててやってくるはずですよ」

「そうか……」

とにかく、緒戦は圧倒できた。これで少しは時間が稼げるはずだ。

「猟兵隊は一列に布陣しておけ、敵がきたら命令に従って一斉射撃だ」

「はいっ！」

猟兵隊、つまり銃を持った兵士達だ。まあ、鉄砲隊では少々ダサイからな。

「ここは俺に任せて佐久間は鐘楼に登っておけ。」

敵はただでさえ多いから、その指揮系統を乱さないと勝ち目は薄い」

「了解」

佐久間は六四式狙撃銃を抱えると後方へ下がって行った。

「ふう……」

緊張は途切れないが、ヘルメットを脱いで息を整える。



さつきは初めての实战だった。

そして、初めて人を殺した。

剣や槍とは違って、ずいぶんとあっさりとしたものだ。

銃の発明が、いかに戦争を簡単なものにしてしまったかよく分かる。

「三尉、無線が鳴ってますよ」

「ん？ ああ」

何かを考える余裕もないようだ。

僕は腰からトランシーバーを取り出した。

相手は館にいる倉敷だった。珍しく緊張した雰囲気で、僕にテラスから見える光景について説明した。

「なんだって！？ 全軍動いたのか！？」

その情報は最も恐れていた事態を意味した。

「ヤバげな雰囲気すね？」

さすがの前島も緊張している。

僕は頷いて銃のセクターレバーを「タ」から「レ」に変更した。

ここを突破されれば、もう館まで敗走するしかなくなる。

議事堂はあくまで簡易の拠点でしかない。立て籠もるのは愚の骨頂だった。

敵がどう出てくるのか考えるが、

こんな特殊な状況下では敵がどう判断するかは相手の指揮官の人格まで分からなければ推測は不可能だ。

嫌な予感を感じていると、部下の少年兵が道の奥を突然指差した。

「領主様！ あれを！」

「……！」

道を埋め尽くす人、人、人。  
ざっと見えるだけでも五百は下らないだろう。

鋼鉄の鎧と盾に守られた重歩兵だ。これを全面に出しているということ、

こちらが銃火器を保有していることをある程度予想していることになる。

間違いない。敵の指揮官は一度は自衛隊と戦ったことのある奴だ。敵との距離は約三百メートルといったところか。ショットガンの有効射程距離にはまだ及ばない。

だが、その迫力に圧倒されたのか、怯えた表情で今にも銃のトリガーを引いてしまいそうな兵が何人もいた。

「全員よく聞け！ 指示があるまでトリガーに指をかけるな！」

なんとかバラバラに銃撃してしまうという失態は演じずに済みそうだったが、

実戦経験のない兵士、それも少年兵が主力ではやはり不安が残る。

「ようし射撃用お意！！！」

僕の命令にスラッグ弾を装填した散弾銃が一斉に筒先を並べる。

その光景はまるで滑空銃の時代の歩兵の決戦風景のようであった。

「まだまだ……もっとひきつけて」

ゆっくりと歩を進めてくる敵軍に息を飲みながら、僕は不安と緊張に身を固くする。

向こうは徐々に歩く速度を上げてきた。距離は縮まってくる。二百、

百九十、百八十……。

「撃えーっ!!！」

距離が目測百メートルを切った瞬間、僕は怒号のように叫んだ。

一斉に百丁以上の散弾銃の銃口に閃光が迸り、ヘルメットをしているにも関わらず、その銃声の大きさに耳が遠くなる。

前方ではスラッグ弾が盾と鎧を貫通した兵士がバタバタと倒れる。しかし、実戦慣れしているのか大きな動揺は見受けられなかった。しまった！銃撃というものをある程度知識として知っているのか！

「ポンプアクション！」

逆に自分の撃った銃の銃声に鼓膜をやられている自軍の兵士達を叱咤する。

兵士らは弾かれたように排莖を行い、次の射撃に備える。

最初の一斉射で倒れたのは五十前後。今まさに抜刀して襲い掛かってきているのが百ぐらい。

「撃てえ!!！」

轟音と共に更に半数が倒れる。

僕は白兵距離にまで接近した残りの五十に向けて六四式を掃射した。突撃をかけてきている第一波はこれで片付いた。

だが、次の瞬間僕は我が目を疑った。

「騎兵突撃っ!?!」

目先の敵に気を取られ、第二波が既に肉薄してきていることを認識

するのが遅れたのだ。  
軍馬を駆り、旋風の如く疾走してくる騎兵軍がまるで幻影のように目の前に現れた。

「クソっ！ 撃て！」

しかし不意をつかれたためか、猟兵隊の銃撃は組織性に欠け散発的なものとなっていた。

当然、素早く動いている騎兵にはほとんど命中していない。

僕と前島はバリケードに乗り上げるように身を乗り出して六四式を乱射した。

だがその突進力はこちらの火力を大きく凌駕していた。

カシッ

六四式のマガジンの弾が切れたので予備マガジンと慌てて交換する。しかし、六四のマガジンはこんな切羽詰った状況のときほど致命的に交換しにくい構造になっている。

「うわっ!？」

なかなかマガジンが入らないことに焦っていると、黒い影がバリケードを飛び越えて乱入してきた。

しくじった！ 阻止線を越えられるのは最悪の事態と仮定していたが、こうもあっさりとは破られるとはさすがに予想していなかった。

映画『アラビアのロレンス』ではラクダの騎兵隊が銃で武装した敵軍の拠点を突破していたが、

脆弱な武器で騎兵隊と戦うリスクを甘く見積もりすぎていた。

だが、ここでそうやすやすと退くわけにはいかない。

ここで敵を食い止め損耗させなければ、時間も稼げないので援軍が

到着するまでもちこたえられない。

「クソがあっ！」

マガジンをしっかりと装填し、僕は怒涛の如く乗り越えてくる騎士達を掃射でなぎ倒す。

しかし、周囲は既に蹂躪された戦場と化していた。

銃声がバラバラな間隔で聞こえるが、練度の低さと恐怖心から命中している様子ではない。

しかも現代の日本の猟銃は安全対策に欧米のものに比べて装弾数をわざと減らしてあるので、

弾切れに焦っているところを次々と馬上から刺突されて討ち取られている。

その光景に歯を食いしばる。畜生実戦を甘く見すぎていた！

あくまで自衛隊の強さは組織化されているからだ。

こんなゲリラ戦に毛が生えた程度の戦闘など想定していないから戦術も粗が多かった。

だが今そんなことを悔いても仕方がない。  
と

「雑魚どもにかまうな！ 狙うは敵将の首一つっ！」

黒い軍馬を駆り鬼神の如く槍を振るう武将が怒号を上げた。

奴が指揮官か！

僕はマガジンの残弾を確認して奴の目の前に立ち塞がった。

相手も、こちらに気付いて真正面と向かいあう。

「面白い」

ケイルダイン・クアンは、銃口を前に凄絶な笑みを浮かべた。



## 第23話 それぞれの思い

時は既に夕刻になろうとしていた。

帝国兵が民兵の死体の散乱する議事堂周辺の片付けをする中、議事堂内には新たな支配者である帝国軍の本陣が移されていた。

「……伏兵とは小癩なことよ」

豪華な椅子にどっかと座っているケイルダインは従軍神官戦士に傷の手当てを任せていた。

左腕を貫通されたが、屈強な彼ならば癒しの魔法をかけておけばすぐに治癒するだろう。

あの二ホン兵と対峙したとき、豪槍を振り上げんとした瞬間に遠方から狙われたのだ。

あと数瞬動くのが遅れていたら、心臓を貫かれていたに違いない。

「どうか自重なさってください。將軍は我らの象徴なのですから」

包帯を巻き終えたヴェルア教のまだ若い神官戦士は心配そうに眉をひそめる。

しっとりとした黒髪が印象的な邪悪なる女神官の微笑みだが、ケイルダインは不快に感じなかった。

「強者を打ち倒してこそ武人というものよ。ヴェルア教のように利己心のみでは戦はできぬ」

しかし本心とは違った答えを彼は無意識の内に返していた。

が、信仰する宗教を否定的に言われたにも関わらず、彼女はどこかおかしそうに微笑む。

「ふふ……それでこそ弱者を支配する強者に相応しゅうございます」  
そつと目を伏せ、邪悪なる神々に祈りを捧げる。  
願わくば、この男に加護あらんことを。

「俺は神仏にすぎるほど柔ではない」  
「……そうでしたね」

くすりと柔和に微笑み、彼女は祈りを止めた。  
その彼女の微笑みから逃げるように、ケイルダインは椅子から立つ。

「だいぶよくなった。行ってくる」  
「ご武運を」

主の出陣に恭しく礼する神官戦士の女は、どこか悲しげにも見えた。

「初日から籠城するハメになるとはな……」

テラスから、敗走してきた日本側の兵士らを見て景は呟いた。  
総力戦ではやはり兵力も練度も差がありすぎたのだ。

既に兵の半数以上を失い、こちらから打って出ることはできなくなっていた。

籠城で時間を稼ぎ、援軍の到着を待つよりない。

しかし、無線からもたらされる情報といえは最前線で苦戦する陸自の断片的な情報しかなく、



果たして援軍がくるのかどうか。

「いよいよマズくなってきちゃったね……」

さすがに不安になった景は傍らにいる後輩に呟いた。

しかし、いつものやんわりとした言葉は返ってこない。

「イツちゃん？」

振り向くと、いつの間にもやらどこかへ消えてしまっている。

気が抜けたので煙草でもとポケットをまさぐっていると、

兵士らのへたり込んでいる庭の中で見覚えのある姿が目にとまった。

「あつ………！」

庭の負傷兵らの中で、ユニクロの服がやたらと目立っている。

彼女は確か医大生だったはずだ。

いつもの抜けた態度ではなく、きびきびとせわしなく動いているのが新鮮だ。

「ほかに誰か怪我した人はいませんかあ〜？」

真剣なのだが間延びした声で兵士らに呼びかける。

一見して頼りないが、そんな彼女を若い兵士達は我々の世界でいうナイチンゲールに出会ったような眼差しで眺めていた。

白衣は着ていないが、彼女のその柔らかな笑みは人を安心させる。

「へえ……イツちゃんも頑張るじゃん」

景は何もしていない自分に少しだけ居心地の悪さを感じつつ、苦笑

を漏らした。

横目にちらりと佐久間が彼女のそんな姿を一瞥していた。

「あーっ！ 佐久間さんダメですよお！」

その視線に気付いたのか、彼の方へ振り向いた衣緒は突然素っ頓狂な声を上げた。

さすがの佐久間もなんのことが分からずにぼかんとしていると、つかつかと歩み寄ってきた彼女に腕をつかまれた。

「おっ…おい」

「じつとしてください！ 怪我してるじゃないですか」

見ると、確かに二の腕を少し切ってしまったている。

退却の途中、突撃してきた騎兵にランスを投げられ避けきれずにかすめてできた傷だった。

しかし、この程度の怪我など、演習ではザラだ。特別に治療を受けるようなものではない。

「いい。これくらい赤チンつけときゃ治る」

「だぁーめですよお！ ちゃんと消毒して包帯巻いておかないと、破傷風になっちゃんいますよお！」

ぶっきらぼうに言う彼に、意外にも退かずに彼女はまるで聞き分けのない子供に言い聞かせるように諭すと、

救急キットから消毒アルコールと包帯を取り出してさっさと手当てを始めてしまう。

彼はそんな彼女に当惑しながらも、あの笠間議員の娘に情けをかけられていることに大きな抵抗を感じていた。

気合の入った職業自衛官には、その特殊な立場上か融通が利かない人間が多い。

海自の人間が迂闊に陸自を卑下しようものなら、乱闘騒ぎは必至なくらいだ。

しかし見方を変えれば、極限状況下で耐え抜く自らのキャパシティを信じるプライドが高いということでもある。

面子が命。これはアウトローの佐久間にも例外ではなかった。

「放せ。これくらい自分でできる」

今度は邪険に振り払うと、銃を背負い直してさっさと去ろうとする。だがさすがに悪態が過ぎたか、と彼も思った。

「自衛隊の人はガンコですねえ」

意に反して、うふふ、と柔和に笑って彼女は救急キットをごそごそとまさぐる。

なにをしているのかと思えば、手当てに必要なものを用意しているではないか。

「はい。そういえば佐久間さんって自衛隊のヒトですもんね。これくらいできますよねえ」

申し訳なさそうに苦笑し、彼女は佐久間に用具を差し出す。

「あ、ああ。まあな」

彼はいまさら謝ろうに謝れず、どこか気まずい思いでそれを受け取

った。

「気をつけてくださいね。私、やっぱり暴力はいけないことだと思います……」

「そうだな、それは同感だ」

彼女は自分の意見に同意されたことに思いがけない驚きを感じた。佐久間は精悍な顔に疲れた笑みを浮かべた。

「自衛隊や戦争知らない奴ほど、無責任に反戦って叫んだり自衛隊の国軍化だとか叫んだりするもんさ」

現役隊員の本音がちらりと漏れる。

そのどこか哀愁の漂う横顔に、衣緒は微かに胸の鼓動の高鳴りを感じた。

それが異性への昂りなのか、彼への純粋な驚きなのかは彼女自身分からなかい。

「大変なんですねぇ……」

その言葉に、よく分かっているようなぼやっとした表情で、彼女は劳いの言葉を返した。

いつも佐久間なら、内心に悪態をつくところだが、今回は不思議と感傷的な気持ちになる。

「そう言ってくれる国民が、もっといてくれれば、自衛隊ももっと変わった組織になってたのかもしれない」

珍しく皮肉げに笑みを浮かべ、彼は去って行った。



## 第24話 ドラゴン・シンビー

領主の執務室に集合した自衛隊員三人と志願兵の指揮官らは椅子に腰を下ろし、

どこか憔悴した面持ちで顔を俯かせていた。

そんな中で、僕はあえて声を強くに語りかけた。

「予想以上に敵軍が手強かったのは今日の戦闘で十分に理解できた。こうなったら持久戦で敵に損耗を強いるしかない」

ここで弱気になってはダメだ。

失策によって戦局は大きく悪化した。だが、それを悔いたりしている場合じゃない。

大勢死なせてしまった。だからこそ僕はもうそんな過ちを繰り返したくない。

責任の重大さに気が遠くなりそうだが、佐久間が上官である僕を殴ってまで奮い立たせてくれた意味が今なら分かる。

あの敵將軍を討ち取るうと真正面から向かいあった瞬間、鐘楼に登った佐久間が『総司令官がなにしてる！』と怒鳴ってきた。

ハツとしたとき、目の前で豪槍を振りかざそうとした敵将が佐久間の狙撃を受けて怯んだ。

周囲の味方がほぼ壊滅していることに気付いた僕はその時咄嗟に退却の声を上げて館に向けて駆け出していた。

その後、館で佐久間と前島に合流したが、出会い頭に僕は佐久間に殴り倒された。

総指揮官はどんな状況下でも生き残ることを考えなければならない。

漫画に出てくるような最前線で戦う將軍など馬鹿以外の何者でもない、と。

指揮官を失った軍は間違いなく死ぬ。しかし兵が半数以下に減っても指揮官さえ生きていれば戦闘の続行は可能だ。

防衛大出はそんなことも分らないのかと佐久間は今までで最も憤慨した様子で叫んだ。

極限状態での戦闘を経験したことのある彼だからこそ沸いてくる感情だったのだろう。

「城壁を突破されないように猟兵を配置。

佐久間は狙撃に、俺は前線指揮を、前島は主に銃が作動不良を起したりしたのに対処してくれ。

それから、夜は夜襲に備えよう。

敵は馬鹿じゃない。こつちの隙を見逃したりはしないぞ」

細かい指示を徹底し、僕は他に盲点がないかを尋ね、誰も意見がなかったのを確認すると、

皆の顔を見渡して拳を軽く握った。

「半数以上の兵を一気に失うなんて、理論的には壊滅もいいところだけど、俺たちはまだ負けてなんかいない。

明日を信じるしかないんだ。気合を入れていけ！」

「はっ！」

「いえっさあ」

その夜、二回に渡って襲撃が起こったが、照明弾とごく少数だがミリタリーシヨップからの拝借品である暗視ゴーグルのおかげで切り抜けることができた。

夜が明けるときには、皆交代で寝ることができ、少しは立ち直ってきたかもしれない。

備蓄食料は十分にあるし、兵士の士気は最初に比べると低いことは否めないが深刻なほどではない。

無線に呼びかけ続けている以上、ここが今どういう状況なのかは司令部に伝わっているはずだ。

増援がいつきてくれるかは分からないが、倉敷や笠間がいるという事実を考えても、なにかしらの対応策は講じられるだろう。

それまで、敵を食い止められればこちらの勝利だ。

それまで…なんとかか。

陥落した評議会議事堂の近くには無人となったヴェルアーの教会があった。

今、その祭壇の前では異様な光景が広がっていた。

供物の如く積み上げられた死体の山。

それを囲うように魔方阵が描かれ、その前ではあの神官戦士が呪文の詠唱を一心不乱に続けている。

周囲に漂うのは異界からの瘴気なのか死体の腐臭なのかは分からず、混沌たる空気が充満している。

「冥界の皇。屍人の君主。豊穰と対をなし殺戮の海に生まれし邪なる権威よ。

ここに我が盟約に従いその眷族を差し出せ。

血を欲するか？ 生者が憎いか？ 欲望に忠実たる誇り高き獣どもよ。

現れよ！ 欲するがままに！」

鬼気迫る祈禱に応えるように、死体の山がまるで生きているかのよう蠢いた。

中からなにか、タールのような黒い液体が滲み出してくる。



が、そこまで変化が起こった時点で、呪文を詠唱する女が胸を抑えてその場に突っ伏す。

肩で息をし、まるで何者かに喉を締め付けられたかのように浅い呼吸を繰り返す。

その傍らに、微かなランプの光に大男の影が映し出された。

「どれくらいかかりそうだ？」

「……あと二日も、あれば」

なんとか答えを返し、彼女は気を失った。

「よかるう」

ケイルダインは頷くと、そっと彼女の身体を抱き上げ、その場をあとにした。

「突撃い！ 一気に突き崩すのだ！」

上級騎士の号令に兵士が梯子を、傭兵がその両翼を守る陣形で壁に向かって突撃をかけてくる。

しかし、武装メイドの一斉射撃にバタバタと数が減り、堀を渡って壁にたどりつく頃には半数ほどまでになっている。

「銃貸せ銃！ 早くしろってばよ！」

前島は弾切れのショットガンを弾込め担当のメイドに放り投げると口早に叫んだ。

慌ててリロードした銃を手渡すメイドからひつたくるように手に取るど、

城壁に梯子をかけようとしている敵兵士に連続射撃する。

せいぜい二十メートルも離れていない近距離だ。鳥撃ち用の散弾でも集束弾の状態なので殺傷力は十分にある。

運悪く顔面に銃弾を受けた敵兵士は悲鳴を上げて転がった。

前島はそれには構わず、かけられた梯子を銃のストックで弾き飛ばす。

佐久間隷下の武装メイド数人がようやく弾込めを終え一斉射撃に移り、

ようやく襲撃を撃退することに成功した。

「……こちらポイントC、敵は退却。オクレ」

安堵感にその場にへたり込み、彼は無線連絡を入れる。

領主の部屋でその報告を聞いた僕はホッとして椅子に座り込んだ。

こんな緊張の連続がもう二日だ。

新しい展開といえば、政府が前線の全面縮小、つまり尻尾巻いて逃げろという決定を下したというくらいだ。

しかし、完全に瓦解した戦線では敵の真っ只中に取り残されている部隊も数多く存在する。

決断が遅すぎた。撤退すら困難を極めるだろう。

「膠着状態か……」

戦闘帽を脱いで頭をかきながら、僕は誰に言うでもなく呟いた。

先行き不安だが絶望的でもない、という微妙な状態はどうにもしっくりこない。

だが、これ以上悪くなってもらっても困る。

コト

眉間に皺を寄せて考え込んでいると、  
間の前のテーブルに湯気の立つカップが置かれた。

「どうぞ。根を詰めるのはよくありませんよ」

彼女の人前では滅多に見せない微笑がそこにはあった。  
僕は思わずドキリとして彼女に向き直る。

「ああ。ありがとう……」

彼女の気配りか、程よい熱さの茶に口をつける。

「なにか変わった様子はあるかい？」

特に話題もないので、そんな事務的な話を振ってしまつ。  
まあ、ここは戦場だ。仕方がない。

「いえ。皆血気盛んですよ」

「リオミアも？」

僕は冗談のつもりで聞き返す。

「ええ。そうですね……」

あの頃以来、初めて何かの為に戦おうという気になっています」

「あの頃？」

緊張が解けていたのだろうか、彼女はなにか重大なことをこぼした

ようだった。

ハッと、彼女は慌てて取り繕おうとする。

「い、いえ。奴隷になる前の話です。で大したことは……」

その様子にはどこか嘘臭さがあった。

不審…とまではいかないが、疑問には感じた。

「なあ。よければ聞かせてくれないかい？

リオミアの昔の話をさ」

率直な言葉に彼女の血相が変わる。

「いえ……そんな私の人生など」

「いいや。知りたいよ。」

それに、開戦前のあの夜に確か何か言おうとしてなかったっけ？」

頭の隅にずっと気になっていたことだった。

今なら聞けそうな気がする。この後も先も分からぬ状況下だからか、躊躇はなかった。

が、

「……………」

彼女は突然、気分が悪くなったかのように口に手を当てて俯いてしまった。

「ど、どうしたの？ 別に言いたくなければ無理にとは……」

僕は罪悪感を抱いた。彼女のことを知りたい一心に、彼女の気持ち

を考えていなかった。  
思わず立ち上がり、彼女の側へと駆け寄る。

「違い…ます」

しかし、彼女は弱々しく首を横に振る。

顔は蒼白となり、身体は小刻みに震えている。

体調を悪くしてしまったのだろうか。無理もない、連日の戦闘に加えて非戦闘員の彼女の雑用は過酷を極めているのだから。

だが、彼女は僕の手をギュツと握ると、何かに怯えたように唇を震わせて僕の顔を凝視した。

「何か…：負の力に満ちた存在が…ここへ…」

「お、おい。一体どうしたんだ!？」

彼女のただならぬ様子に、僕は彼女が精神を病んでしまったのだろうかとさえ思った。

シエルシヨックシンドローム（砲弾後遺症）のような、戦闘のストレスにさらされた人間がしばしばかかるといわれる精神病だ。

尚も気分が悪そうにうずくまってしまった彼女を抱きかかえ、僕は慌てて唯一の医療関係者である笠間を呼ぼうとする。

しかし、次の瞬間、館が、いや地面が揺れた。

「なんだっ!？」

激しい振動に壁に掛かっていた絵画やインテリアが倒れてくる。

反射的に、訓練で砲弾が近くで炸裂した際に仲間を破片から守るよう、上半身を彼女に覆い被せる。

揺れが収まると、彼女が僕の手を丁寧に振り解く。

何かには憑りつかれたかのようにふらふらとテラスへと出て行く。  
我に返った僕は慌てて止めに走った。  
テラスに出て、彼女が手すりに寄りかかるようにして何かを見つめている。

「な…!?!」

彼女の隣まで歩み寄った僕は、その光景に我が目を疑った。

「そんな…あれは…」

リオミアがうわ言のように呟く。

「ドラゴン・ゾンビー……」

リオミアの顔が、恐怖に歪んだ。

## 第25話 死者と生者の戦い

オオオオオオオン……

空気を歪ませたような不気味な遠吠えが街中に響き渡り、館で立て籠もる我々にまで届く。

「な……いつの間にあんなバケモノ入り込んできたんだよ!？」

全長三十メートルを超えようかという巨竜の屍に目を見張り、思わず叫ぶ。

「あれは……おそらく死者の体を贄として怨霊を憑依させた人造体です……」

あの場所は、おそらくヴェルニアの忌まわしい教会があつた場所……

……おそらく……  
敵軍の中に術者が……」

呼吸も苦しげに、リオミアが言葉を搾り出す。

彼女の言葉の意味も重大だが、今は彼女自身の身体の方が大事のようだ。

僕は彼女に肩を貸して立たせてやり、なんとか領主の部屋のベッドまで運んでやる。

そつと寝せてやり、後のことは僕に任せてくれと見栄をきる。

彼女の助言は正直欲しいところだが、この状態では到底無理だ。笠間に診てもらわねば。

無線には各部隊から報告と指示を求める声が洪水のように入ってきていた。  
彼らに答えてやる前に、僕はもう一度テラスから街の様子を観察する。  
するとドラゴン・ゾンビーがきしやり、きしやりと嫌な関節の軋む音を立てながら移動を開始した。  
目的地は、間違いなくここだ。  
あんなバケモノを撃破できるような武器はこちらにはない。  
迫撃砲も、携帯無反動砲すらないのだ。

「おいおい大将さん大変だぜこりゃあ！」

バタバタと騒々しい音を立てて部屋に駆け込んできたのは倉敷だった。

テラスに設置したままのTVカメラを慌てて回し、バケモノの全容をしっかりと捉える。

「こりゃあ特ダネだぜ」

「生きて帰れたらの話でしょが」

興奮する倉敷に冷ややかな視線を送り、僕は無線機を取りに戻った。

「あつ！？ 飛んだっ！」

倉敷の声が同時に響いた。

振り向くと、かなりの距離があるにも関わらず、街からここまで不恰好に羽ばたきながら、  
確かに飛翔したドラゴンゾンビはあつという間に館近くまで接近してきている。

畜生！ あんなボロボロの身体でどうして飛べるんだよっ！？



軟着陸した後、よたよたと起き上がりながら、バケモノは生ける者を探すように首を左右に振った。

城壁にいる兵士らが凍りついているのを確認したのか、咆哮とも狂喜ともつかぬ雄叫びを上げる。

ゾツとするような遠吠えに、半ば恐慌状態に陥った兵士らがショットガンを乱射する。

しかし、肉を削ぎ、血を滴らせながらも、バケモノはダメージを受けた様子は全くない。

効果がないことを悟った城壁の兵士らが慌てて逃げようとするが、意外にも俊敏に動いたバケモノは彼らを目前に捉えると、

その大顎を開ききり、身体の奥底から緑と黄を混ぜたような不気味なブレスを吐きつけた。

「ぎゃああああ!？」

ブレスに飲み込まれた兵士らが、身の毛もよだつ断末魔を上げた。それからの光景は地獄のようなものであった。

ブレスを受けた兵士らはまるで無数の蟲に身体を食い尽くされるかのように、身体がボロボロと朽ち果ててゆく。

バケモノのブレスは致死性の毒ガスのようなものだろうか。

「死霊の息吹……触れたら命を食われ……」

リオミアがベッドからうわ言のように僕に訴えかける。

楽しいファンタジー世界だよ全く!

「リオミア、苦しいだろうけど少しだけ協力してくれ! 奴の弱点や倒し方を知らないか?」

汗をタオルで拭いてやりながら、僕は躊躇いを感じながらも彼女に

尋ねる。

「ゾンビである以上…火…に弱いはずです。でも、あれだけの大きさとなると…」

火炎瓶の残りは少ないし、火炎放射器なんて大層なものは当然ここにはない。

第一、奴の目の前に身体をさらすなど自殺行為に等しい。

「他に弱点は!?!」

焦りつつも、彼女に必死に問いかける。

「…術者が…作られたアンデッドであるのなら…  
敵軍の中にダークプリーストなどの支配者がいるはず…それを倒せば」

この館の外は完全に包囲封鎖されている。打って出て特定の敵を撃破することなど不可能だ。

クソが! 八方塞じゃねえか!

「おいちよつと! 倉敷さんそんなところにいたんじゃ危険ですよ!  
! 室内に避難してください!」

「も、もうちよい………」

次々と自軍の兵士が殺戮されていく映像を、何かに憑かれたように撮影し続けている。

リオミアの容態に加え、この極度のストレスにさらされている僕は、思わず倉敷をテラスから室内にひきずり込んだ。

「いつてえなあ！ 民間人になんてことすんだよ！？」  
「人が死んでいく様を嬉しそうに撮影する奴にそんなこと構ってられっか！」

さすがにキレかけた僕はヒステリックに叫んだ。

彼女が物言いたげながらも黙ったのを確認して、僕は部屋を駆け出していった。

ドアの側に立て掛けてあった六四式を引ったくり、安全装置を解除する。

バリケードに何度か立往生しつつ、外へかけ出る。

今は元を断つよりも目の脅威を排除することの方が先決だ。

前庭の噴水前に備蓄してあった火炎瓶の入った箱から瓶を取り出し、周囲にいた兵士数人に手渡し、攻撃に指示をする。

その際に、敵は火を受ければ確実に死ぬと半ば嘘に近い説明を入れた。

その場しのぎだと言って危険な命令を下したくはなかったからだ。

兵士はみんな、僕より若いのだから、たとえ親しくない者でも後輩や弟のように感じてしまう。

兵士としては失格だが、自分の性格について今更悔やんでも仕方がない。

「行くぞ！ 全員俺について来い！」

兵士らに火炎瓶とチャッカマンを配り終えた僕は、力強く叫んだ。彼らの目に、できるだけ頼もしい指揮官と写るように。

「さ、さ、佐久間センパイなんですかこりゃああ！？」

城壁の階段内に一時避難し、銃を抱いて身を竦めた前島がガチガチと歯を噛み鳴らしながら半狂乱に叫んだ。

「さあな。ネリエントスで俺が出会ったのはちょっとばかり違うな」

腰の雑囊から貴重な手榴弾を二・三個取り出しながら、佐久間は冷静に答える。

時折、城壁が踏み壊されているのか、地響きのような音と鈍い衝撃が起こり、埃がパラパラと天井から落ちてくる。

「……上等だ。クソ野郎が」

前島は佐久間の表情を見て思わずゾツとした。

佐久間は、明らかに笑っていた。口の端を吊り上げるように、曲月を描いて。

「前島。貴様はここから一步も出るな。援護射撃も要らん。ろくに撃ったこともない奴に背中撃たれたんじゃ浮かばれんからな」

余計な装備を外し、身軽になった佐久間は縮こまった前島にそう言い残すと、小銃を手に駆け出していた。

前島は、呆然とそれを見送ることしかできなかった。

「……俺も甘いな。部下に死ねと命令できんのでは」

階段を下りながら、彼は今度は自嘲の笑みを浮かべた。

ドラゴン・ゾンビは既に城壁を乗り越え、突破口を開くためだろう

か、残敵掃討と正門の破壊に移っているようだった。

佐久間は素早い動作で生垣の影に飛び込み匍匐全身を行い、バケモノの死角から接近を試みる。

バケモノは内側から正門にたどり着くと、門を蹴り壊し、吊橋の鎖を力任せに叩き切った。

まるであさま山荘で機動隊の突破口を開くモンケーンだ。

佐久間は舌打ちすると、手榴弾の安全ピンを口で引き抜いた。

生垣からパツと立ち上がり、全力疾走でバケモノとの距離を縮める。バケモノが振り向こうとした瞬間、佐久間は手榴弾を腐った肉の中にねじりこんだ。

異物を取り込んでしまったことに気付いたのが、ドラゴンゾンビは骨の見える尻尾を乱暴に振り回す。

佐久間はそれを身をかがめてかわすと、ドラゴンの胸の下の隙間を転がって反対側へと逃れる。

次の瞬間、ドラゴンの腰辺りが弾け飛んだ。

佐久間はその反対側にいたので、バケモノ自身の体が遮蔽物となり無傷である。

彼の無謀ともいえる攻撃は、一方で最良の戦い方でもあった。

ゾンビの図体のでかさにつけこみ、接近戦を挑むなど、並の人間では不可能な芸当だ。

しかし、彼は激戦を生き抜いてきた「戦士」であった。

「死ぬといっても死なんだろうが……動けなくはなるだろう」

ニヤリと笑みを浮かべ、彼は激痛によるめくバケモノから離れる。

怒り狂ったバケモノは顎を開いてプレスを吐きかけようとする。

が、今度は頭部に何かがぶち当たったかと思うと、瞬時に炎に包まれていた。

「佐久間！ 下がれ！」

佐久間は火炎瓶を手にした上官の姿を向こうに見た。

「あぐつ…!？」

女神官の顔が苦痛に歪んだ。

教会内で魔方阵の中心で精神統一を行い、ドラゴンゾンビと極度の同調状態にあった彼女には、使役しているドラゴンゾンビの苦痛がそのまま自分に跳ね返ってくるからだ。

今の彼女は、目を閉じ表情は変わらぬものの、額には脂汗がびっしりと浮かび、呼吸も荒い。

アンデッドモンスターの中でも創造・使役が難しいドラゴンゾンビを操るのは、術者に大きな負担をかける。

本来ならば十人前後の闇司祭が必要なこの怪物に、彼女はたった一人で創造から使役までこなしている。

下手をすれば、完全なる負の力に精神汚染されて廃人になりかねない危険な行為だった。

「シャーナ！」

ケイルダインは彼女の腰からじわりと鮮血が滴り落ちていることに気がついた。

「大丈夫でございます……されど、今日はもうこれ以上の働きは期待できそうにありません……うつ!？」

女は今度は頭を手で覆った。

何かを振り払うように、頭や顔をかきむしる。  
見ると、女の白い顔の肌の半分ほどに、赤く火傷をしたように水ぶくれができていた。

「がああ……ぐうう……」

怪物を支配下に置く精神疲労に加え、本体自身が損傷を受けているのか、  
苦しげに声を漏らす。

「もうよい！ 下がらせよ！」

「はい……」

息も絶え絶えに、女は答えた。

ケイルダインは気を失いかける彼女に駆け寄り、腰の傷口を、その巨軀に似合わぬ優しい手つきで押さえてやる。

女は少しだけ微笑みを浮かべると、眠るように気を失った。

「逃げ出した……のか？」

銃を構えたまま、全員が徹底抗戦の覚悟を決めていたのだが、大きく吠えたかと思うと翼を広げて飛び去って行ってしまった。見た感じでは、そこまでダメージを与えていたようには見えなかったけど。

「三尉！ 考えるのは後です！ 敵が雪崩れこんできますよ！」

佐久間が訳が分からずに呆然としていた僕の肩を揺さぶった。

そつだ、そつだつた！

正門が破られ、吊橋も降ろされてしまつたんだ。城壁上の兵士らは……ダメだ全滅している。

わずかな時間だったが、被害は甚大だ。

「総員、館内まで退却！ 想定通りに各自の持ち場につけ！」

無駄に阻止線の維持にこだわつては被害を増やすだけだと判断した僕は、

完全な籠城戦への決意を固めた。

その直後、鬨の声と共に敵兵達が正門を突破してきた。

「ひえええ！？」

いつの間にかこちらへ前島が走つてきていた。

「佐久間センパイ酷いじゃないっすか置いてくなんてえ！」

泣きそつな顔をして前島が佐久間にすがりつく。

「悪い。忘れてた」

全く謝罪の念の感じられない無表情で呟くと、彼はニツと笑みを浮かべた。

「だが、お前にもやつてもらつことができたぞ」

「え？」

彼は狙撃仕様の六四式を構えた。

銃声。



百メートル以上先で馬から騎士が転げ落ちた。

「じじいじじいとわ」

自衛隊員二人が、一斉に六四式を構えた。

## 第26話 敗走

三日月が綺麗な夜だ。

屋根裏にいる僕は暗視ゴーグルを脱いで一息ついた。

「静かになつたな……」

死体の散乱する庭内を眺め、誰にいつでももなく呟く。  
皆疲労が溜まってきたのか、誰も応える者はいない。

現在、館で生き残っているのは義勇兵二十名とメイド志願兵四十名。  
昼、騎馬隊の侵入に戦局が一変した。

白兵戦に持ち込まれてはこちらに勝ち目などないんだ。ラストサム  
ライが嘘映画ではないと初めて知った。

激戦の末、向こうもかなりの損害を被ったはずだが、まだ戦闘能力  
は十分にある。

敵がまだ千五百人くらいは戦力があるのに対して、こっちは壊滅寸  
前だ。

籠城したからには時間は稼げるだろうが、援軍が来る様子もない。

あのドラゴンゾンビがまたやってきたら……、とマイナスの要因ば  
かりが脳裏をよぎる。

「ここを頼む」

「あ……は、はいっ！」

ライフルを抱いたまま眠りそうになっていたメイド兵に歩哨の交代  
を命令し、

僕は屋根裏部屋から降りた。

真っ暗な廊下を手探りで進み、微かに明りの漏れるドアを開ける。  
領主の部屋だ。

室内には無線担当に前島、そしてベッドに寝かされたりオミア、看病にあたっている笠間の姿があった。

「あ、三尉……」

前島がうつらうつらとしていた顔を上げて僕を仰ぎ見た。

僕は無言で頷き、リオミアのベッドに移動する。

笠間がベッドに上半身をあずけて寝息を立てていた。

リオミアも、昼に比べてかなりよくなったようだ。呼吸も安定して眠っている。

それに安心した僕はテーブルの椅子に腰掛ける。

「状況は？」

彼女らを起こさないように小声で前島に尋ねる。

「国会で予算関係でもめてますよ。」

戦死者は増える一方なんで補償金だけでも莫大な金額になるし、弾薬も燃料も不足してますし何よりお金も国民の協力もないから八方塞がり。

その上俺たちの同期で脱柵する隊員が多すぎて、

ノイローゼになった陸曹が脱柵しようとした若い陸士を撃って大怪我させたってラジオでも言っていました。

俺もしよーかなあ脱柵」

前島は冗談で言っているのだろうが、笑う気にはなれなかった。

撃った陸曹の気持ちも、逃げようとした陸士の気持ちも分かるからだ。

どっちも悪いし、どっちも悪くない。ただ、互いに自衛隊員であり、そして人間だったという単純な悲劇だ。誰だって、死にたくなんかないもんな。

「あの……」

「ん？」

黙っていると、前島が遠慮がちに僕に声をかけてきた。

「ちょっとここ頼めますか？」

「なんか用でも？」

「ええ、ちょっとトイレに」

「分かった、行ってこい」

「すみません」

こいつにしては珍しくきちんとした態度で出て行く。

いったいどうしたんだろうか？

僕は無線機のヘッドホンを取りながら、少しだけ心にひっかかっていた。

「ミルシエ……！ いるかい？」

前島はこっそりと物置部屋の奥に声をかけた。

こっそり、と何かが動く音がして、微かにあの音が聞こえる。

ちりん……

前島は微笑むと、くすねてきた食べ物や雑嚢から取り出す。

「今日、大丈夫だったかい？ 怖くなかった？」

ふるふる……

少女はパンを小さな口でかじりながら首を振る。

「そっか、良かった」

前島はそつと彼女の横に座り、ヘルメットを脱いで床に置く。

彼女がもそもそと食べるのを暗闇の中で聞きつつ、ややあつて躊躇いがちに口を開いた。

「ミルシエ。兄ちゃん、ミルシエに謝らなくちゃいけないんだ」

少女が食べるのを止めて隣の若者の顔を見上げる。

どうして？ と尋ねるように。

その無垢な少女の視線に耐えかねたかのように、

前島は今まで見せたことのない悲しげな表情で語り始めた。

「兄ちゃんな、多分、ミルシエと一緒にここから出ることはできないと思う」

少女の顔が凍りつく。

きゅっと迷彩服の袖を握り、力いっぱい首を振って拒否の意志を表す。

前島はその手を優しく握ってやると、涙を浮かべる少女を真っ直ぐに見詰める。

「ミルシエ、よく聞くんた。多分、明日か明後日あたりが最後にな

ると思う。

どんなことがあってもここから出ちゃダメだ。静かになって、回りに人の気配がなくなったらこっさりこの館から出るんだ。もし敵に捕まっても、無理矢理館に閉じ込められていたって言うんだ。

そうすれば少なくとも命だけは……」

とうとう涙を流して前島の胸を力の限りに叩き始めるミルシエ。前島はそっと、その小さな身体を抱きしめてやった。

「佐久間さん。ここにいたんですねえ」

衣緒は相変わらずの気の抜けた笑顔を浮かべたまま、玄関前の大階段踊り場に構築されたバリケードで、銃を抱いて座っている佐久間の元にえっちらほっちらとした足取りで近づいた。

暗闇の中で、ジロリと彼の視線が彼女を捉える。

「何しにきた？ こんなところをウロチヨロされたら邪魔だ」

小声だが重い声質に、衣緒は思わず身を堅くした。

「あ、あの。佐久間さん、今日ずっと水も食べ物もとってないみたいだったんで……」

彼女は背負っていた自分のリュックを手に取り、中からカンヅメをいくつか取り出す。

彼女らしい、桃缶やフルーツポンチ缶など食べやすく栄養価が高く、

なにより可愛らしいものばかりだ。

「一日くらい食わなくても死にはせん」

一瞥しただけでぶつきらぼうに言い返し、彼は彼女から視線を外して玄関を睨む。

敵の死体が二、三人ほど転がっている。

「で、でも……」

「笠間」

「えっ？ はいなんでしよう？」

佐久間は腰から何かを取り出すと、彼女に押し付けるように渡した。彼女が慌てて渡された物がなんなのかを確認する。

「え、えええ！？」

それがトカレフであることに気付いた衣緒は、思わずそれを落つことしそうになる。

「護身用だ。撃つときは腹を狙え。一番当たりやすいし高確率で殺せる」

「わ、私鉄砲なんて撃つたことないですう！」

「撃つたことがある、ないの問題じゃない。撃たなきゃ貴様が死ぬだけだ」

「あう……」

泣きそうな顔になって手の中の拳銃に視線を落とす。

しかし佐久間は我関せずといわんばかりにそっぽを向いて歩哨任務に専念した。

どれくらい時間が経っただろうか、衣緒はぽつりと呟いた。

「佐久間さん……私のお父さんのこと、嫌いですか？」

佐久間は黙ったままだが彼女の言葉に反応する。

「……ここだけの話、自衛官でアイツを好きだという者はいない。例えいたとしても、そいつは実戦を経験したことのない者だ」

ややあつて、彼はそう答えた。

衣緒はふつと笑った。

佐久間はその笑みの意味が分からなかったのか、視線を彼女に泳がせた。

「昔なら、お父さんの言っていることが正しいって、私言えたんです……」平和に勝る政治はない』って……」

珍しく笑顔の失せた彼女の顔に何の反応も見せず、佐久間は黙ったままだった。

「でも……」平和』ってなんなんですか？

この世界じゃ、どんなに話し合いで解決しようとしてもうまくいかなかった……」

お父さんはそれを自衛隊を出して脅してるからだって……」

佐久間はくつくと喉の奥で笑った。

気付いた衣緒が黙ったので、彼は皮肉げに語った。

「話し合いで解決するには、

飢えていない者同士か、価値観のある程度同じ者同士でないとは不可



能だ。

明日食べる物が無い人間に愛を説いたところで、何の意味がある？  
相手と同じ人間だと考えていない人間に対等な立場を説明して、何の意味がある？」

「そんなことっ……！」

「じゃあ貴様、今のこの状況下で『話し合い』で解決してみる」  
「……………」

再び黙る衣緒。

「うつ……………つく……………」

俯いて黙っていたかと思うと、彼女は肩を震わせていた。

それが嗚咽だと佐久間が気付くのに、そう時間はかからなかった。

「薄々分かってたんです……………私は甘ちゃんで、お父さんは自分の都合で平和を説いてるの……………」

でも、学校でもテレビでも、『平和』って言葉を信じないといけな  
いって……………」

彼女自身、どう伝えればよいのか分からないのか、理路整然とはい  
かない。

涙と鼻水で、彼女の顔は酷い有様だった。

そこに、白いタオルが差し出された。

驚いて顔を上げると、佐久間が無表情に手を差し伸べている。

「日本はそういう国なんだろう。」

皆が言っていることを正しいと思わなければいけない、仲間外れに  
なりたくない。

大多数の言う『正義』に埋もれていれば安全だ、正しいはずだ。

そんなガキじみた習性で成り立ってんだ。今も、六十年前の戦争の時もな」

「うっうっう……うっう……」

泣き崩れる衣緒を、冷ややかながら、どこか哀れんだ目で彼は見つめていた。

かつての自分も、自衛隊が国民のために戦い、それを国民も信じてくれるはずだと純粋に信じていた。結果は、いつもまでもない。

もしかしたら、彼女がわざわざ自分の所へやってきたのも、彼女も自分と同じ思いをしたことがある人間だからなのかもしれないと、彼はなんとなく考えた。

「ぐす……クシュッ！」

くしゃみをする衣緒に、彼は偽装と保温用に持ってきていた迷彩柄のポンチョを彼女に渡してやった。

彼女は差し出されたポンチョと彼の顔を交互に見つめ、ややあつて微笑みを浮かべて受け取った。

もそもそとポンチョを羽織る彼女に一瞥もくれず、佐久間は銃を持ち直し、誰もいない玄関を再び睨んだ。

衣緒が鼻をかんでいる音が一際静寂の館に響き渡る。

ジロリと佐久間に睨まれた衣緒は蛇に睨まれたカエルのように硬直した。

そんな彼女を見て、佐久間はふつと口元を緩めた。

「あっ……」

衣緒が驚いたように目を丸くする。

彼が笑ったところを、始めて見たからだった。

「……！」

闇を睨んでいた佐久間の目が細まる。傍らに置いていた暗視ゴーグルを手繰り寄せ、スイッチを入れて覗く。

「佐久間さん……ごはん、食べてくださいよ。せつかく持ってきたんですよ」

落ち着いた衣緒が優しい口調で促す。

しかし、佐久間は聞こえていないかのように微動だにしない。

衣緒は自分が避けられているのだと判断したのか、寂しそうな表情になってその場から立ち去ろうとポンチョを脱ぎ、佐久間の側まで持っていく。

と、突然佐久間は近くに來た衣緒を力任せに押し倒した。

「きゃあっ!?!」

思いもよらない事態に、彼女は短い悲鳴を上げる。

「さ、佐久間さんダメです！ こんなことを私にしたって……」

「怪我したくなかったら黙ってる！」

佐久間は暴れる彼女の手足を封じて彼女に覆いかぶさる。

「だ、誰か……」

衣緒が助けを呼ぼうと叫びかけたときだった。

月明りが微かに入り込んでいる玄關の上のステンドグラスに、黒い

影が差したかと思うと、  
次の瞬間粉々に割れて二人に降り注いできた。  
直後、先刻の黒い影の正体が明らかになる。

「あ…ああ…」

そのあまりにも禍々しい姿に言葉も出ない衣緒。

「カミカゼかますとはやってくれるな……」

降りかかったガラスを振り払いながら、佐久間は忌々しげに呟いた。

オオオオオオン…

相変わらず不気味な遠吠えが衣緒の心臓を鷲掴みにする。  
その彼らを濁った瞳で睨みつけ、ドラゴンゾンビは大顎を開いた。  
息を吸い込んだところを見ると、死の吐息をためているようだ。

「いちいちうるさい奴だ……」

佐久間は咄嗟に雑嚢をまさぐると中から拳銃のような形のものを取り出した。

彼はそれを目の前のドラゴンめがけて躊躇なく発射した。

しかし、発射された弾丸はドラゴンの額を兆弾し、明後日の方向へ弾け飛んで行ってしまった。

軽い脳震盪でも起こしたのか、ドラゴンは一瞬だけ怯む。だが、ダメージらしいものはほとんど見受けられなかった。

衣緒は佐久間の攻撃が失敗に終わったことを悟り、自分の運命を予想した。

が

「よし、目をつむれ！」

「えっ!?!」

次の瞬間、佐久間は衣緒の目を手で覆った。

それとほぼ同時に、弾かれて天井に突き刺さった弾丸……照明弾が炸裂した。

本来なら空高くに打ち上げられて炸裂するはずの照明弾の明るさをもろに直視してしまったドラゴンゾンビーは、

その明るさにまるで身を焼かれたかのように甲高い悲鳴を上げて仰け反った。

「ビュッ……」

佐久間は不適に笑った。

この暗視ゴーグルなしではほとんど周囲の状況が分からぬ暗闇で行動していたのであれば、

向こうは相当に知覚を研ぎ澄ませているはずだ。

それを逆手に取る戦術は、対ゲリラ訓練で佐久間は教官から聞きかじったことがあった。

今あのバケモノは、視覚を白一色に奪われているはずだ。これで少しは時間が稼げる。

「行くぞ！ 腰抜かしてる場合か！」

呆然とする衣緒を引っ張り上げ、佐久間は階段を駆け上った。

館のあちこちから銃声が聞こえてきた。おそらく大規模な夜襲だ。

敵は本気でここを落とさなければヤバくなってきたようだ。

屋根裏の銃眼からけたたましい音を立てて、ポンコツ機関銃が猛突撃をかけてくる敵に弾丸を浴びせかける。

きちんと整備していたのが幸いしてか、想像以上に軽快だ。

しかし、たった一丁ではこれだけの波状攻撃を制圧することなど到底不可能な話だ。

撃ち漏らした敵兵はわらわらと玄関に殺到している。

一分もしないうちに、機関銃弾は底をついた。

そして、館全体が重く揺れる。

あのバケモノがホールで暴れまわっているのだろう。

しかし銃眼潰しにやってこないのはある意味不幸中の幸いだ。

こちらの籠城戦術がまだ完全に理解できていないのだろうか。

僕はそんなことを興奮した頭で考えながら、弾の込め終わった狩猟用ライフルをメイドから引ったくり、

暗視ゴーグルで敵兵の姿を確認しながら狙撃を加える。

が、動体応用射撃は思ったよりも難しく、走る敵にはなかなか命中しない。

クソ！ ダメだ！

外の敵に構っている場合じゃない。今は侵入してきた敵を撃退することが先決だろう。

僕はここをパーシエに頼むと、弾切れのライフルを置き、代わりに散弾銃を手にした。

六四式の弾は撃ちつくしていた。

屋根裏から駆け下り、バリケードを超えながら一階玄関へ向かう。

だが着く前に、バリケードで侵入してきた敵に応戦する佐久間の姿が現れた。

「状況は!？」

「玄関を中心に一階の半分以上は敵に制圧されました！」

今は二階への撤退を指示していますが、いかにせん広い館なんでも

だ命令伝達が行き届きません！」

報告しつつ、佐久間は前方の角の暗闇から飛び出してきた敵兵数人に、

近距離ですかさず腰から引き抜いたマカロフを御見舞いする。

暗闇に閃光が瞬き、何が起こったのかもわからなかったであろう敵兵らが倒れる。

そんな中、僕はあることに気がついた。

「おい、前島はどこいった？」

佐久間はマカロフのマガジンを交換しながら、ようやく気がついたといった風に首を振った。

## 第27話 走馬燈

「ミルシエっ！」

前島は倉庫のドアを荒々しく開けた。

この状況下ではあの娘をここにおいていくのは得策ではない。連中の血走った形相を見た限り、非戦闘員だからと生命の保証をするようには思えなかったからだ。

「どこだっ！？ ミルシエ！」

前島は返事がない暗闇に再び叫んだ。

だが返事も、あの小さな鈴の音も聞こえなかった。

焦った彼は、彼女が潜んでいた辺りを暗視ゴーグルを被り直して確認する。

そこには、小さな鈴が、何者かに引きちぎられ、踏み潰された残骸が残っていた。

「み……ミルシエ……？」

彼は一瞬、その場に立ち尽くした。

遠くから銃声が散発的に聞こえるのが、その静寂をより際立たせる。

彼女はどこへいった？

この遺された痕跡から、恐ろしい推測が頭に浮かぶ。

まさか……！

ややあって、彼は全身が総毛立つのを感じた。



この感覚は、あのとき、そう、自衛隊に入るきっかけになった、あの事件の時と同じだった。

部屋にはランプの明りが灯されていた。

薄暗いが、廊下の闇とは比べ物にならない明るさであった。

串刺しにされ、床のカーペットを朱に染めて横たわるメイド服姿の少女。

その手には異世界の武器が握られ、

周囲にはその武器によって打ち出される小さな鉄の筒がいくつも転がっていた。

「で、このガキ、どうする？」

死体の転がる部屋の真ん中で、

節くれたった自分の腕に抱えられたメイド服姿の少女を、

まるでうまそうなメシにありついたときのように見下ろしながら、

古参の傭兵は呟いた。

周囲の仲間も、似たり寄つたりの表情で下卑た笑いを漏らしている。その様子に、無理矢理つれてこられた腕の中のメイド少女の顔が恐怖に歪む。

恐怖のあまり身をよじらすことも、悲鳴を上げることでもできず、ただ見開かれた瞳から涙を際限なく流すことしか出来ない。

「へっ！ まあちよいと熟れちゃいねえが、なあに、ここんどこ女日照りだったからなあ」

「おいおい、騎士どもに見つかったら厄介だからな。早く済ませるよ」

「分かってら。へへへ」

少女を死体の血で汚れたベッドにまるで人形のように放り投げ、男はズボンを脱ごうと武器を置いた。

少女がベッドの奥へと後ずさる。その時だった。

乾き、何かが弾けたような音と共に、テーブルに置かれていたランプが倒れ、運悪くも炎が消えてしまった。

一気に暗くなった室内に、傭兵らは狼狽した。

「な、なにが起こっ……」

「うるあああああああ！！」

雄叫びを上げ、一人の男が暗闇から飛び出してきた。

その場にいた傭兵達が振り向くより早く、マズルフラッシュが瞬いた。

まとめて五人の傭兵が七・六ミリ弾の直撃を受けて肉塊に変わる。

「どけえええええ！！」

バリケードを飛び越え、男が狂ったように咆哮する。

傭兵たちが狼狽する中、ミルシエの姿を暗闇の中確認すると、

「早く二階に逃げろ！ 早くっ！」

有無を言わさぬ声で少女に叫ぶ。

「お、おのれえ！」

抜剣した傭兵が無茶苦茶に切りかかってくる。

「うるせええええ！！」

前島はなんの躊躇いもなくその男を射殺した。

室内の敵はこれで一掃できたはずだ。

弾切れのマガジンを交換し、ミルシエがバリケードを超えて階段の方向へと逃れるのを確認してから、

時間稼ぎのためにその場に腰だめに六四式を構えて踏みとどまった。こんな高揚感、いつぶりだろうか。

鉄パイプで泣き叫ぶ不良どもの頭をかち割ったあの事件以来だ。

精神科では、潜在的な精神病の一種だと診断された。

普段は墮落しているが、『大切な人』や物が危機にあっているのを見ると、

アドレナリンが過剰分泌され普段からは想像できない暴力衝動に駆られる。

だからなんだってんだ、と彼は思っていた。

大切な人を守れないなんて、糞以下じゃねえか、と。

「来いやあ！」

興奮状態の傭兵たちが襲い掛かってくるのを感じ、彼はトリガーを引き絞った。

しかし、弾は発射されなかった。

ガチツッ！

彼の六四式は鈍い音を立てて作動しなかった。

弾切れではない。マガジンは交換したばかり……

まさか、ジャムった！？

「しまっ……」

即座に悟った彼が焦りを感じる前に、彼の喉元に投槍が突き立っていた。

声にならない呻きを漏らし、彼は後ろのバリケードに吹っ飛ぶ。

「ははははっはあ！ やった！ 異世界兵を討ち取ったぞ！」

ゲボ、と聞いたことのない嫌な音が声帯から漏れるのと、下品な傭兵の大声が聞こえる。

しかし、もはや彼はそんなことはどうでもよかった。

ああ、自分はもう死ぬのだと、彼自身驚くほど簡単に知覚できた。

彼の混濁する脳裏に、ある風景が映し出された。

真昼間の屋上、二人の男女の姿がそこにはあった。

どこから持ってきたのか、ベンチに横になって制服をだらしなく着崩した少年と、

豊かな髪をポニーテイルにまとめた物静かそうな少女だった。

微かに吹いてくる風が心地いい。

『前島君……いつもここにいるね？』

先に口を開いたのは彼女のほうだった。

『いいんちよと違って頭わりいから教師からも見捨てられてんだわ』

邪険に扱うでもなく、かといって友好的でもなく少年は気のない返事をする。

『そんなことないと思う。前島君、きつと、その……』

『ほら、とりえもないっしょ』

自嘲的に笑い、彼は寝返りをうつた。

『でも……私は進学クラスにいる人よりも前島君の方が人間的だと思っよ』

『バツカバカし。点数とれねえ奴は人間じゃねえって、物理の木村が言ってたっしょ？』

『そんなことないよ……』

少女の端正な顔が困惑に歪む。どうして分かってもらえないのだろう、と。

しかし、少年自身、彼女が言いたいことも、そして自分への気持ちも理解していた。

彼女の言うとおり、そこまで馬鹿ではなかった。だが、彼は彼女を自分の墮落した生活に引きずりこみたくはなかった。

彼は教師から見れば完全な不良だったが、厳密にはそうとも断言できない。

暴力沙汰は嫌だし、群れるのも嫌い。

煙草や薬も金の無駄だと考えているし、派手な格好するのも面倒。

ただ、のんびりとしていただけ。それが許されない環境だといっだけの話だった。

それを分かってくれたのは、彼女だけ。

「そ、…んな…こと…ないよ…な？　いいんちよ…」

意識が遠のいていく中、前島は走馬灯というものを初めてみた。

それは彼の唯一の後悔。

何故あのとき彼女を受け入れてやらなかったのか。

そうしていれば、あの事件も防げたかもしれない。  
だが、もう……

ちりーん

ああ、心地いい音色だなあ。

少女の鈴の音色に抱かれ深い海の中に沈むように、彼の命はその灯  
火を消した。

## 第28話 添い遂げる者

状況把握と前島を探しに出ていた佐久間は、僕に落ち着いた口調でさらりと告げた。

「前島が、死んだ……？」

振り向いた僕は愕然とした表情を隠せなかった。そのあまりの自然な口調に、一瞬なんのことを言ったのか理解できなかった。

「戦死です。あの娘を庇って……」

佐久間は僕の顔色を心配しながらも冷静な口調を崩さなかった。後ろではパーシエが必死になって泣き叫び前島がいる一階に戻ると暴れるミルシエを捕まえている。

死んだ？

あのいつもヘラヘラと笑っていたあいつが？

そんな馬鹿な……

「か、確認したのかよ！？」

思わず食って掛かるように肩を掴んだ僕に、佐久間は冷徹に断言した。

「しました」  
「うっ……」

佐久間は僕を睨むように見つめていた。自分自身分かっていた。彼は悪趣味な冗談など言わない。僕の手を振り払うと、まるで諭すように言う。

「三尉。これは戦争なんです」

彼はそれだけ言うと、別の銃眼に向かうために部屋を出て行った。

「自分も……昔はそうでしたから言いますが自分を責めてもしょうがありません。」

そんなことをしても事態は好転しないんですから」

佐久間が出て行く足音が、どこか無情に聞こえた。

「佐久間さんっ！」

佐久間は甲高い女の声に振り向いた。

その瞬間、頬に鈍痛が走る。

平手を張った衣緒が、珍しくも目を吊り上げて肩を震わせていた。

「何をする」

「あんな言い方しなくなっただっていいじゃないですか！」

キツと睨みつけ、彼女は怒りをぶつける。

しかし佐久間は別段驚いた風もなく、無表情だった。

ややあつて、彼はおもむろに口を開いた。



「お前は優しい人間だな……」

そういつと彼はふっと薄い笑みを浮かべる。

「ふざけないでください！ 仲間の人々が亡くなったんですよ！ それなのに……」

「俺が泣き叫んでいて、一体誰が敵を食い止める？ 貴様がやってくれるのか？」

ここは青春を謳歌する学校でも法の秩序の及んだ日本国内でもない、戦場だ。

仲間の死を悼むくらいならまず目の前の敵を殺すしかないんだ  
「人でなしっ！」

衣緒は再び佐久間の頬を張った。

彼は避けようとせず、目を薄く閉じてされるがままである。

彼女は我を忘れていたのか、彼の唇からは僅かに血が流れていた。

自分のやったことにようやく気付いたのか、彼女はバツが悪そうな表情をする。

しかし、佐久間はそんな彼女に向かい首を横にふった。

「……そういつてられるなら、お前はまだ正気さ」

「え？」

口の端の地を手でぬぐい、彼はさっさとその場を去って行った。

僕は皆の前でOD色のケースの蓋を開け、中から鈍く光沢を放つ金属の塊を取り出した。

旧日本軍の指揮官らの気持ちだが、現代人であるはずの僕に痛いほどよく分かった。

さぞ、絶望感と罪悪感に苛まれていただろう。

「みんな……これを二人に一人づつ持ってくれ」

皆が顔を見合わせる。

彼らはこの異世界の武器の威力はよく知っているし、扱い方も簡単なので習った。

しかし、貴重なので自衛官しか携行しないと説明していたはずだ。

「……どう使うかは、各人の判断に委ねるよ」

血色の悪い僕の顔を見て、彼らはようやくその意味を察したようだ。メイドの中にはたがいに抱き合って涙する娘も何人かいる。

まるでひめゆり学徒隊の少女達だな。

俺はどうやら極悪人として歴史に名を残しそうだ。

「あたしは要らないよ。今まで撮影してきたデータが壊れちゃう」「  
「そうですよね……」

精神的に強いのか現状が分かっていないのか、倉敷は一部始終をビデオに納めながら言った。

僕はただ、うなだれるしかない。

もう、抵抗も無駄な気がしてきた。

無線機からは救援の来るような連絡は一切来ない。あのドラゴンが出てきてからは電波の状態が悪いようだ。

負の力、トリオミアが言っていたけど、それとなにか関係があるのだろうか。

いや、もういい。どうでもいいことだ。

「さあさあ！ みんな。おいしい料理を作ったから腹いっぱい食べて頂戴な」

そんな中パーシエが鍋をオタマでカンカンと叩いて叫んだ。

沈んだ雰囲気だったその場に、明りが差し込んだかのようだった。

軍用のガスコンロで炊いた、彼女の自信作のビーフシチュー。

各員の飯盒に注ぎ渡され、皆はそのおいしそうな湯気に思わず表情を穏やかにする。

皆、無言でシチューをすすった。戦闘続きでろくに食っていないかった空腹に、染み込むような味だ。

旨い、旨いなあ。この世にはこんな旨いものがあつたんだな。

その温かなシチューに、ぽつり、ぽつりとしよっぱい涙が落ちる。

いつもなら、腹が減った、待ってましたと騒がしい部下が、いないんだ。

ああ、そうだ。あいつはもう死んでしまったんだ。

これが、これが人が死ぬってことなんだ。映画や漫画じゃない、現実に関人がこの世からいなくなるということ。

僕はもうシチューを食べなくなっていた。

声押し殺すように、肩を震わせ、部屋から出て行くと、廊下の角で尚も泣いた。

それこそガキみたいに。

ああ、畜生、結局俺は弱っちい人間だ。善人はおるか悪党にすらなれないような。

「……ツジハラさん」

不意にかけられた女の声に僕はハッと後ろを向いた。

薄暗いが、あの白い肌にメイド服ははっきりと分かる。

「リオミア！ 何してんですか、寝てないと……」

僕はその病的に白い肌を心配し、慌てて涙をぬぐって今にも倒れそうな彼女に駆け寄った。

「ニホンの人は……何でもかんでも自分で背負いこんでしまうのですね……」

彼女はそつと肩にかけられた僕の手を取った。

「まるで私みたいです……」

ふつと自嘲的に笑い、彼女は呟く。

「一体彼女は何を言っているのか分からなかった。体調が悪い上にストレス過多なこの状況でノイローゼにでもなってしまうのだろうか？」

「早くベッドに……」

「ツジハラさんっ！」

次の瞬間、彼女は僕の胸に顔をうずめた。突然のことに声が出ない。

「私は……決心がきました」

彼女は顔を僕の迷彩服にうずめたまま嗚咽混じりに言った。だから一体何を言っているんだ！

「け、決心ってなんのことですか？」

「あの時言おうとしたことです……私は……」

彼女が顔を上げて僕を見る。

「敵襲————！！」

その瞬間、屋根裏から佐久間の怒号が館に鳴り響いた。そして、あの不気味な咆哮が聞こえたかと思うと、さっきまで僕がいた領主の部屋が凄まじい衝撃と共に吹き飛んだ。まだ部屋に残っていた何人かは帰らぬ者になってしまっただろう。もし廊下で泣いていたいなかったら、僕も今頃、と思うとゾツとする。粉塵が晴れると、ドアから淀んだ瞳がぎよろりと周囲をなめまわしているのが垣間見えた。

野郎！ 領主の部屋に特攻かましやがったな！

「あ……あ……」

ドアのすぐそばで倒れたままの女性が一人。

「笠間さん！？」

逃げ遅れたのか！

見ると、足を怪我したのかその場から動けないでいる。

助けなければ、と即座に思った僕だったが、散弾銃を持ってきていないことに気付いた。

部屋に置いてきたままだったんだ。

腰の九ミリではあのバケモノ相手では無力に等しい。

その上、リオミアも……

「う……う……」

リオミア！？

「ああああああ…ああ…」

彼女の背中中、何かが蠢いていた。

そして次の瞬間、メイド服を破り、中から現れたもの。

「は、羽っ！？」

羽毛が宙を舞うのを信じられない思いで見つめ、僕は一步後退った。彼女の周囲にはまるで彼女を守るかのように魔方陣のような光が出現し、まばゆい光を放っている。

それが収まり、彼女はその場にうずくまった。

両手で肩を抱き、荒く息を吐いている。

「くっ…まだ力を解放するには早いのに…」

額にびっしりと脂汗をかき、彼女はよろよろと立ち上がろうとし、失敗してその場に突っ伏す。

慌てて彼女の元へ駆け寄り、抱き起こす。

「り、リオミア！ 一体これは…」

目の前の彼女に起きた現象が信じられないのと、そして今まで感じていた彼女への疑問が混ざり合い、口をついて出た言葉だった。

「私は……そうですね、馬鹿馬鹿しいかと思われるかもしれませんが……」

儂げな表情で、彼女は語る。  
自分自身の『真実』を…

「私は、天使です。それも、堕ちた天使」

てんし…？ あの、天国なんかにいるあの？

彼女はそつと、背中の羽を動かす。

僕の目前に風切り羽が差し出された。

これは…？

「羽が…黒い」

「過ちに樂園を追放された者の証…です」

羽を隠すようにたたみ、悲しそうに言う。

そんな…天使だなんて存在があったということ時点で僕の理解の  
範疇を超えている。

「うつく…それよりも、イオさんを助けないと…」

彼女は立ち上がるうとしてまたもよろめき、僕に支えられる。

ドラゴンゾンビーはドアを胴体が抜けられないらしく、這いずって  
逃げようとする笠間の足に

食いつこうともがいている。

ギシギシと柱が軋み、今にも壊れそうだ。早く救出しなければ。  
リオミアもとてもではないが動ける状態ではない。

クソッ！ もうどの道マジで潮時のようだな…

「三尉！ 援護してください」

佐久間？

屋根裏から駆け下りてきたのか、彼は僅かに焦りの色を見せながら、六四式狙撃銃の最後らしきマガジンを装填した。

「待て！ 九ミリでは援護なんて無理だ！」

「元よりあてにしませんよ！」

彼はこの状況下であるにも関わらず、振り向きざまに冗談ぽく笑いかけ、そして脱兎の如く駆け出した。

「おおおおおーっ！！」

佐久間は突撃姿勢に銃を構え、跳ね上がる銃身を押さえつけて六四式を乱射した。

ドラゴンゾンビは頭部に集中的な被弾を受けたため、悲鳴を上げて怯んだ。

「佐久間さん！？」

「生きてるか？ 文民」

その隙をつき彼は弾切れの小銃を捨て、笠間をそれこそ物のように肩に担いで救出をはかった。

廊下をなんとか走ろうとするが、突然彼が足を取られたかのように転倒した。

彼の足には、矢が突き立っていた。

「いたぞニホン兵一派だ！」

弓を手にした兵士が廊下の向こう側で叫ぶ。

バリケードが全て突破されたのか！？

敵兵がこんな場所にまで到達しているなんて。



周囲を見渡しても、味方はもう数えるほどしか残っていない。生き残っていた武装メイドがライフル銃で廊下の向こうに現れた敵兵をすかさず射殺するが、もはや多勢に無勢。後ろの階段からも次々と現れる敵兵に、もう抗うことなど無意味にさえ思えた。

「三尉い！ 彼女を……早く彼女を！」

佐久間の怒号に僕は我を取り戻した。

彼は、負傷した足をものともせず、歯を食いしばって彼女を再び担ぎ上げようとする。

僕は腰の九ミリを抜いて駆けつけようとした。

しかし、佐久間はまたもや転倒した。

笠間は投げ出され、苦痛に思わず悲鳴を上げる。

なんと、佐久間の足には今度はあのバケモノの鋭利な牙が突き立っていた。

ゴキリ、と骨の碎ける嫌な音が聞こえ、佐久間が激痛にもだえる。

「三尉っ！ 早く！」

その声に、僕は弾かれるようにその場を駆け出た。

一直線に走り、投げ出された拍子に気を失った笠間のところへ到着すると、彼女をなんとか抱き上げた。

「行ってください！ 三尉っ！」

僕は情けない言葉を吐くこともかなわず、佐久間の言われるがままに走り出した。

振り返らなかつた。振り返れなかつた。

彼がどうするのか、もう分かっていたからだと思つた。

「がは……全く臭え息だぜ……」

足に喰らいつくバケモノと目があう。

濁っているが、その瞳は憎しみに満ちていた。

どうやら、腰を吹っ飛ばされたのを覚えていたらしい。

三尉は、もう退避したな。

自分がくたばりかけてるってのに、こんなに冷静だ。

やっぱり俺は狂ってるらしい。

こんなとき、江藤二尉なら、上田三曹なら、どんな判断を下しただろう。

あの狂気の戦場で、最後まで狂者ではなく自衛隊員であり続けた上官の顔が不意に脳裏をよぎる。

「兵隊が許可なく死ぬな……か。」

江藤二尉……国民を守って死ぬなら……いいですよね？」

失血に気が遠くなりながらも、彼は手榴弾の安全ピンに指をかけた。すると、そつとその手を握るもう一つの手。

視線を移動させると、血だらけで、もう虫の息のメイドが微笑んでいた。

「シユレス…ヴァイラ…？」

佐久間は意識が混濁する中で目を見開いた。

彼女は確か二階の防備を固めていたはずだ。その彼女がここにいるということとは……

コイツ、敵兵にやられてここまで這いずってきたのか!?

「御一緒……させてください……」

そう言うと、彼女は最後の力を振り絞って身を乗り出し、佐久間に口付けした。  
そしてそれきり、動かなくなった。

「この世界の人間は……馬鹿ばかりだな……」

彼は彼女の亡骸を抱き寄せた。

瞳に、久しく忘れていた涙をためて。

「地獄の底でも、付いてきてくれるか……？」

そして彼はそのまま、安全ピンを引き抜いた。

## 最終話 リオミア

爆風に身を縮め、僕は全てを悟った。

「へっ……俺が始めた戦争だ。俺が死ぬまでやり遂げないとな」

僕は自分でも狂っていると自覚しながらそう呟いてから笑った。  
武器は拳銃一丁。上等だ。部下を全員逝かせて僕一人生き残ったん  
じゃ格好がつかない。

「いいえ……あなたは生きます……」

僕はその声にハツとした。

「あなたは、私の初めての主人なのだから……」

振り返ると、黒き翼を広げ、手にはまるで死神が持つような大鎌を  
持ったメイドが立っていた。

その病的に白かった肌は、今は健康的に浅黒く、頬には何かの紋章  
らしき刺青が浮かび上がっている。

ゾツとするような美しさだった。聖と邪の両性を併せ持った、狂気  
の美。

「私は聖なる存在にして邪の属性を持つ者。聖なる審判により地獄  
の門を開く者……」

目の前の墮天使は鎌を構え、まるで宣告するかのように言う。

「私は、墮天使・リオミア。はるか昔、贖罪の烙印と共に樂園を追放され、人間として魔を狩ることを宿命付けられし者！」

目を覆うような光と共に、彼女の闘気が爆ぜた。

そしてその衝撃に跳ね飛ばされた僕は気が遠くなるのを感じた。

・  
・  
・

『英気！ 防衛大なんて母さん許さないわよ』

母さん……

『父さんもだ。不景気で公務員が安定しているとはいえ、お前ほどの学力があれば将来の約束された一流大だって無理ではないんだ』

父さん……

『母さんはね。学校は子供の個性を尊重してくれる場所であるべきだと考えてるの。自衛隊なんて自由の無いところに入ってどうするの？』

あんたがいつ僕の個性を尊重したよ……？

『母さんの言うとおりだ。お前の未来は明るいんだぞ。もっと視野を大きく持ちなさい』

じゃあなんで望んでいる史学科や文学部に行かせてくれないんだ…

…？

僕は生かされた人生なんて嫌だ。

何かに真剣になりたいんだ。

レールの上じゃない、本当の自由という地面を歩きたいんだ。

生きていることを実感したいんだ。

・  
・  
・

・  
・

・

・

「う……」

背中が痛い。

あれから一体どれくらい時間がたったんだろう？

周囲は驚くほど静かだった。  
銃声も、怒号も、悲鳴も聞こえない。  
僕はひよっとしてもう死んだのだろうか？

「……っ」

起き上がり、目を開く。  
視界に飛び込んできたのは……

空？

どうして、僕は館の中にいたはずなのに。  
気付くと、もう世が空けていた。

「……は……！」

僕は気付いた。  
そこはやはり館の四階だった。  
屋根がなくなっていたのだ。  
ぽっかりと、円を描いて綺麗さっぱりと屋根がくりぬかれている。

「！……あれは！？」

上空を風と共に通過してゆく対戦車ヘリを見た僕は目を見開いた。  
それが、最新鋭戦闘ヘリコプター、AH-64Dロングボウ・アパ  
ッチであるとする由もなく、  
その大顎が如き機首下の対戦車チェーンガンが吠える。  
肉片すら遣さず、逃げる敵兵の一隊がこの世から血煙と消えうせた。  
戦闘妖精はホバリングから再び空へ舞い上がると、逃げ惑う帝国兵  
らに容赦ない局地制圧用ロケット弾の雨を降らせる。

妖精の胴体には、星のマークが誇らしげに塗装されている。

「在日米軍……！ 参戦したのか！？」

呆然と空を見上げ、呟く。

いつの間によら、救援が来ていたようだ。

なるほど、笠間議員の奴、自衛隊があてにならないからって米軍に泣きついたな。

朝日の中、弄ぶかのように残敵を掃討する戦闘へりは、どこか皮肉ですらあった。

前島が死に、佐久間が死に、そして大勢の志願兵もメイドも死んでいった。

僕たちが命がけで戦い抜いても勝てなかった相手を、いとも簡単に屈服させているのだ。

一週間以上戦いぬいて、全てをかけて戦った敵を、ただ指を動かすだけで圧倒する。

これを皮肉といわずになんというのか。

「ぐ……くくつ……」

なんのために戦っていたんだろう？

「畜生……」

死んでいったみんなの命はロケット弾一発分の値打ちもなかったっ  
てのか？

「ちく……しょお……」

なんてザマだ。これだけ大勢の人間を死なせておいて、僕は生き残



つちまつて。

敵を倒したのは、結局米軍だ。  
耐えられない。

もう、僕は生きていても……

腰にはまだ護身用の九ミリが突っ込んである。

僕はそれをゆっくり抜くと、こめかみに銃口をあてがった。

「みんな……ごめんなさい……」

こうするしかない。こんな僕が責任を取るには、こうするしか。

「死んで責任が取れるとでもお思いですか？」

ハツとして僕は後ろを振り向いた。

褐色の墮天使が、審判の大鎌を持って立っていた。

背後には、被われて骨だけになったドラゴンゾンビの遺骸や敵兵の死体がそびえている。

僕は即座に悟った。彼女がやったのだと。

敵兵士の死体には目立った外傷がないのを見ると、彼女はあの鎌で魂を奪い、文字通り「地獄送り」したのだ。

僕が気を失った後、迫り来る敵兵をあの手で何人何十人何百人と死の世界へと叩き落したに違いない。

「ひっ……!？」

一瞬でそこまで考えた僕は彼女から恐怖のあまり後退った。

無様に尻餅をついたまま、無表情な彼女を見つめる。

きっと今の僕は、恐怖に引きつった顔をしているに違いない。

と、彼女はそんな僕に失望したのか、悲しげな表情を浮かべ、ふつと空中に舞い上がった。

「ま、待ってくれ!!」

僕は慌てて叫んだ。

彼女が空中で静止する。

「み、見ろよ！ 助けが来たみたいだ。俺たちは勝ったんだよ。は、はは……」

あまりにも目の前の現実が現実離れしていて、僕は何をどう話していいのか分からず、意味不明な言葉しか口から出てこない。

自決しようとしていた今さっきのことすら混乱していて忘れてしまっ  
いそうだ。

「だ、だから……だから降りてこいよ。もう、終わったんだ」

声が震えていた。

僕は何をそんなに恐れている？

「戦争は、終わったんだ……」

辺りに静寂が訪れた。

僕とリオミアは互いにただただ見詰め合った。

何も語らず、ただじっと。

「私は禁をまた犯しました……」

先に口を開いたのは彼女の方だった。

僕は、疑問を投げかけることもできずに、ただ聞くのみ。



彼女は悲しげに、そんな僕を見下ろしている。

畜生！　ちつくしよお！

君まで僕の前からいなくなってしまうのか！？

「俺は君が神様の世界で犯罪者だろうがなんだろうが……」

彼女の頬を涙が伝った。

「俺は君を愛してるっ！」

彼女の周囲に何か戒めのような赤い輪がいくつか現れると、段々と彼女を締め付けるように狭まってくる。

あっという間に拘束された状態となったりオミアは、儂い笑みを浮かべて唇を僅かに動かした。

最早ようやく表情が分かる程度の高さにまで上昇していた彼女の言葉は僕には聞き取れなかった。

しかし唇が伝えた言葉……読唇術など知らない僕でも、読み取れた。

ワ　タ　シ　モ　……

次の瞬間、彼女を拘束する輪が紅く発光し、彼女の姿が消えてゆく。

「待ってるからな……ずっと待ってるからな！！　いつでも帰ってきてくれ！！」

手でメガホンをつくり、彼女と自分の運命を呪いながら力の限りに僕は叫んだ。

「俺はここに居るからっ!!」

朝日が完全にエクトを照らした瞬間、彼女は完全に姿を消した。

## エピソード

あれから三年の年月が流れた。

街は復興し、現在は『首都』として機能している。

種明かしをすると、僕らに帝国打倒の協力を申し出てきた盗賊ギルドの長サキユアは、

なんと帝国に植民地支配される以前のこの地域一帯を治めていた王族の血筋だという。

彼女は米軍がいなくなった頃合をみて、民にこの街にかつての国家が再興したことを宣言した。

米軍が瓦解した自衛隊の戦線を立て直すためにはこんな僻地に構ってられないので撤収した後となつては、

書類上はこの街は無政府状態となつていたため、止める奴なんかいなかった。

意外にも彼女は部下からの人望も民からの敬意も厚く（この辺は教会を味方につけていたのに由来するようだ）、  
なかなかいい国づくりをしている。

あのジャーナリストの二人組は、米軍に便乗して去つて行ったが、まだラジオが聞けていた二年くらい前まではその決死のドキュメントで一躍有名人になつていたようだった。

『悲惨な戦争に反対した強き人』として、正義ある人物の代名詞とまで報じられてたっけな。

だがその影に、一人の自衛官の死が横たわっていることを知る者は少ない。

それはさておき僕はといえば、

命令無視により全権限を剥奪され、米軍からトンズラした後も警務隊の迎えもこない（そんな余裕はなかったんだろうさ）ので、破壊され尽くした領主の館をコツコツと再建しながら日々を過ごした。

メイドの多くはこの館に残ってくれたので、生活に不自由することは一応なかった。

街は復興を遂げ、更に発展の兆しすら見える。

僕らが命を賭して守った街。愛着では言い尽くせない感慨がある。でも、僕の心には二人の部下の死と、最後までその想いを伝えられなかった女性の喪失が重くのしかかっていた。

そう。

風の噂では、日本が消えたという。

きつと、帰還魔法が完成して元の世界へと戻ったのだろうか。

その辺りの事情は、こんな辺境の下っ端には分からない。

とにかく、まだ生きている無線の周波数を回してみても、どこも引っかからない。

自衛隊も撤退したのだ。

僕は、完全に孤立してしまったわけだ。

かたん…

僕はいつも朝に領主の部屋のテラスのドアを開けてから一日を開始する。

ここは日当たりがよく、春にはよく小鳥がさえずりにやってくる。

今日もいい天気だ。

こんな日に、彼女がお茶を淹れてくれると最高だったよな。

彼女は今どうしているのだろうか。

墮天使としての宿命にまだ贖罪の旅を続けているのだろうか。

僕はサキユアからある程度の政治的発言力を認められていた。

真つ先に提案したのは、この街を京都のような宗教色豊かな街とすることだった。

天界に存在を許されぬ墮天使である彼女が惹かれたのも今なら理解できる。

彼女が夢見た理想郷。どんな神々でも祀られる、八百万の神々の住まう国、日本。

そこまで実現できるかは分からないが、少なくとも、彼女を迎えるためにやっておかねばならない。

それが僕に課せられた使命だ。

僕は執務室に戻る前にもう一度テラスを振り返った。

当然、そこには誰もいない。

だが、いつか……

いつかそこに、天使が舞い降りることを信じて、僕は今日を生きる。

この世界で僕に、生きる意味を与えてくれた、一人の天使のために。

〓 完 〓



## エピローグ（後書き）

いかがだったでしょうか？

どこかの映画みたいに「衝撃のラスト15分」のように感じた方もいらっしやるのかもしれませんが。

本来、もっと別の形でより長期の「街作り騒動記」を描く予定もあったのですが、私自身が自衛隊に入ることになってその期限に追われての執筆になったので、急遽いろいろとでっちあげたり急ぎ足になったりした部分があります。

そのため、このラストはこのラストで気に入っている部分もあるのですが、新たに彼らの物語を今後も書いていってみようかなと思っています。いわば、トゥルーシナリオ突入です。

実は廃品リサイクル同然で載せたこの作品がお気に入り10000才バーの人気を集めるとは予想だにしていなかったのですが、彼らの新しい生き方が考えられるようになったのは他でもない皆さんのおかげです。

改めて、ここまでの応援ありがとうございます。

新章でまたお会いしましょう！

## 第21話 傷跡(前書き)

2004年版と分岐する話から開始とさせていただきます。ここまでのストーリーを知りたい方は2004年版の20話までお読みください。

## 第21話 傷跡

無線機から流れてくる情報は錯綜していた。

随所で寸断された戦線。

孤立し各個撃破されてゆく小隊。

弾薬の不足。

空に航空自衛隊の直衛機の姿はなく見えるものは異形の妖魔ばかり。小隊長の戦死に一介の陸士長が部下を指揮する苦汁の対応。

燃料不足に動かぬ戦車隊。

パーツの共食いの末に稼働機体が半数以下にまで減少したヘリ部隊。そして救援のあてもない。

戦闘に必要なほとんどのものが欠落している状態で彼らは必死の抵抗を続けていた。

無論、潰走も時間の問題だった。

第二次大戦時のダンケルクの兵士達も、このような気持ちだったのだろうか。

いや、彼らはいつかここへ戻り帰りを待つ国民のため敵を打ち負かしてやるという気概に燃えていただろう。

しかし、自衛隊にはそんなものは存在しない。

大陸に散在するに過ぎない戦闘能力の半減した八万の陸自。

対する敵軍は、妖魔使いと魔導兵団まで擁した帝国軍の精鋭・推定兵力……約六十万。

ただ不様な敗走の過程を刻むのみ。

「このことは口外しないように。士気を下げるわけにはいかない」

「……はい」

僕は敗戦色の濃いこの戦争に、自分自身意外なほど落ち着いて指示を出していた。

大本営発表だな、こりゃ。

まさか同じ事を自分がやることになるとは思わなかった。

「それから、おそらく近日中に我々も会敵が予想される。

斥候との連絡を密にせよ」

「はい」

こうして、眠れぬ夜が明けた。

翌日は驚くほど良い天気だった。

その快晴が逆に恐ろしい。

僕は日の出間もなくの館のテラスに立っていた。

山の向こうを見る。『戦線』の方角だ。

今、こうしている間にも、ここから数百？離れた場所では、死闘が続いているのだ。

だが、そんな気配はここでは全く感じられない。

これが戦争の現実なんだろうか？

きっと、今の時間日本ではお出かけ情報でも朝のニュース番組でやっていることだろう。

戦争なんてものは、結局のところ、血を流している当事者以外にはほとんど他人事なのかもしれない。

でも、僕らはその当事者にその内になる運命にある。

決して、他人事ではない。

その日の天気は、

自分達の元へ戦争という名の何か得体の知れない何かがやってくる、

そんな不気味さを際立たせているように思えた。

(って、そりゃ曇り空でも同じか)

そう思い、結局、自分が怖がっているだけなのだと気付く。

ザマないな……相変わらず。

でも、そりゃあそうだろ？

僕は、実戦経験なんてないんだから。

考えてみればそれだけでも恐ろしいことだ。

実戦経験のない戦闘職種でもない指揮官の指揮で圧倒的な敵軍を相手にしなければならぬ。

常識的に考えればそれは自殺行為以外の何物でもない気がした。

僕は自分の両手をそつと見つめる。

微かに、震えていた。

と、背後に誰かの気配を感じ、僕はハッと振り返る。

「朝食をお持ちしました」

リオミアがテラスにお茶と焼きたてのパンを持って来てくれていた。相変わらず絶妙なタイミングでやってきてくれる人だ。

「あ、ああ……ありがとう」

彼女は朝日独特の明るい色の日光に頬を照らされ、まるで絵画の中の女性のように美しい。

題名は「下っ端公務員と美しき少女」、かな。

僕はさも手の体操でもしていたかのように手のひらを開閉させて誤魔化する。

彼女はそんな僕を横目に、ポットから朝の紅茶を炒れてくれる。気付かれているかどうかは、定かではなかった。

リオミアさえいれば、要塞化された館でさえ華やいで見えるのが不思議だ。

椅子やテーブルなどの家具類はバリケード構築に運び出されているので、

床に毛布を敷いての朝食となった。

「もぐもぐ……パーシェさんも職人だねしかし。こんな状況でも料理作るのに命かけて」

僕はカリカリの小麦のパンをかじり、口に入るととろけるような食感になる最高の出来映えのパンに感心する。

昨日の夜中といい今朝といい、あの人もほとんど休みなく働いているんじゃないだろうか？

「はい。あの方はこの館にそれなりに居場所を見つけていた人ですからね……」

「ふうん。そいえばあの人も奴隷の出身なの？」

さりげなく奴隷出身なんて言葉が出るようになった辺り、僕も大分この世界に毒されているような気がしたが、それはこの際考えないでおく。

「そう、ですね。生来の奴隷ではないらしいですが」

「え？ そりやどどういう意味で？」

「元々はここから山を一つ二つ越えた先の山岳民族の出身なんだそうです」

「なんでまたそんな人がこの館で料理長することに……？」

「それは」

「あ！ いや、いい。言わなくていいよ」

「はい……？」

僕はそう言って彼女の説明を遮った。

考えてみれば僕はリオミアから何から何までサポートしてもらっている。

だけど、それに頼ってばかりではダメだ。

ここに残っている人達は、ただでさえこれから死線を共にしようという運命共同体だ。

指揮官の僕がここで籠もっているんじゃ示しがない。

そのことをリオミアに言くと、彼女は静かに微笑みを返してくれた。それに、パーシェさんには毎度毎度と食事に関して色々労いの言葉をかけに行こうと思っても、

忙しかったり彼女自身が厨房にいる関係で出会わないこともあって機会がないんだった。

思い立ったが吉日。

これが最後になるかもしれない。僕は朝食をさっさと終わると立ち上がった。

「んじゃ、ちょっとだけあちこちまわってきますんで」

「いつてらっしゃいませ、領主様」

彼女は落ち着いた声と、見事なまでに折り目正しいお辞儀で僕を送り出してくれた。

日本の秋葉原とかにいる、キャラクターとしてのメイドではなく、本物のメイドがする見送りは驚くくらいに心地良い。

「さつとと、こんな状態じゃ厨房まで行くのも一苦労だな」

僕はあちこちバリケードだらけになった廊下を四苦八苦しながら乗り越えて行く。

一階へ下り、食堂へ向かい、そこから厨房へ。

厨房では義勇兵達への大量の朝食を作った後で、今度は昼食の仕込みに入っているのか、活気溢れる様子でメイド達が働いていた。そこに、長身で見事な肢体を持った褐色肌の女性がいる。

「パーシエさん」

「領主様っ！？ どうされたのですか？」

一瞬、何かと厨房にいた何人ものメイド達の動作がぴたりと止まった。

僕は仕事の邪魔をするのはまずいと思い、慌てて両手を振った。

「ゴメンゴメン！ 仕事の手は止めなくていいよ！」

メイド達は顔を互いに顔を見合わせると、なんだかよく分からないがそのまま仕事を続けるということなんだろうと取ったのか、恐る恐るといった感じで作業を再開した。

「……………何かございましたでしょうか？ 領主様」

パーシエさんがこちらへ大股でやってくる。

厨房内の熱気に彼女は汗ばんでいたが、それゆえに魅力的に見える。活き活きと働いている女性だけが持つ生命力のようなものが感じられた。

確かに、生来の奴隷といった印象はそこにはない。

「やあ、特に用事はなかったんだけど、一言礼を言いだね」

「……………は、はあ？ お礼などいただくことがございましたでしょうか？」



僕は苦笑いする。

本当に、この館の人々は無欲だ。

自分が人並み以上のことをしているだとか、これだけのことをやっているんだから感謝されて当然だとか、そういった感情がほとんどない。

目の前のパーシエさんの中で、休まず良い食事を作るのは当たり前のことなのだ。

礼を言われるということ自体が不思議なことなのだろう。

逆に、だからこそそんな彼らを労いたいと僕は思った。

「いや、今まで良いもの食べさせてもらったし、その礼さ」

「あの……私は料理人ですので食事を作るのは仕事でございますが？」

「いいんだ。俺、パーシエさんの作る料理、好きだしね」

「えっ ええっ!?!」

そう言うと、パーシエさんが突然頬を赤らめた。

その長身と、はちきれそうなボディをもじもじとさせている。

な、なんだなんだ？ そんな変なこと言ったか、僕？

「ど、どうしたんですか？」

「はっ!?! し、失礼しました!」

パーシエさんは我に返った様子で息を整える。

「そ、その、私がいた村では、そういった言葉は求婚の決まり文句でしたので、つい……」

「きゅ、求婚っ!?!」

い、いきなり何を言い出すんだこの人！？  
あ、そ、そうかあれか！ 「君の作った味噌汁を毎日飲みたい」っ  
てアレみたいなものか！

「そ、そういう意味で言っただんじやあ……」

ちょっと失礼かもと思ったが、とりあえずそれだけは言うておく。  
決して、パーシェさんが魅力のない女性だというわけではなく、  
結婚なんて今それどころの話ではないし、それに……  
それに？ それに何だ？

それは、僕が好いている女性は、別にいるか……ら。

「ってそんなことこそ今考えてる場合じゃねえ！」

僕はガリガリと頭をかいて変な想像を振り解いた。  
目の前のパーシェはおろとしている。

初対面の時とは別の意味で彼女は狼狽しているのだった。  
今、分かった。

この人結構天然さんだ……

日が少し高くなってきていたが、

僕が徹夜してただけで、まだ朝食後間もない時間だ。

中庭には雑然と決戦に向けた物資や義勇兵達のテントが点在してい  
たが、

まだ穏やかな空気がそこにはあった。

「ま、そこでこれから戦場にまで付き合ってくれるってんで、  
ちよっと開戦前に顔見せにね」

「領主様……」

場所を中庭の花壇に移し、僕は彼女に説明していた。

それを聞いて、パーシエさんは僕の顔を真剣な顔でじっと見つめる。こういう顔はあれだ、

自分のような下の人間にわざわざ時間を割いて謝意を伝えに来る領主のことに感激している、

そんなところだろうか。

「そういえば、パーシエさんはこの館に来て長いんですか？」

変にまた感謝の言葉を並べられても困りそうなので、僕は世間話をしようと思った。

それに、パーシエさんよりも年齢的に上の人物がこの館にはいそうもない。

リオミア以外でこの館の過去についてよく知っているのは彼女だけなのだった。

シュレスヴァイラも前領主と共にいた関係で古いのだろうが、どこか精神の不安定な彼女に帝国統治時代のここの話をさせるのはどこか気がひけた。

消去法で、当時のことを聞くならパーシエさんなのだった。

今更だが、この機会を逃せば後がなさそうなので、思い切って尋ねてみた。

「え？　そうですね。もう7年くらいになりましたでしょうか……」

「7年か、長いね」

14〜5歳くらいからだろうか？

随分と幼い頃からここにいらっしゃるらしい。

「その前は故郷にいたんですが、帝国軍に村を焼かれて奴隷になっ  
たんです」

「……酷い話ですね」

「いえ、そんな……よくある話ですよ」

パーシエさんは全く気にした様子はない。

よくある話。それは自嘲でも何でもなく、この世界では本当に珍し  
い不幸ではないのだろう。

故郷を焼かれることが、よくある話……か。

「それでしばらく奴隷市場にいたのですが、料理が得意だったこと  
で前領主の目に止まりここへ」

「なるほどね。そういえばリオミアやシュレスヴァイラとも古い仲  
なの？」

「シュレスヴァイラは元々どこかの孤児院にいたのを前領主に拾わ  
れていたので、

私が来た頃にはもういましたね」

「じゃあ、リオミアは？」

「リオミアメイド長は……」

パーシエはどこか言い難そうな表情を浮かべた。

そして、言葉を選ぶように語り始めた。

「4年くらい前に奴隷市場から買われて来たのですが……その……」  
「何かあったの？」

「領主様は、ご存じなんですよね？ 彼女が前領主から『寵愛』さ  
れていたことを」

「あ、ああ、まあね。やっぱり、酷かったのかい？」

パーシエさんは頷いた。

確かにあの地下室で一度だけ、僕はリオミアの白い肌を見た。

そこに残る、おぞましい傷跡の数々を。

何をされたのか、想像することさえ恐ろしかった。

だが、今のリオミアが見せる笑顔に、そんな暗さはない。

それだけが救いだ。

考えてみれば、それを受けていた当時のリオミアをパーシエさんは知っているのだ。

「はい。それこそ、普通の人間なら死んでしまつくらいの傷を負うこともあつたんです」

「そこまで酷かったのか……」

「それも、あるんですが……」

パーシエさんはやはりさつきから、リオミアの事を話すのに何か躊躇っている様子だった。

何か、嫌な予感がした。

パーシエさんは、何かを恐れているかのような表情で口を開いた。

「そんな普通なら死んでしまう程の傷でも、彼女は数日もすれば完治していたんです」

「……………え？」

どういうことだ？

死ぬほどの傷が、数日で治っていた？

リオミアが？

あの華奢な身体からは想像もつかないことだった。

「運が良かったんじゃないですか？」

その、なんていうか、見た目は痛めつけられていても手加減されていたとか…………？」

「前領主に同じ『寵愛』を受けた娘は全員死んでいます。でも彼女だけは、生きて帰ってきた。それも一回だけじゃない、何度もです」

ぞわり、と肌が総毛立つのが分かった。

何だ？ 何なんだ？ 一体、僕は何を知ってしまった？

確かに僕は今まで、リオミアが語りたがらなかったこともあって、彼女の過去を知らないでいた。

辛い過去だから、思い出させるのが可哀想だと。

でも、同時にそれは、彼女のことをまるで知らずにここまでできたということだ。

僕はこの時点になって、生身としてのリオミアのことを知ってしまったのだ。

息が詰まる。

絶句だった。

「領主様、私もリオミアを嫌ってはいません。

ですが、この館で彼女の当時を知っている者なら……」

パーシエは震える声で呟いた。

「皆、彼女のことを恐れています。『怪物』だと」

## 第22話 疑心

その日、僕は日中の大半を市街地の視察に当てることにした。

リオミアとは、弁当を受け取った時に少しばかりの会話をしたただだ。

……努めて平静を装ったから、不審には思われていないはずだ。

僕は館の門を出ると、市街地を見下ろす丘の上にある館の長い下り坂を、

わざわざ自転車を押しながら下った。

そうだ。

考える時間が欲しかった。

パーシエから聞かされた、いや、気付かされた、リオミアの謎。

数日で死ぬほどの怪我が治る？

そんなことはありえないはずだ。

僕の部隊には、見ての通り医務官や衛生隊員がない。

幹部の責任として、暇を見つけては医療関係の本などを読んでいたから分かる。

この世界で、見た目に致死的な外傷を受けた場合、死亡する確率は恐ろしく高いはずなんだ。

そう、この世界には外科治療のできる医療技術はないし、外傷からの感染症を防ぐ抗生物質はおろか満足な消毒薬もない。

他の娘が死んでしまうほどの拷問を受けて、何度も生還できるはずがないんだ。

確かに、治癒魔法という現代科学をして解明されていない治療方法というものがこの世界には存在する。

でも、それを操れるのは、この街には以前のシュレスヴァイラを治療したアールマン司祭など数人しかいないし、そういった人物の治療を受けていないのは確かだという。

それらを踏まえて結論を述べるなら……

(リオミアは、普通の人間じゃない……?)

そういうことになる、なるしかない。

それだけなら、まだ僕も、「それが何だ！ 彼女は彼女じゃないか！」と言えた。

でも、今のこの状況下では、そんな考えなしではいられない。

僕は漫画なんかでいる熱血だったり、冷めていたりする主人公ほど剛胆でも伶俐でもない。

今から戦争を行う立場にある最高指揮官として、彼女の存在を疑うということをしねばならなかった。

だが、彼女を問い詰めることはできなかった。

まだ考えがまとまっていない。

いや、それは単なる『逃げ』の言い訳だ。

彼女を信じられないでいるというのに、彼女との今までの関係を壊したくなかったんだ。

今まで、僕のために尽くしてくれた、リオミアとの関係を……

「……え？」

僕は押している自転車ごとその場に立ち止まった。

『僕のために尽くしてくれた』？

そのことが何気なく脳裏を過ぎった時、僕には何かとてつもない見落しがあったのを理解した。

そうだ、そうだよ。

そもそも、彼女は何故僕らが来た時にあそこまで協力的だった？

シユレスヴァイラのような狂信的だった者以外でも、少なくとも僕らに対して協力的である理由はないはずだ。

リオミアは何故、あんなにも冷静に僕らを受け入れたんだ？



それ以前に、前の領主に屈服しなかった鋼の意思の持ち主であるリオミアだ。

新たな支配者など必要ないはずじゃないか!?

今まで、あまりにも彼女はそれが当たり前だと振る舞っていた。

僕のような、冴えない異世界の男を主として振る舞うことを。

だが、よくよく考えてみれば、それはあまりにも偶然で片付けるには矛盾に満ちている。

リオミアは前の領主が逃げ出した後、この館で烏合の衆となったメイド達を統率し、シュレスヴァイラ達を説き伏せてまであの館を『維持』したという。

彼女にとって、奴隷である自分の象徴である、館をだ。

シュレスヴァイラのような、心に鎖を巻き付けられたメイドではない彼女が、それをする動機が分からない。

考え過ぎか？

実は他に理由があつたのかもしれない。

身寄りのない彼女が、ここで新たなスタートを切ろうと思った？

……それなら何故、評議会に対して何かのアクションを起こすなり、新たな館の活用方法を考えなかつた？

聡明な彼女の性格からして、今まで通りでいれば状況が良くなるなど考えるわけがない。

なら、なら何で彼女はこの館に留まつた？

それも、メイド達を束ね、館を無意味に維持するなんて無駄を黙々とこなした？

まさか……………!?

僕は自転車のハンドルから無意識に手を放し、坂の中腹から館を振り返っていた。

ガシャン、と自転車が無惨に転がる音。

「館に留まること自体に、理由があつたから……………!？」

そうとしか考えられない。

彼女は当然知っていた。

前の領主が逃げ出した理由を。

異世界の軍隊を相手に、帝国が完膚無きまでに敗北したことだ。

そして、領主が逃げ出した後に起こることくらい、想像がつくはずだ。

彼女は……待っていたっていつのか……？

「僕らがここへ、来ることを……」

僕は呆然と聳え立つ館を見つめた。

これから戦場となる、館を。

リオミアが、何かのために守ってきた、館を。

## 第23話 追憶

彼はその光景を見た瞬間、今自分が何を見ているのか理解した。悪夢だ。

夜のあの街で、自分のいた部隊が孤立する。

何度も繰り返し見た、何度見ても慣れることなどない、悪夢。

予想外の、いや、ある程度は予想されていた敵の猛烈な抵抗を受け、救出部隊？は敵の支配圏の真っ直中で包囲されていた。

その街の名はネリエントス。

羽田空港を飛び立った後、謎の失踪を遂げたジャンボ旅客機が近郊にて発見され、乗客乗員が帝国軍に拉致されたことが判明した魔法都市。

自衛隊は乗客乗員325名の救出を急いだ。急がされた。

国民への直接被害という、国内の厭戦ムードを加速させかねない事態だけは避けねばならないという政治的判断により、十分な準備も支援もないまま、軽武装の部隊を都市へ突入させてしまったのだ。それまでの正面戦闘が勝利続きであった慢心もあった。

そこが、日本人の想像を超えた、魔法都市であることを誰も理解していなかったのだ。

「こちら第一小隊！ 敵に包囲された！ 移動不能！ 航空支援を要請します！」

「無駄だ！ ヘリが二機も落とされたんじゃ航空支援なんかできっこない！」

「畜生っ！ 空自の事前空爆さえあればここまで敵が残ってるなんてことは……！」

銃声がけたたましく鳴り響いていた。

小隊が街の大通りの真ん中で釘付けにされている。

彼らは空間断裂の魔法で撃墜された味方ヘリの救助に向かったが、墜落地点で敵に包囲されてしまったのだ。

ヘリのパイロットは全員駆けつけた時には死亡していた。

喉を掻き切られて処刑されていたのだ。

そして、そのパイロットの血で、建物の壁にこの世界の言葉でこう書かれていた。

？地獄の門を開きし魔都へようこそ？

その言葉の意味を知った時、自衛官達は戦慄した。

帝国軍は勝算あって、この街へ自衛隊を招き入れたのだ。

ジャンボ旅客機の乗客を拉致したのも、そのためのエサなのだ。

しかし、畏にはめられたが、自衛官達は決して退こうとはしなかった。

退けないという事情もあったが、それでも、日本国民を救うのが自衛隊の使命だからだ。

現に、孤立していない部隊の大半は、果敢にも前進を試み、拉致された国民の捕らわれていると思われる建物へと近づいている。諦めない。

俺達も、さらわれた一般市民も、全員生きて帰るんだ！

佐久間陸士長はそう正義感に燃えて銃を握っていた。

『我が召喚に応じ……来たれ妖魔よ……』

召喚魔法の詠唱の声があちこちから聞こえて来る。

自衛官達は、その音色に死の臭いを感じた。

建物に潜む帝国の魔導兵達が、手勢を呼び出しているのだ。

召喚魔法という、質量保存の法則をねじ曲げた馬鹿げた戦術である。

彼は手にする89式小銃から空になったマガジンを取り外し、予備マガジンを素早く叩き込む。

次の瞬間、通りの建物からわらわらと黒い影が飛び出して来た。ゴブリン、コボルト、タールマンやスキュラといった、呼び出せるものは全て呼び出したといった雑多な召喚獣達が奇声を上げながら突っ込んで来る。

それだけではない、上位魔法の使い手が、強力なオーガーやミノタウロスまでも呼び出し、こちらへけしかけて来た。

「撃えーっ！」

装甲車と車両を盾に、防御陣形を取る34名の小隊が一斉に応戦を開始する。

96式装輪装甲車の車上に備え付けられた12.7?重機関銃が唸り、親指ほどもある機関砲弾に上半身を吹き飛ばされたゴブリン達が悲鳴を上げて逃げ惑う。

「接近を許すな！」

「対戦車班前へ！」

「安全装置解除！ 後方の安全確認良し！」

「発射あー！」

110?携帯対戦車ロケットランチャーを持った隊員が、身の丈8mはゆうに超える巨人目掛けて対戦車ロケット弾を撃ち込む。

その鋼のような胸筋を超高速のロケット弾に撃ち抜かれ、巨人が地響きを立てて倒れる。

爆音と銃声が街を覆っていた。

自衛隊の近代兵器は、ここでも十分に効果を発揮している。

だが、武器の破壊力と戦闘の趨勢は全くの別物だった。

「うぐっ！？」

佐久間陸士長は背後で誰かがぐもった悲鳴を上げるのを耳にした。はっとして振り返ると、そこには背後の建物をまるでトカゲのように伝い降りて来る黒ずくめの敵兵らしき人影があった。正面の召喚獣は火力をそちらへ振り向けさせるための陽動だった。暗殺者達の刃が、無防備に建物側に背を向けていた数人の隊員の喉を貫いていた。

「わあああああ！！」

佐久間は89式小銃を暗殺者達へと向け、引き金を絞った。早いっ！？

黒装束の敵は背後の三階建ての建物からまるで忍者のように飛び降り、壁をかぎ爪で引つ掻きながら飛びかかって来る。

ライフルのような長大な射程を持つ武器はここまでの接近戦には不向きなものもあり、

その軽快な身のこなしに確実な命中弾を送ることができない。

敵は自分の味方が何人倒れようと、意に介さずこちらへ向かって来た。

顔には不気味な仮面を着用しており、相手の表情は分からないのが恐怖を助長させる。

正面からまだ巨人を含む大群の敵が襲いかかって来る中、背後の暗殺者達を相手にせねばならなくなった小隊はパニック状態になっていた。

ある隊員は数人がかりで暗殺者に滅多刺しにされ、またある者は投げナイフを顔面に受けて即死する。

暗殺者達は接近戦では自衛官の抗し得る相手ではなかった。

「なんだ奴ら！？ 銃弾を受けても死なないぞ！？」

誰かが叫ぶ。

佐久間もそれを知った時、背筋を何かおぞましい感覚が襲った。いくら89式小銃が小口径高速弾使用の現代型の軍用ライフルとはいえ、

至近距離で銃弾を受けてまともに立っていられるはずがない。だが、黒装束の敵は数発の銃弾などまるでかすり傷程度かのようにこちらへ向かって来る。

「重機関銃で粉々にしろっ！」

装甲車の機関銃座が旋回し、12.7?弾をばらまいた。半ば恐慌状態のその掃射に佐久間は咄嗟に身を伏せる。

ポツ、と鈍い被弾音と共に、目の前に敵兵が倒れ込んで来る。腹を半分近くもっていかれ、痙攣する敵。だがそれは紛れもなくまだ生きていた。

佐久間は飛び起き、銃剣を装着した89式小銃を突き立てた。

「こ、このバケモノめ！ いい加減死ねえ！！！」

胸に銃剣を突き入れられた敵が、銃身を両手で握る。

心臓を突いたはずだった。普通なら即死しているはずだ。

佐久間は銃を伝って、まだ脈打つ心臓の音を感じ、慌てて銃を手放す。

「うつつ！？」

思わず、そのまま情けなく地べたに腰を抜かしてへたり込む。ゲホ、と銃剣を突き立てられた敵が血反吐を吐いた。

よく見ると、その敵の顔には、銃撃の衝撃で吹き飛んだのか、仮面が被さっていない。

「うわぁっ!？」

味方の誰かがパニックの中、手榴弾を取り落としらしい。  
佐久間の近くで、爆音が鳴り響き、耳鳴りが彼の聴覚を奪った。

きいんとした、どこか現実離れた音の世界。

彼は、ふらふらとその敵の顔を確認しに行った。

醜悪な、怪物のような敵に達しない。

そうでなければ、俺は……

俺は……

照明弾が打ち上がる。

夜襲を防ぐための予防措置として、どこか別の部隊が打ち上げたらしい。

まばゆい光に、敵の顔が露わになる。

光は、その美しい銀髪を照らし出していた。

「こ……ろ……し……て……」

苦痛に歪む少女の顔は、血にまみれてなお、美しかった。

佐久間は、彼女の懇願を聞くことさえできず、何もかもが恐ろしくなつてその場を駆け出した。

「うわ……うわぁぁぁぁー!?!？」

ただ走った。

悪夢の中、曖昧な記憶の世界を手探りで走る。

どれくらい走っただろうか。

身体が鉛にでもなつたかのような倦怠感を引きずり、彼はある場所に着いていた。



「広場……」

事前ブリーフィングで偵察機の航空写真を見ていた記憶が呼び覚まされる。

悪趣味な彫像が並び、まるで地獄への扉のような場所……

「……っ!？」

彼は広場の中央に、何かが積み上げられているのを見た。

目を背けたい欲求にかられる。

だが、悪夢はそれを許してくれなかった。

自分の意思とは裏腹に、鉛のような身体はそちらへと向かって行く。それが何なのか、もう知っているはずなのに。

「そんな……そんなのって……」

彼は涙を流しながら口走る。

そこにあつたのは、薄汚れた無数のマネキン。

いや、違う。

マネキンに見えるのは、死後硬直が始まっているからだ。

少女達の白い肌は、生気が抜けて、まるで人形のようなだった。

全員セーラー服を着ていたから、まとめて扱われてしまったのだろうか？

それは、処刑された日本の女子高校生の死体の山だった。

「あ……あ……」

息ができなかった。

絶対を守る、絶対に救う。

そのためなら、どんな敵とだって、戦える。

だが、そこにあつたのは、そんな決意を嘲笑するかのよう現実だった。

少女達は弓兵の一斉射撃により絶命したらしかった。

友達をかばったまま死んでいる子、携帯電話を最後まで手放さずに息絶えている子……

ぽつんと一冊の日記帳が風に揺られてめくられていた。

5月7日

今日から修学旅行！

とっても楽しみだよー

高野先生はせんそー中で暗い世の中だけど、いっぱい楽しい思い出を作ろうって言うてくれた。

センセは反戦のための署名運動をしてるらしくて、出発前にわたしも署名してきた。

らぶ& amp ;ぴいーす！なんちって

そついえばクラスのさゆりちゃんが何だか高野せんせと言い争ってた。

なんでだろ？ せんそーはよくないじゃん。

つて、言ってるそばから空港でジエータイの飛行機が先に飛ぶから待たされちゃった

マジサイアク

風が吹き、日記帳を不規則に弄んだ。

5月20日

まだ助けは来ない。

昨日はB組の中島さんがイケニエとかいうのにされてしまった。

今度は私の番なのかな？　すごくこわいよ……  
早く助けが来て欲しい。

ジエータイの人が助けに来るって、クラスのさゆりちゃんは言うてるけど、いつになるのかな？

わたしたちがここにいること、誰か知ってるのかな？

飛行機の音を聞いたって噂もあるけど……

5月21日

友達のまゆちゃんが逃げだそうとして殺されてしまった

みんな泣いてる

ていこくのこわい人が何かいつているのが聞こえたけど、こわいからわたしは耳をふさいでしまった

夜にトイレに行く途中で高野先生があのコわい人と何か話してるのを聞いてちゃった

よく聞き取れなかったけど、なんだかこわい

これからどうなっちゃうんだろう……？

いやだ　しにたくないよ　おかあさん

5月22日

さゆりちゃんがジエータイのヘリコプターを見たって朝しきりに言っていた

きつともうじき助けが来るんだって

早く助けに来て

おねがい

おねがいだから

あ、いまあのこわい人が広場にあつまれって言うてる  
こわい

あの人になにか言っていると必ず人が死んじゃうんだ

こわいこわいコワイ

さゆりちゃんがだいじょうぶだっではげましてくれてる

さゆりちゃんのおにいさんはじえいたいの人らしい

やった！

さゆりちゃんのおにいさんがたすけにきてくれる

きつと、あのわるいやつらをやっつけてくれる

ひろばにあつめられてる

たかのせんせはどこ？

こわい

こわ

・

佐久間はそこで膝をつき、呆然と死体の山を見上げた。

虚ろな瞳が語りかけて来る。

（ナゼモットハヤクコナカッタ？）

虚ろな少女達の目が自分を責めているのだと気付いた瞬間、

彼は声にならない悲鳴を上げた。

「……佐久間？ おい佐久間」

「はっ！？」

僕は肩を揺すって佐久間を起こした。

随分とうなされているので、さすがに起こすことにした。

疲れているんだろうが、ここまで苦しい睡眠では疲れも取れないだ

ろう。

ここは議事堂近くの鐘楼の上だ。

佐久間はここで仮眠を取っていたようだ。

わざわざ銃を抱いて寝る辺り、彼は筋金入りだと思う。

「大丈夫か？　なんか尋常じゃない様子だったけど」

「……いいえ、ご心配なく。少々疲れていただけです」

「本当か？　ちょっと気を張り詰めすぎなんじゃないか？」

汗をびっしょりとかいた佐久間の顔は、まるで死人のように青ざめている。

「顔、まるで死んでるみたいだぞ？」

「そうですね……そうなのかもしれない」

佐久間は苦笑する。

「ちゃんとベッドで寝たらどうだ……？」

僕はリオミアのことで相談があったが、彼にそんなことを聞ける状態ではないことに気付く。

考えてみれば、僕はいつだって彼に頼り切りだ。

実戦経験のある、大人びた下士官。

佐久間なしにこの部隊は機能しないといっている。

彼には決戦に備えて万全でいて欲しいし、それ以上に仲間として心配だった。

「しばらくここは俺が見ておくから、佐久間はちょっと寝て来なよ」

「はい、そうします……」

彼はそう言っただらふらと立ち上がる。

狙撃仕様の64式小銃まで持っていてこうとするのを僕は制した。

「そんなものまた持っていていたら悪夢みるぜ？」

「……持っていない方が、怖い夢になります」

佐久間は疲れた表情で首を横に振った。

階段を下りていく彼の背中が、酷く小さなものに見えたのは気のせいだろうか。

結局、リオミアのことはまた今度相談することにしよう。

今度があるのかは分からなかったけれど。

## 第24話 義勇兵

「ピユリッツアー賞も夢じゃねえかもな」

朝日もだいぶ昇ってきた時間。

領主の部屋のテラスで、

安全用に日本から持ってきたミリタリーショップの物品の一つである、

ドイツ軍のフリッツヘルメットを被った景は望遠レンズ越しに広がるその光景に息を飲んだ。

小高い丘を超え、現れた集団。

馬にまで鎧をつけ、重厚な鎧に身を固めた騎士達と、それに並走する歩兵隊。

装備のバラバラな部隊は傭兵団だろうか。

警戒しているのか、街とは一定の距離をおいているが、

やがて百人くらいの単位で三個隊を街道へ向かわせ街へ進め始めた。本陣はまだ動かず、先遣を出したのだ。

「自衛隊の人たち大丈夫でしょうか？」

本人は真剣な顔をしているつもりなのだろうか、

どこか間延びした雰囲気や衣緒が景に尋ねる。

「大丈夫でいてもらわないと困るよ。あたしらの命だったかかってんだから」

「ですよねえ」

この緊迫した状況下においても、彼女らはまだマイペースだった。すると、景はセッティングしていたTVカメラを操作すると、突然緊張した表情に変わってマイクを持った。

「見てください皆さん！ 遂に帝国軍残党と思われる軍団が街道から姿を現しました！」

信じられない光景です。隊列を組み、戦旗を翻しながらこちらへと向かってきます！」

彼女はあくまでドキュメントを撮るつもりだった。

遂にその時を迎えてしまった。

敵は驚くほど予想通りに現れた。

その予想通りさが、逆にどこか不気味なものを感じさせる。

（いくらなんでももう少しこちらの動きを探ってくると思ってたけど……）

敵の指揮官がバカなんだろうか？

いや、敗戦後もこうして残党を集め、本国の反撃作戦が始まるとそれに呼応して決起するようなぬかりない相手だ。

そんな初歩的なへまをするとは考え難かった。

何か、他に理由がある？

そのことが頭の隅に引っかかりつつも、完全武装に身を包み、六四式を手にして防衛拠点である議事堂に待機していた僕は無線に叫んでいた。



「佐久間三曹！ 状況報告！」

『A路より騎士一個小隊、歩兵二個小隊。B路より歩兵一個中隊。威力偵察と先遣の両方でしよう』

街を見下ろす鐘楼から佐久間が双眼鏡で見て取った情報を送ってくる。

「大通りを通ってここを制圧しにくる気だな」

僕はこの三ヶ月で作り上げた街の地図（まさか有事に使うとは予想していなかったが）を広げてそう判断した。  
いよいよか……

戦闘に備えて二週間。覚悟はしていたつもりだが、不安は隠しきれない。

不安、といえはリオミアのことだ。

僕は結局、彼女に対して何も根本的な解決をしようとせず、今を迎えていた。

昨日の今日だから、今はそれどころではないから。

……問題の先送り。ダメな日本人の性質が迷彩服着て歩いているのが、僕だ。

はあ、と深呼吸に見せかけたため息をつく。

いいのか、リオミアが敵の可能性だって捨てきれないんだぞ？

そんな彼女にあの館を守らせて。

いや……

いいのかもしれない。

元より、僕がこの街で戦おうと思った最大の理由は、他でもない、彼女を守るためなのだから。

彼女が僕に見せていた全てが嘘だったとしても、僕の方から彼女を裏切りたくないんだ。

それよりも……

(惚れた弱みで……部下と街の人を巻き込んで戦争か?)

それこそ、いいのか?

彼らの純粋な善意を食い物に、矮小な自分の目的を果たそうとして  
いる。

僕は、人でなしなんだろうか……

「領主さま!」

沈んだ顔でいると、隣から声をかけられた。

義勇兵の少年が、散弾銃を手にとりこりと笑っていた。

戦場にいるのに、自衛官という職業として戦う立場にある僕よりも  
場慣れしているように見えた。

「領主さま! この戦いに勝ったら、自由が待っているんですよ  
?」

唐突な問いかけに、僕は一瞬、言葉に詰まる。

見ると、周囲の義勇兵達も固唾を飲んで僕の言葉を待っていた。

でも、そうだな、考えてみれば、確かにその通りだ。

「……ああ、自由で、少なくとも飢えないし、虐げられない未来が  
待ってるよ」

そういえば、少年兵達の戦う理由というのを、そこまで踏み込んで  
聞いたことがなかった。

陣地構築やらで忙しく、彼らとちゃんと話した機会は少ない。

それでも、土気旺盛に彼らは僕の言うことをよく聞いてくれていた。  
彼らの戦う理由は、何なんだろう?

僕のような、惚れた女のために戦うなんてことはないだろう。自由。

そう、そういった崇高な何かのために武器を手を取っているんだ。いいな。羨ましい。

ファンタジーものの映画や小説に出てくる、英雄だとか、それに賛同する若者そのものだ。

自由……か。

僕はそんな曖昧な何かのためには戦えそうもない。俗物だよ全く。

「へへっ！　じゃあ絶対に負けらんないや……妹とかあちゃんを守らないと」

「え？」

少年兵は恥ずかしげに僕を見た。

周囲にいる少年兵達も、口々に言う。

「領主様！　おいらこの戦いで活躍したら、報償で農場を作りたいんだ！　家族みんなで暮らせるように」

「俺は村の女の子達を帝国兵から守りたい！」

「領主様は帝国軍を半年で大陸の半分から叩き出した軍人なんですよね？」

「だから、俺達の命、領主様に預けました！」

「そうだそうだ！　領主様がいれば何も怖くない！」

少年兵達は顔を輝かせていた。

僕は農民や町人、山人といった雑多な服装の上に散弾銃の予備弾を巻き付けた彼らの中、

ただ一人、迷彩服にヘルメットという「職業兵士」の姿でいた。

彼らは、自分達とは違う異世界のその戦闘服の姿を過信することで、

この戦いが絶望的ではないと信じているのだ。  
そして、そんな彼らが信じる、自由と未来……  
それは、他でもない、大切な誰かの平穩に他ならないんだ。  
僕だけじゃない。

理想なんか捨てて、誰かのためだけに命を賭けるのは、何の恥でもない。

守ろう、彼女を。

そして信じよう、リオミアを。

僕はそのためにここに残った。

吹っ切れた思いだった。

僕は、少年兵達の顔を見渡す。

「ここまでできて言うことはもう何も無い。行くぞ、みんな！」

「おおー！！！」

不安は隠し切れないなら、紛らわすしかない。

僕は議事堂内から出ると、広場に待機していた散弾銃を手にした少年志願兵たちをも睥睨し、出撃を告げた。

兵士達の士気は意外にも高い。これなら善戦も期待できるかもしれない。

怖いさ。正直怖い。

でも、戦わねば、もっと怖いことが起きる。

戦争するのはそんなものだ。

鬱になってる場合じゃないな。

これから起こる全ては、館に残ってるあの二人が記録してくれるだろう。

俺の生き様みとけっつか、なんだかなあ。

「三尉、こっちです」

先に待ち伏せ場所である商店の屋上に待機していた前島が手招きしてくる。

僕は背後の少年兵たちに作戦通りにするよう指示し、前島のいる屋上へ行くために建物内に入っていった。

屋上に上ると、道を挟んである向かいの建物の屋上に銃を持った兵士たちがちゃんと位置についているのを確認する。

向こうは僕が見ているのに気付くと、親指を立てて準備完了を伝えた。

僕は苦笑してしまった。これではどっちが自衛官が分かったもんじやないな。

僕も気合をいれないと。

「爆弾はうまく隠してあるな。よし、じきにここを奴らが通るぞ。」

「タイミングが重要だ」

「分かってますって」

前島が点火器の安全装置を外しながら応える。

！

馬の嘶き、鎧の衣擦れ音。

来た。

僕はこちらよりも早く気付いたのか、こちらをじっと見ている向かいの建物の兵士に頷いて見せた。

すると全員が気取られぬように身を伏せる。

無言でいると、ヘルメットをコンコンと前島がつついてきた。

そして不安そうに二個ある点火器の内的一個、前方を塞ぐ方を僕に渡してきた。

自分が戦闘の口火を切るのが不安なのだろう。

いいさ、やってやる。もとはといえば僕が発案者なんだ。

僕は点火レバーに指をかけた。  
不気味な静寂が辺りを支配する。

「アルゴス殿、やけに街が静かだと思いませんか？」

部下の言葉に壮年の騎士隊長は頷いた。

「この気配、ただごとではないな。

家にもっておるのではない。誰もいないのだ」

そう呟くと、彼は伝令兵を鋭く呼んだ。

「市内の様子をつぶさにケイルダイン將軍にお伝えしろ」  
「はっ！」

伝令兵はすぐに後方へと走り去って行った。  
それを見送ってから、騎士が上官に尋ねる。

「して、これからいかが致しますか？」  
「しれたことよ」

壮年の騎士隊長は鼻で笑った。

「この街に駐留する異世界軍の連中は我らに戦術を用いて対抗しようとしておるのだ。  
確か三人と言ったな。

街がこの様子だと、民を徴兵して待ち構えておるつな」

「では後続を待って……」

まだ若い部下に、騎士隊長は不適に笑った。

「兵力差は衆寡適さずといえど、しょせんは農民どもの寄り集まり。我らの敵ではない。ここで待って怖気づいたととられては心外よ」

彼はそう言うと、腰の長剣をズラリと抜き放った。

「聞けえい！」

ゴーストタウンとなり、静寂に包まれている街に朗々と響き渡る大声。

「我らはヴェルアの騎士団にある！

貴様らの主であるぞ！

大人しく異世界人の身柄を差し出せば褒美を取らそうぞ！ だが…

…」

高々と剣をかざし、圧倒的でさえある自信をもって騎士隊長は宣言した。

「歯向かうのであれば容赦はせんっ！

一族郎党生きておれると思っでないぞ！！」

これだけ静まりかえった街だ。伏兵がいるのであれば十分に聞こえたはず。

なんの反応もないことに敵は近くにはいないと踏んだ騎士隊長は掲げていた剣を闘いの後のように降ろした。

「ふんっ！ 腰抜けどもめ……」

彼は嘲笑を浮かべて馬腹を蹴った。  
黒毛の軍馬が鎧をきしませて力強く歩み出す。

だが、次の瞬間、凄まじい轟音が辺りをまるで雷鳴のごとく震わせた。

兵士達が耳を抑える暇もあたえず、今度は目の前に炎の壁が聳え立った。

「ぎゃああああああ！？」

一人前進していた騎士隊長は、その炎の中に飲み込まれ、断末魔の叫びを上げて炭と化した。

「くっ！？ 馬鹿な！ 炎の精霊を呼び出したというのか！？」

その炎の強力さに誤解した部下の騎士が叫ぶ。

TNT爆薬で爆破散布されたハイオクガソリンの燃焼力は半端ではない。

「一旦退くぞ！ 後方に伝令を……」

副官であった騎士が思わぬ攻撃にパニック状態となった馬と歩兵を制しつつ力の限りに叫ぶが、  
炎を前にして自分の跨る馬すらも恐慌に陥り、それどころではない。

「おのれ……この借りは必ず……」

返すぞ、といい終わらぬ内に、彼はハツとした。

両側の建物の屋上に、何かを手にした者たちがいつの間にか現れているではないか。



「しまった！ 伏兵だ！ 早く退…」

彼の叫びをかき消すように、またあの爆音が地を震わせた。見ると、元来た道、つまり退路が炎に塞がれている。

してやられた！ 全ては敵の術中だったのか！？

彼が咄嗟に悟った瞬間だった。

パカッ！

何かが背中に叩きつけられ、彼の纏っていた鎧に当たって砕け散ったようだ。

投石か？ 彼は自分の経験からそう判断した。

しかし、それは間違っていた。

何かが猛烈な熱に焼けただれる音を聞いた。

それが自分の体であることを理解したのは、周囲で火達磨になってのたうつ歩兵達を馬上から見ただった。

そして彼は馬から振り落とされ、そのまま自分が焼けてゆくのを、朦朧とする意識の中で感じていた。

「火炎瓶はあと何本ある！？」

「あと一個！」

「それ投げたらバリケードまで退却する！ テムズたちもだ、いいか！」

『はい！ 領主様！』

携帯無線に叫んでから、僕は背負っていた六四式小銃を手に取り、ポルトを引いて初弾を送り込んだ。

退却を支えるのは、こいつと前島の一丁の六四だけだ。

少年兵らに正確な射撃は期待できない。

「前島！ 急げ！」

「ちよつとチャツカマンがつかなくって……あ、ついたついた！」

前島が手にした火炎瓶に点火したのを確認し、僕は小銃を屋上から下へ構えた。

思わずそこに広がる光景に息を飲む。まさに阿鼻叫喚の地獄絵図だった。

ゴムを溶かし粘着性を高めた特殊火炎瓶の炎が燃え移りのたうちまわる兵士たち。

すでに焼け焦げた死体。

主を失い、パニックになった軍馬は味方の逃げ惑う歩兵を蹴り殺している。

畜生！ 自分でやつといてなんだが、最悪だ！

「行け！ 撤収ー！」

僕は叫び、銃口を『人』に向けたままトリガーを引き絞った。

「始まったようね」

通りのあちこちで上がる戦場の喧噪に耳にした彼女は事も無げに咳く。

彼女は裏通りで最も高い建物の上から開戦の狼煙を見物していた。

シーフマスター・サキュアだった。

ほとんどの住民が避難してしまった街の中で、

娼婦などの非戦闘員を除けば彼女の息のかかった街の住人はそのほとんが裏通りなどを中心に残留していた。

無論、そのことをあの異世界の軍隊の将校も、帝国軍のケイルダイ  
ンも知りはない。

「せいぜい潰し合いなさいな……」

サキユアはそう楽しげに口の端を歪め、煙管から紫煙を吸い、艶め  
かしい吐息と共に吐き出した。

そのために幾度となく危ない橋を渡ったのだ。

帝国側の関係者を街から遠ざけ、一方で領主側にも知られないよう  
工作する。

数日前には、市内に偵察にやってきた帝国軍の密偵を事故に見せか  
けて殺害までした。

そのお陰で、今こうして両軍とも正面切つての大戦争となっている。  
バカな男達ね、と彼女は蔑みの色を瞳に宿っていた。

「戦禍の中で狂い踊るがいいわ」

そう酷薄に笑う彼女の背後に、一人の男の姿が現れた。

「……決心は変わらないのね？」

「はい。申し訳ありません。今まで世話になっておきながら……」

この街で帝国時代の迫害を生き抜いた光母教会司祭・アールマンだ  
った。

サキユアとは対照的な質素な紺色の僧衣姿の彼は、彼女に丁寧に頭  
を下げた。

「私は、あの異界の若者を信じてみたくありません」

彼の背には、戦場へ出かけるための旅道具一式が背負われていた。

サキユアは面白くなさそうに言う。

「あの領主サマ、長生きできるとは思わないわ」

アールマンは心優しい壮年男性特有の柔和な笑みを浮かべた。

「ならば、その死に様を見たくあります」

彼女が煙管から吸い殻を叩き出す。

「ふん、相変わらず頑固ね。アールおじさん」

「サキユアお嬢様も、素直でないのは変わりませんな」

二人は周囲に誰もいないのを知った上で、微かに過去を知る者同士で笑みを浮かべた。

「行きなさい。ギルドに仇成すのでないなら止めないわ」

「ええ。貴女も、自身の信じるもののために生きられるが良い」

「端からそのつもりよ。信じるものを失った人間は生ゴミと一緒にだわ」

彼女はアールマンが去っていくのを見送りもせず、ただ彼方で行われる戦闘の喧噪を眺めた。

爆音。

おそらく、帝国軍ではなく、異世界の兵士達の作った兵器のものだ。思ったよりもやるわね、と彼女は感心する。

あの純粹さと気弱さを併せ持つ、とどのつまりただの優柔不断なガキにしか見えなかった領主が指揮しているとは思えない。

何が彼をそこまでさせるのか、彼女は気になった。

「……さて、異世界の軍人さん、アナタは一体何を信じるのかしら？」

彼女は自分の信念を曲げるつもりはなかった。

だが、そのことだけは、確かにアールマン同様に気になったのだった。

## 第25話 合戦

市内から乾いた銃声が風に乗ってくるかのように微かに聞こえる。メイド服の少女はそれに耳を澄ましながら、いつもは付き従っている若き領主の身を案じていた。遠い国から、いや、遠く、決して出会うはずのない異なる世界よりやってきた主人。

『この館を頼むよ』

彼の命令は確かに彼女の仕事であった。それゆえ、反論の余地もない。

「領主様……私は……」

きゅっ、と両手で自分の胸を押さえる。不安だった。いや、違う。それだけではない。

（寂しいの……リオ？ あの人が死んでしまいかもしれないことが……？）

リオミアは心の奥底に寂寥感が存在することに戸惑う。

彼女は今まで大勢の死を見てきた。

善人も、悪人も、男も女も、老いも若きも……

彼女にとって、死は身近だった。

身近でないのは、自身の死だけだ。

そのため、誰かの死はいつも抗いようもなくそこに在るものだった。

だが、今は違う。

あの若き主人の死は……

（あの人の死は……私にとって何なの？）

それ以上考えたくなかった。

自分が何であるかを知られることと天秤に掛けられる程の苦悩だった。

「よお。心配なのかい？ あの大将さんが」

同じようにテラスにいたあのニホン人の女性がニヤニヤと笑いながら尋ねてきた。

リオミアはその笑顔が命をかけて戦っている者の話をする態度なのかと腹立たしさを感じたが、表情には出さずに素直に応えた。

「はい。もちろん」

「ふうん。大した人望やねえあの自衛隊員」

その物言いにも反感を感じずにはいられない。

しかし、こんな状況下でこの二人といざこざを起こしたところで事態は好転しないし、労力の無駄でもあると思った彼女は、意に介していないように振る舞った。

「まあ……命令無視してまでここに残るくらいだから、案外根性ある性格なのかもしれんねー」

そっけなく呟いてから、彼女はまた望遠力メラの調整にファインダーを覗いた。

リオミアは、昼食の炊き出しの手伝いをしようかと厨房へ向かおうとテラスから出ようとする。

そういえば、こうして他のメイドと上下関係以外で関わるようになったのは、

やはり彼がここへやってきてからの変化だ。

「あっ！」

そのとき望遠カメラを覗いていた景が声をあげた。

「どうしました？」

「本陣が……動いた」

それは、更なる激戦の幕開けであった。

「伝令！ 市内にて敵の抵抗激しく、アルゴス騎士隊長隷下の部隊はほぼ壊滅！  
傭兵どもは現在途中にて止めさせておりますが、いかがいたしますか？」

伝令兵が息を切らせて本陣に駆け込んできた。

彼を見下ろす総大将ケイルダインは落ち着いた口調で伝令兵に尋ねる。

「異世界軍の魔導兵器か？」

「い、いえ。油を瓶につめ、それに火をつけて投げる手製の武器に  
じつじつです」



ざわ、とその場の兵士達が囁き合う声が聞こえたが、ケイルダインは喉の奥で軽く笑う。

「異世界軍には知謀に長けた将がおるようだな」

ケイルダインは表情に変化は表さずに呟く。

二ホン人は全ての民が読み書きは言つのが及ばず高度な数学まで解するという。

軍の将校ならば三人の兵力でも勝てる戦略を考えられないわけでもないとは、ある程度予想はできていた。

しかし諜報能力のない彼らが我々の襲撃を知っていたとなると、サキユアが裏切ったのは確実なようだ。

あの女にはゆくゆくしかるべき報いを受けてもらわねばなるまい。が、その前にこの街を落とす必要がある。

「將軍!？」

「俺が出る」

「ですが將軍自らが出陣なさるのは危険かと……」

「これが我ら騎士団の戦い方よ」

ケイルダインは部下の心配をよそに精鋭の部下達を従えて街の方へと馬を進めた。

たとえ馬鹿げた騎士道精神だとしても、これが彼らの武人たるプライドであった。

『武人としての志など、とうに捨てた』

だが、彼は今なお、亡霊のようにそれに取り憑かれているのだ。いや、戦場という、そうであることを許される場においては、彼は今だけはかつての栄光の自分に帰ることができたのかもしれない。

「な、なにをしておるか! 將軍が動かれたのだ。本陣も動くぞ!」

「おおお おおおー！」

しかしケイルダインがとったこの行動は、計らずとも自衛隊が最も恐れていた事態を招く結果となった。

自衛隊は各個撃破を目標としてたが、もともとが寡兵である以上もつとも危険な状況は敵の波状攻撃によって対応しきれなくなることであった。

そして、これからその最悪の状況に転じるのに、そう時間はかからなかった。

「佐久間三曹、様子はどうだ？」

評議会の二ブロックほどの距離にある防衛線に到着した僕らは、前方の道を睨んでいた佐久間の側に駆け込んだ。

「こつちが待ち伏せしているのを察知したのか、途中で止まってますね。」

「なにかしらの作戦を立ててやってくるはずですよ」「そうか……」

とにかく、緒戦は圧倒できた。これで少しは時間が稼げるはずだ。

「猟兵隊は一列に布陣しておけ、敵がきたら命令に従って一斉射撃だ」

「はいっ！」

猟兵隊、つまり銃を持った兵士達だ。まあ、鉄砲隊では少々ダサイからな。

「ここは俺に任せて佐久間は鐘楼に登っておけ。  
敵はただでさえ多いから、その指揮系統を乱さないと勝ち目は薄い」  
「了解」

佐久間は六四式狙撃銃を抱えると後方へ下がって行った。

「ふう……」

緊張は途切れないが、ヘルメットを脱いで息を整える。  
さっきは初めての实战だった。

……そして、初めて人を殺した。  
剣や槍とは違って、ずいぶんとあっさりとしたものだ。

銃の発明が、いかに戦争を簡単なものにしてしまったかよく分かる。  
手が震えていた。  
情けない。

リオミアを守ると誓ったそばからこれだ。

「三尉、無線が鳴ってますよ」

「ん？ ああ」

何かを考える余裕もないようだ。

僕は腰からトランシーバーを取り出した。

相手は館にいる倉敷だった。珍しく緊張した雰囲気で、僕にテラス  
から見える光景について説明した。

「なんだって！？ 全軍動いたのか！？」

その情報は最も恐れていた事態を意味した。

「ヤバげな雰囲気すね？」

さすがの前島も緊張している。

僕は頷いて銃のセレクトターレバーを「タ」から「レ」に変更した。ここを突破されれば、もう館まで敗走するしかなくなる。

議事堂はあくまで簡易の拠点でしかない。立て籠もるのは愚の骨頂だった。

敵がどう出てくるのか考えるが、

こんな特殊な状況下では敵がどう判断するかは相手の指揮官の人格まで分からなければ推測は不可能だ。

嫌な予感を感じていると、部下の少年兵が道の奥を突然指差した。

「領主様！ あれを！」

「……！」

道を埋め尽くす人、人、人。

ざっと見えるだけでも五百は下らないだろう。

鋼鉄の鎧と盾に守られた重歩兵だ。これを全面に出しているということ、

こちらが銃火器を保有していることをある程度予想していることになる。

間違いない。敵の指揮官は一度は自衛隊と戦ったことのある奴だ。

敵との距離は約三百メートルといったところか。ショットガンの有効射程距離にはまだ及ばない。

だが、その迫力に圧倒されたのか、怯えた表情で今にも銃のトリガーを引いてしまいそうな兵が何人もいた。

「全員よく聞け！ 指示があるまでトリガーに指をかけるな！」

なんとかバラバラに銃撃してしまうという失態は演じずに済みそう

だったが、

実戦経験のない兵士、それも少年兵が主力ではやはり不安が残る。

「ようし射撃用お意!!」

僕の命令にスラッグ弾を装填した散弾銃が一斉に筒先を並べる。

その光景はまるで滑空銃の時代の歩兵の決戦風景のようであった。

「まだだ……もっとひきつけて」

ゆっくりと歩を進めてくる敵軍に息を飲みながら、僕は不安と緊張に身を固くする。

向こうは徐々に歩く速度を上げてきた。距離は縮まってくる。二百、百九十、百八十……。

「撃えーっ!!」

距離が目測百メートルを切った瞬間、僕は怒号のように叫んだ。

一斉に百丁以上の散弾銃の銃口に閃光が迸り、

ヘルメットをしているにも関わらず、その銃声の大きさに耳が遠くなる。

前方ではスラッグ弾が盾と鎧を貫通した兵士がバタバタと倒れる。

しかし、実戦慣れしているのか大きな動揺は見受けられなかった。

しまった! 銃撃というものをある程度知識として知っているのか!

「ポンプアクション!」

逆に自分の撃った銃の銃声に鼓膜をやられている自軍の兵士達を叱咤する。

兵士らは弾かれたように排莖を行い、次の射撃に備える。

最初の一斉射で倒れたのは五十前後。今まさに抜刀して襲い掛かってきているのが百ぐらい。

「撃てえ！！」

轟音と共に更に半数が倒れる。

僕は白兵距離にまで接近した残りの五十に向けて六四式を掃射した。突撃をかけてきている第一波はこれで片付いた。だが、次の瞬間僕らは我が目を疑った。

「騎兵突撃っ！？」

目先の敵に気を取られ、第二波が既に肉薄してきていることを認識するのが遅れたのだ。軍馬を駆り、旋風の如く疾走してくる騎兵軍がまるで幻影のように目の前に現れた。

「クソっ！ 撃て！」

しかし不意をつかれたためか、猟兵隊の銃撃は組織性に欠け散発的なものとなっていた。

当然、素早く動いている騎兵にはほとんど命中していない。

僕と前島はバリケードに乗り上げるように身を乗り出して六四式を乱射した。

だがその突進力はこちらの火力を大きく凌駕していた。

カシッ

六四式のマガジンの弾が切れたので予備マガジンと慌てて交換する。しかし、六四のマガジンはこんな切羽詰った状況のときほど致命的

に交換しにくい構造になっている。

「うわっ!?!」

なかなかマガジンが入らないことに焦っていると、黒い影がバリケードを飛び越えて乱入してきた。

しくじった! 阻止線を越えられるのは最悪の事態と仮定していたが、こうもあっさりとは破られるとはさすがに予想していなかった。

映画『アラビアのロレンス』ではラクダの騎兵隊が銃で武装した敵軍の拠点を突破していたが、

脆弱な武器で騎兵隊と戦うリスクを甘く見積もりすぎていた。

だが、ここでそうやすやすと退くわけにはいかない。

ここで敵を食い止め損耗させなければ、時間も稼げないので援軍が到着するまでもちこたえられない。

「クソがあっ!」

マガジンをしっかりと装填し、僕は怒涛の如く乗り越えてくる騎士達を掃射でなぎ倒す。

しかし、周囲は既に蹂躪された戦場と化していた。

銃声がバラバラな間隔で聞こえるが、練度の低さと恐怖心から命中している様子ではない。

しかも現代の日本の猟銃は安全対策に欧米のものに比べて装弾数をわざと減らしてあるので、

弾切れに焦っているところを次々と馬上から刺突されて討ち取られている。

その光景に歯を食いしばる。

畜生実戦を甘く見すぎていた!

あくまで自衛隊の強さは組織化されているからだ。

こんなゲリラ戦に毛が生えた程度の戦闘など想定していないから戦

術も粗が多かった。  
だが今そんなことを悔いても仕方がない。  
と

「雑魚どもにかまうな！ 狙うは敵将の首一つっ！」

黒い軍馬を駆り鬼神の如く槍を振るう武将が怒号を上げた。  
奴が指揮官か！

僕はマガジンの残弾を確認して奴の目の前に立ち塞がった。  
相手も、こちらに気付いて真正面と向かいあう。

「面白い」

敵将は、銃口を前に凄絶な笑みを浮かべた。  
ぞつと何かが背筋を這い上がる感覚。

返り血に染まったその男は、不思議なことに恐ろしく雄々しかった。  
戦場という殺戮の場に、一種の美学を纏った存在として君臨する。  
使い込まれているが、一点の曇りもない騎士甲冑姿と、機能性を追  
求し尽くした自衛隊の新型迷彩服に戦闘装具を着用した陸上自衛隊  
員。

敵将は馬を見事なまでに巧みに操り、槍を掲げる。

「我が名はケイルダイン！ ヴェロスニア帝国・ヘステイリア西方  
騎士団？元？騎士団長！

？豪槍のクアン？である！ 名乗れ！ 異界の騎士よ！」

まるで吟遊詩人が朗々と謡うかのような勇壮さを併せ持った声だっ  
た。

その瞬間に理解できた気がした。

この男は、この名乗りを上げるために、敗走の屈辱を生き、雌伏の



苦痛を耐えてきたのだ。

覚悟が違う。

このケイルダインという男は、日本人から見れば間抜けにしか見えない、この名乗りを上げる行為に命をかけたのだ。

騎士として、叶わなかった敵にその槍を突き立てんがために。

僕は応じた。

こっちだって、冗談で自衛官やってるワケじゃねえんだ！

「……日本国陸上自衛隊エクト暫定管理小隊・小隊長！　？簿記2級？の辻原だよ！」

悪いな！

僕はアンタのその名誉に付き合えるほどの人間じゃないんでね！

最後の最後に残っていた意地を張り、僕は百戦錬磨の敵と相対していた。

## 第26話 意志

時は既に夕刻になろうとしていた。

帝国兵が民兵の死体の散乱する議事堂周辺の片付けをする中、議事堂内には新たな支配者である帝国軍の本陣が移されていた。

「……伏兵とは小癩なことよ」

豪奢な椅子にどっかと座っているケイルダインは従軍神官戦士に傷の手当てを任せていた。

左腕を貫通されたが、屈強な彼ならば癒しの魔法をかけておけばすぐに治癒するだろう。

あの二ホン兵と相対したとき、豪槍を振り上げんとした瞬間に遠方から狙われたのだ。

あと数瞬動くのが遅れていたら、心臓を貫かれていたに違いない。

「どうか自重なさってください。將軍は我らの象徴なのですから」

包帯を巻き終えたヴェルア教のまだ若い神官戦士は心配そうに眉をひそめる。

しっとりとした黒髪が印象的な邪悪なる女神官の微笑みだが、ケイルダインは不快に感じなかった。

「強者を打ち倒してこそ武人というものよ。ヴェルア教のように利己心のみでは戦はできぬ」

しかし本心とは違った答えを彼は無意識の内に返していた。

が、信仰する宗教を否定的に言われたにも関わらず、彼女はどこかおかしそうに微笑む。

「ふふ……それでこそ弱者を支配する強者に相応しゅうございます」  
そつと目を伏せ、邪悪なる神々に祈りを捧げる。  
願わくば、この男に加護あらんことを。

「俺は神仏にすぎるほど柔ではない」  
「…そうでしたね」

くすりと柔和に微笑み、彼女は祈りを止めた。  
その彼女の微笑みから逃げるように、ケイルダインは椅子から立つ。

「だいぶよくなった。行ってくる」  
「ご武運を」

主の出陣に恭しく礼する神官戦士の女は、どこか悲しげにも見えた。

「初日から籠城するハメになるとはな……」

テラスから、敗走してきた日本側の兵士らを見て景は呟いた。  
総力戦ではやはり兵力も練度も差がありすぎたのだ。  
既に兵の半数以上を失い、こちらから打って出ることはできなくなっていた。

籠城で時間を稼ぎ、援軍の到着を待つよりない。  
しかし、無線からもたらされる情報といえば最前線で苦戦する陸自の断片的な情報しかなく、  
果たして援軍がくるのかどうか。

「いよいよマズくなってきちゃったね……」

さすがに不安になった景は傍らにいる後輩に呟いた。しかし、いつものやんわりとした言葉は返ってこない。

「イツちゃん？」

振り向くと、いつの間にかどこかへ消えてしまっている。気が抜けたので煙草でもとポケットをまさぐっていると、兵士らのへたり込んでいる庭の中で見覚えのある姿が目にとまった。

「あつ………!!」

庭の負傷兵らの中で、ユニクロの服がやたらと目立っている。

彼女は確か医大生だったはずだ。

いつもの抜けた態度ではなく、きびきびとせわしなく動いているのが新鮮だ。

「ほかに誰か怪我した人はいませんかあ〜？」

真剣なのだが間延びした声で兵士らに呼びかける。

一見して頼りないが、そんな彼女を若い兵士達は我々の世界でいうナイチンゲールに出会ったような眼差しで眺めていた。

白衣は着ていないが、彼女のその柔らかな笑みは人を安心させる。

「へえ……イツちゃんも頑張るじゃん」

景は何もしていない自分に少しだけ居心地の悪さを感じつつ、苦笑を漏らした。

横目にちらりと佐久間が彼女のそんな姿を一瞥していた。

「あーっ！ 佐久間さんダメですよお！」

その視線に気付いたのか、彼の方へ振り向いた衣緒は突然素っ頓狂な声を上げた。

さすがの佐久間もなんのことか分からずにぼかんとしていると、つかつかと歩み寄ってきた彼女に腕をつかまれた。

「おっ…おい」

「じつとしてください！ 怪我してるじゃないですか」

見ると、確かに二の腕を少し切ってしまっている。

退却の途中、突撃してきた騎兵にランスを投げられ避けきれずにかすめてできた傷だった。

しかし、この程度の怪我など、演習ではザラだ。特別に治療を受けるようなものではない。

「いい。これくらい赤チンつけときゃ治る」

「だぁーめですよお！ ちゃんと消毒して包帯巻いておかないと、破傷風になっちゃいますよお！」

ぶっきらぼうに言う彼に、意外にも退かずに彼女はまるで聞き分けのない子供に言い聞かせるように諭すと、

救急キットから消毒アルコールと包帯を取り出してさっさと手当てを始めてしまう。

彼はそんな彼女に当惑しながらも、あの笠間議員の娘に情けをかけ

られていることに大きな抵抗を感じていた。  
気合の入った職業自衛官には、その特殊な立場上か融通が利かない  
人間が多い。

しかし見方を変えれば、極限状況下で耐え抜く自らのキャパシティ  
を信じるプライドが高いということでもある。

面子が命。これはアウトローの佐久間にも例外ではなかった。

「離せ。これくらい自分でできる」

今度は邪険に振り払うと、銃を背負い直してさっさと去ろうとする。  
だがさすがに悪態が過ぎたか、と彼も思った。

「自衛隊の人はガンコですねえ」

意に反して、うふふ、と柔和に笑って彼女は救急キットをごそごそ  
とまさぐる。

なにをしているのかと思えば、手当てに必要なものを用意している  
ではないか。

「はい。そういえば佐久間さんって自衛隊のヒトですもんね。これ  
くらいできますよねえ」

申し訳なさそうに苦笑し、彼女は佐久間に用具を差し出す。

「あ、ああ。まあな」

彼はいまさら謝ろうに謝れず、どこか気まずい思いでそれを受け取  
った。

「気をつけてくださいね。私、やっぱり暴力はいけないことだと思

います……」

「そうだな、それは同感だ」

彼女は自分の意見に同意されたことに思いがけない驚きを感じた。佐久間は精悍な顔に疲れた笑みを浮かべた。

「自衛隊や戦争知らない奴ほど、無責任に反戦って叫んだり自衛隊の国軍化だとか叫んだりするもんさ」

現役隊員の本音がちらりと漏れる。

そのどこか哀愁の漂う横顔に、衣緒は微かに胸の鼓動の高鳴りを感じた。

それが異性への昂りなのか、彼への純粋な驚きなのかは彼女自身分からない。

「大変なんですねぇ……」

その言葉に、よく分かっているようなぼやとした表情で、彼女は労いの言葉を返した。

いつも佐久間なら、このクソ文民が、と内心に悪態をつくところだが、

今回は不思議と感傷的な気持ちになる。

（ああ……そうだったな……）

佐久間は思い出した。

他でもない、自分が何故自衛隊に入隊したのかだ。

（俺は……この女のような人を守りたかったのかもかもしれない……）

純粹だった、戦場を知ってしまった前の自分にはもう戻れない。だが、それを思い出すことはこうしてまだ出来る。

そうである限り、自分はまだ、戦える。

ネリエントスで国民を救えなかった汚名を引きずり、純粹に自衛官でいられなくなるごと、

自分が握る銃は？誰か？のためのものであり続けられる。

「そう言ってくれる国民が、もっといってくれば、自衛隊ももっと変わった組織になってたのかもしれない」

珍しく皮肉げに笑みを浮かべ、彼は去って行った。

「佐久間さん……」

衣緒はそれ以上彼を追うことはしなかった。

どこか、彼が悲しそうに見えたから。

いや、それだけならおせっかいにも彼女は追いかけただろう。

だが、彼には何か別のものがあった。

悲しさの中に、何か灯火のように燃えるものだ。

それが、現代の日本にあっては失われつつある、武人の矜持であるとは彼女には分からなかった。

「お嬢さん」

と、衣緒は不意に声をかけられた。

声の方を振り返ると、そこには僧衣姿の中年男性が立っている。

神に仕える者特有の、見る者に安心感を与える姿だった。

衣緒は素直に答えていた。

「は、はいー？ 何でしょう？」



「いやなに、私は治癒魔法を使えますゆえ、あなたを手伝えればと思ひましてな」

「治癒魔法!？」

衣緒は素っ頓狂な声を上げていた。

医大にいた頃、その未知の術の存在は学会を揺るがしていた。単なるプラシーボ効果による暗示効果でしかないと強硬に主張する学者もいれば、

全く新しい人間の持つ能力の発露であり、もしかしたら現代世界の人間にはないこの世界の人類のみが持つ特殊能力かもしれないと主張する者もいた。

だが、共通するのは、治癒魔法が人を癒すことができるのと、現代科学ではまだ何一つその原理を解明できていないことだけだ。

その治癒魔法を目の前で実際に見ることがができる。

衣緒は純粹に医学を志す人間として興味に顔を輝かせた。

「はい！ むしろこちらからお願いしたいくらいですよー！」

「それは良かった」

「こちらへ来てくれますか？ 怪我人のいるテントがあるんです」

衣緒は早速彼を案内することにした。

「私は笠間衣緒っていいいます。魔法使いさんのお名前は何て言うんですかあ？」

「アールマンと申します。見ての通り、光の神に仕える者ですよ」

「へえ〜！ かつこいいなあ」

アールマンは、先刻の彼女と一人の戦士の会話を悪いとは思いつつも盗み聞いていた。

やはり、ここへ来て正解だったと彼は思う。

（ここには？意志？の力を持った者がこんなにもいる。私にも出会えるのやもしれない……）

アールマンは館を見上げた。

（神が求める？英雄？達に）

領主の執務室に集合した自衛隊員三人と志願兵の指揮官らは椅子に腰を下ろし、

どこか憔悴した面持ちで顔を俯かせていた。

そんな中で、僕はあえて声を強くに語りかけた。

「予想以上に敵軍が手強かったのは今日の戦闘で十分に理解できた。こうなったら持久戦で敵に損耗を強いるしかない」

ここで弱気になつてはダメだ。

失策によつて戦局は大きく悪化した。だが、それを悔いたりしている場合じゃない。

大勢死なせてしまった。だからこそ僕はもうそんな過ちを繰り返したくない。

責任の重大さに気が遠くなりそうだが、佐久間が上官である僕を殴つてまで奮い立たせてくれた意味が今なら分かる。

あの敵將軍を討ち取ろうと真正面から向かいあつた瞬間、鐘楼に登つた佐久間が『総司令官がなにしてる！』と怒鳴つてきた。

ハツとしたとき、目の前で豪槍を振りかざそうとした敵将が佐久間の狙撃を受けて怯んだ。

周囲の味方がほぼ壊滅していることに気付いた僕はその時咄嗟に退

却の声を上げて館に向けて駆け出していた。

その後、館で佐久間と前島に合流したが、出会い頭に僕は佐久間に殴り倒された。

総指揮官はどんな状況下でも生き残ることを考えなければならない。漫画に出てくるような最前線で戦う将軍など馬鹿以外の何者でもない、と。

指揮官を失った軍は間違いなく死ぬ。しかし兵が半数以下に減っても指揮官さえ生きていれば戦闘の続行は可能だ。

防衛大出はそんなことも分からないのかと佐久間は今までで最も憤慨した様子で叫んだ。

極限状態での戦闘を経験したことのある彼だからこそ沸いてくる感情だったのだろう。

「城壁を突破されないように猟兵を配置。

佐久間は狙撃に、俺は前線指揮を、前島は主に銃が作動不良を起こしたりしたのに対処してくれ。

それから、夜は夜襲に備えよう。

敵は馬鹿じゃない。こつちの隙を見逃したりはしないぞ」

細かい指示を徹底し、僕は他に盲点がないかを尋ね、誰も意見がなかったのを確認すると、

皆の顔を見渡して拳を軽く握った。

「半数以上の兵を一気に失うなんて、理論的には壊滅もいいところだけど、俺たちはまだ負けてなんかいない。

明日を信じるしかないんだ。気合を入れていけ！」

「はっ！」

「いえっさあ」

その夜、二回に渡って襲撃が起こったが、照明弾とごく少数だがミ

リタリーシヨップからの拝借品である暗視ゴーグルのおかげで切り抜けることができた。

夜が明けるところには、皆交代で寝ることができ、少しは立ち直ってきたかもしれない。

備蓄食料は十分にあるし、兵士の士気は最初に比べると低いことは否めないが深刻なほどではない。

無線に呼びかけ続けている以上、ここが今どういう状況なのかは司令部に伝わっているはずだ。

増援がいつきてくれるかは分からないが、倉敷や笠間がいるという事実を考えても、なにかしらの対応策は講じられるだろう。

それまで、敵を食い止められればこちらの勝利だ。それまで……なんとか。

「こいつあ一体どないな風の吹き回しなんでっしやる、キャプテン？」

コックピットの副操縦士席に座り、計器のチェックをしていた少尉がテキサス訛りの声で尋ねてきた。

「さあな、私には分からん。ただ、上の命令らしい」

その事務的な口調に、気分屋の少尉は臍を曲げる。

管制塔からは離陸の許可はまだ出ていない。

それさえも、より遅れることで日本側に強烈な印象を与えてやろうという上層部の意図のように感じられ、大尉はため息をついた。

「はんっ！ ジャップの政治家の娘を助けるためやる。かないませ

んわホンマ」

「言つな少尉。SDFが負け始めたんだ。我々がいよいよ、騎兵隊自衛隊の役割をする時が来たわけだ」

「……それも気に入らへんわ。今の今まで高見の見物しといてからに、恩着せられる場面でヒーロー気取りですかいな」

気分屋で皮肉屋な少尉とは衝突も多かったが、その考えには同意だった。

だが、と大尉は思う。

「私達の国はそうやって立ち回って強くなってきた。今だってソウ」  
コックピットへやってきた曹長が、大尉の内心を代弁した。

先住民族の浅黒い肌をした大柄な曹長は、いくら狭いとはいえ航空機の中では広々としたこの機体の中にあつてなお窮屈そうだった。

「燃料と弾薬の積み込み八完了シタ。いつだって行けれ」

「了解した。曹長。ここから長い、部下としばらく休んでいてくれ」  
「了解ダ」

曹長は頷き、コックピットを後にしようとして、ふと立ち止まる。

「……少尉、私ハこの戦、興味ガアル」

「なんでやの？ ジャップの小間使いにされるのがそんなに楽しいんか？」

そんなんやから先祖が居留地送りにされるんや」

大尉はこの二人の会話に最初はぎよつとしていたが、今は苦笑いするだけだ。

口は悪いが、そんな差別的なジョークが言えるほどの仲なのだった。

「違う。あの館で戦っている日本のサムライ達に興味がある。彼らは、こんな状況デモ逃げなかつた。私の先祖と同ジ。ダカラ、会ってみたイ」

「英雄、だな」

大尉も同意する。

あれだけ不利な状況下で、一切怯まずに戦っている日本の兵士達には、軍人として敬服していた。

国民を守るために、踏ん張っているのだ。

「……せやな、まるでアラモ皆や」

いくら少尉とて、軍人としてそれは理解できるようだ。

「我々の国なら、勲章ものはずだがな……」

だが、大尉はだからこそ彼らが気の毒だった。

この日本という国では、そうした英雄は受け入れられないのだ。

英雄よりも、スケープゴートを欲する国。

彼らは、おそらく何の名誉も受けられないだろう。

ベトナム戦争の帰還兵のように、どれだけ勇敢であろうと、どれだけ悲壮であろうと、報われはしない。

「曹長、だから我々は」

「ソウダ、絶対に彼らを見捨てナイ」

「せやせや、政治家のために行くんやない。彼らのために行くんや」

彼女達は、コックピットで三人、拳を突き合わせた。

「アメリカ合衆国軍人は、仲間を決して見捨てない！」

沖縄の在日米軍基地から、一機の航空機が、真夜中に密かに飛び立とうとしていた。

## 第27話 優しさ(前書き)

中盤まで2004年版と同様の展開ですので、既読の方は読み飛ばされても問題ありません



## 第27話 優しさ

陥落した評議会議事堂の近くには無人となったヴェルリアの教会があった。

今、その祭壇の前では異様な光景が広がっていた。

供物の如く積み上げられた死体の山。

それを囲うように魔方阵が描かれ、その前ではあの神官戦士が呪文の詠唱を一心不乱に続けている。

周囲に漂うのは異界からの瘴気なのか死体の腐臭なのかは分からず、混沌たる空気が充満している。

「冥界の皇。屍人の君主。豊穰と対をなし殺戮の海に生まれし邪なる権威よ。

ここに我が盟約に従いその眷族を差し出せ。

血を欲するか？ 生者が憎いか？ 欲望に忠実たる誇り高き獣どもよ。

現れよ！ 欲するがままに！」

鬼気迫る祈祷に應えるように、死体の山がまるで生きているかのよう蠢いた。

中からなにか、タールのような黒い液体が滲み出してくる。

が、そこまで変化が起こった時点で、呪文を詠唱する女が胸を抑えてその場に突っ伏す。

肩で息をし、まるで何者かに喉を締め付けられたかのように浅い呼吸を繰り返す。

その傍らに、微かなランプの光に大男の影が映し出された。

「どれくらいかかりそうだ？」

「……あと二日も、あれば」

なんとか答えを返し、彼女は気を失った。

「よかるう」

ケイルダインは頷くと、そっと彼女の身体を抱き上げ、その場をあとにした。

「突撃い！ 一気に突き崩すのだ！」

上級騎士の号令に兵士が梯子を、傭兵がその両翼を守る陣形で壁に向かって突撃をかけてくる。

しかし、武装メイドの一斉射撃にバタバタと数が減り、堀を渡って壁にたどりつく頃には半数ほどまでになっている。

「銃貸せ銃！ 早くしろってばよ！」

前島は弾切れのショットガンを弾込め担当のメイドに放り投げると口早に叫んだ。

慌ててリロードした銃を手渡すメイドからひったくるように手に取ると、

城壁に梯子をかけようとしている敵兵士に連続射撃する。

せいぜい二十メートルも離れていない近距離だ。鳥撃ち用の散弾でも集束弾の状態なので殺傷力は十分にある。

運悪く顔面に銃弾を受けた敵兵士は悲鳴を上げて転がった。

前島はそれには構わず、かけられた梯子を銃のストックで弾き飛ば

す。  
佐久間隷下の武装メイド数人がようやく弾込めを終え一斉射撃に移り、  
ようやく襲撃を撃退することに成功した。

「……こちらポイントC、敵は退却。オクレ」

安堵感にその場にへたり込み、彼は無線連絡を入れる。

領主の部屋でその報告を聞いた僕はホツとして椅子に座り込んだ。

こんな緊張の連続がもう二日だ。

新しい展開といえば、政府が前線の全面縮小、つまり尻尾巻いて逃げろという決定を下したというくらいだ。

しかし、完全に瓦解した戦線では敵の真っ只中に取り残されている部隊も数多く存在する。

決断が遅すぎた。撤退すら困難を極めるだろう。

「膠着状態か……」

戦闘帽を脱いで頭をかきながら、僕は誰に言うでもなく呟いた。  
先行き不安だが絶望的でもない、という微妙な状態はどうにもしっくりこない。

だが、これ以上悪くなってもらっても困る。

コト

眉間に皺を寄せて考え込んでいると、

間の前のテーブルに湯気の立つカップが置かれた。

「どつぞ。根を詰めるのはよくありませんよ」

彼女の人前では滅多に見せない微笑がそこにはあった。  
僕は思わずドキリとして彼女に向き直る。

「ああ。ありがとう……」

彼女の気配りか、程よい熱さの茶に口をつける。

「なにか変わった様子はあるかい？」

特に話題もないので、そんな事務的な話を振ってしまふ。  
まあ、ここは戦場だ。仕方がない。

「いえ。皆血気盛んですよ」

「リオミアも？」

僕は冗談のつもりで聞き返す。

「ええ。そうですね……」

あの頃以来、初めて何かの為に戦おうという気になっています」  
「あの頃？」

緊張が解けていたのだろうか、彼女はなにか重大なことをこぼした  
ようだった。

ハッと、彼女は慌てて取り繕おうとする。

「い、いえ。奴隷になる前の話ですので大したことでは……」

その様子にはどこか嘘臭さがあった。

リオミアは戦局がここまで悪化しても、特におかしな行動が目立つ

わけでもなかった。

僕が抱いていた疑念は、思い過ぎだったのだろうか、と感じ始めていただけに、新たに綻びを見た今、再び疑念は強くなってしまった。

「なあ、よければ聞かせてくれないかい？

リオミアの昔の話をさ」

率直な言葉に彼女の血相が変わる。

「いえ……そんな私の人生など」

「いいや。知りたいよ。」

それに、開戦前のあの夜に確か何か言おうとしてなかったっけ？」

頭の隅にずっと気になっていたことだった。

今なら聞けそうな気がする。この後も先も分からぬ状況下だから、躊躇はなかった。

が、

「……………」

彼女は突然、気分が悪くなったかのように口に手を当てて俯いてしまった。

「ど、どうしたの？ 別に言いたくなければ無理にとは……」

僕は罪悪感を抱いた。彼女のことを知りたい一心に、彼女の気持ちを考えていなかった。

思わず立ち上がり、彼女の側へと駆け寄る。

「違い…ます」

しかし、彼女は弱々しく首を横に振る。

顔は蒼白となり、身体は小刻みに震えている。

体調を悪くしてしまったのだろうか。無理もない、連日の戦闘に加えて非戦闘員の彼女の雑用は過酷を極めているのだから。

だが、彼女は僕の手をギュッと握ると、何かに怯えたように唇を震わせて僕の顔を凝視した。

「何か…：負の力に満ちた存在が…ここへ…」

「お、おい。一体どうしたんだ!？」

彼女のただならぬ様子に、僕は彼女が精神を病んでしまったのだろうかとさえ思った。

シエルショックシンドローム（砲弾後遺症）のような、戦闘のストレスにさらされた人間がしばしばかかるといわれる精神病だ。

尚も気分が悪そうにうずくまってしまった彼女を抱きかかえ、僕は慌てて唯一の医療関係者である笠間を呼ぼうとする。

しかし、次の瞬間、館が、いや地面が揺れた。

「なんだっ!？」

激しい振動に壁に掛かっていた絵画やインテリアが倒れてくる。

反射的に、訓練で砲弾が近くで炸裂した際に仲間を破片から守るよう、上半身を彼女に覆い被せる。

揺れが収まると、彼女が僕の手を丁寧に振り解く。

何かに憑りつかれたかのようにふらふらとテラスへと出て行く。

我に返った僕は慌てて止めに走った。

テラスに出て、彼女が手すりに寄りかかるようにして何かを見つめ

ている。

「な…!?!」

彼女の隣まで歩み寄った僕は、その光景に我が目を疑った。

「そんな…あれは…」

リオミアがうわ言のように呟く。

「ドラゴン・ゾンビー…!?!」

リオミアの顔が、恐怖に歪んだ。

オオオオオオオン…

空気を歪ませたような不気味な遠吠えが街中に響き渡り、  
館で立て籠もる我々にまで届く。

「な…!?!いつの間にあんなバケモノ入り込んできたんだよ!?!」

全長三十メートルを超えようかという巨竜の屍に目を見張り、思わ  
ず叫ぶ。

「あれは…!?!おそらく死者の体を贄として怨霊を憑依させた人造体  
です…!?!」

あの場所は、おそらくヴェルニアの忌まわしい教会があった場所…

…おそらく…

敵軍の中に術者が…!?!」

呼吸も苦しげに、リオミアが言葉を搾り出す。

彼女の言葉の意味も重大だが、今は彼女自身の身体の方が大事のようだ。

僕は彼女に肩を貸して立たせてやり、なんとか領主の部屋のベッドまで運んでやる。

そつと寝せてやり、後のことは僕に任せてくれと見栄をきる。

彼女の助言は正直欲しいところだが、この状態では到底無理だ。笠間に診てもらわねば。

無線には各部隊から報告と指示を求める声が洪水のように入ってきていた。

彼らに答えてやる前に、僕はもう一度テラスから街の様子を観察する。

するとドラゴン・ゾンビーがきしゃり、きしゃりと嫌な関節の軋む音を立てながら移動を開始した。

目的地は、間違いなくここだ。

あんなバケモノを撃破できるような武器はこちらにはない。

迫撃砲も、携帯無反動砲すらないのだ。

「おいおい大将さん大変だぜこりゃあ！」

バタバタと騒々しい音を立てて部屋に駆け込んできたのは倉敷だった。

テラスに設置したままのTVカメラを慌てて回し、バケモノの全容をしっかりと捉える。

「こりゃあ特ダネだぜ」

「生きて帰れたらの話でしょが」

興奮する倉敷に冷ややかな視線を送る。

戦場カメラマンはファインダー越しに戦場を見るため、現実感を失



って自身が？傍観者？になってしまったように錯覚することがあるという。

彼女は、知らず知らずの内にそうなっているのかもしれない。僕は無線機を取りに戻った。

「あつ！？ 飛んだっ！」

倉敷の声が同時に響いた。

振り向くと、かなりの距離があるにも関わらず、街からここまで恰好に羽ばたきながら、

確かに飛翔したドラゴンゾンビはあつという間に館近くまで接近してきている。

畜生！ あんなボロボロの身体でどうして飛べるんだよっ！？

軟着陸した後、よたよたと起き上がりながら、バケモノは生ける者を探すように首を左右に振った。

城壁にいる兵士らが凍りついているのを確認したのか、咆哮とも狂喜ともつかぬ雄叫びを上げる。

ゾツとするような遠吠えに、半ば恐慌状態に陥った兵士らがショットガンを乱射する。

しかし、肉を削ぎ、血を滴らせながらも、バケモノはダメージを受けた様子は全くない。

効果がないことを悟った城壁の兵士らが慌てて逃げようとするが、意外にも俊敏に動いたバケモノは彼らを目前に捉えると、

その大顎を開ききり、身体の奥底から緑と黄を混ぜたような不気味なプレスを吐きつけた。

「ぎゃああああ！？」

プレスに飲み込まれた兵士らが、身の毛もよだつ断末魔を上げた。それからの光景は地獄のようなものであった。

プレスを受けた兵士らはまるで無数の蟲に身体を食い尽くされるかのように、身体がボロボロと朽ち果ててゆく。  
バケモノのプレスは致死性の毒ガスのようなものなのだろうか。

「死霊の息吹……触れたら命を食われ……る」

リオミアがベッドからうわ言のように僕に訴えかける。  
楽しいファンタジー世界だよ全く！

「リオミア、苦しいだろうけど少しだけ協力してくれ！ 奴の弱点や倒し方を知らないか？」

汗をタオルで拭いてやりながら、僕は躊躇いを感じながらも彼女に尋ねる。

「ゾンビである以上……火……に弱いはずです。でも、あれだけの大きさとなると……」

火炎瓶の残りは少ないし、火炎放射器なんて大層なものは当然ここにはない。

第一、奴の目の前に身体をさらすなど自殺行為に等しい。

「他に弱点は！？」

焦りつつも、彼女に必死に問いかける。

「……術者が……作られたアンデッドであるのなら……敵軍の中にダークブリーストなどの支配者がいるはず……それを倒せば」

この館の外は完全に包囲封鎖されている。打って出て特定の敵を撃

破することなど不可能だ。

クソが！ 八方塞じゃねえか！

「おいちよつと！ 倉敷さんそんなところにいたんじゃ危険ですよ！ 室内に避難してください！」

「も、もうちよい……」

次々と自軍の兵士が殺戮されていく映像を、何かに憑かれたように撮影し続けている。

リオミアの容態に加え、この極度のストレスにさらされている僕は、思わず倉敷をテラスから室内にひきずり込んだ。

「いつてえなあ！ 民間人になんてことすんだよ！？」

「人が死んでいく様を嬉しそうに撮影する奴にそんなこと構ってられっか！」

さすがにキレかけた僕はヒステリックに叫んだ。

彼女が物言いたげながらも黙ったのを確認して、僕は部屋を駆け出していった。

ドアの側に立て掛けてあった六四式を引ったくり、安全装置を解除する。

バリケードに何度か立往生しつつ、外へかけ出る。

今は元を断つよりも目の脅威を排除することの方が先決だ。

前庭の噴水前に備蓄してあった火炎瓶の入った箱から瓶を取り出し、周囲にいた兵士数人に手渡し、攻撃に指示をする。

その際に、敵は火を受ければ確実に死ぬと半ば嘘に近い説明を入れた。

その場しのぎだと言って危険な命令を下したくはなかったからだ。

兵士はみんな、僕より若いのだから、たとえ親しくない者でも後輩

や弟のように感じてしまう。

指揮官としては失格だが、自分の性格について今更悔やんでも仕方がない。

「行くぞ！ 全員俺について来い！」

兵士らに火炎瓶とチャッカマンを配り終えた僕は、力強く叫んだ。彼らの目に、できるだけ頼もしい指揮官と写るように。

「さ、さ、佐久間センパイなんですかこりゃああ!？」

城壁の階段内に一時避難し、銃を抱いて身を竦めた前島がガチガチと歯を噛み鳴らしながら半狂乱に叫んだ。

「さあな。ネリエントスで俺が出会ったのはちょっとばかり違うな」

腰の雑囊から貴重な手榴弾を二・三個取り出しながら、佐久間は冷静に答える。

時折、城壁が踏み壊されているのか、地響きのような音と鈍い衝撃が起こり、埃がパラパラと天井から落ちてくる。

「……上等だ。クソ野郎が」

前島は佐久間の表情を見て思わずゾツとした。

佐久間は、明らかに笑っていた。口の端を吊り上げるように、曲月を描いて。

「前島。貴様はここから一步も出るな。援護射撃も要らん。ろくに撃つたこともない奴に背中撃たれたんじゃ浮かばれんからな」

余計な装備を外し、身軽になった佐久間は縮こまった前島にそういい残すと、小銃を手に駆け出していった。

前島は、呆然とそれを見送ることしかできなかった。

「……俺も甘いな。部下に死ねと命令できんのでは」

階段を下りながら、彼は今度は自嘲の笑みを浮かべた。

ドラゴン・ゾンビは既に城壁を乗り越え、突破口を開くためだろうか、残敵掃討と正門の破壊に移っているようだった。

佐久間は素早い動作で生垣の影に飛び込み匍匐全身を行い、バケモノの死角から接近を試みる。

バケモノは内側から正門にたどり着くと、門を蹴り壊し、吊橋の鎖を力任せに叩き切った。

まるであさま山荘で機動隊の突破口を開くモンケーンだ。

佐久間は舌打ちすると、手榴弾の安全ピンを口で引き抜いた。

生垣からパツと立ち上がり、全力疾走でバケモノとの距離を縮める。バケモノが振り向こうとした瞬間、佐久間は手榴弾を腐った肉の中にねじりこんだ。

異物を取り込んでしまったことに気付いたのが、ドラゴンゾンビは骨の見える尻尾を乱暴に振り回す。

佐久間はそれを身をかがめてかわすと、ドラゴンの胸の下の隙間を転がって反対側へと逃れる。

次の瞬間、ドラゴンの腰辺りが弾け飛んだ。

佐久間はその反対側にいたので、バケモノ自身の体が遮蔽物となり無傷である。

彼の無謀ともいえる攻撃は、一方で最良の戦い方でもあった。ゾンビの図体のでかさにつけこみ、接近戦を挑むなど、並の人間では不可能な芸当だ。

しかし、彼は激戦を生き抜いてきた「戦士」であった。

「死ねといつても死なんだろうが……動けなくはなるだろう」

ニヤリと笑みを浮かべ、彼は激痛によるめくバケモノから離れる。怒り狂ったバケモノは顎を開いてブレスを吐きかけようとする。

が、今度は頭部に何かがぶち当たったかと思うと、瞬時に炎に包まれていた。

「佐久間！ 下がれ！」

佐久間は火炎瓶を手にした上官の姿を向こうに見た。

「あぐつ…！？」

女神官の顔が苦痛に歪んだ。

教会内で魔方阵の中心で精神統一を行い、ドラゴンゾンビと極度の同調状態にあった彼女には、使役しているドラゴンゾンビの苦痛がそのまま自分に跳ね返ってくるからだ。

今の彼女は、目を閉じ表情は変わらぬものの、額には脂汗がびっしりと浮かび、呼吸も荒い。

アンデッドモンスターの中でも創造・使役が難しいドラゴンゾンビを操るのは、術者に大きな負担をかける。

本来ならば十人前後の闇司祭が必要なこの怪物に、彼女はたった一

人で創造から使役までこなしている。  
下手をすれば、完全なる負の力に精神汚染されて廃人になりかねない危険な行為だった。

「シャーナ！」

ケイルダインは彼女の腰からじわりと鮮血が滴り落ちていることに気がついた。

「大丈夫でございます……されど、今日はもうこれ以上の働きは期待できそうにありません……うっ！？」

女は今度は頭を手で覆った。

何かを振り払うように、頭や顔をかきむしる。

見ると、女の白い顔の肌の半分ほどに、赤く火傷をしたように水ぶくれができていた。

「がああ……ぐっう……」

怪物を支配下に置く精神疲労に加え、本体自身が損傷を受けているのか、

苦しげに声を漏らす。

「もうよい！ 下がらせよ！」

「はい……」

息も絶え絶えに、女は答えた。

ケイルダインは気を失いかける彼女に駆け寄り、腰の傷口を、その巨軀に似合わぬ優しい手つきで押さえてやる。

女は少しだけ微笑みを浮かべると、眠るように気を失った。

「逃げ出した……のか？」

銃を構えたまま、全員が徹底抗戦の覚悟を決めていたのだが、大きく吠えたかと思うと翼を広げて飛び去って行ってしまった。見た感じでは、そこまでダメージを与えていたようには見えなかったけど。

「三尉！ 考えるのは後です！ 敵が雪崩れこんできますよ！」

佐久間が訳が分からずに呆然としていた僕の肩を揺さぶった。

「そうだ、そうだった！」

正門が破られ、吊橋も降ろされてしまったんだ。

城壁上の兵士らは……ダメだ全滅している。

わずかな時間だったが、被害は甚大だ。

「総員、館内まで退却！ 想定通りに各自の持ち場につけ！」

無駄に阻止線の維持にこだわっては被害を増やすだけだと判断した僕は、

完全な籠城戦への決意を固めた。

その直後、鬨の声と共に敵兵達が正門を突破してきた。

「ひええええ！？」

いつの間にかこちらへ前島が走ってきていた。

「佐久間センパイ酷いじゃないっすか置いてくなんてえ！」



泣きそうな顔をして前島が佐久間にすがりつく。

「悪い。忘れてた」

全く謝罪の念の感じられない無表情で呟くと、彼はニツと笑みを浮かべた。

「だが、お前にもやってもらうことができたぞ」

「え？」

彼は狙撃仕様の六四式を構えた。

銃声。

百メートル以上先で馬から騎士が転げ落ちた。

「こういふことさ」

自衛隊員二人が、一斉に六四式を構えた。

三日月が綺麗な夜だ。

屋根裏にいる僕は暗視ゴーグルを脱いで一息ついた。

「静かになつたな……」

死体の散乱する庭内を眺め、誰にいつでもなく呟く。皆疲労が溜まってきたのか、誰も応える者はいない。

現在、館で生き残っているのは義勇兵70名とメイド志願兵30名。昼、騎馬隊の侵入に戦局が一変した。

白兵戦に持ち込まれてはこちらに勝ち目などないんだ。ラストサムライが嘘映画ではないと初めて知った。

激戦の末、向こうもかなりの損害を被ったはずだが、まだ戦闘能力は十分にある。

敵がまだ千五百人くらいは戦力があるのに対して、こっちは壊滅寸前だ。

籠城したからには時間は稼げるだろうが、援軍が来る様子もない。

あのドラゴンゾンビーがまたやってきたら……、とマイナスの要因ばかりが脳裏をよぎる。

「ここを頼む」

「あ……は、はいっ！」

ライフルを抱いたまま眠りそうになっていたメイド兵に歩哨の交代を命令し、

僕は屋根裏部屋から降りた。

真っ暗な廊下を手探りで進み、微かに明りの漏れるドアを開ける。

領主の部屋だ。

室内には無線担当に前島、そしてベッドに寝かされたリオミアの姿があった。

いや、もう一人いる。

いつの間にか味方として怪我人の治療にあたってくれている教会のアルマン司祭だ。

「あ、三尉……」

前島がうつらうつらとしていた顔を上げて僕を仰ぎ見た。

僕は無言で頷き、リオミアのベッドに移動する。

リオミアも、昼に比べてかなりよくなったようだ。呼吸も安定して眠っている。

それに安心した僕はテーブルの椅子に腰掛ける。  
アールマンがこちらに何か言いたげな表情を向けていた。

「彼女は一体何が原因でこうなってしまったか分かりますか……？」

僕は彼に尋ねていた。

リオミアのこの症状は、素人目に見ても普通の体調不良ではない。  
あのドラゴンゾンビーの出現と同じくして悪化したのを見ても明らかだ。

魔法だとかそういったものに詳しくそうなアールマン司祭なら何か分かるかもしれない。

「領主様、大変申し上げにくいのですが……」

「何ですか？」

アールマンは言葉を選んでいるようだった。

ややあって、彼は口を開く。

「領主様は、この娘を愛しておられるので？」

う、と少し上半身を仰け反らせてしまう。

ストレートだけど、だからこそ誤魔化しようのない質問だった。

でも、それとリオミアのこの症状と何か関係があるんだろうか？

「……それとこれと何か関係が？」

「直接は関係ありません。ですが、大切なことです」

アールマンの顔は真剣だった。

そもそもこのおっさん、どうしてわざわざここへ来た？

何故こんな負けが見えている側に味方する？

その上、その指揮官の個人的な心情を聞こうとする？  
謎だった。

僕はため息をついた。考えるのには少し疲れ過ぎていた。

「ええ、確かに……大切な人だと思っています」

前島がにやりとするが、アールマンは笑ったりしなかった。

「なんすか、笑ってもいいんですよ」

「命を賭して人を守ろうとする者を笑うのは失礼ですので」

なるほどね。

愛情に対しても日本人とは価値観が違うわけだ。

「ならば、あなたは彼女のことを知るのには酷かもしれません」

「アールマンさん、ここは戦場だし、俺もアンタも明日には死んでもおかしくない。」

もったいぶった言い回しはこの際よして欲しいな」

「……ご無礼を。お許しください」

アールマンは僕の単なる八つ当たりを生真面目に受け取り、恭しく頭を下げてくれた。

だが、内心僕は心臓が早鐘を打っていた。

彼がリオミアの正体を知っているという、あまりにも唐突な話に、動揺していた。

知りたい、とは思う。

だが、アールマンが言った通り、知るのを恐れているのもまた事実だった。

でも、答えは決まっている。知らなければならぬ。

彼女を、守るためにも……

「領主様、このリオミアという娘は、人間ではありません」

どくん、と衝撃が身体全体を襲った気がした。  
背筋に嫌な冷や汗が流れる。

「……と、言つと？」

僕は絞り出すように聞き返した。

アールマンは寝息を立てる、美しい娘の顔を見下ろし、淡々と告げた。

「あまりにもよく出来ているので、確証は持てませんが、おそらく……ホムンクルスです」

聞き慣れない単語に、思わず僕は聞き返した。

「ホムン……何だつて？」

「つまり、魔術師によって形作られた人造人間です」

僕は失笑を漏らした。

人造人間？

それってあれか？ フランケンシュタインみたいなやつか？

このリオミアが？ 冗談じゃない！

こんなインチキ親父を信用した俺がバカだった。

「アールマンさん、いくらあなたが治癒魔法が使えるからってそれは……」

「私は彼女に治癒魔法なぞかけておりません。彼女にはその必要はないし、

そもそも、神の祝福を受けた生命でない以上、治癒魔法そのものの効果がない」

アールマンの表情には、ある種の確信というか、どこか有無を言わさぬ説得力があった。

もしかしたら……こいつはインチキ親父ではないんじゃないか？

そんな予感が脳裏を過ぎる。

前島が、リオミアの顔を凝視して目を白黒させている。

それはそつだ。リオミアが人間じゃないなんて理解できるはずがない。

「どういう……ことです？」

「これだけ高精度のホームクルス、おそらく彼女はネリエントスで作られたオリジナルの内の……」

アールマンが説明しようとしたその時、ベッドで眠っていたリオミアの目が開き、

驚く程素早い動きでアールマンの首を手で掴んだ。

「うぐぐっ！？」

リオミアの華奢な体格からは想像もできない怪力だった。

体格の良いアールマンがまるで熊にでも襲われたかのようにもがいている。

何が起きたのか一瞬理解できなかった僕だったが、慌てて止めに入る。

「リオミアっ！？ 止せっ！」

僕は咄嗟に彼女に飛びかかった。

だが、彼女はやはり人間離れた力で僕を払いのける。片腕一つで、僕は吹き飛ばされていた。

僕はベッドから放り出され、床に転がった。

前島が腰を抜かして「ひええ!？」とビビっている。

「何をっ……何を喋ったのっ!？」

リオミアはアールマンをくびり殺しそうな勢いで叫ぶ。

その顔には、怒りに我を忘れた狂気が浮かんでいた。

普段の冷静で、滅多に感情を露わにしない彼女からは想像もできない姿だった。

「止めるリオミア! やめるんだっ!」

僕は再び彼女を止めようとした。

ほとんどタツクルに近い強さで彼女に飛びかかる。

だが、彼女は怯まない。

リオミア、一体どうしてしまったってんだ!?

僕はとにかく、わけも分からずに叫んでいた。

「リオミアっ お願いだ! 君が人を殺す所なんて俺は見たくないんだっ!」

「……っ!？」

ふっ、と彼女の手から力が抜けた。

アールマンが崩れ落ち、ゲホゲホと咳き込みながら首を押さえる。

前島が慌てて彼を介抱する。

「わ……たし……」

リオミアは自分を羽交い締めに行っているのが僕だと気付いたのか、呆然とその場に立ち尽くしていた。そして、彼女の身体が震えていることに僕は気付く。

「りよ、領主様……ち、違うんです……私は……に、人間で……」  
「リオミア、いいんだ」

僕は彼女を抱きしめた。

びくん、と彼女の身体が驚きに脈打つ。

か細い彼女の身体が、そう大柄でもない僕の中にすっぽりと収まっていた。

こんなにも、普通の女の子であるはずの彼女。

でも、恐らく、アールマンが言った通り、彼女は人間ではないのかもしれない。

「リオミアはリオミアだ……人間かどうかなんて、俺にはどうでもいい」

人間じゃないなら何だというんだ？

この世界には人間じゃない者なんていくらでもいる。

エルフ族やドワーフ族だって遺伝子上、厳密には人間ではないらしいし、そもそも人間とチンパンジーのDNAの違いなんてたった3%だっていうじゃないか。

人間じゃないならなんだ！

人間がそんなに偉いか？

戦争ばかりやらかして、差別や貧困を放っておいて自分だけ豊か  
でいたいなんて願う生き物が！

そうだ、だから僕にとって重要なことなんて……

「俺には、リオミアが俺のことを信じてくれているのなら……ただ



それだけで良いんだ」

はっ、と彼女が息を飲むのが感じられた。背後から抱きしめているから、彼女の表情は読み取れない。でも、自惚れでないのなら……

彼女が安心してくれていると、思いたい。

「領主様……いいんですか……？」

彼女が、回した僕の腕を恐る恐る握った。

さっきの怪力が嘘のような、繊細な指先だった。

「何が？」

「私は……領主様が思っているような純粋な存在ではありません……」

彼女の温もりが、迷彩服越しに感じられる。

それは、少なくとも僕には生ある者の証のように感じられた。純粋か邪悪かと問われれば、それは前者にしか思えない。

「俺だつてリオミアが思っているほど、立派な存在じゃないよ」

僕が答えると、彼女はクスツと笑い声を漏らした。

「やめてください……」

「何を？」

「領主様のその優しさは……」

彼女が、凍えるように身を震わせている。

僕は、彼女が寒くないようにより強く彼女に身を寄せた。

すると、僕の迷彩服の袖に、温かな滴が落ちてくるのが分かった。涙だ。

「その優しさは……辛いんです……」

そう消え入るように呟くと、リオミアの身体から、蠟燭の火が消えるかのようにふわりと力が抜けた。

「リオミアっ!？」

僕は再び眠りについてしまった彼女を抱きかかえ、ベッドの上で夕方暮れたのだった。

## 第28話 救出

劣勢である側にとって、夜は長いものだった。

僕は指揮官として、館のあちこちを回って士気の維持に努めた。

命を預けたというだけあって、義勇兵達は疲れた表情ながらも僕を信じて最後までついてきてくれるようだ。

脱走者がいないのは、奇跡といえた。

いや、脱走したところでなぶり殺しになるのは目に見えているから、そうしないだけなのかもしれないけれど。

とにかく、最悪の状況ながら、救いがないわけではない、そんな心境だった。

一通り回った後、僕は足早に領主の部屋に戻った。

作戦本部だからという事情もあるが、それ以上にリオミアが心配だったからだ。

部屋に入ると、無線機のヘッドホンに当てている前島が目に入った。

「状況は？」

ベッドで眠るリオミアを起こさないように小声で前島に尋ねる。

「国会で予算関係でもめてますよ。」

戦死者は増える一方なんで補償金だけでも莫大な金額になるし、弾薬も燃料も不足してますし何よりお金も国民の協力もないから八方塞がり。

その上俺たちの同期で脱柵する隊員が多すぎて、

ノイローゼになった陸曹が脱柵しようとした若い陸士を撃って大怪我させたってラジオでも言っていました。  
俺もしよーかなあ脱柵」

前島は冗談で言っているのだろうが、笑う気にはなれなかった。  
撃った陸曹の気持ちも、逃げようとした陸士の気持ちも分かるからだ。

どっちも悪いし、どっちも悪くない。ただ、互いに自衛隊員であり、そして人間だったという単純な悲劇だ。  
誰だって、死にたくなんかないもんな。

「あの……」

「ん？」

黙っていると、前島が遠慮がちに僕に声をかけてきた。

「ちょっとここ頼めますか？」

「なんか用でも？」

「ええ、ちよつとトイレに」

「分かった、行ってこい」

「すみません」

こいつにしては珍しくきちんとした態度で出て行く。

いったいどうしたんだろうか？

僕は無線機のヘッドホンを取りながら、少しだけ心にひっかかっていた。

ま、いいか。

あいつとは一蓮托生の仲だ。今更小さいことを気にしても始まらない。

何より……リオミアの側についてやりたかった。

アールマンとはあの騒動の後で、改めて話す機会があったが、あえて何も聞かないことにした。リオミアが僕が自分の正体を知るのをあそこまで嫌がっているのだから、もうそれで良いと思えた。考えたくはないが、僕も彼女も、生きてこの館を出られるかは五分五分以下の可能性だろう。このまま死ぬのなら、リオミアも僕も互いを尊重したままにしておきたいし、生還できるのなら、生還してから改めて話をすれば良い。

「それでいいよな……？ リオミア」

僕は天使のように眠る彼女の頬をそつと撫で、小さく呟いた。

「ミルシエ……！ いるかい？」

前島はこっそりと物置部屋の奥に声をかけた。

こっそり、と何かが動く音がして、微かにあの音が聞こえる。

ちりん……

前島は微笑むと、くすねてきた食べ物を雑囊から取り出す。

「今日、大丈夫だったかい？ 怖くなかった？」

ふるふる……

少女はパンを小さな口でかじりながら首を振る。

「そっか、良かった」

前島はそつと彼女の横に座り、ヘルメットを脱いで床に置く。

彼女がもそもそと食べるのを暗闇の中で聞きつつ、ややあつて躊躇いがちに口を開いた。

「ミルシエ。兄ちゃん、ミルシエに謝らなくちゃいけないんだ」

少女が食べるのを止めて隣の若者の顔を見上げる。

どうして？ と尋ねるように。

その無垢な少女の視線に耐えかねたかのように、

前島は今まで見せたことのない悲しげな表情で語り始めた。

「兄ちゃん、多分、ミルシエと一緒にここから出ることはできないと思う」

少女の顔が凍りつく。

きゅつと迷彩服の袖を握り、力いっぱい首を振って拒否の意志を表す。

前島はその手を優しく握ってやると、涙を浮かべる少女を真っ直ぐに見詰める。

「ミルシエ、よく聞くん。多分、明日か明後日あたりが最後になると思う。」

どんなことがあってもここから出ちゃダメだ。静かになって、回りに人の気配がなくなったらこっさりこの館から出るんだ。

もし敵に捕まっても、無理矢理館に閉じ込められていたって言うんだ。

そうすれば少なくとも命だけは……」

とうとう涙を流して前島の胸を力の限りに叩き始めるミルシェ。前島はそっと、その小さな身体を抱きしめてやった。

「佐久間さん。ここにいたんですねえ」

衣緒は相変わらずの気の抜けた笑顔を浮かべたまま、玄関前の大階段踊り場に構築されたバリケードで、銃を抱いて座っている佐久間の元にえっちらほっちらとした足取りで近づいた。

暗闇の中で、ジロリと彼の視線が彼女を捉える。

「何しにきた？ こんなところをウロチヨロされたら邪魔だ」

小声だが重い声質に、衣緒は思わず身を堅くした。

「あ、あの。佐久間さん、今日ずっと水も食べ物もとってないみた  
いだったんで……」

彼女は背負っていた自分のリュックを手に取り、中からカンヅメをいくつか取り出す。

彼女らしい、桃缶やフルーツポンチ缶など食べやすく栄養価が高くなにより可愛らしいものばかりだ。

「一日くらい食わなくても死にはせん」

一瞥しただけでぶっきらぼうに言い返し、彼は彼女から視線を外し

て玄関を睨む。

敵の死体が二、三人ほど転がっている。

「で、でも……」

「笠間」

「えっ？ はいなんででしょう？」

佐久間は腰から何かを取り出すと、彼女に押し付けるように渡した。彼女が慌てて渡された物がなんなのかを確認する。

「え、えええ!？」

それがトカレフであることに気付いた衣緒は、思わずそれを落つことしそうになる。

「護身用だ。撃つときは腹を狙え。一番当たりやすいし高確率で殺せる」

「わ、私鉄砲なんて撃つたことないですう!」

「撃つたことがある、ないの問題じゃない。撃たなきゃ貴様が死ぬだけだ」

「あう……」

泣きそうな顔になって手の中の拳銃に視線を落とす。

しかし佐久間是我関せずといわんばかりにそっぽを向いて歩哨任務に専念した。

どれくらい時間が経っただろうか、衣緒はぼつりと呟いた。

「佐久間さん……私のお父さんのこと、嫌いですか？」

佐久間は黙ったままだが彼女の言葉に反応する。



「……ここだけの話、自衛官でアイツを好きだという者はいない。例えいたとしても、そいつは実戦を経験したことのない者だ」

ややあつて、彼はそう答えた。

衣緒はふつと笑った。

佐久間はその笑みの意味が分からなかったのか、視線を彼女に泳がせた。

「昔なら、お父さんの言っていることが正しいって、私言えたんです……」平和に勝る政治はない』って……」

珍しく笑顔の失せた彼女の顔に何の反応も見せず、佐久間は黙ったままだった。

「でも……『平和』ってなんなんですか？

この世界じゃ、どんなに話し合いで解決しようとしてもうまくいかなかったって……」

お父さんはそれを自衛隊を出して脅してるからだって……」

佐久間はくつくと喉の奥で笑った。

気付いた衣緒が黙ったので、彼は皮肉げに語った。

「話し合いで解決するには、  
飢えていない者同士か、価値観のある程度同じ者同士でないといけない。  
能だ。」

明日食べる物が無い人間に愛を説いたところで、何の意味がある？  
相手を同じ人間だと考えていない人間に対等な立場を説明して、何の意味がある？」

「そんなことっ……!」

「じゃあ貴様、今のこの状況下で『話し合い』で解決してみる」  
「……………」

再び黙る衣緒。

「うつ……………つく……………」

俯いて黙っていたかと思うと、彼女は肩を震わせていた。  
それが嗚咽だと佐久間が気付くのに、そう時間はかからなかった。

「薄々分かってたんです……………私は甘ちゃんで、お父さんは自分の都合で平和を説いてるの……………  
でも、学校でもテレビでも、『平和』って言葉を信じないといけな  
いって……………」

彼女自身、どう伝えればよいのか分からないのか、理路整然とはい  
かない。

涙と鼻水で、彼女の顔は酷い有様だった。

そこに、白いタオルが差し出された。

驚いて顔を上げると、佐久間が無表情に手を差し伸べている。

「日本はそういう国なんだろう。」

皆が言っていることを正しいと思わなければいけない、仲間外れに  
なりたくない。

大多数の言う『正義』に埋もれていれば安全だ、正しいはずだ。

そんなガキじみた習性で成り立ってんだ。今も、六十年前の戦争の  
時もな」

「うつうつ……………うつ……………」

泣き崩れる衣緒を、冷ややかながら、どこか哀れんだ目で彼は見つ

めていた。

かつての自分も、自衛隊が国民のために戦い、それを国民も信じてくれるはずだと純粹に信じていた。

結果は、いつもまでもない。

もしかしたら、彼女がわざわざ自分の所へやってきたのも、

彼女も自分と同じ思いをしたことがある人間だからなのかもしれないと、彼はなんとなしに考えた。

「ぐす……クシュっ！」

くしゃみをする衣緒に、彼は偽装と保温用に持ってきていた迷彩柄のポンチョを彼女に渡してやった。

彼女は差し出されたポンチョと彼の顔を交互に見つめ、ややあつて微笑みを浮かべて受け取った。

もそもそとポンチョを羽織る彼女に一瞥もくれず、佐久間は銃を持ち直し、誰もいない玄関を再び睨んだ。

衣緒が鼻をかんでいる音が一際静寂の館に響き渡る。

ジロリと佐久間に睨まれた衣緒は蛇に睨まれたカエルのように硬直した。

そんな彼女を見て、佐久間はふつと口元を緩めた。

「あつ……」

衣緒が驚いたように目を丸くする。

彼が笑ったところを、始めて見たからだった。

「……！」

闇を睨んでいた佐久間の目が細まる。

傍らに置いていた暗視ゴーグルを手繰り寄せ、スイッチを入れて覗

く。

「佐久間さん……ごはん、食べてくださいよ。せつかく持ってきたんですよ」

落ち着いた衣緒が優しい口調で促す。

しかし、佐久間は聞こえていないかのように微動だにしない。

衣緒は自分が避けられているのだと判断したのか、寂しそうな表情になってその場から立ち去ろうとポンチョを脱ぎ、

佐久間の側まで持っていく。

と、突然佐久間は近くに來た衣緒を力任せに押し倒した。

「きゃあっ!?!」

思いもよらない事態に、彼女は短い悲鳴を上げる。

「さ、佐久間さんダメです！ こんなことを私にしたって……」

「怪我したくなかったら黙ってる！」

佐久間は暴れる彼女の手足を封じて彼女に覆いかぶさる。

「だ、誰か……」

衣緒が助けを呼ぼうと叫びかけたときだった。

月明りが微かに入り込んでいる玄関の上のステンドグラスに、黒い影が差したかと思うと、

次の瞬間粉々に割れて二人に降り注いできた。

直後、先刻の黒い影の正体が明らかになる。

「あ……ああ……」

そのあまりにも禍々しい姿に言葉も出ない衣緒。

「カミカゼかますとはやってくれるな……」

降りかかったガラスを振り払いながら、佐久間は忌々しげに呟いた。

オオオオオオ……

相変わらず不気味な遠吠えが衣緒の心臓を鷲掴みにする。

その彼らを濁った瞳で睨みつけ、ドラゴンゾンビは大顎を開いた。息を吸い込んだところを見ると、死の吐息をためているようだ。

「いちいちうるさい奴だ……」

佐久間は咄嗟に雑嚢をまさぐると中から拳銃のような形のものを取り出した。

彼はそれを目の前のドラゴンめがけて躊躇なく発射した。

しかし、発射された弾丸はドラゴンの額を兆弾し、明後日の方向へ弾け飛んで行ってしまった。

軽い脳震盪でも起こしたのか、ドラゴンは一瞬だけ怯む。だが、ダメージらしいものはほとんど見受けられなかった。

衣緒は佐久間の攻撃が失敗に終わったことを悟り、自分の運命を予想した。

が

「よし、目をつむれ！」

「えっ!?!」

次の瞬間、佐久間は衣緒の目を手で覆った。

それとほぼ同時に、弾かれて天井に突き刺さった弾丸……照明弾が炸裂した。

本来なら空高くに打ち上げられて炸裂するはずの照明弾の明るさをもろに直視してしまったドラゴンゾンビーは、その明るさにまるで身を焼かれたかのように甲高い悲鳴を上げて仰け反った。

「ピンゴ……」

佐久間は不適に笑った。

この暗視ゴーグルなしではほとんど周囲の状況が分からぬ暗闇で行動していたのであれば、向こうは相当に知覚を研ぎ澄ませているはずだ。

それを逆手に取る戦術は、対ゲリラ訓練で佐久間は教官から聞きかじったことがあった。

今あのバケモノは、視覚を白一色に奪われているはずだ。これで少しは時間が稼げる。

「行くぞ！ 腰抜かしてる場合か！」

呆然とする衣緒を引っ張り上げ、佐久間は階段を駆け上った。

館のあちこちから銃声が聞こえてきた。おそらく大規模な夜襲だ。

敵は本気でここを落とさなければヤバくなってきたようだ。

屋根裏の銃眼からけたたましい音を立てて、ポンコツ機関銃が猛突撃をかけてくる敵に弾丸を浴びせかける。

きちんと整備していたのが幸いしてか、想像以上に軽快だ。

しかし、たった一丁ではこれだけの波状攻撃を制圧することなど到

底不可能な話だ。

撃ち漏らした敵兵はわらわらと玄関に殺到している。

一分もしないうちに、機関銃弾は底をついた。

そして、館全体が重く揺れる。

あのバケモノがホールで暴れまわっているのだろう。

しかし銃眼潰しにやってこないのはある意味不幸中の幸いだ。

こちらの籠城戦術がまだ完全に理解できていないのだろうか。

僕はそんなことを興奮した頭で考えながら、弾の込め終わった狩猟用ライフルをメイドから引ったくり、

暗視ゴーグルで敵兵の姿を確認しながら狙撃を加える。

が、動体応用射撃は思ったよりも難しく、走る敵にはなかなか命中しない。

クソ！ ダメだ！

外の敵に構っている場合じゃない。今は侵入してきた敵を撃退することが先決だろう。

僕はここをパーシェに頼むと、弾切れのライフルを置き、代わりに散弾銃を手にした。

六四式の弾は撃ちつくしていた。

屋根裏から駆け下り、バリケードを超えながら一階玄関へ向かう。

だが着く前に、バリケードで侵入してきた敵に応戦する佐久間の姿が現れた。

「状況は！？」

「玄関を中心に一階の半分以上は敵に制圧されました！

今は二階への撤退を指示していますが、いかんせん広い館なんですけど命令伝達が行き届きません！」

報告しつつ、佐久間は前方の角の暗闇から飛び出してきた敵兵数人に、

近距離ですかさず腰から引き抜いたマカロフを御見舞いする。

暗闇に閃光が瞬き、何が起こったのかもわからなかったであろう敵兵らが倒れる。

そんな中、僕はあることに気がついた。

「おい、前島はどこいった？」

佐久間はマカロフのマガジンを交換しながら、ようやく気がついたといった風に首を振った。

「ミルシエっ！」

前島は倉庫のドアを荒々しく開けた。

この状況下ではあの娘をここにおいていくのは得策ではない。連中の血走った形相を見た限り、非戦闘員だからと生命の保証をするようには思えなかったからだ。

「どこだっ！？ ミルシエ！」

前島は返事がない暗闇に再び叫んだ。

だが返事も、あの小さな鈴の音も聞こえなかった。

焦った彼は、彼女が潜んでいた辺りを暗視ゴーグルを被り直して確認する。

そこには、小さな鈴が、何者かに引きちぎられ、踏み潰された残骸が残っていた。

「み……ミルシエ……？」

彼は一瞬、その場に立ち尽くした。



遠くのから銃声が散発的に聞こえるのが、その静寂をより際立たせる。

彼女はどこへいった？

この遺された痕跡から、恐ろしい推測が頭に浮かぶ。

まさか……！

ややあつて、彼は全身が総毛立つのを感じた。

この感覚は、あるとき、そう、自衛隊に入るきっかけになった、あの事件の時と同じだった。

部屋にはランプの明りが灯されていた。

薄暗いが、廊下の闇とは比べ物にならない明るさであった。

串刺しにされ、床のカーペットを朱に染めて横たわるメイド服姿の少女。

その手には異世界の武器が握られ、

周囲にはその武器によって打ち出される小さな鉄の筒がいくつも転がっていた。

「で、このガキ、どうする？」

死体の転がる部屋の真ん中で、

節くれだった自分の腕に抱えられたメイド服姿の少女を、

まるでうまそうなメシにありついたときのように見下ろしながら、

古参の傭兵は呟いた。

周囲の仲間も、似たり寄つたりの表情で下卑た笑いを漏らしている。

その様子に、無理矢理つれてこられた腕の中のメイド少女の顔が恐怖に歪む。

恐怖のあまり身をよじらすことも、悲鳴を上げることができず、ただ見開かれた瞳から涙を際限なく流すことしか出来ない。





彼の六四式は鈍い音を立てて作動しなかった。  
弾切れではない。マガジンは交換したばかり……  
まさか、ジャムった!?

「しまっ……」

即座に悟った彼が焦りを感じる前に、彼の喉元に投槍が突き立っていた。

声にならない呻きを漏らし、彼は後ろのバリケードに吹っ飛ぶ。

「ははははっはあ！ やった！ 異世界兵を討ち取ったぞ！」

ゲポ、と聞いたことのない嫌な音が声帯から漏れるのと、下品な傭兵の大声が聞こえる。

しかし、もはや彼はそんなことはどうでもよかった。

ああ、自分はもう死ぬのだと、彼自身驚くほど簡単に知覚できた。彼の混濁する脳裏に、ある風景が映し出された。

真昼間の屋上、二人の男女の姿がそこにはあった。

どこから持ってきたのか、ベンチに横になって制服をだらしなく着崩した少年と、

豊かな髪をポニーテイルにまとめた物静かそうな少女だった。

微かに吹いてくる風が心地いい。

『前島君……いつもここにいるね?』

先に口を開いたのは彼女のほうだった。

『いいんちよと違って頭わりいから教師からも見捨てられてんだわ』

邪険に扱うでもなく、かといって友好的でもなく少年は気のない返事をする。

『そんなことないと思う。前島君、きつと、その……』  
『ほら、とりえもないっしょ』

自嘲的に笑い、彼は寝返りをうった。

『でも……私は進学クラスにいる人よりも前島君の方が人間的だと思っよ』

『バツカバカし。点数とれねえ奴は人間じゃねえって、物理の木村が言ってたっしょ？』

『そんなことないよ……』

少女の端正な顔が困惑に歪む。どうして分かってもらえないのだろう、と。

しかし、少年自身、彼女が言いたいことも、そして自分への気持ちも理解していた。

彼女の言うとおり、そこまで馬鹿ではなかった。

だが、彼は彼女を自分の墮落した生活に引きずりこみたくはなかった。

彼は教師から見れば完全な不良だったが、厳密にはそうとも断言できない。

暴力沙汰は嫌いだし、群れるのも嫌い。

煙草や薬も金の無駄だと考えているし、派手な格好するのも面倒。ただ、のんびりとしていただけ。それが許されない環境だというだけの話だった。

それを分かってくれたのは、彼女だけ。

「そ…んな…こと…ないよ…な？　いいんちよ…」

意識が遠のいていく中、前島は走馬灯というものを初めてみた。それは彼の唯一の後悔。

何故あのとき彼女を受け入れてやらなかったのか。そうしていれば、あの事件も防げたかもしれない。だが、もう……

ちりーん

ああ、心地いい音色だなあ。

少女の鈴の音色に抱かれ深い海の中に沈むように、彼の意識は混濁していった。

僕は散弾銃に散弾をフルリロードすると、手榴弾を雑囊から取り出して肩のサスペンダーに装着した。

腰のホルスターから9？拳銃を抜き、弾倉を抜いて弾の確認をする。総弾数9発、よし。

「どこへ行く気です？」

佐久間がじろりとこちらを睨んでいた。

彼がこういう顔をする時は、基本的に怒っているのは経験でもう分かっていた。

でも、僕は断言した。

「前島を探しに行く」

「ならば我らも……」

「それはダメだ」

「え？」

「これは俺個人の問題だからね。上官命令じゃあない」

義勇兵とメイド兵が付き従おうとしてくるが、僕はそれを制した。前島という個人のために僕が救助に向かうのはただのエゴイズムだから、彼らを巻き込みたくなかった。

今まで、義勇兵の少年達や武装メイドの多くを死なせてきた。

その僕が、日本人であり自衛官である前島一人のために部下を率いて救助に向かうのは筋が通らない。

命に貴賤はない。前島も、今まで死んでしまった者達も、平等だ。

ただ、僕はあいつを救いたかった。

ずっと、苦しい時も辛い時も、笑顔で皆の心を癒し続けてきたあの調子者のガキを。

指揮官としてではなく、仲間として……

と、目の前に大きな影が歩み出て来た。

「指揮官が敵前に出るのは愚の骨頂だと何度言えば分かるんですか？」

佐久間が今にも胸ぐらを掴みそうな勢いで僕を見据えている。

「百回言っても分かんないかもな、俺、左遷されるようなバ幹部だから」

「あなたが死んだらこの戦闘はもうおしまいだ」

「いいや、終わりじゃない。自衛隊としては、あの民間人二名を守り抜けば？勝ち？だ。俺達の生死なんて問題じゃない。だから、俺が帰ってこなかったなら、お前が指揮を引き継げ。もう味方はここまで減ってしまった……幹部としての俺は、もう必要ない次元だ」

「詭弁だ！」

佐久間は大声で怒鳴った。  
その声は、どこか震えていた。

「佐久間……お前の経歴、読ませてもらった」

「いきなり何です？」

「慕っていた上官……いつも最前線で部下と共にある人だったらしいな……」

佐久間の精悍な顔が驚愕に歪んだ。

僕は長いこと身上調書を詳しく読んでこなかったが、最近になって読んでいたのだ。

ネリエントス戦の経験者であるのは前々から明らかになっていたが、一体彼が何を経験したのかは謎のままだった。

だが、身上調書にはそれが断片的ながら書かれていた。  
彼のいた部隊が、上官ともどもほぼ全滅したことを。

「自分が、ひきずっていると？」

「シユレスヴァイラの件といい今回といい、君のこと、少し分かった気がする。君は、強いけれど完璧じゃあない。ネリエントスの過去から逃れられないでいる」

「ええそうですね！？ だから何なんですか！？」

「だから、お前の悪夢も終わりにしてやるよ。俺が前島連れて生きて帰ってきたら現実も捨てたもんじゃないってことだ。どうだ、悪くない賭けじゃないか？」

「狂ってる！」

「戦場で狂ってない奴なんかいるか……！」

僕は佐久間を睨み返すと、そのまま彼に背を向けて階下へと向かった。



佐久間は……追ってはこないし、背中を撃たれる様子もない。

彼は土壇場で決断力が鈍る傾向がある。戦闘能力とは全くの別の面、それこそ、人としての弱さであり、純粹さなのかもしれない。

「お待ちください」

「え？」

隣に誰かがついてきた。

さすがにそれは予想していなかったので、ぎよっとして横を見る。

「アールマン司祭？」

「ははは、良い、実に良いですな」

リオミアに殺されかけたのが嘘のように彼は笑みを浮かべてそこにいた。

だが、その柔らかな笑みとは不釣り合いに、彼の手には巨大な槍……確かハルバードとかいう特殊な槍だ……を手に、胸当ての鎧まで身につけている。

「何の用ですか？」

胡散臭さを感じ、三白眼を向けると、アールマンは真顔になって答えた。

「いやなに、あなたの死に様を見るのも一興かと思いましたが」

なんだこのおっさん？

リオミアに首キメられて頭おかしくなっちゃったんじゃないだろうな？

僕は決死の覚悟の出鼻をくじかれ、なんとも先行き不安な気持ちに

な  
っ  
た。

## 第29話 鈴

暗視ゴーグルを装着して真っ暗闇の館の中を僕は進んだ。

アールマンが必死になって僕の後ろをついて来ている。

見えるのと、見えないのではこんなにも動きに制約が生まれてしまふのだと実感した。

おそらく、暗闇に敵がいたとしても、先に気付くのはこちらの方だろう。

とはいえ、戦闘は可能な限り避けるつもりだった。

階下では残存兵と敵が散発的な戦闘を続けていた。

途中、何人かの味方と出会い、上の階への退却を命令した。

前島を探すという完全な私用だったが、彼らは僕が自分達のために危険を冒してやってきてくれたと感じたのか、涙を流す者もいた。

罪悪感を抱くが、今はそんなものに構ってはいられない。

館一階の味方が全滅するのは時間の問題だ。

前島……生きてるのか？

僕はじりじりと状況が切迫してくることに焦った。

破壊されたバリケードを超える。

敵味方の死体があちこちに転がっている。

せめて味方のものであれば踏まないように気を遣った。

それにしても、何故あいつは一階なんかに向かった？

何か、理由があるはずだ。

ただっ広い館で、それも戦場となっている中で一人の人間を捜すのは難しい。

せめて、何か手がかりがあれば。

……ちりーん……

「ん？」

銃声と怒号があちこちで聞こえる阿鼻叫喚の館の中で、微かに何か澄んだ音が聞こえたような気がした。

「アールマンさん、今なにか聞こえなかったか？」

「はい、確かに。鈴の音でしょうか？」

「鈴の……」

そこまで呟いて、僕はハツとした。

前島と兄妹のように過ごしていたメイドの少女、ミルシエだ。

彼女は本来なら郊外に疎開したメイド達の中にいるはず。

だけど、今聞こえたのは確かに彼女の身につけている鈴だった。

まさか！？

「こっちだ！」

僕は走り出していた。

何か確信のようなものがあつた。

前島、てめえ何で俺に報告しなかったんだよ！？

あいつは普段は適当な癖に変なところで自分一人で背負い込むところがある。

意外なところで義理堅いというか、律儀な奴なんだ。

だから、ミルシエに何かがあつたのであるうことを、僕に言わなかったのではないか？

今更そんな、水くさいのに！

と、廊下の角を曲がった瞬間、誰かと不意にぶつかった。

「うわっ！？」

「おいどこ見て歩いてやがんだ！ こっちは異世界兵を討ち取って

今から……」

相手は暗視ゴーグルを目に装着したこちらの姿を見ると、その異様な面相に息を飲んだ。

僕も突然の遭遇に怯んだが、腰だめに構えたショットガンの引き金を引いていた。

重い銃声と共に、目の前にいた五人の敵兵の内、

二人が至近距離での散弾の直撃を受けて吹っ飛んだ。

「て、敵だあ！ こっちにいるぞ！」

身なりの汚らしい、正規兵とは思えない連中だったが、場慣れしているのかささず反撃に移ってきた。

僕は慌ててショットガンのポンプを引き、次の弾を銃身に送り込む。だが、双方の距離が近すぎた。

敵は短槍を構えると、僕に向かって突っ込んで来た。

「むっんっ！！」

すると、僕の前にアールマンが躍り出た。

ハルバードをまるで棒きれ程度にししか感じていないかのように勢い良く振り上げ、

突進してきた敵を胴体ごと真っ二つにしてしまう。

「アールマンさん伏せろ！」

僕はその間に排莖動作を終え、アールマンに叫ぶ。

彼が巨体を素早く僕の射線からどかした瞬間、僕は12番ゲージの散弾を残りの敵に向かってぶち込んでいた。

命中するというより、まるで何か凄まじい衝撃に吹き飛ばされるよ

うに敵が散弾に倒れる。

その場に、硝煙と血の臭いだけが残った。

「……ありがとうアールマンさん、あんたがいなきゃ死んでたよ」

「死に様が見たいと言っておいてこれでは本末転倒ですな」

アールマンはそう言って快活に笑った。

この人、強い。

僕は目の前にいるのが、おっさんではなく、一人の戦士であるのだと理解した。

また疑問が浮かぶ。なぜそんな彼が僕の味方をし、こうして身を挺してまで守るのか？

だが、今はそんなことを考えている場合じゃない。

何もかも後回しか、戦場は忙しいね全く。

そうだ、ところであの敵は何と言ってた？

『異世界兵を討ち取った』

確かにそう言った。

ということとは……

僕は嫌な予感がして辺りを見渡した。

……ちりーん……

再び、鈴の音が聞こえた。

奥の部屋からだ。

僕は銃にショットシェルをリロードしながら、慎重にそこへと近づいた。

「あ……」

半開きになったドアの中に入ると、そこは血の海だった。

小銃の至近距離での掃射によるものか、室内は死体だらけだ。そして、部屋の隅に、誰かが倒れていた。僕と同じ、迷彩服姿の男。

階級章が、僕や佐久間と違って肩の部分に縫いつけられている。陸士であることがまず頭に浮かんだ。いや、そうじゃない、その意味を考えたくなかった。

「前島っ……!？」

僕はその姿に、息が止まりそうになった。

前島は……喉を貫かれて、死んでいた。

「そんな……そんなことって……」

僕は銃を取り落とし、前島に近づく。

いつも血色の良かった彼の顔は青ざめ、首の傷口からは鮮血が溢れている。

「あ……あああ……」

僕は彼の前に膝を折った。

この戦いで大勢の部下を失ってきた。でも、最初から苦楽を共にしてきた、自衛隊指揮官として正式に付けられた部下を失ったのは、彼が初めてだった。

自衛官の部下を失った。

それは、酷く利己的な考えながら、日本人であり自衛官である同胞を死なせてしまったという罪悪感に気が狂いそうになる事実だった。

「前島あーっ!？ 何でこんなことになっちまったんだ!？」

僕はとうとう感情を抑えきれずに泣き喚いてしまった。

佐久間の身上調書を読んだように、僕は前島のそれも読んでいた。知り合いの女子生徒を助けるために、不良グループに重傷を負わせたとして鑑別所送りに。

不良グループのリーダーの一人が、市のいわゆる名士様の息子だったのが災いした。

本来なら事情を汲んでもらえるはずが、少年院への収監という重罰が下りかけた。

それを避けるために、18歳になった時点で自衛隊へ入隊すると宣言した。

自衛隊へ入ると、それだけで様々な社会的な保障がされるようになっていた時世だったからだ。

そうだ……

前島は、佐久間同様に、時代に翻弄されながらも、少なくとも必死になって生きていたはずの人間だった。

こんなところで、死んでいいはずはなかったんだ！

「うう ああああ……」

僕はなりふり構わずに泣きじゃくってしまふ。

止めようがなかった。

僕は一人っ子だったから、弟というものがいない。

心のどこかで、僕はこいつを弟のように思っていたんだ。

「領主様。今は泣いている場合ではございません」

「うっ うっ うあああ……」

「領主様っ！」

アールマンの太い腕が僕を掴み上げた。

そして、頬を思い切り張られる。



「こんなところで挫けてはなりません、あなたにはまだ守るべき者がいるではありませんか！」

「あ……………」

僕は呆然とアールマンを見つめた。

そう……………だ。

確かに、佐久間も、リオミアも、二人の民間人も、必死になって戦ってくれている味方の義勇兵達も……………

みんな、守るべき人達じゃないか。

僕にはこんなにもたくさん、守りたいと思える人がいる。

前島が……………それを教えてくれた。

……………ちりーん……………

鈴の音。

横を見ると、ベッドの下に、小さな少女が隠れていた。

母猫からはぐれた子猫のように、怯え震えている。

ミルシエだ。

無事だった。

前島の、守りたかった人。

彼は自分の命と引き替えに、守ったんだ。

彼女はこちらが敵ではないと知ると、そこからぱつと飛び出すと、

前島に飛びついた。

そして、声にならない声で、すすり泣く。

ミルシエにとっても、前島は大切な人であつたらしい。

「そこを退きなさい……………」

「っ…！」

アールマンは彼女に優しく語りかけ、ゆっくりと彼の身体から離す。そして、彼を慎重に横たえた。

「……何、してんですか？」

「まだ死んだと決まったわけではございません」

「っ！？」

「え、だって……首を貫通されて、そんな血が出てるんじゃない？」

いや、待てよ。

血がまだ流れているってことは、微弱ながら心臓が動いてるってことじゃないか！？

僕はその失血量と急所の傷からてっきり死んでしまったものと思いきり死んでいたが、

まだ完全に死んだとは限らないじゃないか。

気が動転して脈さえ取らなかった。それに、僕は医療に関しては素人だ。微弱な心拍数を手首から読み取れるか分からない。

「助かる………のか？」

「むっ………」

アールマンは唸った。

「死んではいませんが、恐らく、私の能力では助かりませぬ」

「まだ希望はあるんだなっ！？」

僕はアールマンにすがりついていた。

「ほとんど絶望的な可能性ですぞ？」

「なら、やれるだけやって欲しい！ 部下を救いたい！」

と、不意に懇願する者に、もう一人が加わった。

「……オネガイ……！」

「ミルシエ……」

少女の幼い手が、アールマンの服の袖を引っ張っていた。

そして、その喉奥から絞り出される声は、普段声を発しない彼女の精一杯の主張なのだった。

彼女もまた、前島を救いたいと願っている。

2対1になったことに、アールマンは困惑の表情を浮かべた。

「ですが、彼を動かすことはできません。ここで治癒魔法をかけますゆえ、領主様にはここを……」

「分かった、守る！ だから、俺が死んだとしてもそいつとミルシエは救ってやってください」

アールマンがこの暗闇にあって、どこか眩しそうな表情で僕を見た。

「……サクマ殿との約束は？」

「前島とミルシエが生きて帰ってきたんなら、八割方果たしたことになるさ。まあ、世の中そんなに甘くないって分かってもらうしかないな」

僕の苦笑を見て、アールマンは真剣な表情でゆっくりと頷いた。

そして、治癒魔法のために呪文を詠唱し始めた。

ほのかに蒼い光が彼の両手から漏れ始め、前島の酷い怪我を癒し始めた。

神の奇跡、科学の及ばない存在の光だ。

アールマンは彼にしかできないことを命がけでやってくれている。

ここからは、僕にしかできないことを命がけでやる番だ。

僕は自分の装備を<sup>あらた</sup>検めた。

ショットガン一丁と12番ゲージ散弾30発、9?拳銃一丁に9?  
パラベラム弾18発、サスペンダーに提げた手榴弾2個。

そして、前島が使っていた六四式小銃一丁と、7・62?  
弾<sup>ショット</sup>60発。完全被<sup>フルメタルジャケ</sup>帽。

科学の作り出した、操る者によつては人を守る力となり、殺戮の道具ともなる武器だ。

僕はそれらを背負うと、部屋の外へと出て行く。

「生きて帰られよ。皆、あなたにそれを望んでいる」

背中からその声を掛けられた。

「分かってますよ。俺だつてリオミアと今生の別れなんてゴメンですんで」

僕はそうはつきりと答える。

「行きなさい、若者よ……信じているから戦い、愛するから守る……  
…そしてそれが、英雄の始まりとなるのだ」

何かアールマンが独り言のように呟いているような気がしたが、僕はさっさと部屋のドアを閉めた。

敵に見つかつてはまずい。

しかし、既に一階の大部分は制圧されてしまったのか、敵の気配はあちこちからした。

暗視ゴーグルを装備し、緑色のデジタルの視界に頼る。

早速、松明を手にした一団が廊下を走つてくるのが見えた。

あの正規兵には見えない薄汚い連中の仲間だろうか、やつらが戻つてこないんで何かあつたと増援を寄越してきたようだ。

こちらには、暗闇で気付いてはいない。

僕はバリケードの残骸に身を隠し、前島の六四式を二脚を立てて構えた。

演習の癖で射撃前に銃に点検をする。

あ、スライドに薬莖が挟まってる。

畜生、これだから六四式は嫌いなんだ。構造的に排莖不良が多い。

前島はこれで死にかけたんじゃないか？

そう思うと無性にこの銃を作った奴に腹が立った。

そして、その欠陥のある銃を改修もせずに放っておいたこれまでの自衛隊上層部にもムカついた。

この銃を手にして戦場に立つ人間の気持ち、その命を、そいつらは一度だって真剣に考えたことはあるんだろうか？

平和だから、自衛隊は戦争をしないから。

じゃあこうして戦争になった時はどうするんだよ！

「かかって来いクソ野郎共！ 日本の公務員舐めてんじゃねえぞ！

」

僕は半ばやけっぱちになって叫ぶと、向かって来た敵兵達に銃弾の雨をお見舞いした。

嫌っていた六四式小銃は、驚くほど正確に敵を打ち倒してくれた。

ああそうだった。

この銃、びっくりするくらい命中精度良いんだった。

僕はちょっとだけ、これを作った奴のことが好きになった。

### 第30話 目覚め

異世界の戦士が使う奇妙な武器の打ち鳴らす音がけたたましく部屋の外から響いてくる。

アールマンは額に汗を滲ませ、全力で瀕死の若者の治癒に努めていた。

だが、彼の表情には希望はなかった。

あまりにも傷が深い。

幸いにして、首の骨などを粉碎してはいないが、だからといってこの重傷が助かる見込みはないに等しかった。

これほどの瀕死の者を救うには、それこそ大司教クラスの術者でなければ無理だ。

だが、アールマンはあの若き異世界から来た軍人の願いを叶えたかった。

あの若者は、あまりにも純粹だった。

金にも、権力にも、名誉でさえも眼中になく、それでいて命を賭して守るべき者を守ろうとする。

この世界のどの英雄物語にもない、異様とも言える人物だ。

確かに、そのためか彼には英雄にあるべきカリスマは微塵もない。

だが、彼の想いに集う者は多かった。

自分とて例外ではない。

そして今も、ドアの外でこの若者を救うために自分の命さえ投げだそうとしている。

アールマンは強く思った。

あの若者の作る未来を見たいと。

「神よ……あの英雄の戦いに応えられよ……」

彼は万に一つの可能性に賭けて治癒魔法をかけた。だが、これまでも他の負傷兵に治癒を施してきたこともあり、彼の魔力は尽きかけていた。もはや精神力と、このマエシマという若者の『生』への思いだけが頼りだ。

「……オニイチャン……」

若者の手を、年端もゆかぬメイドの少女がその幼く、か細い手で握った。

震え、無力な少女の手。

アールマンは意に介さずに呪文の詠唱を続ける。と、彼はある事に気付いた。

「……ひとりぼっちは……もうイヤ……」

きゅっ、と少女がマエシマの手を握る。

そこから、ほのかな緑色の光が少女とマエシマの身体を覆った。

(こ、これは……!?)

アールマンは驚愕の表情を顔に貼り付けた。

尽きかけていた魔力が、少女の手からマエシマの身体を伝い、自分の中へと流れ込んでくる。

このミルシエという少女には、魔法の能力が備わっているのだ。それも、桁外れに強い。

「……ひとりに、しないで……」

少女の涙がマエシマの頬に一滴落ちる。

「…………おねがい…………戻ってきて…………」

「ミルシエ、あなたはまさか…………！？」

アールマンは震える声で小さき少女を見た。

その魔力は桁違いで、そして普通のものではなかった。

本来、よほどの才能を見出されて師匠の下で修行を積んでこそ得られる魔法。

それを、ただのメイドの少女がここまで強力に操ることができるはずがなかった。

そう、彼女のこの魔力は…………生来のものなのだ。

魔法を操ることを前提に創り出された人間。

アールマンはそれに思い至って、少女がまるで怪物であるかのように錯覚した。

ミルシエの鈴が、ちりん、と悲しげに鳴いた。

彼女は小さく、呟いた。

「ワタシモ…………リオミア姉様ト同ジダヨ…………」

シヨットガンの凄まじい破裂音のような銃声が廊下に響いた。

松明を持っていた敵が散弾を受けて悲鳴を上げる。

「ぎゃああああ痛え！ 畜生何なんだっ！？」

「落ち着けゴリス！ この怪我なら死にやしねえ」

「さつきからのこれは農民どもじゃねえ！ 異世界軍の正規兵がいやがんだ！」



敵兵が負傷した仲間を連れて引き下がっていく。散弾銃のバラ弾はライフル弾と異なり、距離があると殺傷力が半減する。

散弾が距離に比例して拡散するから、致命傷を与えられないんだ。しかも相手は鎧や兜を被っている者もいるから、角度によっては散弾ではそれを貫けない。

でも、今のこの状況ならそれが返って好都合だった。負傷者の後送のために、敵の動きが鈍るからだ。といっても、今のがショットガンの最後の弾だった。

僕は暗闇の中のバリケードの一つに身を潜めて防戦していたが、弾薬の消耗は稼げる時間がそれだけ減っていくことを意味していた。前島の六四式を傍らから取り寄せる。

もうこいつの残弾も一弾倉20発だけだ。

弾を節約するために、切り替え軸部を操作して「レ」から「タ」に変える。

これでフルオート射撃から単発射撃しかできなくなる。いよいよジリ貧だ。と、

「アールマンさん!？」

後ろでドアが開いた気配に振り返ると、そこにはアールマンの姿があった。

駆け寄ると、彼は前島を背負っていた。前島の首には包帯が巻かれている。

暗視ゴーグルを外して確認する。

顔色は相変わらず土気色に見えたので、助かったのかどうか一瞬では判別がつかなかった。

「どう、だったんですか？」

アールマンは複雑そうな表情で僕と、そして傍らのミルシエを見た。

「……奇跡が、起こったようですね」

その言葉に、僕は安堵のあまり六四式小銃を杖にその場へたり込みそうになった。

「良かった……本当に……」

佐久間との約束を果たせそうだ。

それに何より、前島が助かった。部下を失わずに済んだ。

それだけで、束の間とはいえ全てがうまくいったかのような安心感が感じられた。

「アールマンさん、あなたには何とお礼を言ったらいいか分かりませんね」

「……いえ、礼なら、この子に」

「ミルシエに？」

「想いの力と、忌まわしきネリエントスの亡霊に」

何の話だ？

ミルシエは無表情に佇んでいるだけで、何か話す様子もない。

一体、二人の間に何があったのだろうか。

いや、それは今考えることじゃない。

まだここは敵のど真ん中で……

「領主様危ないっ!？」

風切り音に気付いた時はもう遅かった。

「あがつ!？」

右の太股に貫く痛みが走る。

それが矢が刺さったのだと理解するのに時間はかからなかった。周囲には、狙いなどつけずに放った無数の矢が突き立つ。

(ちつきしょう!？ 暗闇だからって棒立ちになっちまった! ドジった……)

「異世界兵といえど寡兵だ! あぶり出せ!」

敵は弓兵を前面に出して来た。

館内という近距離でなら熟練の弓兵の撃つ矢が銃ともまともに張り合える。

敵の指揮官が的確な命令を飛ばしたか!?

僕はその場に崩れ落ちた。

「領主様っ!？」

「ぐく……ぐく……」

今までの人生で感じたことなどない、敵意によって打ち込まれた痛み。

突き立った矢は太股の半ばで止まっていた。

矢尻には返しがついているため、簡単には抜けない作りになったいる。

肉に食い込み、激痛に襲われる。

アールマンが咄嗟に矢の半分をへし折り、僕に手を貸そうとしてくれる。

だが、彼がいくら体力のある戦士だろうが、前島を背負い、僕にま

で肩を貸して歩くことは無理だ。  
それに、応戦がないと分かれば、すかさず奴らは追撃してくるだろう。

「い、いい……痛みを我慢すれば、歩けないわけじゃない」

僕は小銃を杖代わりに足を引きずった。  
血が迷彩ズボンを濡らすのが分かった。

「それに、殿が要るだろ？」

「無茶だ！ 癒しの魔法を……」

「ダメだ、前島背負ったあんたは先に行かなきゃ追いつかれる」

僕はアールマンの顔を引き寄せた。

「俺の死に様見たいんだろ？ 『仲間を救うために一人敵に立ち向かう』」

……映画みたいで調度良いんじゃないか？」

「え、えいが？」

アールマンが目丸くしていると、再び弓兵の一斉射撃が来た。

鋭い風切り音を響かせて矢が頬をかすめていく。

僕は無茶な姿勢から六四式を発砲した。

アールマンが発射音とその衝撃波に身を固くし、ミルシエは両耳を押さえてその場にへたり込んだ。

応射が来たことに敵の弓兵達が一瞬、怯んでいる。

六四式の7・62？弾の発射音は現代軍の規格である5・56？弾よりも桁外れにデカイ。

心理的な威圧効果はこちらの方が上だった。

「言っただろ！ 俺だって死ぬつもりはない！ 行ってくれ！」  
「……神のご加護を」

アールマンが祈りの言葉と、彼の宗教の印を切ってくれた。  
ミルシエがそつと僕の手を握って心配そうな顔をしてくれる。  
彼女にもそれなりに好かれていたのだと気づき、ちよつとだけ驚く。

「死んではなりませんぞ！ あなたの死に様を見るのはまだまだ先でなくては面白くありません！」

「ああ、分かつてる！」

僕は三人の背中を見送り、足をひきずりながら間近のバリケードに辿り着く。

まず矢で受けた傷の上をタオルで縛り、ないよりましな止血をする。  
痛みに歯を食いしばる。脂汗が額に滲み、激痛から来る嘔吐感を必死で押さえる。

そして、六四式の二脚を立てる。

1964年という大昔に制式となったこの国産小銃は、こうした防戦に特化した銃だ。

暗視ゴーグルを被り、息を潜める。

残った弾はもう18発くらいだ。無駄弾は撃てない。

たった18発でどこまで時間を稼げるのか、それが勝負だった。

「生きて帰る……生きて帰るんだ……」

僕は失血と痛みに朦朧としてきた意識の中、念仏のように呟いていた。

「生きて帰る……生きて帰るぞ……リオミアが待ってるんだから！」

引き金を絞り、六四式の銃口に発射炎が瞬いた。

目を覚ました時、あの人の姿はその場にはなかった。

夢見心地に、あの人に一度、抱きしめられた気がした。

心地良い記憶。

いや、違う。夢じゃない。

あれはきつと現実だ。

私が本性を抑えきれなかったのも、全て……

そんな私をあの人は受け入れてくれたのだ。

恐れもせず、私に触れてくれた。

胸の奥に後悔と、温かな何かが残っている。

「あの人は……どこ……？」

魚が水を求めるように、鳥が空を求めるように私はあの人の姿を求めていた。

不安だった。あの人がいないことが。

「あ、気が付いたんですねえ」

カサマ・イオがベッド脇にいた。

私を看着我てくれたのだろう。

彼女は確か、あの人の国でいう神官や薬師のような者らしい。

私は彼女を見つめた。

かける言葉が見つからなかったから、無言だった。

彼女はどうかやら私に睨まれているとでも感じたのか、少し慌てて言った。

「た、隊長さん、何だかマエシマさんを助けに行ったきり帰ってこないってさつきから皆さん心配してますけど……」

それを聞いて、私はベッドから飛び出した。

「あつ！？　だ、ダメですよそんないきなり動いちゃ！」

イオが追いかけて来るが、気にしない。

私は椅子の上にあった脱がされていたエプロンを身につける。

メイドの姿を手早く整えると、走った。

幸い、今あの瘴気は薄らいでいる。動けなくはない。

廊下へ出ると、生き残った兵士達と、サクマ殿が騒いでいた。

よく見ると、そこには息をついて階段を上ってきたあのマーラル教の神官の姿もある。

私はその神官の姿を見ただけで吐き気を催した。私にとって、あの聖なる存在はそれだけで毒となる。

目を逸らすと、そこには負傷したのか、マエシマ殿もぐったりとして横たえられていた。

そして、そこにはあの人の姿はない。

サクマ殿が怒気を孕んだ声で叫ぶ。

「三尉を敵中に置いて来たっていうのか!？」

私はまるで雷で背中を打たれたかのような衝撃に襲われた。

死は身近だった。

自分の死だけが身近でないだけだった。

私は人間ではないから、それは当たり前だった。

私はそう造られたから、それは当たり前だった。

でも、今は違う。

あの人死んでしまうのは、耐えられないことだった。

あの人が、私に会って間もない頃に言った。

『僕はこれでもジエイカンなんだ。どっちかというと、君たちを守る立場なんだよ。』

だから、できればもうあんな武器なんて持ち歩かないでくれると安心だ。

いざって時は僕がなんとかするからさ』

そっだ……

守る、とあの人は言った。

私を守る、と。

私はいつも、殺せ、守れと命じられてきた。

そんな私を、あの人は守ると言った。

そんな人は、初めてだった……

(領主様……)

私はどうすればいいのですか？

そっだっだ……

私は今まで、誰かの命令だけで動き、判断してきた。

私がどうしたいかなんて、考えたこともなかった。

あの人は、何というだろう？

あの人は優しい……

きっと、私がまたあんな狂気に歪む姿など見たくはないと言っただろう。

でも、それではダメ。

それでは、あなたを守れないから……

私は走った。

皆が私の姿に気付き、驚いた顔をする。



「り、リオミアさん！？ あんた何する気だ！？」

サクマ殿が叫ぶのを背後に、

私はそのまま、階段の手すりをひらりと飛び越え、階下へと飛び降りた。

私は初めて、自分の意志で選択をした。

全身が痛みに覆われて、いったいどこを怪我しているのかさえ分からなかった。

殴られ、蹴られ、酷い有様だ。

何か喋ろうとすると、口から血反吐が溢れた。

捕虜になれたただけまだ良いのだろう、とはとても思えない。

「生かして捕らえろと言ったはずだ」

誰かが僕のそんなボロボロの姿を見てそう思ったらしい。

なんとか開く右目だけで周囲を確認する。

ここはどこだ？

随分と引きずられて来たような気がする。

血だらけの顔に風が感じられた。

屋外か……？

「し、死んではおりません。虫の息ですが生きております」

「何せ最後まで抵抗しやがりましたので」

「ふん。魔導兵器さえなければただの腰抜けの異世界兵にしては、やるようだ……」

ガシャ、ガシャ、と誰かが鎧を軋ませて歩いて来る気配がした。

「しかし、不様だな…… 『ボキ2級のツジハラ』」  
「ケイルダイン……？」

そこには、悠然と勝ち誇る敵将の姿があった。

### 第31話 二人の指揮官

ケイルダインは僕を冷ややかに見下ろしていた。  
黒騎士。

その言葉はまさにこいつのためにある、そんな感じの男だ。  
数多の国を滅ぼし、蹂躪し、栄誉と栄華の帝国を作り上げてきた。  
帝国にとっての栄光、支配される者にとっての絶望。

だが、ケイルダインのこの冷ややかな視線の裏には何かがあった。  
その何かが何なのか、僕にはすぐには理解できなかった。

「我が軍の前に跪いた気分はどうだ？ ツジハラ」

ケイルダインは歪んだ笑みを浮かべた。

歪んだ笑みの奥にも、何か違和感がある。

この最強の黒騎士の奥にあるもの。

そうだ、百戦無敗の帝国軍は、栄光の黒騎士達は、ただ一度完膚無  
きにまで敗北した。

異世界からやってきた、正体不明の軍勢に。

自衛隊と呼ばれる、軍隊ではない軍隊を相手に、手も足も出ないま  
まに膝を折った。

折らされたのだ。

ケイルダインはその兵士である僕をここまでボコボコにできて満足  
そうだ。

かつて自分が膝を折ったように、同じく僕の膝を折らせることに満  
足しているのだ。

しかし、その視線の奥には、隠しきれない？ 恐れ？ がある。  
目が、心底から満足していないのだ。

「ただか隊員三人相手に数千人動員して跪かせて満足すか？」

僕はそれを見透かし、こちらも歪んだ笑みを浮かべて挑発した。  
次の瞬間、顔を鈍痛が襲った。

ケイルダインのガントレットを付けた手で顔を張られたのだ。  
気絶しそうになる。

血が口から溢れ、泣き叫びたくなる。

「泣け、喚け。貴様の屈辱こそがかつて散っていった我が部下達への鎮魂なのだ」

ケイルダインもそれを促してくる。

でも、僕のどこにそんな意地があったのかと思えるほど、精神力でそれを抑える。

「この地は明日にも我が手に落ちる。再び帝国領となるのだ」

ケイルダインは僕の髪を引っ掴み、顔を上げさせた。

「貴様が侍らせていた女共は一人残らず、魔女として火炙りにしてくれる」

「あ、が……」

「貴様に協力していた者は皆、縛り首だ」

意地の理由が分かった。

誰がこいつに負けてやるか。

恐怖で人を支配することしかできない、こんな奴に！

「どうだ、絶望したか？ この取るに足らん腐った街の支配権と女の色香に迷って無駄な足掻きをした結果がこれだ」

ケイルダインは僕を軽蔑し切った表情でそう言った。

「貴様には戦う理由などない。名誉も、美学もない。哀れで見下げた男だ。だから負けたのだ」

全く同意だね。僕の見下げた点については仰るとおりだ。だけど、それなら……

「……あなたにだって、戦う理由なんてないんじゃないのか？」

僕は前々から感じていた疑問を口にしていった。

「何だと？」

「帝国のために戦うのか？ 知ってるぞ、前の戦いで帝国本国はあんたたち前線の将兵を見捨てて撤退を決定した」

乾いた笑みが浮かぶ。

「な、何がおかしい！？ まだ我らを愚弄するつもりか！」

皮肉だった。

だって、こいつだって僕と同じなんだ。

見捨てられた者同士なんだ。

こいつが航空自衛隊の爆撃に逃げ惑っている時、帝国本国では貴族達が晩餐会を開いていたという。

そして僕ら自衛官が異国の地で必死になって戦っている時、日本本土では芸能人のスキャンダルの方が国民の注目を集めていた。

僕らとあんたは同じものだ！

哀れで、どうしようもなく愚かな何かだ！

命を賭けてまで戦う何かなんて、この世にたくさんは存在しないはずなのに、ちよつとでもかっこをつけたくて、国のため、理想のためだと理由を付けたがる。

「あんたが騎士の名誉だ愛国心だ言ってるのは、結局のところたった3人の敵を血祭りに上げて矮小な復讐をしたかっただけだろ……？ でなきゃ何でこんな辺境の都市を狙う？」

「き、貴様……まだそんな減らず口を」

僕は片眼を見開いて相手を見据えた。

そうだ、死ぬかもしれない今、僕の脳裏にあるのは部下の安否と、ただ一人の少女だけだ。

自衛官としての使命感だなんて、そんな綺麗事なんて微塵も存在しない。

「名誉も美学もないのはあんただって同じだ、てめえの勝手な理由で戦争おっ始めて、大勢を巻き込んで、その先に何がある……？」

ぎり、と歯を食いしばった。

例えこのまま斬首されるとしても、それだけはこのクソ野郎に言い続けた。

「俺はな、あんたと違って名誉だのはないけどさ……」

べっ、と血反吐を吐き捨て、僕は自分への確認のつもりで叫んだ。

「少なくとも、大切な人を守ろうと誓ったさ！ だから逃げなかつたんだっ！」

あんたは復讐のために生き延びる道を選んだ。

僕は守るために死ぬ覚悟を選んだ。  
ただそれだけの違いしかないんだよ！

「ざまあみれ、守りたいって思える女のケツもないんだから、哀れ度合いで言えばアンタの方がよほど哀れだね」

にい、と僕は笑った。

もう八方塞がりのこの状況下では、そうするしかなかった。

「……ならばその女の前で死に恥を晒すがいい」

ケイルダインは額に汗を滲ませ、腰の長剣を抜剣した。  
ずらり、と白刃が僕の眼前に現れる。

いよいよ最後か……

僕の死はきつとこの世界にとっても、日本にとっても何の意味もないものなんだろうな。

せめて新聞の記事になるかな？ ……たぶんならないな。きつと、

あの民間人の女の子の方が載る。

それでも、いい。

いいんだ。

リオミア……

君のさえ、覚えていてもらえるなら。

僕は死を目前にしているというのに、疲労感に負けて目を瞑る。

このまま、眠ってしまいたかった。

僕はその時を黙って待った。

しかし

「……む？」

ケイルダインが剣を振りかざしたまま、何かに気付いたような声を

漏らした。

「え……?」

僕はハツとした。

ここは館の中庭だ。

敵は本陣をここに移していた。

そして、その中庭から、館の方で何やら騒ぎが起きているようだった。

銃声はない。

ということは、義勇兵や自衛官による戦闘ではなかった。

剣戟の音と、口々に発せられる怒号が耳に入った。

仲間割れ?

いや、違うようだ。

暗闇の中、篝火の曖昧な光に照らされる玄関から誰かが躍り出て来た。

赤いエプロン姿の、一人のメイド。

その赤いエプロンが、最初は純白であったと理解するのに時間は掛からなかった。



### 第32話 重なる想い

そこにいる女は、美しく、そして恐ろしかった。

「ハアー……ハアー……」

彼女は両手に敵から分捕ったのであろう片手剣をぶら下げている。玄関に出るまでにどれだけの敵を斃したのか、あるいは自身が傷ついていたのか。

彼女の身につけるメイド服は朱に染まっていた。

あちこち切り裂かれ、見るも無惨な有様だ。

「リオ……ミア……？」

僕は一瞬、その阿修羅のような姿に、彼女であると分からなかった。だが、月夜に照らされ一層引き立つ銀髪の輝きは紛れもない彼女のものだ。

蒼い瞳が、強い意志を宿して眼前の敵兵達を睨み付けている。

「こ、小娘一人だと!？」

「敵だ! 討ち取れ!」

単独で、それも少女が奇襲を掛けてくるなど誰が予想できただろう。敵の顔にも戸惑いの色が見えた。

しかし、玄関の周囲にいた帝国の正規兵と思わしき甲冑姿の兵士達が抜剣すると、

容赦なく彼女に斬りかかった。

「はあぁっ！」

リオミアは跳ねた。

目にも留まらないとはこのことだろうか、僕の動体視力では彼女の動きを完全には追えなかった。

襲い来る敵に向かって踏み込んだ彼女が舞を舞うかのように回転すると、黒騎士から血が迸った。

背後からランスで貫こうとした敵を、数メートルは跳躍してかわすと、その背面に降り立ち、まるで忍者のように首を掻き切る。

体術を操り、宙で華奢な身体を回転させながら、一閃するかのよう放った回し蹴りが敵をなぎ倒した。

それは、武術の心得のない僕にだって分かる程の、常人離れした、いや、人間離れした光景だった。

あれは何だ？

リオミアなのか？

僕は、幻覚でも見ているんじゃないのか？

「領主様っ！ どこですか、領主様ぁっ！」

敵に囲まれた彼女が叫ぶ。

その声は、間違いなくリオミアのものだ。

彼女がこんなにも絶叫するのを聞くのは初めてでも、それは分かった。

ああ、リオミア……

来てくれたのか……君のそんな姿を、僕は見たくなかったのに……でも、ありがとう。

君の姿をまた見ることができて、また生きたいと思えてきたんだから！

「わああああーっ!!」

「うお!?!」

「こ、こやつ!?!」

僕は彼女の出現に気を取られている衛兵の腕を振り解いた。

そして、僕の装備品を戦利品としてケイルダインに見せていた兵士に飛びかかった。

満身創痍の身体は、ほんの少し動くだけで悲鳴を上げる。

だが、アドレナリンの過剰分泌によるものか、リオミアの狂気の姿に当てられたのか、僕は痛みなど無視して狂ったようにそいつにタックルをかけていた。

僕の装備品の中でも、外されたサスペンダーを奪い返す。

「き、貴様あー!」

騎士の一人が僕に向かってブロードソードを抜いて斬りかかって来た。

僕はサスペンダーの弾帯に提げられていたホルスターから9?拳銃を引き抜く。

乾いた銃声が響き、剣を振りかぶった騎士がそのまま仰け反って倒れる。

「無駄な足掻きをつ……!?!」

ケイルダインが不覚を取ったことに歯噛みしている。

異世界兵は魔導兵器がなければ腰抜けて言っただな?

「じゃあプレゼントだよ!」

僕はサスペンダーから手榴弾をひったくり、口で安全ピンを抜いて投擲した。

キン、とレバーが外れて導火線に着火される甲高い音が響く。

「うおっ!？」

ケイルダインは自分の目の前に転がってきた物体が何なのか、知識として知らずとも危険なものだと察したようだ。慌ててその場から背を向けて逃げ出している。

刹那、起爆した手榴弾の爆風にまとめて敵が吹っ飛ぶ。

あの野郎、今まで生き抜いて来ただけあって悪運も強いし逃げ足も速いな畜生!

今度は僕の方が齒噛みしながら、拳銃とサスペンダーを手に足を引きずって走り出す。

いや、それは走るなんて格好の良いものではなく、ただヨタヨタとふらつきながら歩いているに過ぎなかった。

ああ、もう格好悪いな!

「逃がすな! 敵の指揮官もあの小娘も殺すのだ!」

ケイルダインの怒号が耳に入る。

敵は帝国軍残党の正規兵が多いのか、命令があると行動が素早い。

たちまち僕は敵に追いつかれ、囲まれそうになる。

9? 拳銃を振り向きざまに撃ち、接近を何とか阻む。

リオミアはさっきの爆発音と今の銃声に僕に気付いてくれたようだった。

「領主様っ!」

彼女の悲鳴のような僕を呼ぶ声が聞こえる。

「リオミアアア！」

僕も絶叫していた。

百メートルも移動していないのに、もう息が切れる。

身体のおちこちを殴られ、骨折しているからか熱に意識が朦朧としていた。

「こ、この女斬っても死なないぞ!？」

「そんなわけがあるか！ 殺せえ！」

「化け物があ！」

敵兵達の憎悪に満ちた声が聞こえる。

リオミアまでもが怒声を上げていた。

「退けえーっ!!！」

鬼神のような裂帛の気合いで彼女は活路を切り開いていく。

彼女の進路上にいた敵は、一人残らず血煙を上げて倒れていく。

だが、リオミアも無傷では済まなかった。

「取ったあ！」

騎士の繰り出した槍の穂先が彼女の腹を貫いていた。

普通なら、即死の一撃だった。

でも……

「うああああー!!！」

彼女は手にする剣で槍を叩き切ると、強引に自分の腹に突き立った

それを引きずり出した。  
ポタポタと傷口から血が流れるが、気にもとめずに彼女は槍の穂先を放り投げた。

「ひ、ひい!？」

「こいつ人間じゃねえぞ!？」

この世のものとは思えない光景に、百戦錬磨の敵兵達までもが怯んでいた。

それでも僕には見えた。

彼女の瞳が、痛みで濡れていることに。

彼女が痛みに涙する、一人の人間に他ならないことに。

「ハアー……ハアー……領主様……待っていてください……私が……すぐに参ります……」

僕は最後の手榴弾を手に取り、安全ピンを抜いた。  
自衛隊の戦闘教練で教わった投擲姿勢を取る。

「届けえええええええええ!!」

渾身の力を込めて、僕は投げた。

投げた後にバランスを崩し、不様に地面に転ぶ。

爆音。

よろよろと立ち上がると、土煙が視界を覆っていた。

人影が一人、こちらへやってくる。

誰だ？

いや、誰かなんてもう分かり切っている。

僕の胸に飛び込んできた小さなそれ。

彼女の身体だ。

「ああ……領主様……生きていたんですね……」

僕に抱き留められた彼女は、カラン、と片方の手から剣を落とした。感極まったのではなく、腕に深々と矢が刺さっていたからだ。彼女もまた、いや僕以上に傷だらけだった。

「リオミア……何でなんだよ……？　こんなになるまで俺のためな  
んかに……」

僕は罪悪感に押しつぶされそうになった。

こんな女の子が、こんな姿になるのを見て何も感じないわけがなかった。

自分のような、何の価値もない奴のためなんか。

それに僕は、腐っても自衛官なのに。

彼女を、守ってやらなきゃいけない立場なのに。

僕は何も守れてないじゃないか！！

自分で自分をぶん殴ってやりたいくらいだった。

「ふ……ふ……」

リオミアは僕の胸に顔を埋め、幸せそうな顔で笑った。

「自分で望んだことなんですよ……私が、初めて……」

「リオミア……？」

胸の奥が熱くなる。

彼女の想いが伝わってきたような気がした。

彼女が、僕のことをそこまで想ってくれていたこと。

言葉を交わしたわけでもないのに、それが分かった。

彼女の選択はきつと無駄じゃない。  
これがなければ、僕と彼女は最後まで想いを分かち合えなかったから。

「リオミア……僕は、君を守る」  
「あ……」

僕は彼女を掻き抱いた。

そして、花壇のブロックに背を預ける。

周囲を確認すると、完全に包囲されていた。

館の味方に合流しようにも、玄関まで固められてしまっている。

結末は変えられないのかもしれない。

でも、確かに変わったものもある。

僕は彼女のために戦う覚悟をしたこと、彼女が僕のために傷つく覚悟をしたこと。

それは決して無駄なことなんかじゃない。

納得してくれたら、納得できずに死ぬのは大違いだ。

それに……

「領主様と一緒になら……私は何も怖くありません……」

今なら、二人一緒だ……

僕は拳銃から空になった弾倉を取り出し、最後のマガジンを装填する。

ずん、と重苦しい音が地面から伝わって来た。

「ドラゴンゾンビー……」

ケイルダインは本気なようだった。

自分をここまで手こずらせた相手の息の根を、確実に止めたいよう



だ。

僕は彼女を胸に抱き留めたまま、片手で拳銃を向ける。

パーン

デカイ図体のどこかに当たっているのか確かだ。びくともしていないのは明白だった。

それでも、無抵抗のまま死ぬのは癪だった。

パーン

一步、また一步と奴はこちらへ近づいて来た。

もうあと五十メートルもない。

銃声が足音にかき消されるんじゃないかという程、ドラゴンゾンビの存在感は圧倒的だった。

重火器がない以上、どう足掻いたって勝てっこない。

でも、負けはしない。

最後まで、負けだけは認めてやるもんか！

僕は無駄と分かっている引き金を引き続けた。

パーン

その瞬間、ドラゴンゾンビの頭部が爆ぜた。

「うわっ!?!」

僕は咄嗟に爆風からリオミアを守った。

そして、慌ててドラゴンゾンビの方を見る。

そこには、頭部の半分近くを失ったドラゴンゾンビの残骸があった。

ブスブスと腐肉が焼ける臭いが漂ってくる。  
一体何だ？  
何が起きたんだ？

「……え？」

僕は何か上に気配を感じて空を仰ぎ見た。  
夜空の静けさを、何か巨大な物体が横切る。

ヴロオオオオプ！！

巨大な4発のエンジンが回転させる独特の重低音のプロペラ音が降  
ってきた。

月明かりに照らされ、ほんの僅かだったけれど、僕は見た。  
翼に描かれた、星のマーク。

「米軍機……！？」

僕の元いた世界で、最強と呼んで過言ではない国家の航空機が、こ  
の辺境の地に飛来してきていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8501v/>

---

箱庭のメイド達

2011年9月24日18時12分発行